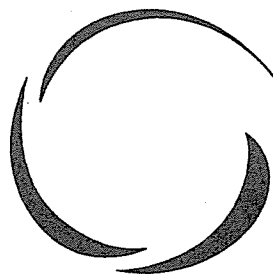


C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

澁澤雅英 オーラルヒストリー

澁澤栄一記念財団理事長



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

澁澤雅英 オーラルヒストリー

目次

澁澤雅英 略歴……………4

第 1 回

澁澤家に生まれる……………	7
森村小学校の頃……………	8
澁澤栄一と同族会……………	10
武蔵中学校の思い出……………	13
高等学校の生活から勤労奉仕へ……………	15
陸軍予備士官学校の頃……………	17
通信隊の見習士官として……………	19
終戦、除隊へ……………	21
東大生のアルバイト……………	23
東食に就職する……………	26
ダンスパーティーで出会い、結婚へ……………	29
澁澤蔵相と財閥解体……………	31
「三田の家」がとりもつ縁……………	33
財閥解体後の暮らし……………	34
缶詰輸出の面白さ……………	36
MRAとの接点……………	37

第 2 回

ロンドンに赴任する……………	43
ブックマン博士と出会う……………	45
MRAの世界性に魅せられる！……………	47
MRAの活動とは……………	49
両立か、活動に専念するか？……………	50
家族、周囲の反応……………	53
バギオのMRA大会に参加する……………	55
MRAの不思議——意思決定方法……………	56
ピーター・ハワードという人物——ブックマン死後のMRA……………	58
アメリカ、マキノ島を拠点として……………	59
日本の青年団を招待する……………	61
ブックマンの意向——政治劇「光の矢」を執筆する……………	63
六〇年安保の頃——MRAが果たした役割……………	65
小田原にアジアセンターを建設する……………	67
日本におけるMRA協力者……………	68
財団運営の方法……………	70
その後のMRA活動……………	72
資料所在について……………	73

第 3 回

バンコクで国際セミナーを開催する	79
東南アジアに対する意識の変化	
— 第二回セミナーで ASEAN を研究	82
文化支援とは — 日本とアメリカを比較して	84
日米欧委員会に参加する	86
インドネシア語の本を翻訳して	89
コーネル大学でインドネシア語を学ぶ	91
MRA とイニシアティブ・オブ・チェンジ	93
チャタムハウスの研究成果	94
大学教授時代 — アラスカ大学・ポートランド州立大学	96
アジアセンターの経営と国際会議	98
MRA 移動学校について	101
英語学校の先駆けとして	102
時代に適応した活動 — アジアセンターの改組を考える	105
財団法人の行く末	107

第 4 回

MRA ハウスについて	113
東京女学館に関わる経緯	116
理事長に就任 — 東京女学館を改革する	118
短期大学から四年制大学へ	120
女子教育機関の存在価値	123

澁澤財団理事長として	125
父、敬三の夢を受け継ぐ	127
実業史研究情報センター設立へ	
— データベースによる学問提供	128

今後の澁澤史料館	131
青森、小牧温泉のこと — 杉本行雄氏の思い出	132
文化事業に生涯をかける	134

あとがき	138
------	-----

澁澤雅英著作・編著作目録	140
--------------	-----

参考資料

資料 1 「21世紀の東京女学館をめざして」〔東京女学館〕	143
資料 2 「一つの提案」〔澁澤敬三〕	144
資料 3 「評議員・理事の皆様」〔澁澤青淵記念財団竜門社〕	147
資料 4 「実業史研究情報センター設立趣意書(案)」	
〔澁澤青淵記念財団竜門社〕	148
資料 5 「第一期五カ年計画—『啓蒙』から『参加』へ—」	
〔澁澤青淵記念財団竜門社〕	150
資料 6 企画展「日本実業史博物館をつくりたい!!」	
パンフレット表紙〔澁澤史料館〕	150
資料 7 企画展「青淵文庫」パンフレット表紙〔澁澤史料館〕	150

澁澤雅英 略歴

曾祖父 澁澤栄一 父 澁澤敬三 母 登喜子(岩崎弥太郎の孫・木内重四郎の娘)

大正14年2月	ロンドンで生まれる
昭和13年3月	森村小学校卒業
昭和13年4月	武蔵中学入学
昭和17年4月	武蔵高等学校入学
昭和19年10月	前橋陸軍予備士官学校入学
昭和20年3月	武蔵高等学校卒業
昭和20年4月	東京帝国大学農学部入学
昭和20年6月	前橋陸軍予備士官学校卒業 見習士官 歩兵通信隊配属(千葉県・柏)
昭和20年9月	陸軍少尉 除隊
昭和25年3月	東京大学農学部農業経済学科卒業
昭和25年4月	東京食品株式会社入社
昭和31年4月	同社ロンドン駐在員
昭和32年5月	同社退職。 MRA活動に専念する。
昭和37年10月	MRAアジアセンター開所
昭和39年4月	財団法人MRAハウス 代表理事
昭和42年4月	MRA移動学校設立(～昭和45年3月)
昭和43年4月	日本外語教育研究所設立 代表理事
昭和45年4月	イースト・ウェスト・セミナー代表理事 日米欧委員会委員
昭和57年1月	英国王立国際問題研究所客員研究員(～昭和59年10月)
昭和60年5月	学校法人東京女学館評議員
昭和60年9月	アラスカ大学経営学部客員教授(～昭和61年6月)
昭和62年3月	学校法人東京女学館理事
平成元年9月	アラスカ大学国際経営センター客員教授(～平成2年6月)
平成3年9月	ポートランド州立大学経営学部客員教授(～平成4年6月)
平成5年1月	同大学客員教授(～平成5年6月)
平成6年1月	学校法人東京女学館理事長・館長(～平成15年12月)
平成9年11月	澁澤青淵記念財団竜門社(現・財団法人澁澤栄一記念財団)理事長
平成14年4月	東京女学館大学開学

澁澤 雅英

オーラルヒストリー

第1回

[2003年7月8日(火) 14:00~16:00]

[出席者] 肩書きはインタビューの時点

澁澤雅英氏(東京女学館理事長・館長)

伊藤 隆氏(政策研究大学院大学教授)

木全ミツ氏(東京女学館副理事長)

武田知己氏(政策研究大学院大学特別研究員)

佐藤純子氏(政策研究大学院大学特別研究員)

丹羽清隆(録音、記録担当)

場所：東京女学館

■ 澁澤家に生まれる

伊藤 お書きになりました『父・渋沢敬三』というのを読んでみました。アチック・ミュージアムのこと、「論文を書くのではない。史料を学会に提供するのである」云々というところがございませぬ。「山から鉱石を掘り出し、これを選鉱して品位を高め、焼いて鍔を取り、粗銅とする」と書かれています。私どものオーラルヒストリーというものも、そういうところがあるんです。私自身がこれを使って研究しようということは、全然ないわけにはありませんが、おおむねは後世のために、ほかの研究者のために、ということになります。よろしくご協力をお願いいたします。

今日と次回までかかるかもしれませんが、MRAに夢中になれるまでのところをお話しただきたいと思っております。

澁澤 そんな昔のことは記憶もないし、ろくなことをしていませんから。

伊藤 記憶がなくても、質問をいたしますので。

澁澤 わかりました、何でもお聞きください。

伊藤 お生まれは大正十四年（一九二五）だということでございます。私が昭和七年（一九三二）生まれですから、八歳違うんですね。お父様が正金「横浜正金銀行」でロンドンにいらつしやっているときにお生まれだということですが、幼児期といつてもごくわずかな期間、数年間はロンドンで過ごしてはいますか。

澁澤 いえ、生まれてすぐ帰ってきました。澁澤栄一が体が悪くなってきたというので、父親がロンドンに行つて三年ぐらいで私が生まれたんですが、急遽帰ることになりました。父は先にアメリカ回りで帰つて、母と私が南回りで帰ってきたのが十月だと思えます。

伊藤 南回りというのはどういふものですか。

澁澤 フランスからスエズ運河を通つて、インドに行つて、セイロン・コロンボ、シンガポールというふうに戻っていきます。

伊藤 それはどこの船ですか。

澁澤 日本郵船です。

伊藤 定期航路があつたんですか。

澁澤 ええ、北野丸という船だと思えます。

木全 よく覚えていらつしやいますね。生まれてすぐのことでしたのに。

伊藤 それは覚えているでしょう。あとで聞いたのかもしれないが。

澁澤 もちろん、あとで聞いたんです。

伊藤 そうですか。それではお育ちになつたのは三田でございませぬか。

澁澤 はい。

伊藤 三田では、お父様とお母様と――。

澁澤 それがなかなか複雑なところがあつまして、あの家はもともと深川にあつた家なんです。明治四十二年（一九〇九）か何かに深川にペストが流行りまして、急遽三田に土地を求めまして、そこに移転したわけです。いま、その家は青森県に行つています。

伊藤 そうですか、十和田のあれ「三沢の古牧温泉・澁澤公園にある家」がそうなんですか。

澁澤 はい、非常に運の強い家で、まだ残っているわけです。明治十何年「明治十年（一八七七）」からですから、もう当然百何十年です。その家にいたんです。その家は、最初は澁澤栄一が住んでおつたんですが、息子の篤二というのがいて、その妻と子供たち三人ぐらいたはざなんです。篤二が家を出てしまひまして、しばらくは私の祖母が三人の息子を連れて、いろいろな小さい家を渡り歩いていました。あまり大きな家で育てると、子供が悪くなるということだそうですね。そういうことで、あの家は人

がいたりいなかったりした家なんだろうと私は思います。私が行ったときにはもちろんおりました。私の母と父、そして祖母がおりました。そういう家族でした。

伊藤 そのときは澁澤栄一さんはどこにいらしたんですか。

澁澤 王子・飛鳥山、いまの澁澤史料館のところですよ。篤二というのは白金三光町というところに住んでおりました。

伊藤 ということは、お祖母さんと別居なさっていたということですね。

澁澤 はい。

■ 森村小学校の頃

伊藤 これを拜見していますと、小学校から中学に入るところがちょっと出てくるんですが、小学校はどこにお入りですか。

澁澤 森村小学校です。

伊藤 森村小学校というのは私立の学校ですか。

澁澤 ええ。本当の名前は南高輪尋常小学校という名前なんです。森村家がおつくりになった学校で、非常にいい学校だったんです。

伊藤 公立ではないんですね。

澁澤 私立です。森村「市左衛門」さんというのは有名な（伊藤はい、財閥ですね）フィランソロピスト「慈善家」で、大変な人です。日本女子大なんかも支援なさった方ですよ。

伊藤 いま虎ノ門に僕らのオフィスがあるんですが、あの角に森村ビルというのがあって、おおこれがそうだな、と思っていたんですが。

澁澤 そうですね。日本陶器という会社をやっておられた。その学校は、男女合わせて一学年三十人しかいないんですよ。男十五人、女十五人の共学で、非常に小さい学校です。先生たちはみんな海

軍の将校みたいな制服を着ていて、学校の中に住んでいる人が多く、なんというのか、特別な学校でしたね。小さい学校でした。

伊藤 やっぱり名家の子弟が多かった、ということですか。

澁澤 月謝が高かったから、そうなんだろうと思いますね。

伊藤 自然にそうなるでしょうね。

澁澤 高かったんだと思います。二十円とか三十円とかいうことだと思えますが、私は覚えていません。

伊藤 そこのお友達とは、あとあとおつき合いがございませうか。

澁澤 ええ、実は私は一度、落第ではないけれど、小学校六年生の時にちよつと胸を悪くしまして――。

伊藤 結核ですか。

澁澤 結核というほどでもない、肋膜炎ですから大したことがないんですが、それで鎌倉に療養してました。森村は小学校しかありませんから、どこかに行かなければいけない。それには勉強しなければいけない。当時は、いまほど大変ではないから予備校に行くなんていうことはありませんでしたが、でも学校で補習があった、夕方五時頃までやるようなことがありました。それには耐えないというので、一年休学したんです。私の母親が私を連れていろいろな山に登ったり、空気がいいところに行けというのでアルプスに行ったりして、非常によかったんです。私としてはすっかりエンジョイしました。北アルプスの山は、小学校のときにほとんど全部登りました。

伊藤 山登りなんかしていいものですか。安静にしていなければいけないじゃないですか。

澁澤 いいらしいですね。いい加減なものなんです。つまりあまり悪くないんです。仮病だったのかな（笑い）。

木全 でも、言えていますね。経験ありますですよ。

伊藤 もう全然育った環境が違いますから、想像を絶するような話ですよ。澁澤家の直系の御曹司でしょう、だから「坊っちゃん、

坊っちゃん」で育てられたんだらうと——。

澁澤 そんなことはないですよ。

木全 一番最初に澁澤さんとお会いしたときに、私は敬三さんとのご関係などを知りたくて、栄一さんの何番目のご子孫でいらっしゃるのかな、と思つて、「澁澤栄一さんって何人ぐらいお子さんがいらしたんですか」と素直に伺つたんです。そうしたら、さうらつと「五十人ぐらいはいたのでしょうね」とおっしゃる(笑い)。それで私は、また失礼な質問をしてしまつて、「あ、理事長は直系でいらつしゃいますか」と伺つたら、「直系の中の直系ですよ」とおっしゃる。そういう御曹司でいらつしゃるのね。

澁澤 あんまり意味がない。

伊藤 お坊っちゃんまで育てられたんだらうと思ひます。

澁澤 森村はそういう学校でした。そういうことを許容する学校でした。外国人の生徒もいました。戦争直前ですが、オランダ大使館の方の息子さんが私の同級生でおりました。日本語はもちろんでききましたが、非常にフリーな雰囲気、英語もやつていました。二世のご婦人が来られて、一週間に二時間ぐらい英語をやつていました。

伊藤 それは小学校の話ですか。

澁澤 はい、小学校です。だから当時としては非常に開けた(伊藤 ハイカラ)、ハイカラで近代的な学校でした。

木全 知つてる? 「ハイカラ」なんていう言葉? 「首のまわりに手を回して、高い襟の形をつくつて」high collarなんですね。澁澤 それで二度目の六年生か、最初の六年生のときかわかりませんが、二・二六事件がありました。それは珍しい体験でしたけれど。

木全 そのときおいくつでした。

澁澤 十一か十二じゃないですか。

木全 二・二六事件は、私が生まれた年だから。昭和十一年(一

九三六)です。

澁澤 それじゃあ十一歳です。ですから五年生でしようか。

伊藤 昭和の年数と同じなんですね。

澁澤 ただ、「六年生を」二度やったものですから、友達が二重にいるわけですね。

木全 だからトータルで、男の子三十人と女の子も三十人いたということですね。

澁澤 男と女という区別はあまりない学校だったものですから。いまでもよく集まるんです。このごろ特に男が暇になつて、女も暇になつたんでしよう、よく集まるんですね。その両方の組が集まりますから、私は両方に出る資格があるというか、出させてもらうというのか知らないけれど、両方に出ています。なかなか楽しいグループです。

伊藤 そういうハイソサエティのお坊っちゃん、いったい何を遊んでいたんだらうと思ひますが。

澁澤 それは問題だと思ひますね。私がいま非常に欠陥人間になつたのは、それが一つだと思ひますね。非常にプロテクト「保護」されていきましたからね。この女学館のような苛烈な環境にいると、どうもうまく行かない(笑い)。

伊藤 えつ、ここは苛烈なんですか。

木全 でも女学館は、普通から見るとプロテクトイッドですよ。いまは違ふけれど、かつてのことをずっと伺つたら、お嬢様方で、一番重い物をお持ちになるのはハンドバッグだという。あとは召使いか女中が持つものだ、なんていう時代が女学館にもあつたそうです。昔のことよ。いまはそんなことはない。

伊藤 僕らだつて、東京女学館というとお嬢様の学校というイメージですよ。

木全 でも本当は違いますよ。リーダーシップをきちんと身につけている。

澁澤 それは木全さんの宣伝でございまして(笑い)。
木全 男女共学の人にはない「リーダーシップを身につけてい
る」。

澁澤 森村はわりあい質素なところもございましたし、もちろ
ん車で学校に行くなんていうことはありませんでしたから、電車
に乗ってとことこ行っていました。うちにも女中さんがいまして、
幼稚園は学習院に行っていたんです。

伊藤 場所はどこですか。

澁澤 青山の外苑に明治記念館がありますね。あの前にイチョウ
並木がありますが、あそこにあつたんです。女子学習院ですが、
女子学習院の中に幼稚園があつて、そこには男の子が入っていた
んです。

伊藤 それはどうやって通うんですか。

澁澤 ですからそこで問題なんです、その女中さんが非常にえ
らい人で、私を連れてテクテク歩くわけです。

伊藤 三田からですか。

澁澤 はい。いま、ここに来るより、もうちよつと大変です。い
まもここまで私はよく歩いて通っていますけれど。

伊藤 渋谷までですか。

澁澤 いや、渋谷じゃなくて、麻布の二の橋のいま住んでいると
ころまでですね。その頃はもつと遠かつたんですが、幼稚園のと
きには、青山の墓地を通過して行くわけです。ですからそれはとて
もありがたく思っています。いまでも歩くことが嫌いでないし、
アルプスを登ったりすることができたのも、その人のおかげだと思
っています。その方は、のちにお嫁に行かれて、いま息子さんが
が相当な学者になられて、最近素晴らしい本を書かれた方なんで
すけれどね。そんな生活をしていました。ですから甘やかされて
いたことは間違いないし、なんとなく広い家にポツンといますか
ら、世の中の人と一緒にワツとやるというのは、どうも私は得意

でないところがありますね。酒でも飲んでワーワーやるのはい
ですけれど、なんとなく弱いですね。

伊藤 いや、弱いというのはちよつと表現が違ふと思いますけれ
どね。

澁澤 弱いと思います。

■澁澤栄一と同族会

伊藤 じゃあ、子供の頃、ガキ大将とかと遊ぶという感じではな
いんですね。

澁澤 もちろん子供ですから、お相撲を取ったり野球の真似事を
したり。私は下手で駄目ですけど、そういうことをやりますよ。
遠足なんかに行くと、大騒ぎして走り回ったりしていましたから、
普通の健康な小さい子供だったんだらうと思います。ただ家の中
は、父親がこういう「民族資料の収集などの」仕事をしていまし
たでしょう。そのために、宮本常一さんが来たのもう少し先だ
と思います、そういう学者の方がたくさんいらして、しよつち
ゆう一緒にいるわけですから、われわれとはちよつと離れていた
感じですか。つまり、家がパブリックなスペースという感じになっ
てしまうわけです。プライベートな家庭というものがあまりな
くなってしまう。それが私に影響しているかな、と思いますね。

伊藤 ちよつと母子家庭みたいな感じのところがあるわけです
か。

澁澤 その「母子の」母(ぼ)は(木全 素敵な方で)、イギリ
スにいましたでしょう。そして父親と別れてしまうような現代的
女性であつたわけだし、非常にselfassertedというんですか、自
己主張の強い人でしたからね。そうですね、母子家庭という感じ
では全然ないですね。何か非常に強烈な女がそこにいる、とい
うような感じですね。

伊藤 それは、あとから思うとそうだ、ということではないですか。

澁澤 あとから思うとそうですね。だからいま女子教育奨励会なんて一所懸命やっている（笑い）。

伊藤 それは母親のような人を大量に育てようということですか。

木全 いえいえ。もうこの社会は男が駄目にしたから、あと人口の半分の女性が力を発揮する以外にない。

伊藤 それは澁澤栄一がそう言った、ということでしょう。

澁澤 いえいえ。

木全 私たちのいまの理解です。

伊藤 澁澤栄一もそう言った、とここに書いてありますよ。

澁澤 澁澤栄一も一度言いましたが、あれは取って付けたようなものです。なにしろ五十人も子供をつくる人ですから。

伊藤 でも五十人子供をつくって、全部認知したわけではないでしょう。

澁澤 したんだと思いますね。

木全 したから、五十人と言ってるんじゃないですか。

伊藤 いえ、澁澤子爵家の系図を見ると入っていないでしょう。

澁澤 それはないですね。

伊藤 それで庶子として一人だけ書いてあるでしょう。

澁澤 大川さんですか。大川平三郎夫人「てる」と尾高次郎夫人「ふみ」、あの二人ですね。それはもうすごい大昔の話で、まだ二十代の時につくっているんですね。だから旺盛ですね。彼はエネ

ルギーがとてますごいですよ。その点でも私はまったく澁澤家とは関係がない人間で、本当にそういうファイトはあまりないですけれど。

伊藤 お育ちになった過程で、澁澤栄一は昭和六年に亡くなりま

すね。多少ご記憶はあるでしょうか。

澁澤 このあいだ、澁澤栄一がつくった家を改修しまして、きれいな家になりました。文庫という接客所みたいなものが王子にあるんですが、それをきれいに直して、重要文化財になるとかなんとか言われているんですが、そのお祝いをやってみんなを集めたんですね。

伊藤 応接室みたいなところですか。

澁澤 ええ、そうです。

伊藤 私は一度あそこに伺って、中に入らせていただきました。

澁澤 二軒ございまして、そのうちに一軒なんですけど、そのときに昭和五年ぐらいの写真が出てきたんですね。それには澁澤栄一が真ん中にいて、ブラッと親類が並んでいるわけです。大家族ですからね。そこに私もいるんですね。私だと認識できる顔をして、そこにいるわけです。ほかの親類もいるんですけど、私はまったく記憶がないですね。

木全 理事長、最後の数人で撮られた写真がありますね。理事長とお父様とお祖父様と、直系の方だけの写真が。

澁澤 それは「私がまだ」赤ん坊です。記憶があるわけがない。あれは私がイギリスから帰ってきたから、四代揃うということなんです。

伊藤 そういことですか。あれは四代揃って、ですか。

澁澤 はい。

伊藤 でも、もうすでにそのときには、篤二さんは廃嫡されているわけでしょう。

澁澤 ええ、廃嫡されていたと思いますね。

伊藤 でも四代揃うんですか。

澁澤 しょっちゅう遊びに来ていたみたいですからね。そのもう一つの写真にもちゃんと入っておりますし。

伊藤 そうですか、じゃあ同族会には居るわけですね。

澁澤 同族会の会員であるかどうか、投票権があるかどうかは知

りませんけれど。

伊藤 えっ、そんな投票権みたいなものがあるんですか。

澁澤 そうなんじゃないですか。なにしろ同族会の記録を見ると、澁澤栄一がなんだかんだいろいろなことを言う。こういうことをやりたいと思うかどうか。例えば「日本女子大に五千円寄付しようと思うかどうか」とか言うのと、誰も「ノー」なんて言わないで、「はいはい」ということになるわけですね。そういう議事録が、断片的ですが、ずいぶんあります。

伊藤 同族会というのは、この中にもよく出てきますが、いつまで続いたんですか。現在もあるんですか。

澁澤 私の父が死ぬまでですね。私になつてから、やらなかったわけです。やめちゃったわけです。

伊藤 それは問題が生じたんじゃないですか。

澁澤 いや、全然。

伊藤 もうみんな、いいということですか。

澁澤 いいというか、ああいうものは、そこに行くとお金をもらえるとということで成立するわけですからね。戦後、財閥解体にもなり、いわゆる澁澤同族会社が解散してからは、集まるというのはまったく同好会に過ぎないわけで、そんなものは続かないですよ。

伊藤 その前、お金をもらうというのは財産分与の話ですか。

澁澤 それは澁澤栄一が同族会をつくったときのことで決まるわけです。一つには、なにしろ子供がやたらにいるでしょう。だから正式な子供をちゃんとまとめておかないとゴタゴタになるおそれがあったということだと思っただけですね。それで七人の子供をアイデンティファイして、おまえたちが相続人であると決めたわけですね。そのうちの一人、私の祖父、つまり長男ですが、それが澁澤本家とか宗家とかいつているけれど、それが毎年の収入の十分の一の五をもらうんですね。あと「の六人が」が十分の一の五を

もらうんです。そういうことを栄一が決めたんですね。

そういうくだらないことをなんで決めなければいけないかったのか、私は非常に疑問に思います。たぶん、子供がたくさんいすぎて、お家騒動が起こり得るからだと思えます。それからもう一つは、子供たちが悪いことをするかもしれないでしょう。そういうときに歯止めをかけておかなければ、ということがあったんじゃないかと思えます。それで、そういうことを決めましたね。十分の一の五といつても、あの頃はわりあいたくさんあったから、各家とも生活は十分できたんじゃないですか。それがあれば、同族会には来ますよ。来なかつたら金がもらえないから来るわけです。

伊藤 それで財閥解体で、澁澤さんの関係会社はなくなるわけですか。

澁澤 全部なくなるわけです。

伊藤 名前が残ったのは、澁澤倉庫ですか。

澁澤 倉庫は名前が残っていますが、私も二万株ぐらい持っているかという程度の話で、そんなものはゼロですね。関係ないんです。まったく関係ない。まあ、挨拶するぐらいのことはありますけれどね。

伊藤 同族というときには、穂積さんとか阪谷さんも入るんですか。

澁澤 ええ、そうです。穂積「歌子」、阪谷「琴子」、明石「愛子」という三人の娘さんが入って、それに四人の男、篤二、武之助、正雄、秀雄が入るわけです。年代的にも、穂積夫人が生まれたのは明治の前、文久何年ですね。澁澤秀雄が生まれたのは明治二十八年（一八九五）ぐらいですからね。

伊藤 だいぶ距離がありますね。

澁澤 すごいでしょ。だからそういうたがをはめておかないと、なんだかわからなくなってしまう、ということだったのかもしれないですね。

伊藤 そうですか。僕はいまでも、雅英さんまでずっと同族会をやっているかなと思っただんですが（笑い）。

澁澤 私は初めからあまり興味がなかった。各家の長男が二十歳になると、それ「同族会」に入れられるわけです。それをやっている、各家は少しずつ増えてくるけれど、長男だけが入っているということ、なんとなく面白くない、ということになるわけですね。私の父も弟が二人いましたけれど、それはあまり相手にしてもらえないので、父だけが同族会の社長をやっているわけですね。

伊藤 その先はもう分与がないわけですか。

澁澤 ないわけです。だからだんだん経済的にも成り立たなくなりました。私はずっとあつたんだと思います。それで戦争でおしまいになった。私はときどき集めて、みんなで一杯やったりすることはあるんです。それは同族会でも何でもなくて、たまに会おうかという程度の話でございます。

伊藤 わかりました。

■武蔵中学校の思い出

伊藤 昭和六年に小学校にお入りになって、さつきおっしゃったように二・二六事件のあとに中学ということですが、当時は中学というのはどういうふうに出るに選ばれるものですか。

澁澤 あのころ一番いいのは、高等学校の入学試験を受けないで済むところに入ることだったんですね。

伊藤 附属ですか。

澁澤 私どものようなあまり出来のよくない子供は。

伊藤 いや、ふつう附属という、出来がいい人が入るんですよ。

澁澤 いや、高師附属「東京高等師範学校 現・筑波大学」ではなくて、七年制のことです。武蔵、東京、成蹊、成城、甲南「兵

庫県」、富山「富山県」というような学校に入りたいたいわけでも落ちちはいやだから東京となると、武蔵か東京高校か、という話ですね。府立高校もありました、いまの都立大学ですね。その三つが一番魅力的な学校で、その次に一中とか四中とか六中とかというのが魅力的。それからいまおっしゃった高師附属ですね。そんなところをみんな狙うわけです。それから慶應が大きいですね。早稲田中学は行く人がいなかったと思いますから、慶應の普通部です。そういうところをみんな選んで、先生と相談して、おまえはあそこは駄目だろうとか、いまも同じですが、そういうことをやっていたわけですね。いまほど競争が激しくないけれど、それで私の父は武蔵がいいだろうと思っただけでしょうね。どうせ高等学校を受けても落ちそうだし、入学試験も大変だからということ、武蔵に入ったんです。

伊藤 入学試験というのは中学から高校に行くときの、ですね。

澁澤 そうです。

伊藤 武蔵はその当時ランクとしては――。

澁澤 まあ、トップの一つですね。一高とかなんとかいうのはちょっと違うけれど、トップだったと思いますね、武蔵、東京高校というのには有名でした。

木全 私は、日本で一番英語が上手な方だと思っています。

澁澤 とんでもないことを。そんなことは全然関係ない。武蔵では、英語が下手で落第したんです。中学三年生の時。

木全 そのときは下手だったんでしょ（笑い）。

澁澤 だから僕は中学も小学校も二回ずつやっているんです。だから友達をやたらといっているんです。

伊藤 中学でも一つ落とすと落第ですか。

澁澤 武蔵というのは面白い学校で、山本良吉という金沢の人が、西田幾多郎さんの同級生だそうですね、校長でした。落第するということは全然不名誉でも何でもありませんね。たくさん落

第させちゃうんです。「もういつべんやった方がいいんじゃない」「そうですね」という感じで落第しちゃうわけです。落第して下の組に行くと、先輩でしょう。だから「澁澤さん」なんて言われちゃって（伊藤 同級生に）。ええ、妙に遠慮されたりして、気持ちがいいんです。まだ子供で小さいですから、一年歳を取っていると、それだけやっぱり知っているじゃないですか。勉強だつて、二度やるとわりあいわかるじゃないですか。だから成績がよくなるんですよ。だから落第していい子はわりと成績がよくなくて、学校が好きになるんですよ。その前は、なんだか面倒くさくてかなわない、毎日電車に乗ってあんな遠くまでいくのはたまらない、と思っていました。

伊藤 武蔵はどこにあつたんですか。

澁澤 江古田にありました。いまの武蔵大学です。あそこまで三田から通うんですから、なかなか大変です。

伊藤 その当時はどうやって通つたんですか。

澁澤 市電というのがありましたね。それに乗って、目黒か恵比寿に行きまして、そこから山手線で目白に行つて、目白からバスで椎名町を通つて行くんです。それで江古田の先に武蔵高校前という停留所がありました。千川という川が流れていました。

伊藤 西武線じゃないんですね。

澁澤 西武線ではありません。あのころは武蔵野線とっていただけですね。池袋まで行けば、それに乗って江古田に行く。でもその方が時間がかかるものだからね。バスのほうがちょっと高いけれど、私は面倒くさいからそれに乗りました。それもいやになつて、中学になつてから自転車に通うことを始めました。

伊藤 ええっ、三田からですか。相当距離があるんじゃないですか。

澁澤 昔の幼稚園の外苑の前を通つて、新宿を抜けて、聖母病院の前、椎名町に行つて、学校まで行くんです。

伊藤 どれぐらいで行くんですか。

澁澤 行きはたいへん登りが多いわけです。帰りは下りなんです。こっちのほうが海で、あつちは山ですからね。だから帰りは非常に早い。

伊藤 でもずいぶん時間がかかるんじゃないですか。

澁澤 四十分以上かかったかもしれません。

伊藤 そんなもので行きますか。山手線の中からだから、そんなに遠くはないのかな。

澁澤 気持ちよかったですよ。いまほど交通量がありませんしね。

伊藤 それはそうですね。いまじゃ危なくて、自転車に乗って走れないですね。

澁澤 いまじゃ危ないですね。新宿を通つていくんですからね。

伊藤 当時の新宿は、そんなものじゃないでしょう。

澁澤 あまり記憶がないけれど、そんなものじゃなかったと思います。

伊藤 武蔵高校の附属にお入りになる頃は、何か将来のことをお考えでしたか。

澁澤 あまり考えていなかったですね。何か、やたらとつまらない本を読んだりして、勉強は嫌いでしたね。

伊藤 つまらない本というのは何ですか。

澁澤 つまらない本というのは、だいたい翻訳小説ですね。トルストイとか。つまらないと言つたのは、本がつまらないのではなくて、読む方がつまらない。こっちは全然わからずに読んでいくわけですからね。バルザックがいいとか、スタンダールがいいとか言っていましたよ。

伊藤 言っていた、ということはおそらく仲間がいるわけですね。

澁澤 そうですね。岩波文庫というのが大変なりソースだったわけです。私は家から本屋に電話をかけて、「岩波文庫の赤い帯の

ついた外国の小説を全部持って来い」と言った。全部ではないけれど、これとこれとこれ、と言うと、本屋は喜んで持ってくるわけですね。それは読めないから、ただ積んであるんですが、どちらかというとそういうことをやっています。勉強はしませんでした。

伊藤 いまのお話を伺っていて、ああそうだと思ったんですが、当時は電話のある家なんて非常に少なかったですね。

木全 そうですね。「配達せよ」と言うんですからね。

澁澤 そういう点は、やや金持ちだったかもしれないですね。

伊藤 「やや」じゃないと思います（笑い）。前に、加藤勤十夫妻にインタビューをしたことがあるんですが、そのときにシヅエさんは、「私の家には子供の頃からずっと電気洗濯機がございましたの」と言っただけですね。それで、ぼくはええっ！、と思ったんですね。

澁澤 それはすごい。石本さんですね。

伊藤 そうです。「それはどこのものですか」と言ったら、「ウエスティングハウスでつくったものだ」と言っていました。そういうお宅もあったんだな、と思いました。

澁澤 でも当時の電力状態では、あまりうまく機能しなかったかもしれないですね。

伊藤 「冷蔵庫もありました」というお話でした。だからおそらく澁澤さんのところにもあっただろうな、と思うんですが。

澁澤 いや、うちにはそんなものはありませんでした。冷蔵庫も、いわゆる氷がいつぱい入っている冷蔵庫で、氷屋さんが毎日こんな「手を一メートルほど開く」大きな氷を持ってきていたのを覚えてます。

伊藤 そうですか。中学では多少文学少年みたいところがあつたわけですかね。

澁澤 いい加減な文学少年ですね。系統的に読んでいるわけでも

何でもないし。

伊藤 文学少年というのはだいたいそうなんじゃないですか。

澁澤 そうですか（笑い）。どうでしょうね。ほとんど役に立たなかったような気がしますがね。

■高等学校の生活から勤労奉仕へ

伊藤 附属だと自動的に――。

澁澤 四年から高校になります。よほど悪くなければ。

伊藤 何かバリアがあるんですか。

澁澤 ないですね。一人前というか、普通の成績をとっていればみんな入ります。高等学校になると、よそから編入もありますね。私どもの組はだいたい八十人ぐらいいたんですが、二十人ぐらい編入するんでしょうか。そんな程度でした。

伊藤 外からかなり優秀な人が入ってくるということですか。

澁澤 これは優秀だったんだと思います。一緒にいましたから、それほど優秀だったとは思わなかったけれど、ああいう学校の試験に通るといのは優秀なんでしょうね。

伊藤 私は先ほど申しましたように、先生よりだいたいというほどでもないですが若いものですから、新制なんですね。よく旧制の高等学校を卒業なさった方々は、旧制高等学校を非常に懐かしく思い起こされるんですね。そして、そのときの友達が生涯の友達、という言い方をなさる方が非常に多いんです。

澁澤 それはそうですね。私も戦争になっちゃって、あまり長く一緒にいませんでしたけれどね。特に私は、途中で兵隊に行ったりしましたから。それでも、いまでも仲良くしています。このあいだも一緒に青森まで行って、クラス会をやったりしました。

伊藤 それは十和田のあそこですか。

澁澤 そうです。二晩ぐらい遊んできました。みんな奥さん連れで来ます。だから仲がいいんです。そういうところで話していると、やっぱりあのときの教育はよかったですね、という話になりますね。先生がよかったですね。非常に優秀な先生でした。漢文でもなんでもそうです。こっちはわからなかったんだけど、偉い人だったんだと思いますね。

伊藤 それはある意味で個性的な先生、ということですか。

澁澤 漢文の先生は、あろうことか加藤虎之助という名前の先生なんです。有名な先生でした。それから、内田泉という先生もいた。それぞれ唐の詩の専門家だとか、『春秋左氏伝』の専門家だとかいうんですね。英語の先生もシェリー、キーツの専門家だとかいうんです。ドイツ語も、国松「孝二」先生なんていまでも生きているそうだけれど、九州大学にいらっしやいましたね。非常に洒落た人でした。

伊藤 附属の場合と、高等学校の場合と、先生は共通なんですか。

澁澤 共通です。

伊藤 そうですか、それはすごいな。昔で言えば、中学校はたしか教諭ですし、高等学校は教授なんですね。

澁澤 その点はあまりはつきりしません。教授なんでしょうね。同じ人が教えていました。教えることも、国語の先生は重友「毅」先生という人でしたが、近松門左衛門の専門家で、いろいろ教えてくれるわけです。歌舞伎ではこういうふうにする、音楽ではこうやる、義太夫はこうだ、長唄はこうなる、とかね。あの戦争の時にそういうことを教えるところはあまりなかったと思うんですが、非常に学問的に高級な話をしてくれるわけです。いまでもよく覚えていますよ。

武田 外国人の先生はいらっしやいましたか。

澁澤 いました。二人ぐらいいたと思います。でも戦争が激しくなると、最後にはいなくなりました。

伊藤 そうすると英語教育もかなり――。

澁澤 英語は一所懸命やっていましたね。英語もやっていましたし、英文学の先生もいました。それもほんの短い期間、一年ばかりのあいだなんです。そのとき習ったことが私のすべてだ、という感じがしますよ。

伊藤 それはちよつと大袈裟じゃないですか。

澁澤 大袈裟ですか。それ以来あまり勉強をしたことがない。小学校の時に勉強したことが一番ベースですね。

伊藤 それは誰でもそうですけれど。

澁澤 算術から何から、全部小学校でやって、それ以来全然進歩していない。中学・高校で習ったことは、こういうものなんだ、こういう方向でやればわかるんだ、もし知りたければこういうことをやればいいんだという、学問のすすめじゃないけれど、そういうことを教わったんだと思いますね。

伊藤 高等学校に入られたのは昭和十七年（一九四二）ですか。入られたときはもう戦争になっているときですか。

澁澤 はい。中学四年のとき、私は非常に憂鬱な毎日を暮らしていました。とにかく日本は駄目だと思っていましたし、非常に不愉快な感じでした。学校がどんどん悪くなる。配属将校なんていうのがいて威張っていましたからね。武蔵はそれに抵抗し続けてきた学校だと思いますが、そんな感じでした。ある日学校を辞めちゃおうかと思つて、自由学園というものがあるからそれを見に行こうというわけで、友達と一緒に行ったんです。そうしたら、自由学園というのはとてもいい学校なんだけれど、転校するだけの勇気もなくて、帰りに渋谷の駅でアイスクリームが何かを食べべた。びっくりしたといつても、そういうふうになりそうな感じではありましたがね。それが中学四年です。だからその翌年に高校ですね。だから「高校入学は」十七年だと思つています。

伊藤 自由学園には高等教育の部分はあるんですか。

澁澤 なかったのかもしれませんがね。

伊藤 たしかあれは高等教育はなかったと思いますね。では、とにかく高等学校時代は、戦争の時代ですね。

澁澤 もうそれからすぐ勤労奉仕ですからね。

伊藤 ここにも勤労奉仕と書いてあるんですが、いったい何をされたのかな、と思ったんですが。

澁澤 最初は埼玉県の田舎に稲刈りに行ったんです。

伊藤 それは農作業ですね。

澁澤 二週間ですか、十一月頃ですね。

伊藤 初めての経験でしょう。

澁澤 もちろん初めてですが、非常に楽しかったですよ。

伊藤 鎌で指など切らなかつたですか。

澁澤 いや切らなかつたですけど。

伊藤 お米が地上に生えているんだ。

澁澤 男の人がいないわけですね。きれいなお嬢さんばかりじゃない。

伊藤 いや、危ないですね。

澁澤 そういうところに泊まり込んでやっているわけでしょう。だからみんなにこにこしていましたよ。それで鎌で一日中刈った。

二反歩とか三反歩とか、何軒かの家が一緒に勤労奉仕の学生を連れて、チームを組んで稲刈りをやるんですね。よかつたですよ、景色もいいし、空気もいいし。

伊藤 私も子供の頃に父親に連れられて驚宮か何かに行って、これがお米のなる草だと教えてもらいましたよ。それで疎開に行つて、初めて稲刈りをやりました。

澁澤 それが一つですが、高校二年になってからは全面的に勤労奉仕ですね。学校に行くことはほとんどなしですね。これは板橋

のほうの金属工業で、鉄砲の弾か何かつくっていたんじゃないかな。

な。そういうところにいました。

伊藤 それはどんな作業ですか。

澁澤 私は引き物といって、真鍮の棒を細くします。ダイスの中を通して細くするわけです。そして弾の大きさにするんだけど、その先はどういうふうな弾になるのか僕は知りません。そんなことをやっていました。いろいろな機械がありまして、それぞれ別のことをやっていました。

伊藤 分担していたんですね。これを拝読していたら、お父様が見に来られたということですね。

澁澤 ええ、私は非常に反抗的で、日本に協力する気があまりなかつたんですよ。ところがその工場に行ったら、ちょっと気が変わりました。「やつぱり負けちゃあ困るな、一所懸命つくるか」といって、毎日遅刻もしないで、三田から板橋まで行くんですか

らね。大変でしたけれど、行って一所懸命やっていたわけです。それで父親が面白がつて見に来たんだと思いますね。何をやっているんだろうと思つたんじゃないですか。日銀総裁が来るとい

うわけで、びつくりして、みんなワーワー言っていましたよ。

伊藤 それはびつくりするでしょうね。

澁澤 でも私にはあまり関係がない。ただサーツと見て帰っちゃ

う。

伊藤 いや、会社は驚いたと思いますよ（笑い）。

澁澤 会社は喜んだのかもしれませんがね。でもそれだけの話ですよ。そして十月に兵隊に行つちやいましたからね。

■陸軍予備士官学校の頃

伊藤 軍隊に入ったのは二年生の時ですか。

澁澤 はい、二年生です。

伊藤 兵隊に行くというのは、適齢になつたという意味ですか。

澁澤 そうです。その年、十九歳になりましたからね。十九歳から徴兵になりました。それでもう行かなくてはいけないということになって、予備士官学校というところに幹部候補生にアプライしたわけです。

伊藤 すみません、ちょっと制度的によくわからないんですが、高等学校にいらるときに出願できるんですか。

澁澤 はい、もう十九歳になる人はできるんですね。あるいはもつと若くてもできるのかもしれませんが。

伊藤 それは陸軍ですね。

澁澤 陸軍の特別甲種幹部候補生という制度ができて、それにアプライしたわけです。そうしたら入って、十月五日だか十日に――。

伊藤 それは試験か何かあるわけですか。

澁澤 ええ、試験みたいなものがありましたね。鉄砲を撃つたりしましたよ。戸山が原に行つて、何かがあつて、バンなんてやつた。

伊藤 それは教練「軍事教練」か何かでやっていたことですか。

澁澤 そうです。私は大嫌いなんですけれど、まあしょうがない。甲種幹部候補生というのは、最初から伍長さんになるんです。それで半年で見習士官になるという話だったから、それはいいじゃないと思つて、なつたわけです。

伊藤 それが前橋にあつたわけですか。

澁澤 はい、前橋予備士官学校という大きな学校です。

伊藤 そうですね。たくさんの人が前橋、前橋とおっしゃいますから。

澁澤 相馬が原の寒いところで、本当にまいっちゃつた。

伊藤 いままでのお坊っちゃま生活とは全然違う。

澁澤 それほどお坊っちゃま生活ではありませんでしたから。いろいろなことをやっていましたからね。山にも登つたし、いろいろ

ろなことをしていましたけれど、あれほどひどい寒いところに行つたのは初めてですね。それと、工場に行つたときには、まだ日本が負けない方がいいから少しでもやろうかと思つたけれど、前橋に行つたら、もう日本は負けた方がいいと思うようになりましてね。

伊藤 それは何故ですか。

澁澤 だつて、とにかく知的にまったく話にならない。だつて学校ですからね。多少は、何のために戦争をしているのかとか、国際関係とか、そういうことを言つてもいいんじゃないかと思つたけれど、そういうことは一切言わないんですね。命を捨てるんだ、みたいなことばかりギョーギョー言っているわけです。知的レベルが低いといつて威張るほどこつちが知的レベルが高かつたわけではないけれど、生き甲斐として、あんなことはとてもやれないと思ひましたね。行つた途端に、もういやになつちゃつた。

伊藤 どういう教育をするんですか。

澁澤 私は通信隊でしたから、トンツ、トンツとやつたり、通信機を持つていつて野原に行つて、いくつかの班に分かれて交信したりするんですよ。だけど、そんなことはくだらないことですよ。食べるものもあまりないので、みんなお腹を空かして、食事を盗んだりして怒られたりしているわけです。とにかく一番驚いたのは、士官を養成する学校なんだけれど、その学校には戦車が三台しかないわけです。それもみんなガソリンがないから動かないんですね。そんなことで勝てるわけがないじゃないか、勝つどころか日本は終わりだ、それなら早く負けた方がいい。

伊藤 仲間の人たちはどうだつたんですか。

澁澤 本音はみんなそう思つていたんじゃないですか。みんな学生ですからね。でも入つたらしようがない、一緒にやろうという人もあつたし、そういうことが好きな人もいますからね。僕は七十人ぐらいのうち、ちょうど真ん中で卒業しました。

伊藤 一学年が七十人ぐらいなんですか。

澁澤 それはもう学年というものではなくて、なんとか区隊という。通信隊の同期生です。

伊藤 通信のほかにあるんですね。主計とか——。

澁澤 主計はない。それはもつと文化的なところで、われわれのところは歩兵と通信と機関銃と歩兵砲です。

伊藤 それぞれが区隊になっているんですか。

澁澤 そうです。それで何人かみんな一緒に暮らしている。

伊藤 教官はみんな軍人さんなんですか。

澁澤 みんな予備役です。つまり学生出身の人ですね。中隊長が唯一の本物でした。それがどうしようもないやつで、僕はこれとても駄目だと思いました。

伊藤 その当時、同じ区隊で苦勞なさった方々とはおつき合いはありますか。

澁澤 全然ないですね。その連中がときどき集まる。私のグループは外地へは出ませんでしたから戦死した人はいないんですが、少し前の人はずいぶん戦死しています。そういう人たちの慰霊祭をやるから来いとか、寄付をしろというのは来ますけれど、全然やる気がないから。

伊藤 それは昭和十九年（一九四四）ですか。

澁澤 十九年の十月に入つて、二十年の六月に卒業して、その麻布、このあいだまで防衛庁のあったところに、見習士官になって来ました。

伊藤 何連隊というのではなくて、なんとか部隊というんですね。

澁澤 東部なんとか部隊という名前でしたね。そこに入りました。それからさらに配属されて、千葉県の大柏に行きました。

■通信隊の見習士官とつづ

伊藤 見習士官というのは少尉の下ですか。

澁澤 そうです、もちろん見習いです。

伊藤 でも待遇はいちおう士官なんですか。

澁澤 はい、そうです。だから営門をパツと出ると、みんなさつと立ち上がつて敬礼したりするので、きまりが悪くてしょうがない。

伊藤 「きまり悪い」という言葉は最近あまり聞かないですね。

澁澤 だつてそうじゃないですか。こっちは軍隊意識じゃないんだから。

伊藤 いや頭はどうか知りませんが、格好はちゃんと軍服を着ているわけでしょう。

澁澤 ずいぶんケチな軍服でしたけれどね。通るとハツと敬礼するわけです。だから怖ろしくて、なんとか裏を通つて逃げたいと思つたけれど、そうもいかない。というのは家が近くでしょう。だからそこに入った翌朝、私はそこを飛び出して家に行ったんです。飛び出したのは六時頃だったか、まだ朝早い頃で、敬礼、とみんなやっているわけで、おつかなくて、見つかつちゃうじゃないと思つたから。

伊藤 それは外出ですか。

澁澤 将校はいつでも入つたり出たりできるわけです。好きなようにできるわけです。

伊藤 営内居住ではないんですか。

澁澤 そのときは営内居住でした。でも下士官以下の人は許可がないと出られないわけです。将校は出られるわけです。見習士官もそれに準じるわけです。しめしめ、ということですよ。

伊藤 それは知りませんでした。営内居住だと将校でも許可が要

るのかと思いました。

濞澤 要らないと思いますね。そのころの軍隊の規則を覚えてい
るわけでもないし、そのころも知りませんでしたけれどね。

伊藤 やっぱりと数ヶ月戦争が続いたら、どこかに出るとい
うことだったんですか。

濞澤 私の場合はもう、本土決戦、九十九里浜かどこかに上陸し
てきたらどうするかということを経上演習でやっていましたよ。

そんな馬鹿なことがやれるわけがない、と思っていました。

伊藤 それで柏なんですか。

濞澤 松戸のそばです。

伊藤 あれは内陸ですね。

濞澤 それは、そこに部隊があつて泊まる場所があつたから入
られたんじゃないですか。

伊藤 本土決戦用の部隊ということですか。

濞澤 そうですね。

伊藤 しかしそこに行つて数ヶ月で敗戦ということですね。

濞澤 そのときはもう七月ですから、本当に悪くなっていました。
鈴木貫太郎内閣になっていました。私はときどき出てきて、東京
に遊びに来るわけです。なんとかかんとか理屈をつけました。も
ちろん通信隊ですが、機材がないわけです。壊れたりすると補充
がきかない。「じゃあ一つ発電機を買ってきてやるから、東京へ
行つてくる」とかいうと、「じゃあ行つてきてくれ」と中隊長が
いうわけです。

それで沖電気か何かに行つて、「発電機三台よこせ」とかなん
とかいう。発電機といつてもこんなに小さいんですよ。手動の大
したことがないものだけれど。沖電気は浅野総一郎さん「二代
目」という人が社長で、その人をちょっと知っていたものだから、
出かけていって、「発電機ちょうだい」といって、「やるかな」と
いってもらつて帰つてきたりした。しかしその途中で、ただでは

帰らないから、家に行つて一晩泊まつてご馳走を食べて、いろい
ろ話を聞く。当時おやじは日銀総裁でしょう。空襲で焼けた人が
たくさん家に来ていた。うちはたまたま焼けていなかった。いろ
いろな人が入っていました。木内「孝」さんのお父さん「信胤」
も入っていたわけです。そのほかに石川島の重役なんかもいまし
たからね。そういう人と話をすると日本の状況がわかるじゃない
ですか。

伊藤 それは「濞澤村」と言われるものですね。

濞澤 そうそう。村の人はえらい人が多いし、食料もいっぱいあ
る。

伊藤 情報もいっぱいあるんですね。

濞澤 情報もいっぱいある。「これじゃあ駄目じゃない？」と言
つたら、「駄目だよ」と言つたりね。うちの父は責任もあるので
しよう、「そんなこと言わない方がいいよ」とかなんとか言つて
いたけれど、見え見えじゃないですか。だから駄目なんだと思
つて、また発電機を抱えて帰るわけです。それで柏では、神社の
家を借りて下宿していましたけれど、小さな下宿からいやいやな
がら朝、部隊に行くわけです。それで一日ぼんやりして、また帰
つてくるような生活をしていました。

ただ夜、塹壕の中に通信機が並んでいる部屋があつたので、そ
こによく遊びに行つて、アメリカの放送を聞いていました。だか
ら、もういよいよだとわかるんです。ポツダム会議があつたとか、
それを日本は受け入れたとか受け入れないとかいうことがわかる
わけです。日本語でもやつている。アメリカの音楽が聞こえて、
いや素晴らしいなと思つたりしていました。

それからB29が落ちたりして、中にあるものを盗んでくるわけ
です。通信関係のものですね。そうしたら全然性能が違うわけで
す。もつとも、私はよくわからないんですが、われわれの持つて
いるものは明治時代の機械ですから、全然違うということにはわか

るわけですね。それで聞くと、きれいに音楽が入るし、これは素晴らしいと思っていました。だから戦争が終わったときに私は、ざまを見る、という感じでしかなかったですね。

伊藤 いまのお話で、お宅に寄ったということは、お宅の周辺は空襲には全然遭っていない時期ですか。

澁澤 いやたくさん遭いました。ほとんどの家が焼けたんですが、うちだけ残ったんです。

伊藤 お書きになったものを見ると、柏から東京の方を見ていた、と――。

澁澤 ああ、前橋からですね。三月二十五日に、前橋から見ると東京が真っ赤になっていましたから、これはもうとても駄目だと思っていました。

伊藤 奇跡的にも残ったということですか。

澁澤 でも父親がわざわざ天井裏に行って焼夷弾を払いのけたりして、天井から落ちたりして、大騒ぎをしたらしいですよ。そのときは人がいっぱいいたから、「澁澤村」だったからよかった。みんながいなかったら焼けていますね。それが焼けなかった。いろいろな資料を父は持っていましたので、それが辛くも戦災を免れたんです。

伊藤 あのミュージアムのものなんかですね。

澁澤 いまそれはもう大変貴重なものになりました。

伊藤 空襲で燃えていたら何も残らないということでしょうね。

澁澤 うちでもいくらかは燃えたんですが、燃えないものもあつた。

伊藤 お宅の周辺、一角が残ったんですか。

澁澤 すぐ隣の小泉さんの家は焼けちゃって、信三さんは火傷をしたんですね。

伊藤 あれはお隣なんですか。

澁澤 お隣といってもすぐ隣でもないけれど、ちょっと近くです

ね。焼けた家が多いですよ。麻布十番なんか全滅ですからね。前橋から帰ってきて、ある朝飛び出してきて六本木に行ったら、ずうっと私の家までちゃんと見えるわけです。それで、なるほど東京というところはローマの七つの丘じゃないけれど、丘と谷の町なんだということを感じました。本当にそうなんです。

伊藤 今日も渋谷の駅からバスに乗ってくると、こう「昇ったり下ったり」ですからね。

澁澤 そのあいだに家が全部ないんだから、非常に見晴らしがよかったです。

■終戦、除隊へ

伊藤 それで八月十五日は――。

澁澤 柏におりました。

伊藤 どんな具合でございましたか。

澁澤 いや、なんていうこともない。朝、空襲警報が鳴って、艦載機が毎日のように来るので、逃げ回ったりしていたんです。でも私は知っていたわけです。日本政府がそれを受け入れたということ。十五日に天皇陛下が放送するらしいということも知っていました。いつまで空襲しているかと思ったら、本当に十一時頃、サアーツとみんないなくなつた。それでまったく静かになつた。暑かつたけれど、きれいな日で、みんな宮庭に集まつて、汚いラジオを持ち出してきてやつたんですが、何を言っているのかよくわからない。とにかく勝つたと言っているのではないことはわかるんですね。だから相当ショックを受けた人もいましたね。ショックを受けたのはプロの軍人で、若い人で一所懸命やっている人でしたから、かわいそうでしたね。

でも予備士官学校出身のわれわれ予備将校は全然がっかりしてないわけです。もうそのときから、「これからは土地は上がる

か、下がるか」なんていう話をしたりしていましたからね。将校集会所にみんな集まって話をしたら、そんなことを言っていました。

伊藤 その柏の通信隊は、予備士官学校出の人が多かったんですか。

澁澤 もう将校というのは、本物はほとんどいないんですね。柏全体でも二人とか三人しかいないんじゃないでしょうかね。

伊藤 それで復員は即日始まるんですか。

澁澤 ええ、少しずつ始まりました。私はどういうわけだか英語ができるということになっていたのでした。

伊藤 いや、できたんでしょう。

木全 シェークスピアでしょう。

澁澤 できなかったんです。それでも通訳をやれ、ということになったんです。それで九月の初めか、厚木にマッカーサーが来るということになって、東京の六本木の部隊にまた異動になったんです。

伊藤 すぐ復員させてくれなかったんですね。

澁澤 もっとも、少尉にしてくださいましたね。

伊藤 ポツダム少尉ですね（笑い）。

澁澤 だから少尉の軍服を着て、帰ってきたわけです。それで六本木の大きな部隊、いま「スターズ・アンド・ストライプス」が入っているところですが、そこに行つて通訳の試験を受けたんです。

伊藤 それは軍人のままですか。

澁澤 もちろん軍人のままです。それで通訳の試験を二世の人がやるんですが、私はあっさり落ちました。

木全 二世というのはアメリカ人ですか。

澁澤 日系二世です。

伊藤 そうでしょうけれど、占領軍なんですね。

澁澤 そうじゃないかもしれませんね。日本人でそういうのがいたのかもしれませんが。あるいは乗り込んで来たのかもしれませんが。先遣隊かもしれません。でも兵服を着ていました。それで何か質問をしました。あなたの子供はどことかという。しかしわからないわけです。あとになって考えればみんなわかるんだけれど、そのときは何を言っているかわからないから、あっさり落第した。落第したものだから、もう一回柏に帰って、そこで除隊です。二千何百円という法外なお金をもらって帰ってきました。

伊藤 法外ですか。

澁澤 そのころ法外でしたよ。だってひと月の給料が八十円とかいう時期ですからね。

伊藤 そのうち、インフレであつという間に価値がなくなりますけれど。

澁澤 それから、その中の千円は封鎖されました。定期預金でくれました。だからあまり使い出はありませんでした。何も使うことはないですからね。それで学校の先生から近松の話が聞かされていきましたから、歌舞伎の芝居を観に行ったりしていました。

伊藤 やつていたんですか。

澁澤 東京劇場とか有楽座とか、ほんのいくつか残ったところがあるんです。そこで、二十一年（一九四六）のお正月以降の話ですが、やっていたんです。「尾上」菊五郎とか、竹本越路大夫とか、国宝級の人がいっぱいおったんです。それはえらいんだと名前だけ聞いていたから、僕はそれをしょっちゅう観に行つた。新派とか前進座とか、面白かったですよ。それに毎日行けるだけのお金をもらって帰ってきました。

武田 そのころやつているんですね。

澁澤 やつていましたよ。

伊藤 除隊になったのはいつ頃ですか。

澁澤 「昭和二十年」八月の終わりか九月の初めだったと思いま

すね。それから青森に行っただんです。私の家族が疎開してしましたから。それで青森県で自転車を借りて、下北半島を一周したりして遊んでいたわけですよ。

伊藤 しかしそんな時代にどうやって食べるものを手に入れていたんですか。

澁澤 こっちは農場ですからね。

伊藤 ちよつと待つてくたさい、その農場って何ですか。

澁澤 「澁澤農場」というところにいたんです。そこに疎開していたわけですよ。それは澁澤栄一が明治時代に手に入れたというわけじゃないけれど、担保流れか何かになったものを犠牲的精神をもって引き受けたんじゃないですか。それからずっと経営していたんですが、澁澤農場何千ヘクタールとかあったんです。木がいっぱい生えていた。

伊藤 それは何という村ですか。

澁澤 三本木というところで、いま十和田市とっています。

伊藤 十和田市の中に入っているんですね。

澁澤 そうです。十和田市から三沢に行く途中のかなりの場所が農場だったわけですよ。そこに行くと、米はあまりなかったんですけど、私がちよつと持つて歩くぐらいのものはあったんですよ。新しい自転車を所長が買ったのを取り上げちゃって、ガタガタにしちゃって、いまちよつとかわいそうだと思っっているけれど（笑い）。自転車の後ろにお米を乗せてね。

伊藤 お米を持つていかなかったら、どこも食べさせてくれませんかからね。

澁澤 はい。だいたい民家に泊めてもらってましたけれどね。なんとなく有名な人がいるじゃないですか。そういうところに行くのと、「ああそうですか、澁澤さんですか」といって泊めてくれるわけですよ。

伊藤 お父様が歩いたところもずいぶんあるでしょうからね。

澁澤 澁澤農場というのは、青森県でもいろいろ仕事をしていたんですよ。

伊藤 そういう意味もありますか。

澁澤 たぶんあると思います。でも電話をかけておいて、あいつが行くから、というような話ではなかったんです。

伊藤 飛び込みで行くわけですね。

澁澤 飛び込みで行くわけですよ。いい旅行でした。二回ぐらい、二、三週間行きましたね。

伊藤 それはいつの話ですか。

澁澤 二十年（一九四五）の十月です。もう寒くなり始めです。いまワーワー言っている六ヶ所村とか、あの辺をずっと通りましたよ。

伊藤 紅葉がきれいな季節ですね。

澁澤 きれいでしたね。「国破れて山河在り」とかいうことは僕にはあまり信じてなかったけれど、そのときは負けて助かったな、なんて思っていましたよ。

伊藤 命が助かったことは間違いないですからね。

澁澤 でも、国も助かったんですよ。

■東大生のアルバイト

伊藤 高等学校から予備士官学校を受けられますね。そのときは学籍はどうなるんですか。

澁澤 武蔵を休学しているよう格好じゃないですか。休学しているといつても、ほとんどが勤労奉仕をやっているんですから、たまたま私は予備士官学校にいるというだけで、学校には籍があったと思います。第一、学校から「大学はどこに行くんだ」と聞いてきましたから。

伊藤 そのときは大学のことをどういふふうにお考えになってい

たんですか。もともと、高等学校に入られたということは、大学に行こうということでしょう。

澁澤 ええ、そうですね。行くのなら東京大学に行くんだろうと思っていましたね。武蔵のやつは、みんなそう思っていますから。伊藤 当時は東京帝大ですね。

澁澤 はい、あるいは京都とかね。あのころは全部うちやうんですから、そうなんだろうと思っていました。ただ法学部なんかは競争が激しいから、農学部なら大丈夫だろうと思って、「農学部に行きます」と言ったら、ちゃんと入っちゃったわけです。農業経済ですが、本当の農学はやる気がなかった（笑い）。

伊藤 それじゃあ、復員されたときはもう――。

澁澤 大学生です。東京大学の学生です。

伊藤 恵まれていますね（笑い）。軍隊に行っているあいだに、自然に卒業して、入学しているんですね。

澁澤 ですから私は本当に勉強ということをしたことがないんです。小学校から中学に入るときの試験が唯一の試験です。

伊藤 それでは下北半島なんかを回っている頃は、本当は大学に行っていないわけじゃないんでしょう。

澁澤 本当は行っていないわけじゃない。でも行く気なんか全くなかった。一度大学に行きましたよ。

伊藤 手続きですか。じゃあ、いちおう大学に入られたことは間違いないわけですね。

澁澤 だって卒業証書もらったんだから（笑い）。

伊藤 もちろんそれはそうでしょうけれど、もうやめちまえ、ということではないんですね。

澁澤 そうじゃないんです。でもほとんど勉強しなかったですね。全部で五年間いましたけれど、四十日ぐらいしか行かなかったんじゃないでしょうか。

伊藤 試験や何かはどうなっていたんですか。

澁澤 難しい試験があるんですよ。肥料学とか作物学とか栽培原論とかあるんですよ。

伊藤 お父様だったら喜ぶような学問じゃないですか。

澁澤 それは「僕には」絶対にできないでしょう。僕はアルバイトをしていましたから、同級生にお金をやって、受けてもらうわけです。

伊藤 何のアルバイトをしていたんですか。

澁澤 それがいろいろあったんです。まず一番効率が良かったのは、千駄ヶ谷に津田英語会というのがあったんですが、そこで英文タイプを教えたことでした。

伊藤 さっきの話とちよつと違うんじゃないですか。英文タイプを教えるということは、英語を教えるということでしょう。

澁澤 いや、英語を教える力はないんです。通訳で落っこちたぐらだから。だけれども、あのころの平均的日本人の中では多少英語はわかった方もかもしれませんけれどね。文章を読み上げるぐらいのことはできましたけれど。タイプはもつと前から、高等学校の時からやっていたんです。

伊藤 それはどういうきつかけでおやりになったんですか。

木全 うちにあつたから。

澁澤 あつたし、英文タイプというのは面白いじゃないですか。

伊藤 よく女の人がやりますけれどね。

木全 でもみなさんやっていない時代ですから。

澁澤 いや、女の人に限らないですよ、男だってやりますよ。「黒沢商会」というお店があつたでしょう。そこに『タイプ教本』というのがあつて、それを見てやっていたんです。だいぶうまくなつたんです。

伊藤 じゃあ、いまワープロなんかやるのにすごく楽ですね。

澁澤 ワープロを私ができるようになったというか、やる気になったのは、そのときのおかげです。

伊藤 キーの並びが同じですからね。

澁澤 それを教えるのがなかなかいい商売で、一日五時間も六時間も教えると、一回何百円だか、いくらだったか忘れたけれど、くれるわけです。それが一つのアルバイトです。

伊藤 それはどういう人が勉強しているわけですか。タイピストになろうという人ですか。

澁澤 ええ。男性もいましたが、大部分女性ですね。だから、なかなか色っぽくてよかったです。もう一つは大蔵省でアルバイトをしていました。これもタイプライターが必要だったんですね。タイピストがいなかったんです。ところがあのときは、日本の法律を全部英語にしなくてはいけなかったんですね。終戦連絡部というところは、それに狂奔していたんですね。

伊藤 じゃあ木内信胤さんのところじゃないですか。

澁澤 そう、そこにいたんです。信胤さんの部の中で、タイプを打っていたんです。

武田 じゃあ、木内さんともお仕事では顔を合わせるんですか。

澁澤 木内さんとは同じ家に住んでいましたからね。

伊藤 「澁澤村」の住人なんだから。

澁澤 けれども、一緒に仕事するなんていうことではないですよ。彼は偉い人ですから。その下に、柏木雄介とか、渡辺武とか、そういうえらい人がいっぱいいた。

伊藤 渡辺武さんもいたんですか。渡辺武さんがその次ぐらいでしょう。

澁澤 ええ、課長ですね。その下に、たくさん民間からスカウトされた人がいました。東京海上の水沢さんとか、三井から来たナツキさんとか。つまり海外のお店にいた洒落た人たちがいっぱい来ていたんです。そういう人でないと交渉ができなかったんですね。私はそういうのではなくて、タイプを打っていたんですけれどね。

伊藤 今度は教える方ではなくて、タイプを自分で打つ方ですか。

澁澤 そうですね、タイピストと一緒にやっているわけですね。

伊藤 それは自分で翻訳するわけではなくて、誰かが翻訳したものでですか。

澁澤 初めは全然翻訳なんかしなかったですね。でもだんだん、大蔵省が四谷に移ってからは、私も手紙を書いたり、それを司令部に持って行ったりする仕事もお世辞にやっていましたけれどね。あまり何もしないといけないから。

伊藤 要するにアルバイトでしょう。

澁澤 アルバイトですよ、もちろん。

伊藤 フルタイムで働いているわけではないでしょう。

澁澤 もちろんない。官僚になる気なんか初めから全然ないですから。

伊藤 それはそうかも知れませんが、信胤さんだって別に役人になるつもりでやっていたんじゃないでしょう。

澁澤 役人じゃなかったですね。

伊藤 いや、やっぱり役人ですよ。

澁澤 あの場合は役人ですね。だから、うちの父親が大臣になったのと同じですよ。みんなアルバイトですよ。

武田 みんなアルバイトですか（笑い）。

木全 大臣もアルバイト（笑い）。

澁澤 自分でそういうふうにしてやっていたと思いますよ。いやなアルバイトだけれど、押しつけられた、ということだと思いますよ。

木全 アルバイトにはお手当がいい。

澁澤 彼は本職だなんて全く思っていないからでしょう。

伊藤 そうですね、それまでの経歴と全く違いますからね。

澁澤 だから、いやでいやでしようがなかったと思いますよ。

伊藤 それ「終戦連絡部でのタイピスト」はいいアルバイトでし

たか。

木全 「東大に」五年間の中で四十日出席して、卒業したのは何故、というところから話が始まったわけですが――。

澁澤 自分でアルバイトをして稼いだ金で、今度は友達の子に試験を受けてもらって、それでやっと卒業したんです。唯一自分でやらなくてはいけないのは実習で、田無の農場に行った。これは出席を取られるから、十回ぐらい行きましたかね。ペーコンはこうやってつくるんだ、とかいって、へえそうか、と思った（笑い）。

伊藤 それは本当に実学ですね。

澁澤 実学といつて、何も知らなかったんですよ。

木全 だから卒業して、ペーコンに関係のある東食に入られた。

澁澤 まあ、東食に入ろうという気はちょっとありましたね。東食という会社はなかったんですが、水産業みたいな仕事をしたいなとは思っていました。

伊藤 お父様の影響もあるんですか。

澁澤 それはちょっとありますね。でも父のは学問ですからね。私はそうじゃなくて、食料のない時だから、食料の会社に入ったらしいと思った。

伊藤 それは正解ですね。

澁澤 正解でしたよ。

伊藤 卒業なさるのは何年ですか。

澁澤 二十五年（一九五〇）です。ですから五年間かかって卒業した。かかったといつても、五年間遊んで卒業した。

伊藤 その間、アルバイト三昧ですか。

澁澤 ええ、それで試験はひとに受けてもらったり、自分で受けたのもいくつありました。けれども一番大事なのは東畑「精一」先生のシユンペーターに関する試験で、見事に落っこちて、それが落ちたために卒業できないわけですよ。ところがもう東食に就

職していましたから、頼みに行ったわけですよ。

伊藤 「ビッテン」というやつですね。

【註】「ビッテン」とは、戦前の旧制高校で用いられた落第しそうな学生が教師に合格をお願いすることをいう。ドイツ語の「bitten（お願いする）」から来たとされる。

澁澤 ビッテン。しょうがねえな、ということですよ。あの頃、東大はいい加減な学校だった。近藤康男さんなんかのゼミに出ても、共産党の集会みたいな感じのところ、革命を起こすような顔をして、そんなことばかりやっているわけでしょう。僕は全然興味がないしね。唯一やったのは卒業論文で、古島敏雄というえらい先生がいて、その方のところで漁業権に関することをやりました。これは父親のところ、古文書を拾って来て、自分では読めないからその人に読んでもらって、それを適当にまとめて出したら、古島さんは、「じゃあ卒業させてやろう」とかいうことになった。

伊藤 見事、農学士になられたわけですね。

澁澤 そうだ、農学士なんだ、僕は。

伊藤 あそこは農学士でしょうね。

澁澤 そうです。

木全 農業経済士なんて言いませんね。農学部ですもの。

伊藤 いまごろはいろいろな学士号や博士号もあって、いろいろですけど、当時はやっぱり学部ごとに出してましたね。

澁澤 そうですね。農学士になっちゃったんですよ。それで東食「東京食品株式会社」昭和三十六年に株式会社東食へ商号変更に入った。それからは一所懸命でした。

■ 東食に就職する

伊藤 そのころ、就職の状況はいかがでした。

濫澤 難しかったと思いますね。だけど東食では、私は学校にいるときにアルバイトをやっていましたから。

伊藤 そういうふうにつながって来るんですね。それは何のアルバイトですか。

木全 ベーコン？

濫澤 いや、ベーコンじゃなくて、牡蠣だと思いますが、タネ牡蠣という商売があつて、仙台のほうでやっているとすね。牡蠣の子供をつかまえて、それを牡蠣のカラに附着させて、その附着させたものをアメリカに輸出するという商売が戦後始まったんですね。それを東食が代理店みたいにしてやっていたので、仙台に行きました。それを出すのに、アメリカから検査官が来るわけですよ。その相手をして、二ヶ月から三ヶ月やらなくてはならない。最後に大きな船五、六パイ分を船積みして出す。二月から四月の初めまでの仕事なんです。そういう馬鹿なことをやる人というのは正規の社員にはあまりいないから、それでアルバイトということをやったのかな。

伊藤 向こうから買い付けに来る人と対応するわけですか。

濫澤 買い付けというか、検査に来るんです。アメリカの州の政府の検査官です。

伊藤 向こうの会社ではないんですか。

濫澤 会社じゃないんです。日本の牡蠣にはいろいろな害虫がついている。ニシとかいうのがついていて、それがアメリカに行くに困るといので、それを駆除することなんです。駆除なんてできやしないので、みんないっぱい行くんですけれどね。

伊藤 ニシというのはタニシのニシです。

濫澤 そうですね。タニシのような格好をして、もう少し凶暴なやつで、牡蠣を食べちゃうんです。牡蠣に穴を開けて中身を取っちゃう。日本でそれがあまり害がないのは、日本では牡蠣は役に浮かべてぶら下げるでしょう。だからニシがつかない。ところが

アメリカでは地撒きするんです。だからニシが増えると、ある浜は全滅ということになるわけです。それを怖がって検査官を派遣してくる。検査官は占領軍の宿舎に泊まって、私は変な旅館に泊まって、毎日一緒に浜に出かけていつて通訳をするということなんです。英語と日本語も難しいんだけど、漁師の日本語と私の日本語が、これまたわからない。何を言っているんだかちつともわからない。だから三重通訳が必要だったんだけど、わかったような顔をして「フン、フン」とかいつてやっていました。本当は全然わからない。

伊藤 しかしさっきのお話だと、通訳は駄目ということでした。なんとなくお話が食い違うな、と思つていらっしゃるんですけど。さつきは、日本で一番上手な英語遣いだというお話だったんですけど。

木全 「That's my observation.」それは私の所見です」

濫澤 それはずっと後のことです。

伊藤 だんだんそうなったんじゃないですか。

濫澤 だんだんうまくなつたんです。

木全 そのころからやつていらつしやるから、お上手になれるわね。

伊藤 実践的な訓練ですからね。

濫澤 そうですね。その外人を仙台の町に連れ出して、一杯飲ましたりして、お世辞を使ってやるわけですからね。

伊藤 もうそのころから接待していたんですか。

濫澤 そういうことは英語の勉強には本当はならないんだけど、多少はなりましたかね。でもそれでは英語はうまくならない。やつぱり勉強しなくては駄目ですね。それはその後でやらされるわけですね。

伊藤 ほかのいろいろな可能性を考えないで、すぐ東食なんですか。それはアルバイトやったから、ということですか。

濫澤 私の父親は、息子の就職の世話をするという気が全くない。したくない。つまりインフルエンス「影響力」がありますから、いやなんでしょう。つまり彼の社会資本をつぶすのは困る。しかもどうなるかわからない息子のためにつぶすのは非常に困るということだったんでしょ。自分とは関係なく生きていつてもらいたいという気持ちもあったと思います。私は銀行に行こうなんていう気は、もともとありませんからね。僕は銀行は向かないですからね。

伊藤 農学部だとちよつと――。

濫澤 まあ、入ろうと思えば入れたかもしれませんが、入る気はなかった。それで隣に住んでいた柏木さんという人がいて、その人が公正取引委員会の課長さんか何かをしていました。三井物産の出身の人です。その人から「自分も行くから、東食に行かないか」という話があって、「それでじゃあ行きましょうか」ということになった。アルバイトをしていたから、もう入社試験もへちまもなく、「どうぞ来てください」という形で、入ったわけです。だからいい加減なんです。大学の入学も就職も、なんとなく――。

伊藤 それはラッキーというべきですね。

木全 成績はよかったんでしょ。お友達が全部いい点を取ってくれたから（笑い）。

濫澤 そうかもしれないですね。でも最後は落ちたから、あまりよくなかったんだ（笑い）。

伊藤 東食にお入りになって、これはいい仕事だと思いいになりましたか。

濫澤 ええ、輸出というのはあの頃日本ではとても大切だと言われていましたね。特に食料は輸出バリエーションが高い。というのは、お金が高いのではなくて、輸入原材料によって輸出するものではないでしょう。国内でできたものを輸出する場合がありますから

「真水」部分が多いでしょう。だから非常にお国のためになっている。あのころ日本は本当にひどかったから、お国のためになることならいいと思っていました。

伊藤 輸出なんですか。

濫澤 当時は輸出なんですね。

伊藤 さっきのお話は牡蠣でしたが、ほかには。

濫澤 ほかに缶詰の輸出もやりました。魚の缶詰はずいぶんやりました。サケ、イワシ、牡蠣。みかんもやりました。東京にいたときは輸出が多かったですね。

伊藤 水産だけじゃないんですね。

濫澤 水産だけではありません。農産もやりますけれど、日本はやはり水産が多いですね。魚の缶詰をつくるためにトマトソースをイタリアから輸入するという形の輸入はありました。でも商売は面白いと思えました。買って売りますからね。そのあいだで較差を稼ぐわけですからね。経費もかかるから、それをどれだけ圧縮するかというところは、非常にチャレンジングで面白いですね。それから、いろいろなことが起こるでしょう。船が来るはずだったのに来なかったとか、そういうことに対応していくというものなかなか面白い仕事だった。それで七、八年やっていましたかね。

伊藤 東食の中にもいろいろなセクションがあるわけでしょう。

濫澤 ええ、水産部缶詰課というところに行きました。

伊藤 ずっとそこにおられたわけですか。

濫澤 ええ、日本にいるあいだはね。イギリスに行くことになってから、イギリスでは人が少ないから全部やらなくてはいけないので、冷凍もやったり、油もやったり、穀物もやったり、いろいろやるようになりましてけれど、商売を知っているのは水産、缶詰ですね。

伊藤 缶詰にするための工場を会社は持っているんですか。

濫澤 いいえ、買うんです。清水とか長崎とかに行って、そーい

うところの缶詰屋さんから買って、輸出するわけです。

伊藤 じゃあ商社みたいなものですか。

澁澤 東食というのは商社です。三井物産の食料部なんです。

伊藤 ああ、そうなんですか。じゃあ自分でブランドを持っていくわけではないんですね。

澁澤 それは自分のブランドを巻いて出すこともありすが、つくするのは自分ではない。電話と机だけでやっているわけです。

伊藤 会社はどこにあったわけですか。

澁澤 最初は銀座の二丁目にございました。いまホテル西洋とかいうのがある、あのあたりにありました。後に室町に移りました。そこにしばらくいましたね。ロンドンに行くところから、日本は缶詰がだんだん輸出できなくなっていったんです。コストが高すぎた。

伊藤 何でコストが高いんですか。

澁澤 やっぱり人件費が上がりましたからね。

木全 ロンドンにいらしたのは何年ですか。

澁澤 ロンドンに行ったのは一九五六（昭和三十一）年です。面白い頃で、鳩山内閣のときで、ちょうどフルシチョフとブルガーニンというのがいて、鳩山さん、河野さんが行ってきたりする。それからハンガリーで暴動が起こるとか、スエズで戦争が起こるとか、非常に騒然たる時代で、英国でそのときを暮らしたのは非常に参考になりました、というのもおかしいですけれど。

伊藤 ちょうど河野農林大臣が日ソ漁業交渉をまとめて帰ってくる時期ですね。

澁澤 そう、それがカニとかサケの話です。

伊藤 直接商売に関わってますね。

澁澤 商売に関わりましたね。でもあのころ日本は弱いですからね。

伊藤 いまだって、ロシアとの関係ではあまり強くないと思いま

すけれど。

澁澤 でも、まだこっちはお金があるから（笑い）。当時は本当に貧乏ですからね。一ポンド＝一〇〇〇円の世界ですから、どうしようもなかったですよ。

伊藤 そうですね、いまユーロ＝百何円ですからね。

澁澤 若い社員がみんなで節約しながら、ギリシャ料理か何かの昼飯を食べていました。

伊藤 ギリシャ料理は安いんですか。

澁澤 おいしいですよ。イギリス料理はまずいから。

伊藤 イタリア料理と並んで、安くておいしいんでしょうね。

澁澤 ロンドンというのはまずいところですが、インド料理とかギリシャ料理はおいしいんです。

■ダンスパーティーで出会い、結婚へ

伊藤 ロンドンにいらつしやる前に、ご結婚なさっているでしょう。

木全 そうそう、そこのお話が抜けていると思っていました。房子さんとの出会い、ソーシャルダンスが趣味だとか、そのへんがちよつと抜けているな、と思っていました。

伊藤 いや、どの段階で伺おうかと思って。なかなかひとのご結婚の話聞くのは難しいんですよ。

木全 ああ、そうなの。でもパツと伺えばいいじゃありません。

伊藤 たいいて聞いていますけれど。

澁澤 たいして難しくはない。

伊藤 やっぱり照れるんですよ。

木全 あら、ご自分で照れていたらしようがない。

伊藤 いや、そんなことはないです。

澁澤 昭和二十四年（一九四九）でしたか。

木全 二十五年卒業だから、学生時代ですね。

澁澤 二十四年にその女性に出会ったわけです。その前にもいろいろな女性に出会ってはいましたけれどね。女性が半分いるんだから、日本にはたくさんいるんだ。

伊藤 いや日本だけじゃない、どこに行っても半分いるんです（笑い）。

澁澤 その人に会ったのが二十四年で、それからだんだん、これは一つ結婚しようかということになったわけです。

木全 学生時代ですね。東大生ですね。

澁澤 そうです。

伊藤 なんて知り合っただんですか。

澁澤 工業倶楽部でダンスパーティーがあつて――。

伊藤 このあいだ壊された日本工業倶楽部ですか。

木全 東大生がそういうところに入りに入っているわけですか。

澁澤 今度新しくなりました。そのころは古い。そこで会ったんですね。それで、なんとなく意気投合して――。

伊藤 ちよつと待つてください。そもそもダンスは――。

澁澤 いやダンスなんて僕はできないですよ。ただ立つて動いているだけの話です。

木全 東大のダンス部に入っただんですか。そんなものはなかったのでは。

澁澤 そんなのはとんでもないことです。

伊藤 たぶんご家族の中で何かあつたんじゃないですか。

木全 年がら年中あつたのでしょね、ダンスパーティーは。

澁澤 そんな洒落たダンスは僕は踊れませんよ。踊るのはチークダンスとかいうやつ。

木全 嘘ばかり。

伊藤 もう、どこまでが本場で、どこが嘘がよくわからないんです（笑い）。

澁澤 駄目なんです。それで、大学をいよいよ卒業せざるを得ないと思つたのは、その人と結婚しようと思つたからなんです。卒業してないやう、うちでも困るじゃないですか。だから、それじゃ卒業しようと思つて、あわてて卒業論文を書いて卒業したわけです。

伊藤 そのことがなければ、もうちよつと長居をしようというところでですか。

澁澤 旧制は何年までいられたのか知りませんがね。旧制大学が二十六年か二十七年でおしまになるはずだから、それまではいられたんでしょね。

伊藤 僕が大学に入学したときに、まだ旧制の人が残っていましたからね。

澁澤 そうですか。とにかくシベリアから引き揚げて来る人が次から次へと来るわけですからね。それは旧制をしばらく残しておかなければしょうがないですね。もう、おじさんみたいな人が帰ってきて、入ってくるわけです。

伊藤 そのダンスパーティーにはなんで誘われたんですか。

澁澤 タカラクラブとかいうのがありまして、それは慈善団体とか称するんだけど、私の親類の女性が運営しているクラブで、それがときどきチャリティダンスをやるんです。宮様とかなんとか呼んできて、会費を募るわけです。私はお金がないから、会費なしで入るわけです。

伊藤 アルバイトで懐はいつぱいじゃないですか。

澁澤 まあ多少はあつたかもしれませんがね。

木全 お父様が出してくださつた。

澁澤 それで行つただんですね。そこでその人に会つて、それじゃあしょうがないな、結婚するか、ということになったわけです。それまで私は、わりとニヒリステイックな感じで生きていましたからね。日本はもう駄目だと思つていたし、兵隊では痛めつけら

れたし、もうしゃあねえ、というところがありましたけれど、死ぬというわけにはいきませんし、なんとなく生きていたんですね。でも彼女と一緒にいるかと思ってから、妙に元気が出て来て、卒業論文を書いたんです。

伊藤 相手はどういう方だったんですか。

濹澤 タカラ亭という料理屋の娘で、四谷のほう、麴町にあったんです。わりと大きな、いくつもお店を持っている料理屋というカレストランだったんですが、そこのお嬢さんでした。

伊藤 そのダンスパーティーで初めてお知り合いになったんですか。

濹澤 はい。それからそういうダンスパーティーを探しては、この一緒にいたりしたんですね。

伊藤 ダンスパーティーはたくさんあったんですか。

濹澤 ほかにすることがない時分ですから、よくありました。あったけれど、ダンスパーティーというか、ただなんとなくワイワイやっているだけのことですかね。

伊藤 濹澤家の周辺だからよくわからないですね。

濹澤 ご馳走もあまりないしね。

伊藤 ご馳走はあまりないかもしれませんがね。でも、あるところにはあつたんじやないですか。

濹澤 そういうところではなかったですね。それで、銀座なんかで会ったりして、一杯飲んだりしているうちにだんだん仲良くなってきた、それでは、ということになったんですね。それで就職しようとなる。そうなる生き甲斐がいくら出るじゃないですか。

伊藤 それはそうでしょうね。それで生き甲斐が生じなかったら大変ですね。

■ 濹澤蔵相と財閥解体

伊藤 いまのお話ですが、その前に、財産税その他で、濹澤家がお金持ちじゃなくなっちゃうという問題があるでしょう。

濹澤 understatement「控えめな表現」もいいところですね。そんなところじゃありません。本当に一文無しになりましたからね。伊藤 本当ですか。でも「古川に水絶えず」という言い方がありますね。

濹澤 それはいいですね。私の父は大蔵大臣をやっていたし、その後もいろいろな会社に行ったりして給料をもらっていたからよかったですかもしれないが、昔のように同族会社の収入の十一分の五をもらうという話ではなくなりましたからね。

伊藤 濹澤財閥というのは財閥解体の対象になったんですか。

濹澤 一度なつたんですが、あまりに小さいから解除されたんです。支配していないから。支配率というんですかね。

伊藤 要するに株を持っているパーセンテージが低いわけでしょう。

濹澤 低いわけですね。

伊藤 いろいろな会社に少しずつ投資している。

濹澤 そうなんでしょうね。だって全部で千万円もあつたかどうかという程度でしょう。それは全然財閥とは違うわけですよ。だから「解除してやる」と司令部が言ったんだけど、うちのおやじは妙に粋がって、「いや、おれが解除してもらおうという申請を出すわけにはいかない」という。申請を出すと、自分宛に申請を出さなければならぬじゃないですか。そういうことはいやだ、というんです。

伊藤 濹澤敬三から大蔵大臣・濹澤敬三宛になるんですね。

濹澤 それと、その前に三菱とかに出かけていって、解体するこ

とを頼んででしょう。司令部がそういうから、ウンと言ってくれ
と。だから自分だけ抜けるわけにはいかないところ
もあつたし、あの人は良心的なところもあつたし。それから日本
は負けたんだから、そのくらいのプライスを払うのは当たり前だ
という感じもあつたでしょう。そういうことで、「解体解除の申
請を」やらなかつたんですね。やつたつて、そんなに残つたとい
う話ではないと思えますけれどね。

伊藤 でも残ると残らないとは大違いじゃないですか。

澁澤 どうせ、インフレでめちゃくちゃになるわけですからね。

伊藤 そのときに投資した会社で、そのあと生き残つたのはた
くさんあるでしょう。

澁澤 それは第一勧銀なんかあつたわけですね。だからそれを持
つていけばいくらか食べることはできたかもしれないけれど。

伊藤 いくらか、どころではないでしょう。

澁澤 でもあまり変わらないですよ。あのときのインフレとい
うのはすごいものでしたからね。

伊藤 結局、三田のお宅は――。

澁澤 あれは物納しました。

伊藤 全部ではないでしょう。

澁澤 最初は一部でした。家と、庭が畑になっていましたから、
それは自分でしばらくやっていましたね。そのうちに庭も売つち
やうというか、大蔵省に投げちゃつた。

伊藤 庭も売つたんですか。

澁澤 ええ、全部大蔵省になつたわけですよ。国有財産になつた。
そして自分は下の小さいところに住んでいた。そのことが原因に
なつて母親と別れるということもなつたわけですね。

伊藤 別れるといつても、別に離婚したわけではないんでしょう。

澁澤 実質的には離婚でしたけれど、父は離婚したくないと言
つたし、母も強いて、ということではなかつたんでしょうね。父は

母を経済的に助けていましたしね。

伊藤 いわゆる別居ですね。

澁澤 別居ですね。長い長い別居ですか。

木全 雅英さんは、敬三大臣に「はい、お母さんに持つていつて
おやり」と言われて、お金を運んでいらしたんですね。

澁澤 大したことはありませんでしたけれどね。

伊藤 何が大したことないんですか。

澁澤 金額。

伊藤 大したことがないというのが、僕らの感覚と同じなのかど
うかということがよくわからないからね。

澁澤 いや同じですよ。父もあまりお金がなかつたから。

伊藤 やつぱりいままでの生活も一変ですか。

澁澤 一変ですね。その前後の生活も、あまりリアルな生活では
なかつたですからね。あまり家が大きすぎて、さつき申し上げた
パブリック・スペースみたいな家でしたから。

伊藤 パブリック・スペースみたいなところまで含めて、全部物
納したんですか。

澁澤 そうです。全部物納です。それは潔い話ですね。そんなこ
としないで、あそこを持つていけばいろいろなことができたでし
ょうね。それから金を貸してくれるところもあつただろうし。

伊藤 いい場所ですからね。

澁澤 ええ。でもそんなことでちよこちよこやって、変な金儲け
をしたつて、どうつていうことはないですからね。あれはかえつ
て、僕はよかつたと思いますね。しかもその家がいま青森に行つ
てちゃんと存在しているわけですからね。経済には「理外の理」
というものがあらんじやないですかね。

■「三田の家」がとりもつ縁

伊藤 そこにあつたお宅を、いま青森に持っていったわけですか。
 澁澤 ええ、そうです。

伊藤 その家は、さっきのお話だと物納されたんじゃないですか。
 澁澤 ええ、だから大蔵省からもらつていった。国有財産を払い下げた。

伊藤 それは誰がおやりになつたんですか。

澁澤 杉本「行雄」さんという人がいて。

伊藤 いま館長をやつておられる方ですか。

澁澤 つまり、さつき三本木に森があつたと言いましたでしょう。澁澤家が全くお金がなくなつてしまつたので、父も困つた。生活費もない。それで杉本君という秘書をやつていた人に、「きみは青森に行つてその山林をなんとか料理して、現金をつくれ」と言つたわけです。農地はみんな解放したけれど、山林は残つていましたから。そうしたら彼は出かけていって、木を伐つて、リングゴ箱か何かを拵えて、進駐軍か何かに売りつけたりして、一応お金が回るようになったわけですね。そのうちのどれだけを父親が手に入れたか、私は知りません。父はたぶんそんなに必要としていなかったと思います。父自身は、いろいろな会社に行つていましたから大丈夫だつたと思います。

しかし彼「杉本氏」はそこで製材業である程度まで行つたわけです。製材業だけでは限界があるということで、観光事業に進出したわけですね。それで十和田湖に博物館兼宿舍みたいな、修学旅行会館というのをつくつたのが始まりで、いまは十和田湖と奥入瀬と三沢の三つの場所で相当大きな営業をしているわけです。それもしかし、アップス・アンド・ダウンズがあつて、かなりの部分を小佐野「賢治」さんに乗つ取られたりしたこともあるし、

労働組合にひどい目に遭つたこともあるし、まあ大変でしたけれど、いまはうまくやつていようです。うまくかどうか、不良債権の一つかもしれないけれど、まあなんとかやっています。

その人がどうしてもあの家が欲しいと言つたんですね。ずっと言い続けていたんです。それで僕はよく大蔵省に行つてお話をしたことがあるんですけど、まあまあ、ということでした。

伊藤 よく大蔵省は「その家を」解体しないで、そのまま持つていましたね。

澁澤 大蔵省というのは僕、大嫌いなんですけれどね。あまりいい役所だとは思わないけれど、あの家に関してはとても誠実にやってくれましたね。きちんとしていた。一番よかつたのは、日本の家だから襖とか障子とかがあるじゃないですか。そういうものを全部、土蔵みたいなものがあつてその床下にみんな入れて、保存してくれたんですね。だから青森に行くときに建て直すことができました。そうでないと規格が全然違うでしょう。明治の建築ですからね。それをもういっぺんつくるなんていうことはとても大変です。

伊藤 ものすごくお金がかかりますね。

澁澤 お金もかかるし、それをやる人もいないんですね。家も全く釘を使つていないような家だから。それをもし大蔵省がペンキ塗っちゃつたとか、よく進駐軍がやつたように部屋を大きく変えて、パーティションをつくつたとか、そういうことをやつたら、あの家は駄目だつたと思うんですね。でもそれをやららないんですね。多少トイレを変えたとかいうことはありますけれど、基本的に元の通りしておいてくれたんです。それは非常に温情があるというか、Decent「礼儀正しい」というか、品のいい扱ひだつたと思うんですね。

伊藤 何かに使つていたんですか。

澁澤 もちろん。あそこは戦後の財政の本拠でしたからね。大蔵

大臣官邸です。石橋「湛山」大臣も住んでいた。石橋さんはそのうちご病気になったけれど、そのほかいろいろな大臣もいましたし、住まなくてもそこを使った。例えば大蔵省に新しく入省する人のインタビューがあるじゃないですか。あそこでやっていたんですね。だから三島由紀夫なんかあそこで面接したんですよ。このあいだまでの大蔵省の次官級の幹部は、みんなそこで採用された人たちです。

その人たちは澁澤敬三というのを、どういふのかな、好きなんでしょうね。だから「澁澤学校」というのがあって、いまだに命日になると新橋で会をやるんです。私も呼んでいただけのんですけど、歴代の大蔵次官がずらりと並んで、澁澤敬三を偲ぶわけです。偲ぶといってもそう難しい話をするわけではなくて、写真を置いて、父親が好きだったとかいう天ぶらだかピータンだかを飾って、一人ひとりお辞儀して、あとでじゃんじゃか飲むわけですね。澁澤敬三は、歌はそうでもないけれど踊りの名手だから、その踊りを真似して、元次官がやるんです。下手くそですけれど、それが楽しいんですね。芸者なんか昔の芸者が出てきてね。そういうことがいまでも続いているんです。もう死んでから三十八年かな。毎年やっていて、今年もやるとか言っていますよ。僕はいい加減に馬鹿なことはやめたらどうかと思うんだけどね。お金もかかることだし。

木全 いまや、唯一公然とできるオケージョンかもしれない。

澁澤 そうなのかもしれない。何軒かの会社が費用は負担しているんですけど、全然汚職にはならないタイプの宴会なんですよ。そういうのは珍しいのかな。でもえらい次官がだんだん死にましたのでね。石野「信一」さん、谷村「裕」さんとか。

伊藤 誰がいま一番古いんだろうな。
澁澤 長岡実さんですかね。それから国鉄総裁をやっていた人がいましたね「↓高木文雄」。それから吉国「二郎」さん、谷村裕さん。

伊藤 谷村さんは亡くなられたじゃないですか。

澁澤 谷村さんなんかまでは、非常にさかんでしたね。亡くなつてからちよつとみんな元気がなくなつた。みんな歳を取つたから。伊藤 僕は谷村さんのインタビューもやつたんですけどね。海軍の短現でしょう。それで日本海軍史をつくるというので、おまえちよつと来い、といつてやらされたんです。

澁澤 『短現の研究』という本があるじゃないですか。

伊藤 海軍の人たちに混じって、僕がやつたんです。

澁澤 いや面白い会ですよ。私は見るたびに、この人たちが日本を駄目にしたんだと半分思い、しかし半分はいい人たちだな、と思う。

悪くしたわけではないけれど、日本が自分で悪くなつたんですね。彼らが悪くしたわけではないけれど、大蔵省のシステムは銀行に対して相当責任があることはたしかですね。いまの金融に対してもそうです。銀行を子供扱いして過保護にしたから、日本はこんなになつちやつたんですからね。

伊藤 歴代いれば、そういうことになるかもしれないね。

澁澤 ええ、それがブラツと並んでいると、けしからんと思えますよ。

■財閥解体後の暮らし

伊藤 お父様は財産税のこともありますが、公職追放になって、公職追放のあとはいろいろな会社に関係なさっていたわけですか。

澁澤 しばらく何もしなかったですね。日本中を旅行をしていましたね。

伊藤 余裕があるなあ。

澁澤 余裕というか、彼は日本中に知人がいますからね。

木全 一人で旅行なされたの。お母様はご一緒しなかったの。

澁澤 一人で。母親はもう別れていますから。それで篤農家とか、いろいろな人がいるでしょう。

伊藤 そういう人たちもかなり没落していますね。

澁澤 でも都会ほど没落していませんね。

伊藤 大地主の人で、山林を持っていれば別ですけれどね。

澁澤 でも別に贅沢をしに行くわけではありませんからね。それから行けば、日銀の支店とか第一銀行とかがあって、別に敬三にご馳走する必要は全くないんだけど、ご馳走してくれるんじゃないですか。そういうことでやっていたんじゃないですか。

伊藤 ご結婚なさる前は、いちおうお父様と同じ家に住んでおられたわけですか。

澁澤 はい、その小さい家に住んでいました。

伊藤 じゃあご結婚なさるといふことで、そこを出たんですか。

澁澤 ええ。それでその敷地の中に小さい土地があったので、ここに家を建てて。

伊藤 小さい家の中にまだ土地があるんだな（笑い）。

武田 まだ小さい家が建つんですか（笑い）。

木全 理事長。小さいじゃなくて、3LDKの倍とか、そういう言葉を使った方がみなさんにわかるんじゃないですか。

澁澤 十七坪半かな。

木全 建坪。一階建て、二階建て？

澁澤 一階建て。小さいですよ。

伊藤 まあ新婚だったらそれだけあればいいじゃないですか。でも土地があったわけですね。土地がないのに建てるわけにはいかないから。

澁澤 どうしてあつたのか知りませんが。まだ全部物納していなかったんでしょうね。そうそう、物納していない部分もあつたんですよ。自分が住んでいましたしね。自分が研究室に使って

いたところで死ぬわけですから。そういうところもありました。

伊藤 だから残った部分だって、僕らが想像しているよりは広いんだろうと思いますけれど。

澁澤 赤貧洗うが如き状態でなかったことはたしかです。しかし、非常にお金があったわけでも、もちろんありませんね。まあ貧乏だと思えます。

伊藤 貧乏というのは比較の問題ですから。

澁澤 庭に山羊を飼って、お乳を搾って、うちの息子、娘を育てたりしておつたわけですから。

伊藤 それは誰が、ですか。

澁澤 うちの家内が。それから父の家の女中さんもやっていましたけれどね。それは何も私のところだけじゃなくて、どこだつてやっていますから。

木全 だけど、結婚してパツとお父様が建ててくださるといふのは、ちよつと普通とは違いますね。

伊藤 それで山羊を飼う庭があるんでしょう（笑い）。

木全 草が生えている庭が。

伊藤 山羊はたくさん草を食べるんですから、ある程度広くなければ飼えませんからね。

木全 山羊だけじゃなくて、ほかにはどんな動物が？

伊藤 まさか牛がいたというわけではないでしょう（笑い）。

澁澤 犬がいました。それと猫もいました。それは広い土地でしたからね。五千坪もあつたんですから、広かつたんじゃないですか。

伊藤 もともとは五千坪ですか。

澁澤 ええ。

伊藤 仮に二割残つたとしても大変なものだ。

■ 缶詰輸五の面白さ

伊藤 それで東食にお入りになって、ご結婚なさったんですね。

濹澤 はい。結婚するために東食に入ったんですから。

伊藤 それで東食はけっこう面白かったと。

濹澤 これは面白かったですね。軍隊よりもずっと面白かった。

伊藤 それはそうでしょう。

濹澤 東京大学よりも良かった（笑い）。

武田 面白い言い方ですね。

伊藤 ある程度になったら自分で責任を持つ部分が出てくるわけですか。それとも初めからそうなんですか。

濹澤 東食というのは商社ですから、銀行の出店みたいなところがありまして、例えば長崎になんとかいうイワシの缶詰屋さんがあると、それにお金を出して、缶詰を作ってもらって、売るわけでしょう。それはタイムラグがありますから、ある時には品物がなくても売っちゃうときがありますね。そうしたらどうしても品物をつくらなければいけないんですね。すると高くても買わなくてはならない。つくってもらうためには、金に糸目をつけないでやるけれど、逆の場合もありますね。たくさんお金を払ったけれど、ちっともつくってくれないということもあるし、それが売れなかつたということもある。そういうリスクがしょっちゅうあるわけですね。だから年中緊張して暮らしているわけです。面白かつたですよ。

伊藤 リスクの話はわかりましたが、儲かる話はどうですか。

濹澤 儲かるものもありましたね。

伊藤 「儲かるもの」では、やっていけないじゃないですか。

濹澤 タネ牡蠣なんてすごく儲かった。三割は儲かったと思えますね。それから、イワシの缶詰なんかも豊漁だと儲かります。

伊藤 イワシの単価が安くなるからですね。

濹澤 しかしマイワシがどんどん減っていったものですから、イワシの缶詰からは事実上撤退しました。最後に撤退するときにはお金を貸し込んでいた会社があったので、僕は二ヶ月も長崎に住んで、その回収に努力しました。

伊藤 じゃあ、けっこうあちこちに出かけなければいけない仕事なんですか。

濹澤 そうですね。清水、焼津はしょっちゅう行かなければなりませんでしたしね。どんな魚が上がっているか。いまとは全然違うと思うんですよ。いまはみんなコンピュータでやっているけれど、あのころはまだ古いタイプの漁業ですから。でも非常にエンジョイしました。リスクが好きだったのではありませんけれど、そういうメカニズムが面白かった。それで外国の船が長崎に入ってくるのにまだ缶詰ができていない、なんていうのは大変ですよ、大騒ぎ。

伊藤 それをなんとか間に合わせるとか、やるわけですか。

濹澤 日本人は突貫工事をやりますからね。でも魚がいなければ突貫工事もできませんからね。大変でしたけれど、面白かったですね。マイワシとウルメイワシと二つあって、マイワシを売っているんだけれど、最後にはウルメを一緒に詰めたりしてごまかした、なんていうこともあるし（笑い）。

伊藤 あれはずいぶん違うものなんですか。

濹澤 大して変わらないですよ、大きさも同じですし。

木全 やっぱり商社って悪いことをしているのね。

濹澤 商社は悪いですよ。悪いのが面白い。

伊藤 それで主にどこに輸出しているんですか。

濹澤 アフリカ。ナイジェリア、ガーナ。サケ缶詰とカニ缶詰は英国。マグロはアメリカが圧倒的ですね。みかんも北米ですね。ロンドンにも出るけれど。

伊藤 アフリカは何を買うんですか。

澁澤 イワシの缶詰。サンマの缶詰も買います。

木全 どういう階層の人が食べていたんでしょうね。上層階級でしようね。

澁澤 それは行ったことがないからわからないですね。トマト漬けとかいって、イタリアからトマトを入れるわけです。そのトマトをぶち込んで、魚と一緒に煮る。

木全 気候柄、貴重品ですね。腐らないしね。

伊藤 輸出は、牡蠣を除けばだいたい缶詰ですか。

澁澤 私がやっていた最初の何年間かは缶詰の専門家でした。

伊藤 やはり絶えず取引のある缶詰の会社があるわけですか。

澁澤 ええ、それがまた競争で、ほかの商社も行きますから、いいものを早く取らなければならぬですね。そういう意味でも苛烈でした。

伊藤 どこが競争相手なんですか。

澁澤 あのころは野崎産業とか第一物産、いまの三井物産、それから三菱商事ですね。当時は三菱と言わなかったけれど。そういうところが大きいですね。大きいのが四、五軒ありまして、そこが、売れるとなればみんな一斉に買いに行きますからね。先にとれだけ取れるか、ということになります。

伊藤 売れるという情報はどこから取るんですか。

澁澤 それは支店もありますし、エイジェントもいますからね。

伊藤 アメリカやヨーロッパですか。

澁澤 やっぱりわかるじゃないですか、市況というものがありませんから、これは売れそうだということが。マグロの缶詰なんか、アメリカでこれは必ず売れると思えば売れますよ。

伊藤 それは見込みですか。

澁澤 見込みで生産しても、売れます。でも危ないことは危ないですね。売れないことだってあるんだから。

伊藤 リスキーではありませんが、売れば――。

澁澤 早くうまくやっておけば儲かりますね。

伊藤 その儲けというのが面白いわけですね。それが自分のお金になるかどうか別として、ですが。

澁澤 それは面白いですが、自分の懐には入りませんね。

伊藤 よくやったといったら、賞与がいっぱい来るとか、そういうのがあるじゃないですか。

澁澤 そんなこともないですね。そんなに大して儲からない。

伊藤 お父様はどういうふうにごらんになつていたんですかね。

澁澤 まあ、ともかく一所懸命やっているといるんだからいいだろう、と思つていたんじゃないですか。父は僕とは全然違うタイプの人

だといまでも思つていますけれど、父のようにはならなかったから、その点は残念だったのか、それが当たり前だと思つていたのか、どつちか知りませんが、別に特に不満だったことはないんじゃないですか。特に結婚して一所懸命やっていたし、孫もできましてし、喜んだんじゃないですか。

伊藤 同じ敷地の中に住んでおられたんでしょう。

澁澤 そのころはそうですね。MRAをやるまではね。

■MRAとの接点

伊藤 ちょうど四時になりましたので、MRAとの接点は、この次に伺います。

澁澤 こんなつまらない話をどうするんですか。信じられない。

木全 これは東京大学の一流の教授がインタビューされるんですから。

伊藤 大丈夫ですよ。自分が評価するわけではないんですから。

これ『父・洪沢敬三』を読んではいたら、澁澤さんはご自分でMRAに夢中になる以前に、お父様がMRAと接点があるんで

すね。それは聞いておられたわけですか。

濫澤 ええ、知っていました。

伊藤 それはロンドンにいらっしやるときにすでに知っていましたか。

濫澤 「私が」ロンドンに行く前に、父は一九五二（昭和二十七）年にアメリカに行つたと思います。それは戦後父が初めて外遊した時だと思えます。帰ってきて、ブックマンというえらい人がいて、こういう運動があると盛んに言っていました。私は、ふうん、そんなものか、というものでしたけれどね。

伊藤 一応それが頭の中にインプットされていたんですね。

濫澤 ええ。そしてMRAというのは、そのころは日本の窓みたいなところがありまして、たくさんの人がいつていたし、外国に行くチャンスをとくさんくれるということもあった。わりと親切な外国人ですね。日本のために。

木全 政労使ですね。

濫澤 ですからそれは魅力があつたと思えますね。だから私は全然いやではなかつたけれど、MRAを自分でやろうとは夢にも思つていなかった。それはロンドンに行つて、その気になつたんですね。戦後世界との関係ですね。

伊藤 ありがとうございます。ちょうど時間になりました。

濫澤 本当にくだらないことばかりで、お恥ずかしくてしようがない。

伊藤 いや、二回ぐらい伺わないと駄目かな、と思つたんですが、MRAまで到達しましたので、大変満足しております。

木全 さつきおっしゃっていましたね。MRAの前に二回、なんです。

伊藤 それぐらいになると思つたんですが。

濫澤 どうも信じられないですね。こんなことが役に立つなんて。

伊藤 まあ、仕上げをご覧しろ、というものです。

濫澤 私のアイデアじゃないんだから、いいですけど。

伊藤 乗つてくたさい。MRAというのは前から、岸さんの話の中に出てくる、鳩山日記に出てくる、何だろう。反共だ、ということだけはわかつているんですね。

濫澤 容共でないことはたしかです。反共かどうか知らないけれど。

伊藤 いや、反共ですよ。容共のわけがないじゃないですか。

武田 調べても全然わからないんですね。

濫澤 このあいだ変なものをお送りしたじゃないですか。「アジアセンターODAWARA 四十周年記念―戦後の日本とMRAの軌跡―」

伊藤 ああいうものは普通に流布していませんものね。

濫澤 それはそうですよ、マーケットがないですから。

伊藤 ですから、いつたいこれは何だろうかということが前から気になつていたんですね。鳩山さんのところにもブックマン一行来訪というのがありますね。けっこう鳩山さんも晩年にはMRAとしよつちゆう接点があるんですね。

濫澤 ブックマンというのはやっぱりえらい人だったんですね。僕はすごい人だと思いますね。

伊藤 それの日本の中心の一人ですからね。

濫澤 私は違いますよ。

伊藤 木内「孝」さんから、「ぜひお話を伺つておいた方がいいですよ、いまのうちに」というお話があつたものですから。木内さんも妙なことで知り合いになりました。

濫澤 木内さんも最後はMRAをやっていたんですね。

木全 いままだやっていますでしょう。全く違った形になつてしまつて、いま関心がないとおっしゃるけれど、そこを聞きたいでしょう。だけど木内さんはしようがなく、相馬雪香さんのおつき合いをしていらっしやるんだろうと思います。そのへんはまたゆ

つくり。

伊藤 それも伺いたいですよ。

澁澤 M R A というのはもう過去の話でね。

伊藤 M R A ハウスは別に過去の話じゃないでしょう。

澁澤 現在やっています。私が経営しています。給与ももらっています。ありがたい存在です。

伊藤 ここは給料をもらっていないわけではないんじゃないんでしょう。

澁澤 ほとんどもらっていないです。

伊藤 ここはボランティアですか。

澁澤 もらっているんですが、全部寄付しています。

木全 全額。

澁澤 僕は女学館に非常に迷惑をかけたのでね。

木全 と、おっしゃっています。

澁澤 ここからお金をもらう気にはならないんです。

伊藤 いずれお話を伺います。どういうご迷惑をかけたのか。

澁澤 その話はやめましょう。

木全 ちよつとやめた方がいいですね。

伊藤 やめた方がいい話も、やってくださいよ。あとで消せばいいんですから。

澁澤 女学館の話ですか。それは大変ですよ。聞くも涙、語るも涙。

伊藤 あまり話していると駄目なんです。どうもありがとうございます。ありがとうございました。

澁澤 ありがとうございます。おそれいました。

澁澤 雅英

オーラルヒストリー

第2回

[2003年8月20日(水) 14:00~16:10]

[出席者] 肩書きはインタビューの時点

澁澤雅英氏 (東京女学館理事長・館長)

伊藤 隆氏 (政策研究大学院大学教授)

木全ミツ氏 (東京女学館副理事長)

武田知己氏 (政策研究大学院大学特別研究員)

佐藤純子氏 (政策研究大学院大学特別研究員)

丹羽清隆 (録音、記録担当)

場 所：東京女学館

■ ロンドンに赴任する

伊藤 この前は、東食にお入りになってどんな仕事をされていたのかということまでお話を伺ったんですが、そのうちロンドンの支店に転勤になる、それが昭和三十一年（一九五六）でございませぬ。

澁澤 はい、そうでございます。

伊藤 それはご自分のお気持ちとしては、嬉しいものでしたか。

澁澤 ええ、商社ですから、ニューヨークとロンドンはいいところなんです。そういうところに行かないようではしょうがない、ということであつたと思います。ですから、嬉しいというか――。

ただ、その頃は夫婦別れしなければいけませんからね。

伊藤 やつぱり駄目ですか、その頃は。

澁澤 ええ、全然駄目です。日本は外貨がないから。支店長だけは「妻子を」連れて行くことを許していましたが、あとは全然駄目ですね。三年も五年も「妻子と」別居する人がたくさんいる。いまみたいに、ちよつと帰つて来るというわけにはいかないですからね。かわいそうです。

伊藤 ご自分もそういう運命になるかもしれないなかつたわけですね。

澁澤 なつたんですよ。行つたんですから。

木全 ご夫婦別れにはならなかつた。

澁澤 別れやしませんでしたけれど、別居ですよ。

伊藤 別居といつても、そんなに長いことではないですからね。

澁澤 単身赴任ですよ。

伊藤 だけど、昭和三十一年にロンドンに転勤になられて、翌年辞められるんじゃないですか。

澁澤 だから、一人でそんなところに送るような会社とは一緒に

やつていけないと思つて辞めたんです。

伊藤 ちよつと、ここ「父・渋谷敬三」に書いてあることと違ひますね（笑）。しかしロンドンでのお仕事はどうでございしたか。数ヶ月ですか。

澁澤 いえ、もちろん一年近くおりました。ただ、途中でMRAの仕事をするようになりましたので、会社のほうはあんまり興味がなくなつてしまつた、というところがありましたね。でもしょうがない、やつていました。ほかにいないんですから。電報は毎日来ますから、仕方がない。

伊藤 東食の、向こうの在外の人はなんというんですか。

澁澤 駐在員です。駐在員事務所といつていました。

伊藤 何人ぐらいいるんですか。

澁澤 私ときは、日本人が三人で――。

伊藤 現地職員がいるんですか。

澁澤 現地職員が三、四人いました。

伊藤 どこかのビルか何かを借りていらっしゃるんですか。

澁澤 シティの中の、ロンドン塔のそばのビルディングに入つていました。

伊藤 当時は電報も高かつたでしょう。

澁澤 高いし、時間がこちらと違いますからね。日本は夜遅く出すので、商社の人にとっては大変でしたね。

伊藤 この頃はまだ電報ですか。ファクシミリとか――。

澁澤 そんなものはないですね。全然ないです。電話は、まずかからない。かかればかかるんでしようが、お金もかかるし、時間もかかる。

伊藤 申し込んでからつながるまで時間がかかるわけですね。

澁澤 そういうことです。

伊藤 経費節減のためにあまりかけるな、ということになるんですね。

澁澤 そうですね。電報は長くなるから、暗号に直す。暗号というわけではないけれど。

伊藤 短縮にするわけですね。

澁澤 秘密ではなくて短縮にするとか、面倒くさいことがたくさんあって大変でした。

伊藤 やはり買い付けと売ることですか。

澁澤 日本でやっていたのは輸出が専門でした。ロンドンにはずいぶん送っていましたからね。ミカンの缶詰とかシヤケの缶詰とか、うち「の会社」が業界の代表みたいになっていたものもありましたから、ロンドン側の業界との交渉とかもありました。輸入は、ニューヨークのほうが多かったですね。

伊藤 そうですか。日本がヨーロッパないしイギリスから買い付ける物はあまりなかったわけですか。

澁澤 まずなかったんじゃないですか。それは機械とかはありましたでしょうけれども、私どもが扱う物はあまりなかったんじゃないですか。

伊藤 食品としてですね。そのお忙しいお仕事の中で、ご自身はどういうお住まいをされていたんですか。どこかに下宿されていたんですか。

澁澤 アパートです。外貨はなかったんですが、一応対面を保つような給料を払うというのが日本の見栄じゃないですかね。私が東京にいたときの給料は、一万円から一万二〇〇〇円ぐらいだったんですね。九〇〇〇円ぐらいから始まって、その程度だったんですけれど、ロンドンに行ったら、途端に一五〇ポンド＝一五万円です。

武田 えええつ、そんなになるんですか！

伊藤 でも当時のロンドンには、たぶん物価が高かったんでしょう。

澁澤 だって、一ポンド＝一〇〇〇円ですからね。高かったですよ。しかし一五〇ポンドというのはそう安い金額ではない。いま

のロンドンではとてもそんなものでは食べられませんが、その頃のアパートは、私が払っていたのは一週間八ギニーだったと思います。四週×八ギニー＝三十二ギニーですから、「一ヶ月で」四〇ポンドぐらいですかね。そのくらいを家賃で払って、あとはご飯食べて、バスに乗りたりして会社に通う。

【註】ギニーは金貨の単位。一ギニー＝二十一シリング、二〇シリング＝一ポンド。一九七一年、十進法移行により廃止。

伊藤 適当にお酒を飲んでも大丈夫ですね。

澁澤 まあ、お酒はもちろん飲みました。会社の人に飲み助が多かったから飲んでいたけれど、いいアパートを取ってくれましたね。

木全 その当時の家族の生活費の考え方はどうだったんでしょうか。

澁澤 こっち「日本」でちゃんと給料をくれる。

木全 また別に、ですね。赴任生活費が十五万円。

澁澤 十五万円というか一五〇ポンドで、それを、三井銀行ロンドン支店とかいうのができていたので、そこに入れてまして、ちょこちょこ小切手か何か書いて家賃を払ったりしていました。つましいものですよ。ちまちましていましたよ。

伊藤 日本経済も、もうちよつとしますと――。

澁澤 それから十年ですね。私が行ったのは一九五六年ですが、一九六五年ぐらいからやつと人並みぐらいの感じになったんですね。

伊藤 でも最初の大型の景気高揚は、たしか五〇年代の終わりに始まりませんか。

澁澤 それはありましたが、あまり本格的ではない。やつぱり安保が終わったあとですね。池田さんの所得倍増以降ですね。それからグツと良くなってきたんです。それとオリンピックですね。

■ブックマン博士と王冠

伊藤 濹澤さんの生活というか思想というか生き方が、急に変わるきっかけはどうやって生じたわけですか、そういう商社生活の中で。

濹澤 それはMRAというものが持っていた方に影響されたんですね。巻き込まれたんですね。

木全 MRAとの出会いはどのような……。

濹澤 私は父親が最初に行ったんです。一九五三（昭和二十八）年だったと思いますが。

伊藤 そのときは気にもなさらなかった、というお話でしたが。

濹澤 気にもしなかったというか、「そんなのあるのか、へえ」という話でしかなかったんですが、ロンドンに行ったら、その親玉がいたんですね。フランク・ブックマンという、たいへん偉い人です。

あるとき会社に、えらそうな顔をした日本人が来たんです。誰かと思つたら古沢「潤一」さんという人で、日銀の理事か何かをしていたような人なんです。そのときは日銀だったかどうかちょっと覚えていませんが、鳩山「一郎」さんのお婿さんだったんです。

伊藤 あの古沢さんですか。

濹澤 鳩山総理のお婿さんだったと記憶していますが、その方がある日突然、店に来たんです。それで、「ブックマンという人が来て、あなたに会いたがっているから、夕飯を食いに来てくれ」と言うわけです。ロンドンというか英国というところは非常に階級社会でございますから、商社なんていうのは町人なんです。

武田 士農工商ですね（笑い）。

濹澤 そうなんですよ。やつぱり外交官とか大学教授とかは――。

伊藤 それが「士」ですか。

濹澤 ええ、「士」ですね。

伊藤 しかしあとのジェントルマンは「農」かな（笑い）。

濹澤 それはよくわかりませんが、とにかく町人は町人の社会にしか入れないんです。もつとも、われわれはその町人の社会にだって、ろくすっぽ入ったわけではありませんが、そこでは対等なギルドの一員みたいな感じで扱われるわけです。そこからちょっと出て、外交官に会おうとか、新聞記者に会おうといつても、なかなかできないわけです。日本があまり注目されていなかったこともあったと思いますけれどね。お金もないし。

そういうことがありましたので、ロンドンに行ったのは行つたけれど、二、三ヶ月しても、あまり面白くなかつたところがありませんね。つまり、日本でもそんなにえらい人と会つていたわけではないんだけど、なんとなく日本はこういうふうに成り立っているということがわかるじゃないですか。イギリスでは全然わからないんです。誰が国を牛耳っているのかわからないというような感じで、ちよつと違和感があつたというか、物足りなかつたんですね。そうしたら、ここに写真がありますが「アジアセンター ODAWARA 四〇周年記念」の末尾の建物の写真を示す、ブックマン先生のいるこの家に行つたわけです。

伊藤 それはロンドンにあるわけですか。

濹澤 ええ、これはロンドンの真ん中のメイフェアという一番いいところの最高の住宅地の中でも最高のところですよ。パークレイ・スクエアとかグロブナー・スクエアというのは最高なんです。グロブナー・スクエアにはアメリカ大使館がありますし、パークレイ・スクエアも最高なんです。そのど真ん中に大きな家があつて、そこに来いというわけです。パークレイ・スクエアというのはそういうところだ、ということぐらいは知っていたから、おそろおそろ出かけていったわけです。そうしたらそこにブック

マンがいた。

伊藤 その時は古沢さんが連れて行ってくれたわけですか。

澁澤 古沢さんは、中にいらつしゃいました。私は一人で行きました。行ったらブックマンがいて、初めはなんだかよくわからなかった。二階に大きなロビーみたいところがありまして、赤いきれいな絨毯が敷いてあって、立派なHuddle「暖炉」があつて、とにかく洒落たところでした。そしてたくさん人が来ていて、紹介されても、こっちは全然わからないので、「こんにちは」、「こんにちは」と言っていました。そのうちに、食事だというので行くのと、私の隣に座ったのがイギリスの外務省の外交官で、反対側の隣は「スコットマン」というスコットランドの新聞の主筆か何かをしている人でした。そういう人たちがいるわけです。僕は初めてイギリスの中でそういう人に会ったわけです。私の会っている町人とは非常に違う（笑い）。町人とは全然違う、と思つたわけです。

伊藤 それは風体や何かのことですか。

澁澤 アクセントが違うじゃないですか。英語らしいじゃないですか。百姓・町人は違うんです。英語でcockney「ロンドン下町訛り」とかいてね。タクシーの運転手ほどじゃないけれど、違う種類の人たちで、話題が全然違う。ミカンの缶詰が売れたとか売れないとか、そんなくだらない話じゃないわけです。世界はどうなっているだろうとか言うから、引き込まれちゃうわけです。ブックマンという人は、とんでもなくカリスマ性のある人でしたから、それにも相当イカレましたけれど。

そこでご飯を食べてから、演劇に連れて行かれたわけです。それがMRAがお得意とする音楽劇ですが、『消えゆく島(Vanishing Island)』です。これはいまでも私は懐かしく思い出すんですけれどね。歌がいっぱいあつて、非常によくできた劇でした。それをレスター・スクエアのヒポドロームという劇場で

やっているわけです。それは日本で言えば、帝劇というレベルの劇場ですね。そこにたくさん人が集まっている。そこに全世界の人がザーツと出て来て、やるんです。MRA独特のペイジェント「大がかりなショー」をやるわけです。

それで劇が終わると、みんな、私がブックマンのお客だということを知っているから、みんながやってきてはアプローチして行くわけです。それまでは町人だから誰も相手にしてくれなかったのに、ばかに人気が出たというわけでもないけれど、注目されるじゃないですか。それで喜んだというところとちよつとケチくさいけれど、面白かったですね。

しかしその劇は英語ですから、よくわからない部分があつたので、脚本をもらつて帰つて、アパートでその晩一所懸命読みました。面白かつたからもう一回観に行こう、というようなことで、だんだん引き込まれていきました。

武田 澁澤さんを招待した理由というのは何ですか。

澁澤 それは私の父親との関係だと思えますね。古沢さんはたしか日銀だつたと思うんです。はつきりしませんが、ご存知だつたんじゃないですか。

伊藤 古沢さん自身もMRAの運動に加わっていたわけですか。

澁澤 それは鳩山さんだからでしょう。私が「ロンドンに」行ったのは一九五六（昭和三十一）年五月でございましたが、その年の秋だと思えますが、ブックマンが日本に来たんですね。その時に鳩山さんの家に二度も行つたりして、官邸にも行き、勲章ももらい、たいへん仲良かった。

伊藤 『鳩山日記』によく出て来ますからね。

澁澤 鳩山さんはブックマン先生に非常に惚れ込んだんじゃないですか。そのブックマンが来たときには、かなりの人数が来て、台湾とか全部回つて、その最終到着地がロンドンだつたわけです。そこにたまたま私がいいたことだと思ふんですね。古沢さん

もそのグループに入っていた。音楽劇も、日本を皮切りにずっと回ってきまして、その大旅行の終点がロンドンだったと思います。そこに古沢さんは一緒にいらしたんだと思います。どうしていらしたのか、ちよつとわからないけれど。

伊藤 鳩山さんのところに行ったというのは、逆に古沢さんの関係かもしれませんね。

濹澤 それはそうじゃないと思いますね。鳩山さんご自身がブックマンに非常に興味を持っておられて、古沢さんはむしろ鳩山さんに言われて、いやいやながらつき合ったところではないですか。いやいやじゃないけれど、よくわからないながらつき合ったということではないですか。

伊藤 結果的な話かもしれませんが、古沢さんは濹澤さんをリクルートしたみたいな感じになるわけですね。

濹澤 それは非常にそうですね。責任を取ってもらわないと困りますね(笑い)。

■MRAの世界性に魅せられる!

伊藤 それで実際に、自分の仕事を辞めて、その仕事をしようというおつもりになる。その仕事をしようという意味や内容がよくわからないんですけれど。

濹澤 私の書いたものの中で、『父・渋谷敬三』には書いてなかったかもしれませんが、私は中国共産党の若い航空機のエンジニアと知り合いだったんです。その人はロンドンに住んでいました。ロンドンに行くときの飛行機の中で一緒になったんです。彼は北京から派遣された筋金入りの共産党員だったと思います。若い人でしたけれどね。ロンドンに着いてしばらくしてから会って、ときどき私のアパートに遊びに来たりして、いろいろな話をしました。彼は大使館かどこかに住んでいたのかな、私は彼の家には行

きませんでした。彼がこつちに来ました。そしていろいろな四方山話をしておりました。

私がMRAで観た『消えゆく島』という劇自体が、共産主義の世界と自由世界とは両方駄目だ、というか非常に問題を抱えている。その両方をアウフヘーベン「統一」して、もつといい世界をつくらなければならないという筋書きのわけですね。それがとてもうまくできていると私は思ったんです。そこで、その男がどう思うだろうかと思つて、連れて行ったわけです。そうしたら彼は興味を持ったんです。初めは、「こんなものはけしからん、資本主義の宣伝だ」とかなんとか言っていたけれど、だんだんその気になつてきたんですね。それで夏までには彼はすっかりその気になつたので、僕は彼のために心配したんです。だって、私なら何になつても別に誰も何も言わないけれど。どうせ町人ですからね(笑い)。共産党の人がそうなつたら大変だろうと思つて心配したんですけれどね。

しかし、その対話の中で彼が教えてくれたのは、「われわれはいわゆる筵旗を立てて金持ちに反対しているという話じゃないんだ。いまの世界は矛盾がたくさんある。それに全然違う種類のフレームワークを拵えて、新しい歴史を導入するんだ。そういう仕事を私たちはやっているんだ。資本家をやつつけるなんていうのは単なるスローガンに過ぎないんだ」というわけですね。私が資本家に関係がある人間だったから、そう言ったのかもしれない。私のほうは、共産主義が怖いですからね。娘も息子もいましたし、彼らがあまり不幸になるのはかわいそうだと思つた。そう思っていたけれど、彼は、「そういう話ではないんだ。もつといい生活をすべての人のためにつくるんだ。その本部がクレムリンと北京にあるんだ。そして全世界にネットワークをつくつてやっているんだ。国務省にもいっぱい味方がある」という。ちよつどマッカーシー旋風の中で、私も話は聞いていましたので、へえそういう

ものか、という感じですね。彼は「日本の外務省にも「味方が」いるんだ」と言っただけで、僕はそれはあまり信じられなかったけれど（笑い）。

伊藤 いや、いたかもしれませんが（笑い）。

濫澤 いたかもしれませんがね。ともかくそこら中にいるんだ、と言っんです。「そういうことは秘密にしているやつもいるし、表立ってやっているやつもいる。そういうのを全部チェス盤の駒のようにして、だんだん攻め込んで、陣取り合戦をやっている。その一番先端は、例えば労働組合である」とかいうような話をするんです。

私はそれまで、そういう考えを持ったことがないわけです。日本にいたときは、世界をどうかするという考えはまったく知りませんでした。特に日本は負けていますから、世界のことなんかとんでもないという話ですね。ロンドンに来ると、日本という枠から外れているから、精神的には宇宙に迷っているような状態じゃないですか。だからそういうことを言われると、案外素直に入っちゃうんですね。若いということもありましたけれど。

それで興味を持ったなら、MRAはそれ「国際共産主義運動」に対して対抗しているグループなんだと言う。これはMRAが言ったことで、その人は言いませんでしたけれどね。いろいろ聞いてみると、たしかにそういうところがある。最終的に、その男がMRAにすつかりどつぶりになったので、私はこれは大変だ、もし一人の中国共産党員を変革することができれば、五億か十億の中国人が変わることだってあり得るだろう、という感じになっただけです。

もちろんそのほかに、私には個人の問題もたくさんありました。「腐った卵ではいいオムレツはできない」とブックマンは言いますし、私は相当腐った卵だと自分で思っていましたから、やつぱり腐らない卵になった方がいいと思って、いろいろ反省したりな

んかして、おやじに謝罪の手紙を書いたりします。女房にもいろいろなことを話したりします。私はあんまり浮気をしたりしていませんでしたけれどもね。でも、まあやつぱり夫婦はもうちょっとうまくやればよかったというところもあったので、そんなことを手紙に書いて出したわけですね。そうすると、妙に自分が軽くなるんですね。何というのかな、しがらみから外れて、それじゃあこういうことを少しやってみるか、という気になる。

それからやつぱり魅力は、MRAの持っている世界性です。日本では絶対に考えられないような世界がそこにあった。例えば僕はアフリカの黒人に初めて会ったのは、そのパークレイ・スクエアの家です。ナイジェリアの酋長みたいな人で、アル・ハジ・ウモルとかいう男だったけれど、なかなか立派な顔をした男なんです。真つ黒けでね。そんな人がいて、そんな人と話をしたりするなんていうことはまったく初めてですからね。その世界性にイカレちゃったんじゃないかと思えますね。日本の中にいてもしょうがない。だいいち、日本が良くなるためには世界を相手にしなければ何もできないという感じを、前から理論的には持っていましたけれど、実感を持って感じたんじゃないですかね。

それを聞いて、支店長はすつかりびっくりして、初めは「何を言っているんだ」というような話でした。しかし彼も非常に立派な方でしたから、「そうか、そんなに思うのなら、少しやってみるか」みたいなことで、わりあいにはサポートしてくれました。

伊藤 仕事をしながら、ですか。

濫澤 もちろん仕事をしていました。そしてブックマンのほうも、いま考えると利口だったのか馬鹿だったのか、この家「写真、先ほど招かれた家」に僕を招待してくれて、「そこに住め」というわけです。それで、七月の終わり頃からそこに住んだんです。

武田 アパートを引き払ったんですか。

濫澤 ええ、アパートを引き払って。だいいち安上がりでいいし、

隣にマケンヂーという外交官がいました。これは相当えらい人でした。

伊藤 どこ外交官ですか。

濫澤 イギリス人です。チュニジアの大使とか、あまり大きな国の大使にはなりませんでしたが、MRAが彼のキャリアを邪魔したんでしょうね。けどなかなか立派な人で、その人の隣の部屋に住んだんです。そして毎朝会社に行つて帰ってくるという生活が始まったんです。ずいぶんおつちよこちよいでした。

■MRAの活動とは

伊藤 MRAというのは、当時イギリスではどんな評価を受けていたんですか。

濫澤 西洋の国では、MRAには反対の人が多いです。キリスト教の人にとってMRAは、仏教の中の創価学会みたいなものですから、一種独特の新興宗教みたいな感じがありましたね。ところが日本にはそういう感じはあまりなかったんです。

伊藤 キリスト教の中のセクトだという認識なんですか。

濫澤 実際は全然そうじゃないんです。まったくそうじゃないと私は思いますが、キリスト教の人、教会はそういうものをやっかむわけですね。日本だつてそうじゃないですか。

伊藤 MRAは別に教会を持つていないわけでもないでしょう。

濫澤 持つていないわけでもなんでもありません。でも自分のところの弟子が、そういうところに引つ張り込まれたりするのを、教会はいやがるんじゃないですか。

伊藤 その人が教会には行かなくなるということですか。

濫澤 行かなくなる。教会はあまり効果的な仕事をしていない場合が多いじゃないですか。ところがMRAは若い男や女をつかまえてきて、それが光り輝くような顔をするようになったりするわ

けじゃないですか。それまではつまらないミカンの缶詰を売っていたやつが、突然世界を変えようと思つたりするようになる(笑い)。そういう変化が起こるじゃないですか。それは本来教会がやるべき仕事でしょう。当然やっていべき仕事だった、けどやっていないわけです。それは官僚化しているし、組織化されていてヒエラルキーがあるからでしょう。ところがMRAにはまったくヒエラルキーというものがありません。そういうものは「教会にとつて」脅威じゃないですか。ちよつと、こういう学校「東京女学館」が予備校に対して脅威を感じるようなところがありますね。

武田 MRAに入る、あるいは会員になる資格のようなものはないんですか。

濫澤 ないんです。会員というものがありません。ただ勝手にそこにおいて、何でもやれというわけ。世界を変えろ、自分が思つた通りにやれ、というわけ。思つた通りといつても、神様の声を聞いて、その命令に従え、ということですね。

伊藤 じゃあ、濫澤さんはその時はクリスチャンなんですか。

濫澤 いや、そうじゃない。全然そうじゃない。いまだにそうじゃないやありません。

伊藤 そうすると、神様はどの神様になるわけですか。

濫澤 いや、神様というのは(伊藤 普遍的なものですか) 普遍的なものです。

伊藤 じゃあ日本の八百万(やおよろず)の神ですか。

濫澤 私は八百万の中で育つていましたから、仏様でも何でもいい。お釈迦様でも基本的には似たようなことを言っているんだらうと思うんですよ。

伊藤 キリスト教というのはある程度発端にはあるけれど――。

濫澤 それはブックマン自身がキリスト教ですし、イギリス人でMRAをやっている人はクリスチャンが圧倒的に多いですからキリスト教的ではありませんけれど、日本ではクリスチャンは非常に

少ない。

佐藤 ほかに日本人で、ロンドンでMRAの活動をされた方はいらつしやるんですか。

濹澤 ロンドン在住の人はすごく数が少なかった。あのときは西「春彦」さんという大使がいらしたんだけど、お正月に全日本人が大使官邸に呼ばれるんです。それでお寿司か何かご馳走になる。それっぽつちしかいわけではないわけですか。

伊藤 大使館に入る程度の人間しかないということですか。

濹澤 そうなんです。それしかないなかつたんです。もう少しいたかもしれないけれど、とにかく非常に少ないんですね。ですから、その中にMRAの人がいたなんていうことはないと思います。しかし日本から来る人はありました。有名な相馬雪香さんもそうですし、雪香さんのお嬢さんで原不二子さんという有名な方がいらつしやる。あの方はその頃十八、九だったからまだ学生でしたが、そのパークレイ・スクエアに一時住んでいました。そういう人が何人かいました。

武田 MRAの日常的な活動というのは、何かあるんでしょうか。

伊藤 伺っていると、伝道みたいなことかなと――。

濹澤 伝道はないんです。パークレイ・スクエアに家はありますがけれど、そのそばに立派な家があつて、それぞれ人が住んでいて責任者がいて、人を招いたりする。アフリカの酋長とかアラビアのなんとか、アメリカの労働組合の指導者などですね。英国の労働組合も非常にさかんでしたから、そういう人たちを招いてやっていました。そういうところにわれわれもときどき参加させてもらつて、一緒に飯を食つたりすると、とても面白いじゃないですか。世界の戦いの接点にいるような感じになるわけです。

それから劇です。なぜMRAが劇をやつたか、いまになつて私が考えると、やつぱりMRAがやろうと思つたことをteatro「展開」するというか、彼らに仕事を与えるのに、何かやらせなかつ

たらみんな退屈しちゃつて、駄目になつちゃうじゃないですか。

一人ぼつちで世界を変える、なんていうことは続かないですね。だけど、劇と一緒にやるう、それでどこかに行こう、港湾労働者がいるイースト・エンドのところで劇をやるから一緒に行こうとか言えば、それに参加するんじゃないですか。私は劇に参加したのは数年あとの話ですが、その時はそういうことをしよつちゅういろいろなところでやつているから、それに参加したりしておりました。日本人は珍しいから、モルモットみたいなもので、こういうのがいるぞ、といつて紹介されたりしますね。

伊藤 広告塔ですね。

濹澤 広告塔です。

■両立か、活動に専念するか？

伊藤 会社を辞めて運動に飛び込むというときに、職業を持つことと両立することではないんですか。

濹澤 「両立」すると思いますね。私の父親などは、そうしたらいいじゃないかとさかんに言っていましたし、それは不可能ではなかつたかもしれませんが。あの頃、日本ではごくMRAは有名でしたね。

伊藤 外国に行くチャンスになりましたからね。

濹澤 それで、行けば何かその気になつて帰つてくるということがありますからね。MRAに反対になつて帰つてくるという人は少なかつたし、何かの形でMRAを宣伝しようということになる。有名な人だと講演会をいっぱいやつたりしますから、MRAは有名でした。そして戦後の日本は、そういうメッセージが欲しいときですね。わりとやさしいメッセージですからね。日本は駄目な国だなんて言わないで、日本は大事な国で、アジアは日本がやらなければ駄目だ、みたいなことを言ってくれるから、こつちは感

心してその気になってしまふところがありますからね。

そういうわけで有名なんだけど、組織というか、何か具体的にやる力はありません。鳩山さんとか一万田「尚登」さんとか、そういう人が一所懸命やっているけれど、具体的に何かするということ、なかなかできにくいですね。

伊藤 でも、相馬さんみたいな人がいたわけですね。

濹澤 相馬さんがいらっしやいましたし、非常によくなさいました。麻布にいまでもありますが、MRAハウスをおつくりになりましたし、財団もおつくりになりましたし、三井「高維」さんもいらっしやって、やっていました。

たぶんあの頃、MRAのブックマンなどは、日本は大変な鍵になる国だと思っただんじやないですかね。アジアでは日本が一番オープンな国でありましたし、他の国はまだ植民地が大部分だし、朝鮮は戦争が終わったばかりだし、中国は全然手をつけられない国になってしまいました。だから日本は大事だ、日本で何かやろう、ということでも小田原のアジアセンターをつくるということ、なんとなく思っただんじやないですかね。それで、それをやるやつが欲しいということになったんじやないか。そういうふうな計画的に私を狙ったという感じはまったくありませんでしたが、こいつをうまく引つ張れば、そういう馬鹿なことをするんじやないかとは思っただんじやないかと思っただんじやないか。

木全 ブックマンに会われて、何ヶ月後に仕事を辞められたんですね。

濹澤 一年ちよつとですね。

木全 ということは、仕事と活動を両立されて、一年間なさっていたんですね。

濹澤 はい。

伊藤 そのお宅に住みながら――。

濹澤 住んではおりました。しょっちゅう洗脳はされているんだけれど、昼間は会社に行っていますから、また別の洗脳をされているわけです（笑い）。

木全 同じような立場の方が、世界から何人かいらしたんですね。その家に住まわせてもらっている方は――。

濹澤 このところにはいなかったですね。

木全 やはり特別な目をかけられていたんですね。

濹澤 私は目をかけられていたと思いますね。こいつを訓練してやろうと思っただんじやないですか。

木全 「訓練の」し甲斐があるということですね。

伊藤 どういう訓練なんですかね。

濹澤 だいいち、英語がうまくなければ駄目でしょう。それも、商社でただ町人としゃべっている英語では駄目なわけです。やっぱり大名とでもしゃべれるような英語にしなければいけないでしょう。別に英語を教わったわけではないけれど、そういう経験ですね。だから、スイスのコーというところにセンターがあって、そこにも行かせてもらいましたし、パリで何かあると、「ウィークエンドにちよつと行ってこないか」と言われたりして、世界が広くなりますね。

伊藤 スイスのコーというところに本部があるわけですか。

濹澤 はい、その時は大きなセンターがありまして、そこでやっています。そこに最後に中国共産党員が来ちゃったんです。彼はそれで、中国から追放されたんだと思います。でも中国は感心に、彼を暗殺しようとか何とかしない。私はそうなるんじやないかと思っただんじやないか。ほんとうに心配していたんです。あるいは連れて帰られるとか。ところが、どこかで彼は detect「逃走」したんですね。いま思えば、私が考えたほど大事な人ではなかったのかもしれない。結局どこかに姿を隠したちゃったんですね。わからなかったんだけれど、四、五年経ったら、ドイツ人の美人と結

婚して、デュッセルドルフに住んでいるということがわかって、MRAの人も驚いたし、私も驚いたんです。

伊藤 結局、除名になったぐらいで済んだということですね。

濹澤 そうでしょうね。ただ、その人がそういうふうに変わったことは、私には非常に大きなインパクトでした。一人が変われば、百人だつて変わるわけですからね。そういうことができるメッセージとパワーのあるものならば、日本全体が一所懸命やれば、中国全体に対して、何かメッセージになるんじゃないか、という感じになりますね。そういうことがありましたね。

伊藤 自分を明らかにするといいますか、自分自身に正直になれということ、自己批判のようなものですね。あるいは自己告白という宗教的なものに非常に近い。

濹澤 非常に宗教的ですね。

伊藤 共産党でいえば自己批判だろうと思いますけれど。

濹澤 共産党の自己批判はあまり道徳的なものではないですね。むしろ政治的なものでしょう。MRAの場合はまったく道徳的というか宗教的というか、正直であるとか純潔でなければならぬ、とか言っているわけですから、非常に心の深いところで反省せざるを得なくなりますね。ただMRAが非常に利口だったといまになつて思うのは、それをやって、ちよつとハツとなると、それをすぐに使う、あるいは使わせるわけです。ほかの人に会つてそういう話をする、みんな伝搬するじゃないですか。つまりお寺に入つてじつとしているんじゃないかと、世界に飛び出して何かやってこいよという感じであつたのが、MRAの力だったかな、と思いますね。

伊藤 鉢鉢みたいなこととは違うわけですね。

濹澤 鉢鉢はブックマンが一人でやるから大丈夫なんです。こんな大きな「両腕をいっぱい広げる」鉢にほかほか金が入つてくるんですよ。それはすごいですよ。ブックマンは大変な人ですね。

伊藤 その中からいただいて、いろいろなところに行くわけですね。

濹澤 いただく、という意識もないですね。

木全 変な話ですが、理事長が仕事をお辞めになつてMRAに没頭されたときの、いわゆる条件はどうなっているんですか。

濹澤 ないんですよ。

木全 実物給付？

濹澤 ええ、実物給付です。

木全 お小遣いをもらうというわけでも、給料をもらうわけでもないですね。

濹澤 何ももらわないんですね。ただ、私は訓練のためなんですよ、仕事を辞めたらすぐアメリカに呼ばれました。家内も子供も連れてアメリカに行つたんです。その時は、「飛行機の切符はあるから、これで行つて来い」というようなもので、お小遣いも何もなしで行つたわけですよ。

木全 でもアメリカに行つたら生活しなければいけないでしょう。

濹澤 MRAのグループの中にいましたからね。

伊藤 だけど切符だけじゃあ、途中でご飯も食べられないし――。

濹澤 だからそこには一種の信仰のようなものがあるわけです。

木全 何年間MRAで仕事をするとか、そういうことも関係ないんですよ。

濹澤 関係ない。

木全 クビという発想もない――。

伊藤 契約みたいなものはないんですね。

濹澤 「When God guides, He provides」(神が導くところ神が備える)、「これはキリスト教の言葉ですが、そういう感じなんですよ。

木全 商社マンが、よくそういう非合理的な――。やっぱり心の問題ですね。

澁澤 だから私は、先生が私なんかの話をこんなことなされるのは、本当に疑わしいんですよ。これほどおつちよこちよいいな人間で、普通ならやらないことをやっている。

伊藤 普通やらないことをやる人のほうが（武田 面白い）。

澁澤 結果として辻褄があつて、いま女学館の理事長で、これもまいつているけれど、それをやっているから、良かったですね。野垂れ死にしていたかもしれないわけです。しかもMRA自体は途中でなくなつてしまふわけですからね。それでも生きていますから、ありがたいことだと思つておりますけれどね。

■ 家族、周囲の反応

伊藤 お辞めになるときに、奥様、お父様はそんなに簡単にいったわけではないでしょう。それから会社もあるでしょう。会社だつて、いままで先生に投資しているわけですね。

澁澤 投資しているわけです。「東食の」社長さんは非常に憤慨したというか、残念がりましたね。残念がるほどの人材じゃなかったんですけれど、「しかし少し考えてもらわない」といつて、芝公園のところにある「クレッセント」というレストランに行つて――。

伊藤 石黒さんのところですね。

澁澤 そう、石黒さん、私の親類なんだけれど。

伊藤 そうですか。これはいいことを聞いた。

澁澤 そこに社長さんに連れて行かれて、口説かれましたよ。だけれどしようがない。

伊藤 まず帰国することがありますね。

澁澤 それは願ひ出ました。

伊藤 それは辞めることが前提ですか。

澁澤 辞めるかもしれない。「ロンドン支店にいてもご迷惑をか

けるので、ロンドンにはほかの人をあれ「補填」していただいて、私は帰してください」と支店長に言いました。支店長は、もうこいつは辞める、と思つたんでしようね。なかなか大物支店長で、いい人でした。とても世話になりました。その人はイギリス人と結婚したんですが、ちよつとその頃は恋愛中で、面白い方でしたね。私のことは、これは駄目だな、と思つたんじゃないですかね。たぶん東京にそういうふうに進言されたんじゃないですか。これはしようがないから帰せ、というように。それで「私は」アメリカ周りで帰つたんです。帰つてフィリピンに行きました。

伊藤 ちよつと待つてください。会社としてはとにかく日本に帰す段階で、これは辞めるな、という認識を持っていたんですね。

澁澤 持っていたと思えますね。でも会社といつても、いまほど組織的ではありませんでしたし、東京食品は三井の分かれでしよう。人数も少ないわけです。あれは三井の人が一社に百人以上いとはいけないでしょう。ですから三井系の方で、いわゆる幹部という方はほんとうに二、三十人しかないわけです。小さいグループでやっていたということもあるかもしれませんね。そこで私が、場合によっては役に立つようになるかもしれないと思つて、ロンドンまで出した。それは父親の關係ももちろんあつたと思ひますね。そういう期待をされたのも事実だと思ひますが、実際はあまり私は大した商人でもありませんでしたし。

木全 妻・ふさ子さんの反応はどうだったんですか。

澁澤 妻は賛成でした。「あなたがそれほどうなら、やりましょう」なんて、これは日本の女性の言いそうなことじゃないですか。

伊藤 さあ、どうでしょう（笑い）。

澁澤 最近は何もないけれど。

木全 いや、愛があれば言いますね。

澁澤 そんなのは四十年も五十年も前のことだから。

木全　こんなのが記録に残るんですか？

伊藤　いや、残りますよ（笑い）。

澁澤　やはりそうだったと思いますね。それに止めようがないでしょう、亭主が走り出してしまえばね。悪いことをやるんだつたら困るけれど、そうでもないし。たしかに素敵なことに見えるところもありましたよ。

伊藤　奥さんは直接MRAに接触したことはないわけですか。

澁澤　東京で接触しました。私が向こうで虜になったから、その連れ合いも洗脳しなくて、とこつちで思ったんじゃないですか。

伊藤　こつちというのは（武田　日本支部みたいなものですか）。

澁澤　日本には、相馬雪香さんなんかがおつくりになったMRAハウスがありましたからね。

伊藤　それは相馬さんが中心なんですか。

澁澤　中心というか、代表者は三井高維さんという方ですが、もちろん相馬雪香さんの力は大きかったと思いますね。それから経済的には一万田さんですね。

伊藤　そうですか、一万田さんはそれほど入れ込んでいたわけですね。

澁澤　非常に入れ込んでいましたね。あの頃は、政治家や財界人でほんとうに入れ込んだ人がたくさんいましたよ。それはいまの財界人のようにいい加減なものではなくて、もつと本気でしたね。やはり日本は貧乏だったからじゃないですか。本気でやっていましたね。政治家も党派を問わず、非常に一所懸命の人がたくさんいました。社会党の人もいっぱいいましたし、労組も、全電通の人とか炭労、国労、動労がいましたし。

伊藤　造船の人もいたんですね。

澁澤　造船、柳沢さんですね。

伊藤　鍊造さんといったかな。

澁澤　柳沢鍊造さんですね。そうすると、その柳沢さんのところ

「石川島播磨」の社長は土光「敏夫」さん、と来るわけでしょう。芋づる式になっていって、シンパがバツとできていきます。だから、センターのひとつもつくったらどうだ、ということになるんじゃないですか。

伊藤　もうセンターはできているわけでしょう。

澁澤　ハウスはできていたけれど、小田原にはできていませんでした。

伊藤　いまおっしゃったのは、都内のハウスですか。

武田　ハウスというのは支部みたいなものですか。

澁澤　そうですね。でも独立してしまいましたけれどね。日本の財団法人でやりましたから、向こうの支店ということでは全然ないんです。

伊藤　でも実際は支部のわけでしょう。

澁澤　ええ、そうです。

伊藤　奥様はそこから――。

澁澤　そこからアプローチされたと思いますし、相馬雪香さんとか、雪香さんの弟さんで相馬豊胤さん、いまタイにいますが、その人の奥さんとか、そういう人たちにアプローチしていました。だから「MRAが」どういうものか、ということにはわかっていました。私もせっせと手紙を書きましたからね。いまのように筆無精じゃないから、一所懸命やっていましたね。

伊藤　その説得の手紙を見せてもらえばわかるのかな。説得されちゃうかな。

木全　残っていますか、本物が？

澁澤　あるかもしれません。

木全　そういうのをとつてあると面白いんですね、本当に。

伊藤　どれほど熱意を込めてお書きになったか。

澁澤　そんなのを出されたら――。

伊藤　いまみたいにシャーツと、こんな形で見ているんじゃない

ですからね。

澁澤 そのことは『父・渋沢敬三』にもちよつと書いていますけれどね。それでフィリピンに行くことになって、フィリピンで彼女と会ったわけです。

■バギオのMRA大会に参加する

伊藤 フィリピンではMRAのアジア大会ということですが、フィリピンにもそういうハウスのようなものがあつたんですか。

澁澤 その時はまだありませんでした。ただ、日本で『消えゆく島』という劇があつたときに、星島二郎さんとか相馬雪香さんとか何人かの人が、劇と一緒にマニラに行つたんです。それはたぶん一九五五（昭和三〇）年ででしょう。そのとき、フィリピンは反日で大変だつたわけです。ところが星島さんは舞台に立つて、「われわれがやったことは申し訳なかつた」とやつたわけです。それでブーツとなつたわけだけれど、マグサイサイという大統領がいて、「そんなことを言うのなら、ちよつと会おう」と言つて会つたんですね。それが日本人としてはフィリピンとやや関係ができた始まりということになっています。その関係で、マグサイサイが主催してアジア大会をやるうということになつたんですね。なつたといつても、そういうふうな唆したやつがいたから、マグサイサイはそれに乗つたということなんでしょうが、バギオというところで大会をやることになつたわけです。

私は、「それに来ないか」と言われて、「会社を辞めるという前提で、そこに行くから東京に帰ります。そこでたぶん辞めさせていただくことになると思います」みたいなことを言つて、出て来たんです。それでアメリカ経由で帰りまして、女房とはマニラの飛行場で会いました。その時のマニラは、本当に日本人にとっては、にくいところでしたね。怖い感じでした。

伊藤 怖いというのは？

木全 石を投げられるとか？

澁澤 ほとんどすべてのファミリーが日本人によって殺されたりいじめられたりしているんですね。マニラの真ん中にイントラムロスというスペイン人がつくつたお城があつて、その中にみんな入れて焼き殺したとか、そういう本当か嘘かわからないようなひどいことがいっぱい起こっていますからね。どこのファミリーに行つても、「私はこういう目に遭つたのよ」とやられる。それは日本人にとつては、ほとんど宗教的体験ですね。しかも自分は別に責任があるわけではないでしょう。フィリピンに行つたわけでもないし、戦争をする気があつたわけでも何でもないわけだから、それでもその責任をとらなければいけないのか、ということで大変困りました。MRAでなかつたら、あんなところには近寄りませんね。

伊藤 そのMRAの大会は成功したわけですか。

澁澤 ええ。ただ残念なことに、マグサイサイがその直前に飛行機事故で死んだんです。それでガルシアという方が大統領になられました、そのガルシアさんがバギオにいらつしました。二日ぐらい、いらしたかな。上院議員とか、いっぱいお供を連れてきました。そこで「アジア大会」と称するわけですから、ベトナム人もいたし、韓国人もいた。またその韓国が難物で、日本に対する感情が悪い。だから日本人は本当にあの頃は辛かつたですよ。なんでこんな目に遭わなければならぬのか、と思うような状態でしたから。

武田 大会というのは具体的にはどういうことをやるんですか。

澁澤 私はべえべえというか新米だから、プランをした人の意識は存じませんが、やつぱりガルシア大統領の演説があつて、MRAのえらい人が誰か出て来て話をして、こういうことが行なわれていますとか、日本ではこうなっています、MRAハウスができ

ました、とかいうような話をしたり——。

伊藤 ブックマンさんは。

澁澤 ブックマンはそのときはいませんでした。弟子が来ていましたけれどね。そして、たしか劇もやったと思います。MRAが常用するのは、劇とコーラスです。インターナショナル・コーラスとかいって、いろいろな国の人が歌を歌う。それがなかなかいいんですよ。いまはそんなことは当たり前のようになっています。が、当時は十カ国の人間が集まってやるなんていうことは、なかなか演出できなかったんですね。それがMRAの得意技だったんだと思います。そんなこともやりました。

それで、和製の歌みたいなものもあるわけだから、フィリピン人が立ち上がって、「私は日本人にひどい目に遭ったけれど、いまはこうやって初めて日本人に会って許す気になった」みたいなことを、また言うんですね。そうするとみんなワーツとなったりして、日本人はこんなに「肩をすぼめる」小さくなっている（笑い）。そんなことが毎日続いて、三日か四日やっていましたよ。

一方、韓国との関係もありました。これは久保田発言とかいう非常に厄介なものがありまして、それに対しては、星島さんがそのときいらしていましたし、相馬雪香さんと星島さんが、たぶん岸「信介」さんとお話になったんでしょうね、「久保田発言を撤回する、財産請求権はどうかする」とかいくつかのことを大会で言われました。それは半オフィシャルな感じでおっしゃいましたので、韓国もやや心を開いて、そういうことになったんだよ、ということになると、それにみんな感心するわけですね。そうするとフィリピン人は人が好いから刺激されて、「じゃあわれわれも許しましょう」とかいうことになるんですね（笑い）。そう簡単じゃないけれど、そういうような話です。そういう演出をグループとしてやるというのがMRAのお得意のやり方です。

【註】久保田発言とは、一九五三年の第三次日韓会談における

日本側首席代表・久保田貫一郎の「日本の韓国統治はプラス面もあつた」という趣旨の発言をさす。

伊藤 それが数日間であつた。

澁澤 マニラには四、五日から一週間ぐらいいましたかね。それで家内と二人で帰ってきて、父親と話をした。父親は、「まあまあ、両方やればいいじゃないの」という常識論で、私も「それはわからないわけでもないんだけど、ここまで来たらもつとやつたほうが面白いじゃない」というところもありました。なにしろ途端に全世界に親類がいっぱいできたような感じになるでしょう。それは町人もいたけれど、いやつもとくさんいて、インテリもいっぱいいた。オックスフォード大学のドンとか、いろいろながいて、尊敬する人がいっぱいいました。ああいう人たちと一緒になら大丈夫だろう、というところもありました。それで父親を説得しちゃつたんですね。

■MRAの不思議——意思決定方法

澁澤 それで、アメリカに一家を挙げて移住しまして、三年ぐらいアメリカにおりました。

伊藤 それは、役職でも何でもないわけなんですね。

澁澤 なんでもない。そこが不思議なんです。

木全 典型的な日本の優秀な男性には考えられない。ステイタスとか昇給・昇進とか。

伊藤 いや、ステイタスという問題ではなくて。

澁澤 意思決定の仕組みがわからない、ということでしょう。そこは結局、ブックマンの言うことが最終的には通つたということなんでしょうね。ブックマンが「日本を大事にしてやろう」と言うのと、日本、日本ということになってくるんですが、具体的に何かをするというのは、そういう連中が集まって、一緒にしや

べり合うわけですね。そしてお祈りか何かする。お祈りといつてもカトリックみたいにこんなふうには「両手を拝むように合わせる」お祈りするわけではないんだけれど、「神様の言うことを聞くことじゃないか」と言ってるのと、案外いいアイデアが出てくるような気がするんですね。「じゃあそれで行こう」というと、ワーツとなる。それでブックマンにお伺いを立てに行くと、「よかろう」なんて言われると、それが錦の御旗で進軍して行くわけです。

伊藤 それで思っただんですが、常任活動家というんですか。

澁澤 専従者ですね。

伊藤 専従ということは、普通は役割分担があるじゃないですか。

澁澤 本当はね。

木全 専従は何人かいらしたんですか。

澁澤 フルタイムは、日本では三十人か四十人いたんじゃないですか。

伊藤 日本国内で、ですか。

澁澤 最終的にはね。私が始めたときにはまだそんなにいなかったと思いますね。私がおの何番目かであったと思いますし、それから少し増えて、学生さんなんかが学校を辞めたり、卒業しても就職しないでやる人がいましたね。高校生なんかたくさんいましたし、半専従みたいな人もいました。それがどういふふうにして意志決定をするかというお話でしよう？ グループになつたら、社長がいなかったりすると格好がつかないわけですからね。

伊藤 物事を決める場合に、こういうルールでやるのかなあ、と思っただんですが。

澁澤 僕はそれがMRAの強みであると同時に弱みであったと思うんですね。強みの部分は、機関決定ではないから、なんとなくみんなの決定みたいで、走り出すとすごい力を持つわけですね。僕は日本でMRAがやったことは、驚異的な力を発揮した部分がたぐさんあったと思います。しかしそれは、組織なしに、なんと

ない危機感と、神様の意志か何か知らないけれど、ワーツとみんなと一緒にやるからすごい力が出るんですね。それをやっている人たちの顔つきがいいものだから、それに同調して、ワーツとなる人もいっぱいいたわけです。それで一種独特の力を発揮できたので、MRAはここまで来たんですね。小田原のアジアセンターもできたし、それが続いてきたんだけれど、やっぱり意志決定がきちんとしていないから、いざというときに意見が合わなかったらどうにもならなくなるわけです。それがMRAの致命傷で、ブックマンが死んだからは、だんだん駄目になっていくわけですね。

伊藤 ブックマンはわかるんですが、例えば日本なら日本という場所を考えると、そこでのカリスマもないと、できないのではないのでしょうか。

澁澤 それはまた別の問題がありまして、ブックマンはアメリカ人やイギリス人のよく訓練された弟子を日本に送ってきたわけです。それにやらせていたわけです。スイス人もいましたし、インド人もいましたし、面白い人がいました。初めのうちはどうしても、その人たちがブックマンのお墨付きをもって日本の仕事を決定するみたいところがあつたわけです。ところが、それでは駄目だ、日本は日本人でやらないとうまく行かない、ということになる。何も国粹主義を言っているんじゃないけれど。

そこで、私なんか日本に来てやり始めて、アジアセンターを建てるなんていうことになってからは、日本人の仕事でなければこれはできないよ、というふうになっていったわけですね。そこでその外国から来ている代理人みたいなやつはなるべく追い出して、こつちでやるよ、来るやつはこつちの言うことを聞け、というふうな権力闘争はたしかにありました。組織的な闘争ではありませんでしたけれど、具体的な面でそういうことがありましたね。

武田 中心にブックマンさんがいらっしやって、スイスのコーに

ある本部は、ブックマンさんの意向でいたい動くということですか。

澁澤 全世界どこでもそうだと思いますね。ブックマンが生きていたうちはね。ブックマンは六一年（一九六一）に亡くなりましたが、それまでですね。ブックマンはだいたい病気で、痛風でしたから、しょっちゅう出て来ませんし、寝ているときが多かったから、いないという部分もありましたが、実は彼が全部決めていたと思いますね。

■ピーター・ハワードという人物 ―ブックマン死後のMRA

澁澤 それがいなくなつて、次にMRAを指導したのがピーター・ハワードという人で、私がいへん世話になつた私のメンターです。オックスフォードを出た人で、ビーバー・ブルック卿の経営するデイリー・エクスプレスの政治記者で、すごい文章を書き、大変な秀才で、運動も強くて、フットボールの選手でもあり、オリンピックのボブスレーに出て英国のチームを優勝させたとか、すごいんですよ。

英国というのは、そういう型破りのすごいやつがちよろちよろ出てくる国なんです。日本では、型破りのやつは適当にこうする「平準化する」から、あまり伸びないんですよ。イギリスは、それが大英帝国ができた理由なんだと思いますね。僕はハワードさんにはどれだけ世話になつたかわかりません。政治記者でありましたから、政治的な「ことも学んだ」――。のちに私は英国の研究所に行つて本を書いたりしますね。ああいうことの基礎はほとんどハワードさんから習つたことのように思います。別に政治学として教わつたわけではないし、国際政治という名前をつけて教わつたわけではないけれど、世界はこういうふうに見えるんだよ、と「教わつた」。

しかもその見方ですが、インドのガンジーの孫が一緒にやつていたんです。しかし、どうもガンジーと私と、うまく行かないとさがあるんです。その時にハワードに、「どうしてガンジーは僕よりもうまく物ができるんだろう」という話をしたことがあるんですね。そうしたらハワードさんは、「インドはいまは非常に貧乏だけれど、英国のシステムの一部だ。ということは、つまり世界の一部だということだ。だからインドのインテリは世界のインテリだ」ということを言つたんですね。逆に言えば、日本のインテリは世界のインテリじゃない、と言つたわけです。それに僕はいたく感銘しまして、なるほど僕は日本という枠を超えることはできないんだ、ということを思いましたね。超えなければいけないんだ、超える人をつくらなければいけないんだ、というようなことは、いまでも、とても強く思っています。いまはもう年をとつたから、そんなことにあまり情熱はなくなつたけれど、その頃は危機感のようなものを感じましたね。

ハワードのような人は何でもわかるんですね。ピルマのことも、スリランカがどうかということもわかる。そこでなぜ暴動が起るのかということもわかる。ちょうどEU「↓EC」が出来始める頃の農業政策についても的確なる批評をする。私はインテリというのはこういうものかと思つて、びつくりしましたね。

伊藤 その人が後継者になるんですか。

澁澤 そうなんです。それをまた誰が決めたかという問題になるでしょう。そこがまた不思議なんです。そのときはハワードがなるということとは誰が決めたわけでもないんです。ハワードが自分で「おれがやる」と言つたんです。彼が一番できたし、劇だつてたくさん書いています。この春も青森に行つて彼の書いたものをずいぶんたくさん読んだんです。すごい能力なんです。いまから四十年前なのに、いまの世界にピッター来るようなものをたくさん書いています。それで僕は感心したんだけど、や

はり能力があったんでしょね。彼が自分でやるといって、みんなついていったんです。

しかし反対のやつもいたわけです。特にイギリス人は反対したんですね。ほとんど同じような能力を持っていて、しかしハワードほど華やかではない人がいっぱいいるでしょう。そういう人はやっぱり反対するでしょうね。表立っては反対しないけれど、なんとなくテンションがありましたね。だから、ブックマンが死んだ途端にMRAは分裂し始めた、と私は思っていますね。

伊藤 結局、分裂なんですか。

濫澤 分裂といつても、組織がないから分裂のしようがないわけですね。分派をつくるとか、そういう話はないわけだから。ただなんとなく力が失われ行くわけですね。

伊藤 なかなか理解が難しい組織ですね。組織といつて、組織でもないような気がしますからね。

濫澤 そうです。私は、これは一つの研究の対象として、本当にどなたか研究なされば面白いものだと思いますね。

伊藤 誰かが示唆したにしても、みんながこれをやろうといつて同じ方向を向いたときの強さというのはわかるんですね。しかしそれは、形をつくったときに普通は官僚化するんですね。

濫澤 普通は官僚化する。だからやめちゃうんですね。私はそういう青年運動みたいなことをやったこともあるんです。例えば北海道に行つて、若いお嬢さんたちをいっぱいそそのかして、劇をつくったり歌を歌わせたりして、それを全北海道でやる。また日本は面白いもので、自衛隊みたいな人が応援してくれるんです。北海道の全部のキャンプを回つたりするわけです。変な面白いものを自衛隊からもらつて、自衛隊の飛行機に乗せてもらつたりしてやるんです。それはすごいんです。しかしそれが一段落したらどうするか、というものを持っていないんですね。それでやめちゃうんです。もうこれで終わり、さよなら、ということ、子供た

ちは学校へ帰つたり、勉強をし始める。私は東京に帰つて、昼寝はしないけれど、ほかのことを始める、あるいはアメリカに行つたりする、ということだったように思います。そういうところは非常にフレキシブルで、よかつたですね。

伊藤 何事もそうですけどね、ある面で非常にメリットがあれば、必ずデメリットもあるということですね。

濫澤 そうです。もちろんそうです。MRAはまったくその両面を持つていたし、いま本当に力を失っているのもその結果だと思っていますね。

■アメリカ、マキノ島を拠点として

伊藤 それでアメリカにいらつしゃつて、奥様と子供さんを連れて行かれるわけですね。子供さんの教育なんかどうなさつていたんですか。

濫澤 マキノ島というところにMRAのセンターがあつたんですが、そこで暮らすようになったんですね。一軒の家を貸してくれました。小さい家だったけれど、そこに四人で住んだ。しかし四人だけではどうしていいかわからないことがたくさんあるから、外国人の女の人も入つてくれました。家政婦でもない、看護婦でもない、そういう世話をする、シャペロンみたいな人が来てくれて、一緒に暮らしました。上の子は小学校に入り、下の子はまだ幼稚園でしたかね。家内は英語がわからなかったから、たいへん苦労したと思います。でもだんだんしゃべれるようになって、やっぱりああいう英語の教育もあるんだな、と思いましたね。子供はパッと英語に変わりますね。

伊藤 パッと英語に変わると、日本語を忘れちゃうでしょう。

濫澤 はい、父親が訪ねてきましたときなんか、全然日本語がわからないですね。ちよつとかわいそうな感じもします。

伊藤 そこはアメリカのセンターみたいなところなんですか。

澁澤 はい、そうです。とてもきれいなところで、ヒューロン湖という湖水にある島です。そこに子供たちは三年ぐらいいました。家内もそこにいることが多かったけれど、私は世界中を走り回っていました。

伊藤 そのときはブックマンについて歩くわけですか。

澁澤 ブックマンでなくても、ほかの人が「どこかに行つて来ないか」とかいう。それも、行って来いという命令じゃないんですね。「何か面白そうだけど、どうですかね」なんて言うと、「じゃあ君、行つたら」という話になるわけですね。それで、「じゃあちよつと、みんなで考えるか」ということになつて――。

伊藤 その「みんな」というのは、どのぐらいの人数がいるわけですか。

澁澤 そうですね。マキノにはたくさんいましたから、七十人から八十人で考えるんですね。そういう集会もありますし、もう少し具体的に、澁澤をどこかに遣らうという話は七十人では決められないので、五、六人で決めるんですね。それでたぶん、どこかでブックマンのお墨付きがくるんですね。

伊藤 やっぱりブックマンの使徒みたいな方が何人かいらつしゃるわけでしょう。

澁澤 そうです。いましたね。ですからヒエラルキーがなかったとは言えないですね。

伊藤 アメリカの中でも相当大きな力を持つようになっていたんですね。

澁澤 そこがわからないんです。本があるじゃないですか、MRAはアメリカ帝国主義の手先であったとか、日本のMRAはアメリカの帝国主義がやっていたとか、私の名前なんか書いてあるんですね。ああいう扱いを受けるんですから、やっぱりそれなりに影響力はあつたんでしょうね。影響力があると思われたんです。

ようね。実際にあつたかどうかわかりません。しかし上院議員とか何かで、一所懸命やる人はずいぶんいました。ちょうど鳩山さんがやったように、やっぱり影響力はあつたんでしょうね。

木全 どうして理事長はアメリカなの？ 日本じゃなくて。

澁澤 どうしてでしょうね。

木全 ほかにMRAに日本の方はいらしたんですね。

澁澤 ええ、最初私はイギリスですよ。日本に帰ってきて、日本の青年団の役員を百人呼ぶとかいうべらぼうな計画をしたんですね。

伊藤 どこに呼ぶんですね。

澁澤 マキノ島のアメリカのセンターです。これの世話をするのが、私というか日本のグループの最初の仕事だったわけです。それは驚天動地の計画で、私はあまり効果があつたとは思っていないんですが、ブックマンがあるとき夢を見て考えた、というような話じゃないかと思うんですね。日本には青年団というのがあるそうだが、たしか周恩来が青年団の副会長か何かを呼んで、それはとてもえらい男なんです。すつかり意気投合したという話を聞いて、こつちもやらなくてはいけない、とかなるんじゃないですか。ブックマンは、そういう点はちよつと子供じみたところがあるんですね。正直なのかもしれないけれど。「向こうが一人やつたなら、こつちは百人呼ぶんだ」とか言つて、全国の四十七都道府県から二人ずつ、それに全国的な役員を何人かつけて、百人を呼ぶという。

日本その頃のMRAは、金なんかないからびつくり仰天してバタバタしているんだけど、切符が向こうから来るわけですね。だからそこが、こういう大きな「両腕をいっぱい広げる」托鉢なんです。僕はそういう集会にのちになって出たことがあります。ブックマンが「こういうことが起こっている。こういうことをしなくてはいけないと思うけれど、お金が要るんだ」なんて言

うと、いつぺんに一億円ぐらいパツと集まっちゃうんですよ。それはすごいものですね。信じられないぐらいです。

伊藤 それはお金持ちが出すんですか。

澁澤 いや、そうじゃないです。みんなが出すんです。みんなが出すと、お金持ちも出させられるということになりますけれどね。それから、お金持ちの未亡人というのが西洋にはたくさんいるわけですね。することがなくて、大きな家があつて、お金がたくさんある。そういう人がブックマンに惚れ込んで、ブックマンが「この家はいい家だな」なんていうと、「じゃあ差し上げます」ということになるんですよ。

武田 ちょっとわからないですね（笑い）。

伊藤 やっぱり奇跡を信じなければいけないですよ（笑い）。

澁澤 それは奇跡ですよ。差し上げるんじゃない場合だつてあるんですよ。「お使いください」といって、名義はその人、という場合だつてあります。ニューヨークの郊外のデルウッドのマウントキスコというところですが、そこにある家なんかすごい家で、馬が何十頭もいる、お城みたいな家ですが、それがブックマンの家なんですね。

それからワシントンには、日本大使館の真向かいにありました。マサチューセッツ通り三四一九に、イリーさんという大金持ちがいます。ヴァンダービルド家の関係の方だと思えますが、すごい家なんです。ワシントンの目抜き通りなのに、裏にテニスコートがあつて、森みたいな庭がついていて、大きな立派な家があつて、何十人も泊まれるようになっていて。それがMRAのセンターになっちゃうんですね。イリーさんがそこに住んでいるんだけれど、イリーさんがMRAの仕事の全面的にすることになっちゃうんです。そういうところで宴会なんかやると、それは大使だつて来ますよね。

■日本の青年団を招待する

伊藤 さっきの日本の青年団を呼ぶ話は、結果としてはどうだったんですか。

澁澤 私は実は、これは非常に徒勞に終わつたと思つていてるんだけれど、そういうふうに言うのもかわいそうだから言わないんだけれど（笑い）。

伊藤 呼ぶことは呼んだんですか。

澁澤 呼んだんです。私は一緒に行つたんです。私たち家族はちよつと先に行つたかと思いますが、とにかく百人来たわけです。一九五七（昭和三十二年）年というのは終戦後十二年でしょう。まだ日本はとて国際化なんかしてないし、田舎の町のあれ「青年団」ですから、荒っぽいのもいっぱいいるわけです。若い政治家です。竹下「登」さんなんかその一部だな、たぶん。

伊藤 まあ。その時招待されたかどうか知りませんけれど。

澁澤 いや竹下さんはもう少し年上でしたから招待されなかつたけれど、彼は招待されてもおかしくない立場の人ですね。だからブックマンの狙いは悪くないわけです。もしその百人のうちから十人の総理大臣が出ていたら、それは大変な、すごい先見の明だと言えるんじゃないですか。

伊藤 そうですよ、あの頃の青年団のリーダーは代議士になつたり、大臣になつた人がたくさんいますからね。

澁澤 いっぱいいます。僕もいっぱい知っています。あまり僕はそういうの気に入らないから好きじゃないけれど、MRAに行つたという人はたくさんいますよ。ただ、その人たちは英語がまったくわからない。だいたい反米ですね。反米というか、容共の人が多いですね。

伊藤 よく来ましたね。

澁澤 そこがみんなずるいんですよ。ただでアメリカに行くんだから、じゃあ行こうという感じですね。

木全 思想がないですね。

澁澤 思想なんか何もないです。それで地方の新聞には、竹下登がアメリカに行く、なんて書かれるでしょう。そうするとみんなニコニコしちゃうんですよ。それが百人、マキノにワツと集まったわけですね。どうしますか。英語はまったくわからない。そのあとさんざん飯を食わさなければならぬ。何かさせなければならぬでしょう。そのへんがMRAのめっちゃくちゃなところですね。

木全 一週間ぐらいいたんですか。

澁澤 いやもつと。ひと月ぐらいいたんじゃないかな。

武田 滞在費も全部MRA持ちですか。

澁澤 全部持ちますよ。そしてワシントンを見せてやるなんていうと、特別の飛行機を出して、見せるんですね。

佐藤 それはMRAが選抜したんですか。

澁澤 いや、日本青年団協議会というのがありました。外苑に青年館というのがあるじゃないですか。

伊藤 日青協というのがあるでしょう。

澁澤 日青協。その会長に二宮尊徳という変な名前の男がいて、その人が一番えらかったんです。その下に副会長が三人ぐらいいて、そのへんが選抜したんじゃないですか。もちろん、一つひとつの県に委託したんじゃないですか。それぞれの県から集まってくるわけですね。だから筋金入りの共産党員みたいな人は来なかったでしょうね。結局、日和見が来たんでしょうね。

でもその連中が劇をつくったんですよ。『明日(あす)への道』という名前の劇ですが、富山県の青年団の会長さんが拵えたもので、百姓の水の争いをテーマにした劇をつくったんです。それがなかなか評判で、よくできているとかいって、その次の年、五八

年(一九五八)にはそれをフィリピンのマニラのイントラムロスという、日本人が一番悪いことをしたところで上演したんです。それでフィリピンの人がいっぱい来たりしました。ずいぶんドラマティックなことをやりましたね。それを支えるのは僕らではなくて、アメリカ人やイギリス人の若い連中でした。ヨーロッパ人もそうですね。舞台装置から何から全部やるんですから。日本人は人数も少ないから、とてもそんなことはできない。

伊藤 でも通訳はそんなにたくさんいるわけではないでしょう。

澁澤 だから私は忙しかったんですよ、朝から晩までくだらない話を聞いて通訳するわけですよ(笑い)。それで英語が多少はうまくまりました。

伊藤 そういう仕事がいりいなところであって、それで三年ぐらいアメリカのそこにいらつしやつたわけですか。

澁澤 ええ、おりました。青年団は全部で一ヶ月ぐらいだったと思いますが、まだ人種差別の激しい頃で、アトランタとか、南部をなんとかしなくちゃ、とかいって(伊藤 黒人問題)、黒人の劇だといって、黒人聖歌みたいなものをつくって持っていったんです。そういうところに黒人と白人だけ行ってもうまく行かないから、やつぱり日本人のような変わったやつを一緒に連れて行けということになるわけですね。それで私などが行ったんです。劇場に行っても、白いほうと黒いほうとあって、どっちに行ってもいいかわからないわけですよ。そうすると、「いや、おまえは白人だ」というから、「ホント?」なんて言ったりしたんですけれどね(笑い)。

武田 真中に座るしかない(笑い)。

澁澤 それを考えると、アメリカではいま黒人が国務長官になって、なんとかいう婦人もやっているなんて、大変な変化ですね。すごいですね。アメリカは本当に自浄能力のある国だと思いますね。日本もずいぶん変わりましたけれど。そんなことをいろいろ

なところでやっていたんですね。

伊藤 その三年間は――。

濫澤 三年間というわけではなくて、行ったり来たりしてしましたからね。ヨーロッパに行ったりしますし。

伊藤 いちおう本拠は――。

濫澤 子供がいましたから、何かというとは私はそのマキノ島に帰って行きました。

伊藤 そのマキノ島というのは湖の中の島だということですが、交通手段は何ですか。

濫澤 船、フェリーです。それから冬はスキープレーンですね。飛行機の車輪の代わりにスキーみたいなのがくつついている。

武田 映画で見たことがありますけれど。

伊藤 実際に体験したことはないですね（笑い）。

武田 学校はその島の外にあるんですか。

濫澤 学校は島の中にあります。

伊藤 じゃあかなり大きな島なんですね。

濫澤 いや、小さいんです。周囲九マイルとかいう小さい島ですが、インディアンが大部分なんですね。白人は少ないんです。ですからうちの娘はインディアンと一緒に学校に行っていましたし、PTAなんかがあつて、私も出たことがあるけれど、こんな格好をした「前屈みになる」変なおじさんがいっぱい出て来て面白かったですよ。小さい学校ですけれどね。生徒が全部で十五人とか二十人とかいう学校です。

伊藤 わざとそういうところを選んで決めたんですか。

濫澤 いや、そんなことはないですよ。その島にはそこしか「小学校が」ないから。

伊藤 いや、その島に決めたことです。

濫澤 ブックマンが行ったことですか。そこにグランドホテルという大きなホテルがあつたんです。そこを大会場に使っていたん

ですね。私の父がそのホテルに行つたんです。そうしているうちに、ブックマンが托鉢をしたんでしょうね。そこに自分で建てる、という話になつたんですね。それで青年団が来たときには、三百人ぐらい泊まれるような施設ができていたんですよ。

武田 夢のような話ですね。

濫澤 夢ですよ。しかも千人ぐらい入る劇場もあるんですよ。

伊藤 これぐらい「両手の小さめの輪を作つて」の托鉢でもいいから、欲しいな。

■ブックマンの意向

―政治劇「光の矢」を執筆する

木全 理事長は、都合ブックマンとは何年間おつき合いになつたんですか。

濫澤 そんなに近くでつき合っていたわけではありませんが。

伊藤 側近までいったわけではないでしょう。

濫澤 全然、側近ではありません。私は単なる労働者というか、前線部隊です。

木全 でも影響をお受けになつたという意味で――。

濫澤 最後に、あの人はそういうセンスがあるのかな、六〇年安保を予想していたんでしょうね。五八年（一九五八）ぐらいから「日本は大事だ、なんとかしなくてはいけない」ということを言い出した。ピーター・ハワードはすごくarticulate「滑舌がよい」だから、何を言っているかよくわかるんだけれど、ブックマンとというのは何を言っているんだかわからないんです。何かボソボソと変なことを言う。それをオックスフォードのドンをしていた人が、秘書として解説してくれるわけですね。たぶんこう言っているんだらうということなんです。日本がとても心配だ。中国も心配だ。中国人はかわいそうだ。中国人をなんとかしてあげなければいけない。それには日本がやらなくてはいけない」なんて

いう話になっているんですね。

五九年（一九五九）の春にブックマンはトゥソンというところに住んでいたんです。これがまた贅沢極まる立派な家で、砂漠の真ん中にあるんですが、どうやってああいふものを手に入れるのか。その二階の大きな部屋に住んでいるわけです。僕は二階にはあまり行かないけれど、ブックマンがいるから、いろいろな人が来るわけです。私の父親も来ましたし、ビルマのウー・ヌー総理大臣とか訪ねてくるわけです。

そこで私にも来いとか言われて、門番小屋みたいなところに泊められて、そこでしょっちゅうつき合っていた。つき合っているうちに、日本をなんとかしろよということ、こちらも困っちゃって、へんてこりんな政治劇を一発書いたんです。ピーター・ハワードもいましたから、手伝ってもらったところもあったけれど、その劇をブックマンに読んで聞かせたわけです。そうしたら『光の矢』という名前をつける、「Shatt of Light」とかなんとかポツンと言って、それが題になっちゃうわけですね。

それを演出して劇にしよう、じゃあロサンゼルスに持って行ってやろう、ということになりました。ロサンゼルスに劇場のある大きな家がありましたので、そこに行つて、劇の専門家も来て、私も主役になりました。日本人も朝鮮人もいましたし、出演者十人ぐらいの小さい劇ですが、それをロサンゼルスで拵えた。「それを持って行つて、日本をひっくり返してこい」というわけです。その劇はなかなか強烈な劇でした。自民党政権がどれだけ腐敗しているかということ。自民党といったかどうか忘れましたが、もう自民党になっていますね、五五年体制ですからね。

伊藤 いまのは五九年の話ですね。
澁澤 五九年ですから、自民党ですね。「藤山愛一郎というのは、あれは駄目だ」とか、またブックマンというのはそういう妙な情報を持っているんですね。「あれは悪い友だちとつき合っている」

とか何とかいう話ですね。こつちはよくわからないんだけど、「へえ、そうですか」というと、「でも君、そんなこと言っていたら駄目じゃない。日本はつぶれちゃうよ」なんて言われる。ああいうえらい人に言われると、こつちもおたおたして、その劇を書いたわけです。アリゾナのきれいな砂漠の門番小屋で書いたんです。それが劇になって、それを持ってきたのが五九年五月頃だったと思います。

伊藤 それはアメリカから引き揚げるつもりで来ているわけですね。

澁澤 ブックマンというのは計画書をつくつたりする人ではないから、何を考えているかまったくわからない。いま考えてみると、たぶん安保を予想して、日本は安保をうまく処理しないと共産化しちゃうかもしれない、ということがあったんでしょね。私は共産化しなかったと思つているんですけれどね。アメリカ軍がいるし、中国はそれほど力がなかったし、そんなことはあり得ない、と私は今では思っていますけれど、そのときはわかりませんでしたね。

ただ、仮に共産化しなくても、あれをうまく收拾しないと国の分裂というか、非常によくないことになるだろう、ということ。ブックマンは思っていたんでしょね。そこでなけなしの日本人である私とか家内だとか数人を使つて、そこに殴り込みをかけようという戦略を打ち出すんですね。それが私にはよくわからないけれどね。そして、そこでやれば何かが出てくるだろう、それが小田原センターにつながる、というところまで彼は持っているんです。だと思つてます。そこで私が歩兵になるわけです。将棋の駒として使われるわけです。そうだったんだ、というふうには思っています。

伊藤 その時は奥さんも子供も連れて、日本に帰ってくるわけですか。

澁澤 ええ、帰ってくるんです。それだけの覚悟を持って行かなくては駄目だ、と言われてね。

伊藤 しかし、劇をやつて、あるムーブメントを起こすにしても、資金の問題はどうなさるおつもりだったんですか。

澁澤 そういうことは考えないことになっているわけです（笑い）。

伊藤 ちょっと待つてください（笑い）。

澁澤 もちろん考えますよ。私は商売もやっていましたから、全然わからないわけではないので、考えますけれども、最終的には「神が導くところ、神は備える」ということになるわけです。

木全 大きな托鉢から（笑い）。

澁澤 実際それが出てくるんですよ。それがまた不思議なことで

木全 それで歩兵の駒で、待つておられたときの精神的な充実感というのはい。

澁澤 私はあまりいい人間じゃないですから、こんなことをいつまでやつてもかなわないな、と思つていたこともありますけれど、しかしブックマンのような人のそばにいますと、なんとなく浄化されるような部分もあるんです。ブックマン自体は、そんなにいい人だったとは思えない部分もあるんですけれどね。相当老獪なやつだったという感じはするんですけど、とにかく大物ですよ。僕は彼はガンジーとかレーニンとかそういうランクの人間だと思えますね。仕事は全然違いますけれどね。だからそばにいますと影響されちゃいますね。

木全 トータルで二十年ぐらいご一緒だったんですか。

澁澤 いえいえ、そんなことはないですよ。三年間です。だって五七年（一九五七）に会社を辞めたでしょう。六一年（一九六一）に「ブックマンは」死んじゃうんですから。小田原ができる前に死んじゃうんですから。

■六〇年安保の頃

— MRA が果たした役割

伊藤 それで日本にお帰りになって、劇はどういうところでやるんですか。

澁澤 プリンズホテルのそばに都市センターというのがありまして、そこが国会なんかが一番近いわけです。そこをダーツと借り切りまして、そこで毎日のように上演するわけです。そうすると、岸さんだとか、みんな来るわけです。

木全 ブックマンがいなくても、お金のことは考えないで、どこからか誰かが——。

澁澤 僕は忙しくて、そんなことを考えてられない（笑い）。

伊藤 おかしいですね。

武田 岸さんとかが来るのは、澁澤さんが連絡されるんですか。

澁澤 私だけではなくて、相馬雪香だつて加藤シヅエだつて、なかなかの *big stars* がたくさんいますから。星島二郎だつてそうだし、国会議員でしょっちゅう MRA ハウスに来る人がたくさんいるんですからね。そういうのが一所懸命運動するわけです。それで「あれを観なければ駄目だよ」とかなんとか言う。だから超満員になるような劇ではありませんでしたし、劇場も小さかったけれど、しょっちゅう来ていましたね。その前で、日本はどうやって滅びるかという絵を見せるわけです。それを直すにはどうしたらいいかということが描いてあるはずなんですけれどね。

しかしそれはなかなか効果があつたんだと思うんですよ。ブックマンのあれ「先見の明」があつたんでしょうね。MRA というものは、あの頃の人民戦線からいえば危険な対象になったんじゃないでしょうか（伊藤 そうでしょうね）。多少妨害もされたような覚えがありますけれどね。

それから三池の問題がありましたね。あれは総労働・総資本の

対決で、そこでブックマンはドイツの炭坑夫に劇を書かせて、それを送り込んでくるわけです。これがまた大変な劇で、炭坑夫がたくさんついて来て、金がかかるわけです。それを日本中でやれというわけですね。北海道は炭坑がたくさんあるから、まず北海道でやらなくてはいけない。東京ではもちろんやる。大阪でもやらなくてはいけない。そしてさらに大牟田に乗り込んでやるという。大牟田で何回もやりましたよ。それはすごかったですよ。

ただ、ドイツの炭坑夫というのは、unexpected angleじゃないですか。もし日本人の右翼が来たら、とてもそんなことはできないですね。どんなにメッセージがよくても、できない。ドイツの炭坑夫だったら同じ炭坑夫だし、あいつらはシレッツとして、炭坑の三池の一番のところに行つて話してきたりするんです。向坂逸郎みたいなどころに行つて話したりする。そうするとみんな、「へえ！」と言つて感心する。やつぱりそこがMRAの不思議なところなんです。どこにでも入れるようなところがある。それで一晩やりましたら大変な人気だった。午後やつて、夜やったのかな。炭坑夫に見せなくちゃ、と炭坑の人が言い出すんですよ。それで朝、炭坑から上がってくるでしょう、それに見せてくれというので、翌朝もう一回やつたんです。

それがどのくらい効果があつたか、僕は知らないけれど、そういう離れ業というか、不思議なことをやりました。本当に三池が解決するんですからね。それで解決したというほど僕は元気がないけれど、しかしまったく効果がなかったとも思えないですね。そしてそれを旅行させるのは大変だということで、国鉄の十河「信二」総裁が特別列車を出してくれたんです。それで東京から九州、九州から北海道と、全国を寝台車付きの特別列車で移動させるわけです。あれは汚職に近いようなものだと僕は思うけれどね（笑い）。

佐藤 私物化していますね。

伊藤 十河さんも「MRAの」支持者だったんですか。
澁澤 十河さんは大変な支持者です。MRAでなければ夜も日も明けない。終わりの頃はだんだん下火になったので、十河さんは非常に怒つて、私のことを「あいつは駄目だ」とかなんとか言われました。「やれ！ やれ！」と言われました。「でもね、そういうつまでも同じことばかりやつてられませんか」といつて弁解したことがありますよ。

伊藤 木内さんは十河さんの伝記をつくっていますけれど、そういう縁もあるんですか。

澁澤 木内信胤さんがMRAをやり始めたのはずっと後です。三池とか安保とか、一番のクライマックスの時はまだいなかったです。

木全 ブックマンなきあとのMRAですか。

澁澤 そうですね。

伊藤 六〇年安保の時には、劇だけやっていたわけではないんですよ。

澁澤 あのと、特に東京は、六月頃は非常に異様な状況でございました。アイゼンハワーが来るとか来ないとか、ハガティというのが羽田で取り囲まれたりして、国会は毎日取り巻かれてどうにもならない。議長は清瀬「一郎」さんというおじいさんで、それがもみくちゃにされながら法案を通したりしている。

木全 岸首相の訪米阻止、とかね。

澁澤 そうそう、そういうときですから、さすがの日本の国会議員も「これは大変だ、社会党のやつと話さなくちゃ」なんて言うんだけれど、話す場所がないんですね。国会にはうまく入れないし、社会党の人は、自民党の人と話していると人民戦線に怒られちゃうので、秘密に話さなくてはいけない。場所がないんです。そこで、MRAハウスに来るわけです。

伊藤 MRAハウスというのはどこにあったんですか。

澁澤 麻布です。有栖川公園のそばです。そこに来るといっても、呼ぶやつがいるから来るわけです。その呼ぶやつというのは、十河さんである場合もあるし、国会議員の場合は、加藤シズエとかやるわけです。そういう人たちが言うのなら来ようと言って、西尾末広だとかみんな来るわけです。だから毎朝毎朝、朝飯会をやって、夜は夜でそういうのが来て、やっているわけです。うちの女房とかもみんなお料理をつくったりしていました。それでお金の話だけれど、肉屋や八百屋に借金が増えちゃって、本当に困ったということがありました。

■小田原にアジアセンターを建設する

伊藤 日本のハウス自体は、どうやって経営していたんですか。

澁澤 そこにいる人たちは給料は一文も払いませんね。人件費とというのはないんですが、食費があるわけです。つまり食糧費ですね。食糧費、活動費がある。

伊藤 もちろん建物があるわけですから、その維持費から水道光熱費などがかかりますね。

澁澤 それは相当なものでしたけれど、MRA協力会というのを拵えて、いろいろな会社からお金をもらったりしていました。

伊藤 こんなに「両腕を広げる」大きくなっても、ある程度の「鉢鉢の」器があったわけですね。

澁澤 小さいもので、この程度でしたけれど「目の前の湯呑茶碗を指す」。だけれども、しょっちゅう足りないわけです。足りなくて困っていました。でも破産するというでもなかった。もつとも、借金が増えて、八百屋なんかを呼んできて、みんなで歌を歌って聞かせたりして、「こういうことをやっているんだ」とか言ったりして（笑い）、ごまかしていたんです。

武田 人間味があって、いいですね。

澁澤 「もう一ヶ月待ってちょうだい」なんて、そういうこともやっておりましたね。

伊藤 ハウスは財団なんですね。

澁澤 財団です。

伊藤 理事長は？

澁澤 相馬さんじゃなくて、最初は三井さんだったかもしれないね。

伊藤 あとで十河さんか何かになるんですか。

澁澤 十河さんは、小田原アジアセンター建設委員長で、これは十河さん、工藤昭四郎、千葉三郎、それに私の父親も入っていました。そういう相当えらいのが集まってやってくださったんですね。私が役員になったのは、父親が死んでからです。つまりこういう大きい「↓鉢鉢の器」がなくなつてからです。それまではそういうことはあまり考えなくてもよかつたんだけど、そのアジアセンターをつくるということでは、寄付は全部、鉄鋼連盟とか電力業界とかに行くわけです。これはずいぶん私も行きました。しょうがない。でも父親がまだ生きていましたし、病気でしたけれども、頼んでくれると少なくとも会ってはくれる。

伊藤 紹介状を書いてくれるんですね。

澁澤 助かりました。それでも五億円から六億円かかった中で、結局二億円は払えませんでした。清水建設に借金が残ってしまった。

伊藤 それは小田原のセンターをつくる時の話ですか。

澁澤 はい、そうです。

伊藤 ハウスの時は？

澁澤 ハウスはもつとずっと前で、できたのが一九五二（昭和二十七）年だと思えます。まだ日本の経済状況は、食べるものがないような感じの時で、一万田さんが先頭に立って財団をつくって、協力を拵えて、寄付を集めて、それでハウスを手に入れたんで

すね。中国の方が持つておられた家を安く買ったんです。そのときは戦後のどさくさみたいな感じがあつたと思いますね。

武田 いまもあるんですか。

濫澤 ありますよ。

武田 同じ場所ですか。

濫澤 同じ場所です。建物は替わりましたけれどね。古くなったので、新しくしました。私が笹川良平のところに行つてお金をもらつてきて、建てました（笑い）。やつぱり、こういうの「両腕を開く↓大きな鉢の器」がないと困るんです。

伊藤 アメリカで芝居をつくつて、一団で帰つてくるわけでしょう。それと、いままでハウスでやつていた人たちとは、すぐに一緒にできるわけですか。

濫澤 そこにはいろいろな力関係、軋轢があつたと思いますね。つまり外国でやらやらやつていたやつがやつて来て、日本であらそうなのを言つてもらつちや困る、という感じはあつたと思います。日本のやつは、MRAをやるというのは外国へ行く手段みたいなところがありますから、外国に行かせてくれないのか、というところもあつたんじやないですか。そんなことも聞いたことがあります。私は忙し過ぎて、あまりそういうことを心配する余裕がありませんでした。

伊藤 日本でもブックマンと同じように、組織のような組織でないような、という形なんですか。

濫澤 そうです。ただ、財団法人は組織です。そうでないと資産を所有できないし、寄付の受け入れができませんから、それは財団法人でやりました。だけどそこで何をするかは、財団の理事が決めるのではなく、ブックマンというか世界全体の流れに従つて決めていく、というところがありました。だから小田原にアジアのセンターを建てろというの、そういうお墨付きが来るわけではなくて、なんとなく世界中で、「日本は建てるべきだよ」な

んていうような声が広がるんですね。そうすると、日本の国会議員なんかはバタバタして、「君、建てなきゃ駄目だよ」なんて言い出すんですね。それで小田原ができるわけです。

伊藤 「こだま」みたいな話ですね。自分が言っているんじゃないですか（笑い）。

濫澤 本当に不思議です。私にもそのメカニズムがわかりません。しかし結果として小田原ができました。

伊藤 その小田原ができたのは何年でございますか。

濫澤 一九六二（昭和三十七）年です。去年、四十周年をやりました。

■日本におけるMRA協力者

濫澤 安保のときに、三池でそういうことをやつたり、『光の矢』という劇をやつたり、それに同調する日本の学生もたくさんいましたからね。それで右翼的というか、反共議員連盟みたいな連中は、非常にMRAを高く評価しているんです。純粹なことを言つてやつていると思う。その親玉が、議員ではありませんが、十河さんだつたんです。十河さんはえらい人で、ちよつとブックマンに近いような感じの人でしたから、「やらなければ駄目だよ」といつて、やることになつていつたんですね。

伊藤 やはり十河さんというのはカリスマですか。

濫澤 あれはえらい人ですね。

伊藤 木内さんのお父さんもそういうところがあるんじゃないですか。信胤さん。

濫澤 あれは私の親類だから、あまりいいとか悪いとか言えないけれど、十河さんとはちよつと違うんじゃないですか。十河さんは志士みたいなところがありましたからね。しかも頭もいいですからね。だつて新幹線をつくるというのは大変でしょう。小田原

センターをつくるなんていうのと全然意味が違う。大変なんですから。国会議員全部を相手にして、日本の政府の組織全体を相手にして、あれだけのものをつくるというのは、技術的にも大変なことです。それは一人ではないでしょうが、味方もいたでしょうが、何年かでおやりになったんですね。国会が文句を言わないように、世界銀行から金を借りてくるのか、自分一人でちよつと暗躍してやって、保険をかけてどんどん進めるんですね。いまなら、新幹線がないなんていうことは考えられないけれど、あの頃はそうではありませんでしたからね。あの方はえらい方でした。尊敬していました。

武田 一九六〇年前後にMRAに協力的だった政治家というとはかに具体的にどういう方がいらつしゃいますか。

澁澤 あと、千葉三郎ですね。星島二郎、岸さんもそうです。周東英雄もそうです。協力的というのか、受田新吉は民社党でしたけれどね。それから加藤シヅエ、社会党では鈴木強、これは全電通の参議院です。それから炭労の阿具根登、そういうったような人がたくさんいました。自民党にもっと多かったですよ。自民党は味方しやすい対象ですからね。

武田 それはMRAハウスのほうにしょつちゅう出入りするんですね。

澁澤 よく来ていましたね。しょつちゅう来てはいるわけではありません。安保のときのような大事件があると、みんなしょつちゅう来ていました。

伊藤 MRAハウスの日常的な活動というのはどういふものなんですか。

澁澤 これは人に会うということが大切なわけですね。それには呼んでくるのが一番いいわけです。どこかレストランに行くとか金がかかってしかたない。うちでやれば、借金でなんとかできるといふところがあつたから、うちに呼んでくるわけです。呼んでき

て、「やりましようよ」という。そうすると、いまのようなシンパがたくさんいるから、その人たちが、「じゃあ、あいつを呼んできてここでやるうじゃないか」とか、西尾末広を呼んできて、「これをどうやって收拾するか」という。本当に安保の時は、どうやって收拾するか、という状態でしたからね。うまく收拾しなかつたら本当に変なことになりそうな感じだったから、みんな心配していたんですね。そうすると、「MRAハウスに行くから」というと、「どうぞいらしてください、誰と誰が来ます」「わかりました」といって、目玉焼きか何かを拵えて待っているわけです。

武田 そういふときに進行するのは相馬さんですか。

澁澤 そのとき呼んできた人ですね。加藤シヅエさんが呼んでくれば、加藤さんでしょうね。私はそういうものは出席はしたことはあるかもしれないけれど、国会議員でもなければなんでもないし、あまり関係しなかつたですね。彼らが自分でやっていましたよ。相馬雪香さんもやっていましたね。あの方は政治家、尾崎「行雄」さんのお嬢さんですからね。

伊藤 じゃあ澁澤さんは、財団の理事でもなかつたわけですか。

澁澤 ええ、その時は全然そうではありません。私は単なる走り使いたいなものです。通訳・連絡係みたいなものです。

伊藤 アメリカにいらつしゃつたときはわかるんですが、日本に戻られてからは、いったい生活費なんかどうしたのかな、と思つてんですが。

木全 どうしても気になりますね。

伊藤 気になりますよね。霞を食って生きていたわけではないはずだから。

澁澤 私はMRAハウスの中に住んでいましたよ。

伊藤 そうですか、向こうでと同じような感じなんですね。奥さん、子供さんもそうですか。

澁澤 ただ、うちの娘と息子が、西町スクールという高い学校に

入りましたので。

木全 インターナショナルスクールですね。

澁澤 日本語がわからなかったから、二年ぐらいそこに入っていました。それは高いので、うちの親父が出してくれました。「おれが出す」とか言ってやってくれました。それを出すとすると、じゃあ洋服も買ってやろうとか、当然なるわけです。

木全 ということはやはり、資産がない人にはできないわけですね。

澁澤 澁澤敬三は資産はなかったけれど、お小遣いは持っていましたからね。

伊藤 まあ、動くお金があればいいんですね。

澁澤 そうですね。

伊藤 奥様はその中にいらつしやったんですね。

澁澤 ええ、いました。それで一所懸命お料理をつくったりしていました、協力していました。

伊藤 それは何年間ぐらいおやりになったわけですか。

澁澤 父親が六三年（一九六三）に死にましたので、それからしばらくそこに住んでいて、六五年（一九六五）ぐらいかな、そういつまでもあそこいられないと思って、父の遺したお金があったので、小さなアパートを買って移ったのが六七年（一九六七）ぐらいだったかな。

伊藤 お父様が住んでおられた家はどうなりましたか。

澁澤 一番最初に住んでいた大きな家は財産税で物納しました。それから最後に住んでいた家は、大蔵省に売りました。もちろん大蔵省はそれを壊したと思いますけれどね。そのそばに私がいましました。その家はそのまま残っていました。でも父が死んだときに、それも大蔵省に売ったと思います。

伊藤 遺産相続の問題ですか。

澁澤 相続というか、大蔵大臣官邸の隣にちよろちよろ住んでい

るといいうのもあんまりいい感じのものでもないと思って、売って、よそに移ったわけです。

伊藤 そういふふうになると、MRAハウスとの関係もちょっと変わってくるようになりますね。

■財団運営の方法

澁澤 だんだんアジアセンターの経営が必要になってくるわけですね。建物ができると、たいして大きな建物ではありませんが、それでも地上五階、地下二階とかなると、放っておいても二千万とかかかりますね。もともと二億円の借金がある上にそういうものがある。そこに若いやつがいっぱい集まって、どんちゃか騒ぎをやっているわけです。毎日、音楽劇をつくって、若い連中二百人も連れてアメリカに渡ったり、いろいろなことをやっていたわけです。

伊藤 それはいくらお金があっても足りないですね。

澁澤 足りない、本当に足りなかった。でもそれが辻褄が合ったから不思議ですね。その二億円だけはずいぶん残ってしまったけれど、結局九〇年（一九九〇）ぐらいに全部返しました。アジアセンターの経営については、最初はなかなかうまく行きませんでしたけれど、英語の学校を始めまして、それでだいぶ儲かりました。

伊藤 それは小田原ですか。

澁澤 はい。日本の会社の人たちが海外進出を始める走り、トヨタとか銀行とか、いわゆる一流会社が争って送ってくるわけです。

木全 一ヶ月ぐらいの（伊藤 宿泊してやる）セミナーでしょう。

澁澤 一ヶ月泊まり込み。十年ぐらいで、がほがほ儲けました。それで生きていくことができたわけです。それだけでなくて、そ

ういう経営をどういうふうにするのかということで、私はスタンフォード大学に行きまして三ヶ月の非営利法人の経営というセミナーに出席しました。だってわからないんですもの。むかしミカンの缶詰を売ったことはあるけれど、そういう建物を経営したり、財団を運営したりするのはわからないから、行ってきたんですけれど、非常にいい知恵をたくさん授かって帰ってきました。それからどうにか回転するようになりました。儲けるだけではなくて、もちろん清水「建設」にはなかなか返せませんでした。東南アジアとのセミナーを始めたり、私らしい仕事をだんだん始めました。

伊藤 ちよつとすみません、ハウスと小田原とはどういう関係になるんですか。

澁澤 財団法人MRAハウスが両方を所有しています。小田原アジアセンターと東京の資産、両方です。

伊藤 いまおっしゃった小田原のほうに関わりを持つようになられたときは何か役員になられたんですか。

澁澤 父が死にましてから、私は理事になりました。

木全 いまは理事長ですね。

澁澤 理事長というか、代表理事といっております。

木全 トップは代表理事ですね。ずっとやってらっしゃいます。

伊藤 麻布のほうも一緒のわけですか。

澁澤 はい、そうです。

木全 でも麻布はノータッチですね。麻布も何か関与してらっしゃいますか。

澁澤 私は麻布に事務所を持っています。いま澁澤財団の分室までつくっちゃって、公私混淆も甚だしい(笑)。

伊藤 澁澤財団というのもあるんですか。

澁澤 それは澁澤栄一という人です。

木全 それはまた独立したテーマとしてお話を聞きになったほ

うが――。

伊藤 飛鳥山にあるのは――。

澁澤 あれです。

伊藤 あの財団ですか。それならわかります。

澁澤 あれは澁澤栄一が死んだときに、家屋敷を財団に寄付したわけです。それがそのままながつて、現在に至っているわけです。一時は本当にお金がなくて困っていたんですが、バブルの一番高いときに、北区が庭を買ってくれたんですね。それで相当なキャッシュフローができて息をついた。そうしたら第一勸銀大汚職に巻き込まれて、宮崎「邦次」頭取が自殺するという騒ぎになって、その財団の役員は総退陣したわけです。それで私を理事長にしろ、ということになって、私が理事長になって、いまやっています。

その財団は、そういうことになったものですから、何をしたらいいかわからなくなつたわけです。もともとあまり何をしたらいいかわからない財団なんだけれど、そこでいまこういうことをやるうといつて、私がいま面白い計画をやっておりますけれども、あと二、三年頑張ろうと思つていっています。

伊藤 『澁澤栄一伝記資料』をつくつたのは、あそこですね。

澁澤 そうです。

伊藤 その元になつた史料はあそこでお持ちですよ。

澁澤 いまでもあります。

伊藤 僕もそれを見せていただきにあがったんですが、竜門社はどうなつていんですか。

澁澤 あそこのいまの名前は、澁澤青淵記念財団竜門社というへんてこりんな名前になつていんです。

伊藤 そうですか、竜門社もついているわけですね。

澁澤 ところが私はその竜門社という名前はもうやめましようと言っているんです。黒竜会の分かれみたいになつてもかなわな

いし。

伊藤 誰もあまりそんなふうには思わないと思いますけれど。

濹澤 だいいち、知らない人が多いんだから。特に外国との関係になると、「竜門社って何ですか」ということになって説明のしようがないじゃないですか。Dragon Gateですといっても、何を言っているんだ、ということになるじゃないですか。

武田 めでたいような気がしますけれどね。

濹澤 この十月にその名前を変えます。濹澤栄一記念財団という簡単な名前にいたします。

■その後のMRA活動

伊藤 それでは、時間があまりないので先に進まないようにしましょうか。

濹澤 ごめんなさいね、くだらない話ばかりして。

伊藤 いやいや、非常に面白かったです、よくわからないところがたくさんありますので（笑い）。

濹澤 私がわからないので（笑い）。

武田 この小田原のセンターというのはアジアセンターというんですね。

濹澤 はい、最初は「MRAアジアセンター」という名前で持えたんです。MRAのアジアのセンターという意味でつけたんです。しかし、ブックマンの死後、MRAというものが思想運動として下火になったというか……。しかもピーター・ハワードが六五年（一九六五）に死にましたので、それ以来だんだん……。

伊藤 リーダーがいなくなっただけですね。

濹澤 いなくなっただけです。それから各国勝手なことをやる。そこで私も勝手なことをやるようになったわけです。

伊藤 全体をまとめていくだけのカリスマがいなくなっただけで

すね。

濹澤 いなくなりました。

木全 でも世界ではMRA運動は続いているわけですね。

濹澤 続いていると考えている人もいるし、もうなくなっただけで考えている人もいるんじゃないですか。

武田 名前が変わったんですね。

濹澤 ええ、変わりました。「Initiatives of Change」という名前になりました。それはもう一種の敗北宣言みたいなものです。と、私は思っています。

伊藤 ここで切りましょう、ちょうどいいところです。ある程度わかったというか、わからなかったというか、よくわからないんですが、とにかくMRAという茫漠としたイメージに多少アクセスできたかな、という気はいたします。

濹澤 それは、もしご研究なさる方が将来あれば、面白い対象だと思います。ただそれを研究するのは非常に難しいと思います。オーラルヒストリーばかり、みたいな話になる。資料は多少はありますので、私のところでいま財団の仕事として、その保存、劣化防止をしようと思っております。写真がいっぱいありますからね。

伊藤 写真とか、劇の……。

濹澤 劇のフィルムはたくさんあります。フィルムは最近少しづつビデオに直したりいろいろして、写真はDVDに入れたりしてとっておりますが、それを歴史として書けるかというところ、大変ですね。日本のことだけなら多少はできるかもしれませんが、いま申し上げたように、私自身が関与していないことがたくさん起こっているわけですから、難しいですね。でもああいうものがあるときあつた、ということはなかなか面白いことですね。

伊藤 僕は一番最初、ずいぶん昔に、岸さんのインタビュをやったときに、たしかMRAのことを聞いたんです。それから、あ

これは何だろうと思っていましたら、いろいろなところに実は出てくるわけですね。そのたびに、道徳再武装というのはなんだろう、不思議な問題だな、と思っていました。

伊藤 私自身にもあまり説明ができないんですね。一種のつむじ風のようなものがあって、ワイワイ回っていて、そのあいだで何が起こった。起こった結果は、何故だったか、私にもわからないような感じがありますね。それは、ブックマンのやり方がそういうふうにした部分もあると思います。

伊藤 いちおう六二年（一九六二）に小田原ができて、だんだんそちらのほうのお仕事に関与されるようになって、お父様が亡くなられて（濹澤 六三年）、全体の理事にもおなりになって、ということですね。

濹澤 でもまだその時には十河さんがいらつしやいましたから、理事をやっていただいたいの思っていますし、私が代表理事になったのももう少し先だと思っています。それは調べておきます。

伊藤 いま代表理事は？

濹澤 私だけです。ほかに理事はいますけれど。

伊藤 何かで見たときに相馬さんの名前が出ていましたけれど、あれは何ですか。

濹澤 相馬さんはMRA国際協会という団体です。

伊藤 それはまた違うんですか。

濹澤 その話をし始めると――。

伊藤 この次に伺います。

濹澤 つまり私はアジアセンターの経営でいっぱい、もうMRAの仕事なんかやっていられない。だいいちMRAの仕事をする、と、鉢の鉢がなくて大変だということをも骨身に徹して知っていましたから、そんな騒ぎではない。とにかくセンターをペイさせるようにしなければならぬということの中で夢中になっておりました。昔のMRAのようなことをやりたい人は、それに不満だった

と思いますね。じゃあ、自分たちでやろうと行ってできたのがMRA国際協会です。木内さんなんかはそっちのほうに関係しているんです。

伊藤 木内孝さんですね。

濹澤 木内信胤さんです。

伊藤 孝さんもそれに関わっているんですか。

濹澤 関わっていないと思いますね。

木内 ちょこっと関わっているんですね。私も誘われてメンバーになったりしているけれど、それは相馬さんが、「あなた、孝さん」と言うから、つき合っている程度のことではないかと思えます。ですから、「講演会でお話ししてちょうだい」と言われたら、行ってやるのか、そういうことだけれど、もうMRAの思想とかにはほとんど関係がない。だから理事長にお話ししても、もう全然、とか言われちゃって。

伊藤 わかりました。またこの次に伺います。じゃあ、ここで一応終わりにします。

■資料所在について

伊藤 ちょつとお知恵拝借なんですけど、ひとつは、濹澤さんのご親戚に明石さんがいらつしやいますね。僕はいま奇妙な事典をつくっております、日本の近代で、公的な役割をした人たちの資料が現在どうなっているかという事典なんです。例えば伊藤博文を見ると、伊藤博文関係文書というのがありまして、これはだいたい国会図書館の憲政資料室に入っております。それを私がやったんですが、活字化するという仕事もやりました。これは書簡だけですが、書簡だけで全九冊になりましたので、大巻ですね。当時の人たちはみんな手紙で政治的なコミュニケーションをして、証拠としてとっているわけですね。それは非常に研究に役に

立つわけです。

澁澤 しかも日本紙に墨で書いてあるから、消えないんですね。印刷したものは駄目なんですね。

伊藤 「事典の組見本を示して」 こういうふうになんか人名を掲げて、資料がどうなっているかという事典なんです。その中に明石照男さんを入れたい。明石さんの資料がいつたいどうなっているのか、僕らには全然わからないんです。明石さんの遺族に聞いてみたいんです。明石さんの遺族をどうしたら知ることができるか——。

澁澤 明石さんの息子も死んじゃいましたからね。息子の未亡人は明石正子という人です。

伊藤 アドレスはわかりませんか。

澁澤 ちょっとわかりません。家に帰ればわかります。その人がいま明石家。当主はその人の息子かもしれません。その人のご主人は景明さんという名前で、亡くなりましたが、日銀の理事か何かしていましたね。そのお父さんが照男です。

伊藤 それからもうひとつなんですが、先ほど三日月「クレツセント」の石黒さんの話が出ましたが、石黒さんのレストランの上のところに、寶石とか古物商みたいなことをやっているでしょう。それで下がレストランなんです。そこに石黒忠恵の文書が一室にあつたんです。忠篤さんのほうは、戦災でなくなっているみたいなんです。

澁澤 忠恵のほうは面白いでしょうね。

伊藤 忠恵さんのは少しだけ、吉田茂からもらった書簡とかいうのが入っているんですね。それもちょっと見せてもらったんですが、これはあそこに聞けばいいな、と思っていたんです。そうしたらなくなつたでしょう。相続人が書いてあつただけでしょう。澁澤 私はそれをお助けすることはできませんけれど、穂積重行がいますね。あの人に、石黒関連の資料はどこにあるかとおっしゃれば、あの方は歴史家だし、そういうことを知っているかもしれ

れませんね。石黒とは叔父・甥みたいな関係ですからね。石黒夫人は、穂積重行のお母さんの——。

伊藤 みんな澁澤一族ですね。

澁澤 澁澤一族じゃないですよ。穂積一族ですね。穂積重行はご存知でしょう。

伊藤 いや名前だけです。「穂積歌子日記」を出されて、面白かつたですよ。あの書評を書きましたので、とにかく読みました。

澁澤 あれは面白かつたですね。私が生まれたときのこと書いている。相当な歴史家じゃなければ、あんなことはできない。穂積さんはなるべく早くおやりになったほうがよろしいです。歳ですから。もう一人、阪谷「芳直」という従兄弟がこの前死にしました。

伊藤 阪谷さんは尚友倶楽部でいろいろ助けてもらつてやっているものですか。

澁澤 あれも歴史家の一人ですね。

伊藤 そうですね。いろいろやつてもらいました。

澁澤 阪谷さんの文書はお嬢さんが持つていて、どうかすると言っていました。

伊藤 阪谷さんのお話も伺おうといつていたんです。渡辺昭さんのお話を伺つて、渡辺武さんのお話を伺つて、いま戸沢「奎三郎」さんという理事長の話を伺つたんですが、その前に阪谷さんのお話を聞こうといつていたら、ご病気になられたんです。

澁澤 惜しいことをしましたね。あれは面白い人です。私の親類では出色の出来ですね。穂積もいいですけど。

伊藤 この前、木内さんを通じて、両澁澤の資料がどうなっているかということをお尋ねになつたと思いますが、この仕事のためなんです。それで澁澤栄一と敬三と両方はいまあそこにあるかどうか、あそこの方に書いてもらいました。それで今年度中になんとかしようと思つています。

澁澤 あそこは財団としてちゃんとやっていますから、しばらく大丈夫です。

伊藤 石黒さんのところはどうかっちゃんたるうな。しかし誰も受け継いでいないということはないはずです。インターネットで検索すると、相続人として女の人の名前が出てくるんですけど、華族体系を見ますと、その人は全然見えないんですね。それからいろいろな検索をしてもその人の住所も出て来ないし、ああ、と思っっているんですが。石黒家は子爵ですからね。

澁澤 それは私にはわかりません。クレッセントの人は次男でしょう。

伊藤 でも、あの人が持っていたんです。クレッセントの上にあつた――。

澁澤 それは場所があつたから、そこに預けたんでしようね。僕からいえば、穂積さんが希望ですね。穂積さんが知っているかもしれない。

伊藤 可能性はありますか。あるいは相続人の方をご存知かもしれませんね。

澁澤 知っているかもしれませんが。

伊藤 わかりました。ありがとうございます。

澁澤 明石照男は第一銀行に資料があつたかもしれませんが。副頭取までやっているんだから。

伊藤 いまはみずほ銀行になっているから、どうなっているかわからない（笑い）。

澁澤 それでわからなくなるんですね。

木全 このオーラルヒストリー・トークはまだ続くんですか。

伊藤 ええ、続きますよ。

木全 日程を決めましょう。澁澤理事長は、こんなのが本当に役に立つのかな、とさかんにおっしやっています。

澁澤 どうもすみませんね。こんなつまらない話ばかりで。

伊藤 僕が覗いたことがない世界の話ですから、びっくり仰天の連続です。

武田 いま五〇年代、六〇年代のいろいろな研究が進んでいて、MRAという名前がいろいろなところに出てくるんですけど、何を調べていいのかまったくわからないですね。

澁澤 私にお会いになると、ますますわからなくなるんじゃないですか。

伊藤 MRAで検索するといろいろなことが出て来ますが、なんだかあれじゃあよくわからないですね。具体的なことがほとんど出て来ないですし。

澁澤 実体のない、ひとつの風のようなものでして。

伊藤 いま僕のところで近現代史の史料を集めているんですが、その中のひとつにせきいたる関之という公安調査庁の次長をやつた人の日記があるんです。それは昭和三十六年（一九六一）ごろだつたかな。

佐藤 「十河、澁澤を泣かすとは何事か」と、ブックマン博士追悼式の時の日記に書かれていたと思います。

伊藤 そのあと、だいぶ関心を持っているんですね。

澁澤 三十六年にブックマンは死にましたからね。

佐藤 八月十一日だと思います。

澁澤 そうです。ドイツで死んで、日本でびっくりして、みんなで追悼会をやつた、その時の話でしょう、たぶん。

伊藤 この次はブックマンが亡くなるころあたりからのお話を伺いたいと思います。ありがとうございます。また、いろいろお教えいただきまして、ありがとうございました。事典をつくるのに大変役に立ちます。

澁澤 お役に立てませんで。

澁澤 雅英

オーラルヒストリー

第3回

[2003年9月25日(木) 14:00~16:00]

[出席者] 肩書きはインタビューの時点

澁澤雅英氏(東京女学館理事長・館長)

伊藤 隆氏(政策研究大学院大学教授)

木全ミツ氏(東京女学館副理事長)

武田知己氏(政策研究大学院大学特別研究員)

佐藤純子氏(政策研究大学院大学特別研究員)

丹羽清隆(録音、記録担当)

場 所：東京女学館

■バンコクで国際セミナーを開催する

伊藤 実はそのう、ある出版記念会で柳沢錬造さんにお会いしました。

澁澤 そうとうなお歳でしょうね。

伊藤 でも非常にお元氣そうでした。それで、「いまMRAとの関係はどうなっていますか」とお聞きしましたら、「いちおう会費は払っているけれど、もう何もやっていない」という。「何故やっていないんですか」と聞いたたら、「相馬さんとぶつかった」という。

澁澤 へえ、そうですか。それはまた珍しい。

伊藤 それで、いやになって一切手を引いた、という話でした。

澁澤 おじいさん、おばあさんに喧嘩されたら、困りますね（笑い）。

伊藤 やつぱり尾崎「行雄」の娘だということ、そう率直にはおっしゃいませんでしたが、やりたい放題で、どうも一緒にはやっていけない、ということでした。

澁澤 相馬「雪香」さんというのはえらい人なんですけれどね。

木全 相馬さんはいまお幾つになられましたか。

澁澤 九十一か九十二歳ですね。

木全 それだったらもう本性が全部出る年齢ですからね。（一同笑い） 抑えるということができない年齢ですね。

澁澤 それにいまさら文句をつけてもしょうがない（笑い）。

木全 それを計算しておつき合いですということが、高齢化社会の生き方です。

澁澤 でもそれで一所懸命いろいろやっていらつしやいますからね、「難民の会」とか。

伊藤 ときとして老害ということもありますからね。

澁澤 それはありますね（笑い）。

木全 「老害」だらけですからね（笑い）。

伊藤 前回、小田原のセンターをおつくりになったところのお話を伺いました。それが英語の研修で、なんとか経営が成り立ったというお話でした。やはりお話はクロノロジカルに伺いたいと思います。最初に澁澤先生にお目にかかったときに、アメリカに留学されたり、向こうの大学の先生をやられたというお話を伺ったように思うんですが、それと小田原のセンターをつくった時期との関係はどうなりますか。

澁澤 アメリカの大学に留学したことは三回あるんですね。

伊藤 一回は、小田原のセンターの経営の勉強のために行かれましたね。

澁澤 ええ。二回目はインドネシア語の勉強のために行きました。

伊藤 それはだいたいいつごろでございませうか。

澁澤 それは一九八〇年か八一年です。

伊藤 そうすると、ずいぶん長い間小田原の経営をやっていたんですね。

澁澤 ええ、もう一所懸命やっていました。

伊藤 そこにお住みになっていたわけではないんですか。

澁澤 東京におりました。新幹線ができましたので、楽に行かれるようになりました。

伊藤 できたときから新幹線はございましたか。

澁澤 小田原センターができたのは一九六二（昭和三十七）年で、その年に鴨宮までの試験線ができました。オープニングのときに来てくれた外人を乗せて、新幹線はこういうものだ、世界一の汽車だ、とかいつて見せたんです。その翌年か翌々年に開業したんですが、もう線路はずいぶんできていました。

伊藤 じゃあ東京からそこにお通いになっていたんですね。

澁澤 その前は車で行くとか五時間とか七時間とかかかって、大変

でした。小田急というのがあって、やや早く行きました。一時間ちよつと違う。新幹線だと四十分で行けますので、変なところに行くよりよっぽど早いことになります。

伊藤 東京駅に近ければ、ですね。

澁澤 そうですね（笑い）。

伊藤 じゃあ、八〇年に「アメリカにインドネシア語の勉強に」おいでになるまでは、だいたいその仕事をやっておられたわけですか。

澁澤 英語の学校をやって儲かり始めたわけです。儲かるというほどでもありませんでしたが、キャッシュフローがだんだん増えてきました。ちょうどそのころ、東南アジアと日本の関係は大変悪く、タイとかバンコックでも日貨排斥がありました。

伊藤 たしか田中「角栄」さんがやられましたね。

【註】田中角栄は、一九七四年一月、東南アジア五カ国訪問をする。バンコックで反日学生デモにあい、ジャカルタで反日暴動にあう。

澁澤 田中さんがやられたのはジャカルタです。田中さんのセクレタリーを私の従兄弟がやっています、「どうだ？」と言うから、「大丈夫だよ」と言ったんですよ。そうしたらああいうことがあったので、あとで悪いことしたな、と思ったりした覚えがあります。

伊藤 「大丈夫だよ」とおっしゃったのは、その前からインドネシアと関係があったからですか。

澁澤 その前、一九七二（昭和四十七）年が最初だったと思いますが、タイのバンコックで「Asian in a World Community（世界社会の中のアジア）」という名前でセミナーをやったわけです。

伊藤 それはどこがやったわけですか。

澁澤 私どもとチュラロンコン大学との共同主催でやったんです。

伊藤 そのときに「私ども」とおっしゃるのは？

澁澤 MRAですが、MRAという名前は使わないで、「イースト・ウェスト・セミナー（East West Seminar）」という、変なアリアス「別名」みたいな名前を使っておりました。

木全 忘れないうちに「申しますが、理事長は」「アジアは日本か」という本を出していらつしやいます。

澁澤 それはずっと後のことです。その時出した本は、『東南アジアの日本批判』『副題、「シンポジウム・アジア共同体を考える』』という本です。

伊藤 それはご自分でお書きになった本ですか。

澁澤 これは会議でみんながしゃべったことを翻訳して、サイマルで出したんです。序文はたしか斎藤志郎さんという日経の方がお書きになったと思います。

伊藤 それは会議録みたいなものですか。

澁澤 ええ、基本的には会議録です。その会議録が面白かったのは、当時タイで一番過激だといわれていた学生指導者がたくさん集まってくれたことです。

伊藤 過激な、というのは反日の、ということですか。

澁澤 反日です。タイの人はそうむやみと過激ではないですからね。況んや共産主義とかという話ではないんですが、非常に反日的だった。でも東南アジアでは常にそうですが、反日は一つの顔であって、本当は自分の国の政府にいちやもんをつけているわけですね。その時のタイは、なんとかいう軍人の総理大臣でしたね「タノム・キタイカチョン首相」。それに対する反発があって、実際それを二、三年続けたあとで、その政権が壊れて民主化されましたから、良かったんです。日本はそのスケープゴートというか、理由にされたんですね。そういうことだから、大丈夫なんだ、と私は言っていたわけですね。それで田中さんのセクレタリーにもそう言ったんだけど、そう簡単ではなかった（笑い）。

伊藤 タイでそれをおやりになるというきっかけは何だったんですか。

澁澤 相馬雪香さんの義理の弟さんで、相馬豊胤さんというのがいらっしやるんですね。その人はお医者さんだったんですが、辞めて、MRAの仕事をしていました。MRAが昔のような状況でなくなつてからは、彼はタイに興味を持って、タイの若い学生を呼んだりしたんです。いまでもつき合っています。とても優秀な男女二人の学生が日本に来たんです。それを一ヶ月ぐらい案内して仲良くなった。その二人ともチュラロンコン大学だったと思います。

それで、チュラロンコンと「一緒に」やるうじゃないか、ということになって、私が行ったときに相馬さんも行きまして、チュラロンコンの人と話をしたんですね。それで日タイ関係だけをぎやあぎやあやると反発を招いて両方困る。むしろ世界中の人を集めてしまえということで、アメリカ人もヨーロッパ人も連れてきた。その中で、タイと日本の関係は世界の中でどういう意味を持つかという、わかつたようなわからないような話ですが、そういうコンテキストの中で日タイ関係を考えましょう、ということになりました。

そうすると、話題がすこし多くなりますね。たしかにあのときの日本は存在が大き過ぎました。朝の歯磨きから歯ブラシから自動車から、全部日本なんです。タイはどこに行ったんだ、という感情的な反発もあった。それは無理もないところがありました。日本の会社のネオンサインがすごいですね。パンコックなんかは、ほかのものは何もない。全部が日本のもので、パナソニックだとかサンヨーだとかですから、ちよつとお行儀が悪いところもありましたね。

しかしその結果、中曽根さんが通産大臣であそこにおいでになって、謝つたりしたんですね。僕は謝るような性質のことだとは

思つていなかったんですが、お行儀が悪いということはあつたんでしようね。そういうことがきっかけになって、国際交流基金ができた。「一九七二年」、日本もつと文化的な投資をしなければならぬということになった。そのターニング・ポイントじゃないですか。ちょうど高度成長がいくらか落ち着いて、日本人も余裕ができたし、なんとかしなくちゃ、と思うようなタイミングだったんだと思いますね。

伊藤 いま簡単に、世界各国から人を集めたとおっしゃいますが、そういう資金はどうなさるんですか。

澁澤 これは私どもが出しました。

伊藤 私どもというのは、そのセンターですか。

澁澤 英語学校の利益で出しました。その頃はだいたい余裕ができていました。七〇年代ですからね。MRA時代の知り合いがいっぱいいて、学校の先生をしたりしますからね。デンマークとかインドとか、そういうところから人を連れてくるわけです。

伊藤 それもMRAの人脈だったんですね。

澁澤 ええ、それが非常に大きいです。それがなければ、私はどうしようもないわけです。

伊藤 それとお金ですね。

澁澤 お金はできたばかりのお金で、大した金額じゃありませんでしたけれどね。

伊藤 でも旅費や何かを出さなければならぬでしょう。

澁澤 そうです、ヨーロッパ人を呼んでくるのに旅費は出さなければならぬですね。

伊藤 そこまで発展したわけですね。

澁澤 英語学校は本当によく儲かつたんです。

■東南アジアに対する意識の変化

―第二回セミナーでASEANを研究

伊藤 東南アジアは、タイが始まりですか。

澁澤 私どもはタイが始まりです。

伊藤 それが発展するわけですか。

澁澤 これはMRAではありませんが、イースト・ウエスト・セミナーという名前で行っています、私どもの仕事はかなり発展しましたね。その相馬さんという方はついにタイに住み着くことになって、いまも住んでいます。それで日本語を教えたりしているうちにだんだんえらくなって、ある大学の副学長になっていきます。といってもいわゆる正規の副学長ではないんですけれどね。タイは非常にルーズな柔軟な社会ですから、そういうことができるといいでしょう。それからチュラロンコンという国立大学のど真ん中に大きな部屋をもらって、それを私どもの事務所と称してやっていますし、いまでもやっています。

その仕事は、タイの学生を毎年何十人か日本に連れてきたり、日本の学生を連れて行ったり、両方でホームステイをやったりするものです。多少特化したものとしては、タイの畜産とか水産の関係の学生を連れてきて、日本の牧場とか畜産大学に、三週間からひと月の研修をさせるものがある、非常に感謝されています。伊藤 それはいまおっしゃったイースト・ウエスト・セミナーの事業なんですか。

澁澤 その名前でやりましたが、相馬さんは「オフ・キャンパス・アクティビティ (Off Campus Activity・OCA)」という違う名前を使っていましたね。

伊藤 違う名前を使っていたというのは、要するに違う事業なんですか。

澁澤 ええ、違う事業ですね。イースト・ウエスト・セミナーと

いう私がやっているほうは、どちらかというと似非アカデミックなことをやるんですね。

伊藤 「似非」は余計じゃないですか。

澁澤 日タイ関係はどうだとか、東南アジアはどうだとか、中国はどうしたとか、ベトナムはどうだとかいう話をしたがるグループです。片方はもつと学生と草の根のつき合いをしようということですから、オフ・キャンパス・アクティビティという名前を使っているんですね。

伊藤 セミナーの仕事としては、タイから東南アジア全体に広がっていくということになりますか。

澁澤 最初がタイとニカ国というが、「Asian in a World Community」ということでやったんですが、二回目はASEANというものがだんだん有名になってきたときにやりました。あれは一九六七年にできたんですが、あまり誰も知らず、有名ではないものでした。しかしベトナム戦争がややくなってきたということもあって、世界がASEANに注目するようになってきたんですね。そこでASEANとは何だろう、ということになった。

だいたいその頃の世界の感覚は、ああいう弱い国が集まっても何もならない。力のない国がやっても駄目だという感覚だったわけです。ところが、どうもなかなかよくやっているようだということ、ASEANの研究を、イースト・ウエスト・セミナーの第二回のセミナーにしたわけです。それをチュラロンコン大学でやりました。チュラロンコン大学に大きな立派な会議室がありまして、それを借りてやりました。

それがとてもタイミングがよかったです。一九七五(昭和五〇)年、ASEANの最初の首脳会談のある直前ぐらいだったんですね。それだから、突然みんな興味を持ちだしたわけです。われわれはその前から始めていたので、その会議には外務省も何百万円かくれました。珍しいことですね。それから西山「健彦」と

いうアジア局の「地域」政策課長がいらして、三百万か、もう少しくれましたか。忘れしました。それからロシア人が来ました。当時はロシア大使館でおつかない感じでした。

伊藤 ソ連大使館ですね。

澁澤 ソ連大使館。いい男たちでした。それからアメリカ大使館も来ました。一躍有名になったんですね。外務省もASEANのことがよくわからないし、東南アジア政策をつくるにはASEANを無視してはやれない。しかしそのASEANのことがよくわからない。そういうことは、われわれのような柔軟なる民間のグループのところに行ったほうがわかるだろうと思った、わりと柔軟な官僚がいたんですね。それで来たんですね。

そのセミナーがともよくて、その時の英語の記録は全部テキサス大学で出版しました。それを日本語で出したのが、『日本を見つめる東南アジア』〔副題「新しい道をさぐるアセアン」(一九七七)〕という本で、やはりサイマルで出しました。

伊藤 先生はよくサイマルからいろいろお出しになっていますが

澁澤 ほかが出してくれないから。

伊藤 サイマルとは何かご縁があるんですか。

澁澤 いや、別にありません。

木全 最初は何のご縁でしたか。

澁澤 『東南アジアの日本批判』だと思えますね。田村「勝夫」さんが妙に気に入ってくれまして(木全 変人でね)、すごい変わった方ですね。「あなたがつくるものは何でも出すよ」という調子になったものだから、こっちは甘えて、あとでインドネシアの本も出したし、いろいろ出しました。その第二回目のセミナーが一番よかったですか、テキサスで出した本を、いろいろな国の外務省とかタイの政府が買ってくれました。といつても、安いですけれどね。その時はタイだけではなくて、インドネシ

アも来ましたし、五カ国「他にシンガポール・フィリピン・マレーシア」全部来ました。

ASEANが何故いままであまり有名でなかったか、これからどうすべきか、首脳会談をやるについては何をすべきか、というようなことを議論したんですね。特にそれは、東西冷戦の中で小国はどうすべきか、という話ですね。リ・クアンユーが言っている「ゾウが喧嘩をすると、周りの草はみんな荒らされる。それは困るから、小さい国といえども、大国の影響を排除して、自前で発展しなければいけない」という話なんですね。

それはとても時宜に適していた。日本もその頃、ちょっとそういう感じの国だったんですね。その頃といつても、いまもそうだけれど。だから、ASEANと日本は仲がいいわけです。というようなことがわかり始めたわけです。

それで相馬さんはタイに住み着くことになった。といつても、しょっちゅう往つたり来たりしています。学校で教えたり、学生交流をやつて、最後にはタイのお姫様に学習院大学の名誉博士号をあげたりしました。とても人気のあるお姫様がいます。皇太子の妹さんかお姉さんで「↓妹」、とてもいい人です。シリントンでしたか。それに去年か一昨年「↓二〇〇一年に」、あげたんです。タイとはとても深い関係になりました。

それから私は、相馬さんがタイ語をやるのなら僕はインドネシア語をやる、と思ったんです。タイ語って難しいんです、トーンが多くて。相馬さんも「いくらやってもわからない」と言っているんだけど、なかなかうまくなくて、酒なんか飲みに行くと、女の子とタイ語でべらべらやったりするようになって、ちょっと羨ましかったです。その言葉は僕にはとてもできない。

インドネシア語というのはとてもやさしい言葉なんです。入るにはやさしい。マレー語ですし、アルファベットなんです。昔はアラビア文字でやっていたらしいんですが、いまは「ローマ

字の「アルファベットでやっていますし、文法も比較的簡単です。トーンも、「アア」「尻あがり」とか「イイ」「尻さがり」というのがあまりなくて、日本人でもしゃべれるんですね。

伊藤 「アア」とか「イイ」とかがないと、やりにくいんじゃないですか。

濹澤 「アア」「尻あがり」と「アア」「平板」というのは、瞬時には「発音」できないじゃないですか。韓国語だってそうでしょう、十ぐらいある。ベトナム語が一番難しいそうですね。タイ語もそうとう難しい。

伊藤 つまり母音にすると、全部「a」なら「a」になるものが、いろいろな記号をつけて全然違ってくるわけですね。

濹澤 意味が違うわけですね。日本語でも「箸 (hasi)」と「橋 (hasi)」というようなものがありますね。

伊藤 でも関東と関西では反対になりますからね。

濹澤 そう、タイでもそうかもしれません。それでインドネシア語をやることにしたんです。そして外務省が「インドネシア・コロキア」というのをやっただんです。ASEANのことで僕が外務省のお手伝いをした格好になったからでしょうか、僕を呼んでくれたわけです。旅費も出してくれたかどうかは忘れましたが、ジョクジャカルタでやっただんですね。牛場「信彦」大使が議長でした。あの頃は牛場さん、大来「佐武郎」さん、佐伯喜一という三大巨頭がいて、それがみんないるわけです。そこにずらりと学者がいて、私が末席にいるわけです。

そのときはまだインドネシアも反日のところがありました。インドネシア人というのは気の強い国民性があります。タイはともやわらかいんですが、インドネシアは喧嘩腰になるところがあって、なかなか大変でした。それをやっているときに、この連中と英語でしか話ができないというのはとてもかなわん、と思ったわけです。

伊藤 しかも、英語ができる人としか話せませんね。

濹澤 それに、向こうもそううまくわけではないし、こっちもそううまくわけではない。だから片言同士でやりあって、それでわかり合えるわけがないではないか、という気がしました。

伊藤 インドネシア人の英語と日本人の英語とでやるわけですかね。もつとも、先生の英語は（木全 日本一です）、クイーンズ・イングリッシュかもしれませんし。

濹澤 そんなことはない。英語がうまくなったのは、それよりずっとあと、ロンドンで勉強したときです。だけどそのときは、そういうことで、これじゃあ駄目だなと思いました。

■文化支援とは

—日本とアメリカを比較して

濹澤 それから、アメリカ人の文化支援は大変なものなんですね。

伊藤 インドネシアに対して、ですか。

濹澤 それもそうですし、タイに対してもそうです。ロックフェラー財団が、ただお金を出すというものではなくて、十八年間かけて一つのプロジェクトをやるんです。最初の三年は、まずアメリカの学者を育てるんですね。それでタイ語を覚えさせる。向こうからも連れてきて、PhDの予備をつくるわけですね。それをやりながら、図書館を充実させたりしているわけです。五年目ぐらいから十五年目ぐらいが一番大事で、そのあいだに三十人か四十人ぐらいのPhDをつくるんじゃないですか。

伊藤 タイなら、タイ人ですか。

濹澤 ロックフェラー財団の場合は、タイとインドネシアとフィリピンが主眼だったんですね。分野としては農業と医療と経済ということですね。私は農業や医療はよくわからないけれど、経済学は結構つき合っていました。タイの場合は、経済はタマサート大学で、農業はカセサート大学、医学はマヒドン大学、その三つを

重点的に十八年間やるわけです。本当に何十人というPhDをつくるんです。それが十年目から十二、三年目になると「タイに」帰ってきて、先生になる。それでアメリカ人はだんだん退いてゆくんですね。

伊藤　ということは、現地ですでに教えて、アメリカに連れて行ってPhDをとらせるわけですか。

澁澤　そうです。そしてそれが帰ってきてプログラムを引き継ぐという形になるわけです。私はタイのロックフェラー財団を訪ねて、ラリー・スタイヘルという人がやっていました。すっかり感動して、すごいものだと思っただけですね。あの頃はベトナム戦争の最中で、東南アジアとしては必ずしもアメリカに好意を持っていたわけではないけれど、東南アジアのインテリは、大部分がアメリカに足を向けて寝られないという人たちなんです。だいたい、考え方がアメリカに十年もいてPhDをとっているんですから、日本人よりよっぽどアメリカのことをよく知っている。これはとても駄目だ、アジアは完全にアメリカに取られる—まあ取られるということはないけれど、日本も何か、と思っただけで、英語学校の収入ぐらいでは、とてもじゃないけれど、何もできないですね。

　　けど少しでも何かやらなくてはいけないということで、ロックフェラーがつくった経済学部で毎年二人分の奨学金を払うとか。アメリカに連れて行ってPhDを取らせるようなお金はあります。現地でやったわけですね。

　　インドネシアでもなるべく貧乏なところを選んで、金がかからないところを選びました。北スマトラのメダンというところで「北スマトラ・日本友好協会」をこしらえて、毎年十人ぐらいの高校生にお金をあげるわけです。それで北スマトラ大学に入る。ずっと成績がよければ、卒業までみてやる、とか何とかいうことです。

　　小さいお金で、ロックフェラーと比べたらとてもじゃないけれど僅かなんですが、それをやっている頃から日本もずいぶんやるようになったんですね。京都大学の霊長類研究所は、たまたまインドネシアはオランウータンがいるところだということがあって、一つの大学の学部を丸抱えにして、猿の学者を日本に連れてきた。猿に関しては、猿の標本をつくるのに、皮をなめすとかいろいろなことが必要なんです。日本にはそれがいるので、それを教えるとか、非常に幅が広いことをしていました。京都大学の学者さん—このあいだ亡くなりましたが—は、トヨタから一台車をもらって、本当の山の中まで四輪駆動で入って、蚊がブンブンいる中で寝泊まりするんですね。僕が小さなかゆみ止めのようなものを出して、「あげましょうか」といったら、「そんなの問題にならない」と言われました（笑）。こっちは泊まるわけではなくて、夜になったらホテルに帰るので。

伊藤　しかしマリアなんか怖いんじゃないかな。

澁澤　怖いでしょうね。しかし京都大学だけではなくて、植物学は金沢大学とか、広島大学とか、そういうシンジケートをつくってやるんですね。だから日本も捨てたものではないと思いました。

伊藤　結局文部省がそれにお金を出していたんですね。

澁澤　出していました。

伊藤　外務省はあまりやらないんですね。

澁澤　私はあまり、お金がどこから出て来たか知らないですね。京都大学は東南アジア研究センターというのがあって、ジャカルタにもオフィスがありましたし、バンコックにもありました。大使館というほどでもないけれど、なかなか立派な土地をもってやっています。

伊藤　それで澁澤さんとしてはだんだんインドネシアにのめり込むわけですか。

澁澤　インドネシアにのめり込んだというか、東南アジアという

ところはとても大切だと思い始めたわけです。東西冷戦の中で、MRAのときからそういうことを習っていますから、どういうふうに世界を取るか。そういうことを教えられていますから(笑い)。

そういう絵の中で東南アジアはどういう意味があるか、ということとを当然考えるじゃないですか。東南アジアといってもたくさんあって、タイのような国もあるし、インドネシアは全然違った、ずっと左翼的な国でしたね。スカルノの影響もありました。

そんなことで、一つ一つ違うんですが、全体としてどちらにもつかない、左でも右でもなくて、自分たちで独自に行く。それが弱い国であっても守る。そうしなければ何もできない。いまはソ連とアメリカは喧嘩しているけれど、ある日仲良くなるかもしれない。リ・クアンユーの説では「ゾウが愛を囁くと、やっぱり草は荒らされる」というんですね。実際、ベトナム戦争が終わったからそうなったんですから。それを守る、そういう世界のフォースを排除して、自分のところで経済成長していくのは並大抵のことではないですね。それは一国ではとてもできない、五カ国一緒にやる、ということであつたんですね。

だから僕はとてもASEANは面白いと思う。それを日本の政府が認めるわけです。それで「福田ドクトリン」ということで福田「趙夫」さんが行かれて、「ASEANと日本は心と心の関係だ」とか変なことを言つて、それまでのアジア政策の一視同仁とか悪平等みたいなことを言つていたところから、ASEANは別だということに変わったんですね。それから援助も猛烈にするようになった。

そうなるインドネシアの外務省の会議にしても、私が自分でやるような小さな集まりにしても、例えばアサハン・アルミニウムがありますね。スマトラで大きな発電所を拵えたわけです。そういう大型援助がどんどんできてくるから、それはどういう意味があるんだろうということを考える。それから天然ガス

(Liquefied Natural Gas)を見に行きました。あの辺を僕はずっと歩いています。

■日米欧委員会に参加する

伊藤 それは八〇年(一九八〇)にアメリカに行かれる前ですか。澁澤 ええ、七〇年代です。そんなことをやっていたので、外務省というか、私の従兄弟がやっただんだと思いますが、イギリスのチャタムハウス[Chatham House]に紹介してくれたんです。チャタムハウスというのは王立国際問題研究所というんですが。

伊藤 外交評議会ですね。

澁澤 それはアメリカのThe Council on Foreign Relationsです。チャタムハウスはThe Royal Institute of International Affairs、トインビーがこしらえたシンクタンクです。そこで日本についてのプロジェクトをやるということになりました。「Evolving Role of Japan in an Asia-Pacific region」という名前のプロジェクトでした。つまり日本のロール「役割」が戦後どういうふうに変遷してきたかということを書くわけです。それで私をキャップにして、何人かでやろうということをやった。私というか、日本人をキャップにしてやるというプロジェクトを立てたわけです。そこで日本人を誰か寄せ、ということになって、国際交流基金が金を出して、誰かを送ることになった。その誰かに私になった。

伊藤 それは何年でございますか。

澁澤 八一年(一九八一)に向こうに行つたと思います。八一年から四年ぐらいいました。

伊藤 さつき八〇年にインドネシア語の勉強のためにアメリカに行かれたとおっしゃいませんか。

澁澤 それは三ヶ月か四ヶ月、コーネル大学に行きました。コーネルはとてもアジアに強いんです。

伊藤 それはイギリスに行かれる前ですか。

澁澤 前です。その時はイギリスに行くなんて夢にも思っていないでしたから。ロンドンにトライラテラルか何かがあつて、その帰りにアメリカに寄つて、三ヶ月いました。

伊藤 何の会議ですか。

澁澤 日米欧委員会といつたかしら。

伊藤 ああ、渡辺さんがやつていたものですか。

澁澤 渡辺武さんです。あれ「日米欧委員会」も渡辺武さんが私のことをいろいろおっしゃつてくださったらしくて、入れていただいたんですけれどね。あれはとて面白い会で、えらい人がいっぱい出てくるんですね。キッシンジャーだとか、ブレジンスキーだとか、シユミット、シラクなどみんな出てくるわけですね。

伊藤 渡辺武さんは日本側の代表じゃないですか。

澁澤 あれは委員長ですね。アメリカはロックフェラーでしょう。フランスはベルトワンの人でした。あれは文化的観光事業です。ああいう連中を見るだけでも面白いじゃないですか。しゃべるのは半分ぐらしかわからないかもしれないけれど、面白かった。いまいろいろ言っているウォルフowitzなんかが若い頃で、まだ大使にもならないころで来ていましたよ。ジェラルド・カーティスとかね。そういう人たちとつき合うだけでも面白い。メシはおいしいし、場所は一流ホテルでやるでしょう。それでイギリスに行く女王様に会うんですからね。もちろんサッチャーには会う。フランスでやるときはシラクが出て来たり、ジスカールデスタンが出て来たりしますから、それは入れてもらうだけでも面白いですよ。

伊藤 それは発足の頃から、というわけではないんですか。

澁澤 私が最初に行ったのは一九七四年か七五年ですから、「発足してから」二、三年後ですね。

伊藤 その頃は日本側はどなたですか。

澁澤 牛場さん、大来さん、それで渡辺さんですね。財界人では盛田「昭夫」さんとか、そんな人がさかんにやつていたんじゃないかな。盛田さんは一時議長もやつていました。

伊藤 そういうときには、各国から何人ぐらい来るものですか。

澁澤 全部で二百人以上の会になるんです。ホテルオークラなんかで。

伊藤 それで、日・米・欧が、一・一・一ぐらいの割合になるんですか。

澁澤 欧が一番多いんじゃないでしょうか、国が多いから。日は一つしかないから小さいんですが、あれのそもそのインテンション「目的」が、日本を世界との対話に引っ張り出そうということですから、日本人はわりと大事にされた。大事にされても、みんなあまりしゃべらないで、しゃべる人は本当に限られるんですね。だから私みたいな全くの末席でも、「何か君、言ってくれよ」と言われるから、しょうがないからつまらんことを考えてしゃべるわけですね。そうすると名前も知られるし、ロックフェラーさんと仲良くなつたりして、面白いんです。仲良くというほどでもないけれど、「手をあげて」やあ、やあ」という仲になるわけです。

武田 何回か続けて出られたんですか。

澁澤 私は女学館に来るまで、毎年のように行っていました。

伊藤 あれは場所は持ち回りなんでしょう。

澁澤 そうです。最近では三極だけではなくて、韓国でやつたり、シンガポールでやつたり、中国でやつたりもします。私は中国でやつたときに行つたんです。八一年（一九八二）でしたか。そのときは宮澤「喜一」さんが鄧小平さんに呼ばれたわけです。私もまた末席を汚して行つたわけです。あのすごい人に、生まれて初めて、一回か二回会いました。面白かった。そういう人に会うというのはドラマティックじゃないですか（笑い）。

伊藤 いいですね。

澁澤 まあ、つまらんことですけどね。会つたってなんにもな

らないんだけど。

武田 何かの役に立つんじゃないですか。

濹澤 役には立たないけれど、思い出になりますね。

伊藤 長期的にはいろいろな可能性がありますがね。

濹澤 それはちょうど中国がオープンしようとしている最中ですから、面白かったですね。そのときはどういわけだか、小さいグループで、先遣隊で行ったんですね。そのあとでロックフェリーなんかも来て、かなり立派な会を北京でやりましたが、最初は日本人が十五、六人。それで宮澤さんがいらして、どういうわけか私は宮澤さんと同じ車に乗ることになったわけですね。「紅旗」という真っ黒けの車ですね。それで、十三陵から万里の長城まで、間が長いんです。もともとの人は僕の高等学校の先輩だから、話題がないわけではないけれど、感心したのは、あの人は中国のことを何でも知っているんですね。漢文の素養はすごい。武蔵高校はすごい学校だと思ったりして（笑い）。そういうことがありました。

伊藤 日米欧委員会は、渡辺さんが日本側は取り仕切っているわけですか。

濹澤 そうでした。当時は十何年もやっていらしたんじゃないですか。それで事務局長が山本正さんという方で、大変なきらきらの能力がある方です。あの人がいなければ、あんなことは日本ではできないですね。その山本さんは、MRAハウスの土地建物を借りてやっていたんです。こっちは家主なんです（笑い）。

木全 いまは？

濹澤 いまもそうです。つまり一九五〇年ぐらいにMRAハウスができたわけでしょう。そのときに土地建物があったわけですね。金に困って少し売ったりもしたけれど、それでも七百〜八百坪あったわけです。そこにいたんだけど、なんとかそれを人に貸したい。フォードに貸すという話もあったんだけど、うまく行か

ないでいるうちに、山本さんが国際交流センターの事業の事務所を探していると聞きました。いまほど大きくなって、まだ小さかったんですが、お貸ししたんです。以来ずっと貸しっぱなしで、いまでもやっています。そのおかげで、こっちは家主だから（伊藤 家賃が入る）、家賃も入りますが、山本さんがやるそういうきらきらした会議に呼んでもらえるわけです。シンデレラがダンスパーティーに行くようなものです。

伊藤 そうすると三極委員会は渡辺さんの関係と山本さんの関係と、両方ですか。

濹澤 渡辺さんは、私の父親が大臣をしていたときに、大蔵省の終戦連絡部長何かをしておられて、その頃から知っていました。

ただ、非常に真面目な方で、一杯飲むという方ではないんです。伊藤 大変堅い方です。

濹澤 奥様のこともよく知っていました。堅い方ですね。でも、どういうわけだかわいがかつてくれました。「トライラテラルにも「濹澤を」入れるよ」と山本さんにおっしゃったんでしょう。それで私が入った。コミッシヨナーという名前が入った。日本に五十人もいるうちの一人ですが、それになったわけですね。それから尚友会館。昔の貴族院の人ですね。

伊藤 そうです、昔の子爵と伯爵です。

濹澤 そういふのがあると、渡辺さんがまた「濹澤を入れる」とおっしゃるんですね。それで入れられて、一回演説か何かさせられました。

伊藤 あそこでお話をされたんですか。

濹澤 はい、一度。以来、行ったことはないですけど。

伊藤 いま、渡辺さんのこういうお話を冊子にしようと思って、仕事をしているところなんです。武さんはもうほとんど駄目ですが、ご生存中に出そうと思っています。

濹澤 九十いくつですね。

伊藤 ええ。この前、渡辺昭さんのほうが亡くなられましたね。もうじき百歳というぐらいのお感じでしたからね。

渡辺さんからも三極委員会の話はずいぶん伺いました。あの方はその前にアジア開発銀行をおやりだったんですね。

澁澤 そうです。総裁です。

伊藤 これもさつきおっしゃったようなアジア外交の一環だと思っただけですが、渡辺さんがさかんにおっしゃっていたのは、「弱い国だけが集まって経済開発をやるうといつても、お金のない国が集まって銀行をつくっても、お金が湧いてくるわけではない。やはりアメリカを巻き込まなければいかんので、アメリカから提案させる話をつくった」という話をされていました。

澁澤 アジア開発銀行というのは池田「勇人」さんがおつくりになったんですね。私のロンドンのプロジェクト、「Evolving role of Japan」の目玉の一つは、その頃のことなんです。それまでは日本は何もしない、安保が騒動だった。しかし池田さんで少し高度成長した。池田さんはインドネシアとマレーシアの和解を画策したりするじゃないですか。うまく行きませんでしたけれど、「アジアに」出てくる一環が、アジア開発閣僚会議とアジア開発銀行になったんですね。それで渡辺さんが選ばれたんですね。伊藤 澁澤さんがそちらのほうのお仕事をされる時期は、アジアのNIEESに続いて、ASEANが少しずつ成長し始める時期ですね。

澁澤 そうですね。一九六七年にASEANができて、七五年（一九七五）に初めて首脳会議が開かれる。そのあいだ八年間、何もしないわけではないけれど、あまりできなかったんですね。それは世界が二つに分かれて、身動きがつかない状態だったからじゃないですかね。

伊藤 そうでしょうね。

■インドネシア語の本を翻訳して

伊藤 それでさつきおっしゃいました、アメリカのコーネル大学に三ヶ月行かれたということですが、その時は多少、日本でインドネシア語をお勉強なさってから行かれたわけですか。

澁澤 それが大変なんです。私は無茶苦茶な人間で、五十歳の時にインドネシア語を始めたわけです。

木全 そうしたら、最近じゃない。

伊藤 そんなわけではないでしょう（笑い）。

澁澤 ついこのあいだ、数年前ですよ（笑い）。

伊藤 それはちょっと、おべんちゃんもちよつと行き過ぎですよ（笑い）。

澁澤 それでインドネシア大使館に日本人とあいのこの可愛いお嬢さんがいたんです。その人が教えてくれることになったんです。

伊藤 それは小田原の時代ですか。

澁澤 もちろん小田原もやっていましたし、外務省のインドネシアと日本のコロキアにも私はレギュラーメンバーでときどき行っていました。それで大使館の人に会うから、「誰かいない？」と言ったら、紹介してくれたわけです。それが私の事務所に来て教えてくれたりしました。でも女の人から習うと、私はあんまり物を覚ええない（笑い）。男から習っても覚ええないんだけど、女の人からだど特に覚ええない。

伊藤 女の人の顔ばかり見ているから（笑い）。

澁澤 にもかかわらず、それを始めてから二、三年後にインドネシアに行ったんです。そこに友達がだいたいできていましたから、プリスマという雑誌があるんですが、プリスマの編集長でイズミット・ハダットという素敵な男がいるんです。その人と大変仲良くなった。インドネシア人というのは知的に高い人が多いんです。

それも、あそこはアラビアもあるし、オランダもあるし、アメリカもあるしというわけで、非常に高級な人が多いんですが、プリスマというのはそういう人たちのための雑誌なんですわね。

伊藤 インテリ向けの雑誌なんですか。

澁澤 ええ。それでインドネシア語ですからほとんど読めないんですが、それが別冊を出して、インドネシアの独立に貢献した人の列伝をつくったわけです。『歴史に関わった人々』とかいう名前でした。それが出たということを知って、私はこれは非常に面白いと思ったんです。というのは、インドネシアはスカルノで大騒ぎして、とても荒れた国でしたが、それがようやく落ち着き始めて、自分の原点を探ろうとしている、と思いました。プリスマの人たちは非常にバランスのとれた人が多いから、僕は読んだわけではないけれど、第一章のスカルの列伝もバランスのとれたことを言っているだろう。ステイルマンという初代の軍の長官、それからアグス・サリムという初代外務大臣とか、ずらつと七、八人並んでいるんです。これは面白いだろう。「だろう」ですよ、わからないんだから。それで「日本語に翻訳していいか」と言っただけです。そうしたら「OK」と言うわけです。それでサイマルに持ち込んだわけです。

伊藤 またサイマルですか。

澁澤 だって、そんな本を訳して出してくれるところはないですもの。それで、「これはどうですか、僕が訳すから」と言っただけです。ちよつと訳せるような気がしたんですね。それで両方とも契約しちゃったんです。ところが訳せないわけです（笑）。何を言っているんだかわからない。

伊藤 それはお嬢さんから習ってからの話ですか。

澁澤 もちろん習ってからです。

木全 だから五十何歳ですね。

澁澤 それで困り切って、東南アジア研究センターの矢野暢とい

う素晴らしい人がいたんです。その後素晴らしくなくなっちゃけれど、その時は素晴らしかった。それで、矢野さんに相談したら、土屋健治という人がいると紹介してくれました。これはとてもいい人で、松本深志高校の出身で、東大でインドネシアを勉強したすごい人なんです。感じのいい人で、インドネシアに長く留学していてインドネシア語はペラペラですし、インドネシア人の「心」がわかる人なんです。あまりいい人です、そういう人は。日本にはビジネスマンやお役人はいっぱいいるけれど、インドネシア人と本当につきあえるという人はそういう人です。その人はできるんですね。彼の博士論文は「インドネシア・ナシヨナリズム」というもので、これは世界的に評価が高いものです。彼はインドネシアの立派な家に下宿して、二年間本当に勉強したんでしょね。文字で勉強するだけではなくて、生活を通してインドネシア人の心を知ったんですね。

「私は」その人と意気投合してーというよりも、こっちは習うばかりで別に投合というわけでもないけれど、彼はやりましょう、と言いつ出したんです。それで僕がまず訳すわけです。それを彼のところに送ると、めちゃくちゃに直されて返ってくるわけです。それで八章か九章のうち二章は、時間がなくてとうとうできなくて、別のインドネシアの学者に頼みましたが、あとの七章は私と土屋さんが一緒に訳した、ということになっています。実際は土屋さんがみんなやったもので、私は周りでワイワイ言っただけです。でも長野県の家に行つて何日も何日も徹夜したりして、大騒ぎしてやったんです。それは面白かった。

伊藤 その方は長野なんですか。

澁澤 土屋さんは京都大学の先生で、私の山小屋が長野にあります。僕は東京にいますとあまり仕事ができないんです。どこに行つてもあまりできないんだけど、長野に行くと、いくらか物を書いたりする気になるわけですね。そこでやって、ずいぶん勉強

しましたね。ですから、インドネシアのことがずいぶんわかったような気持ちになりましたね。

日本人は誰も知らないストーリーだから、巻末にインドネシアの歴史の小事典をつくりました。それはもちろん、土屋さんが全部おつくりになった。でも僕はそれで、少しだけれど本当にインドネシアのことがわかりましたね。『『真実のインドネシア・建国の指導者たち』タウフィック・アブドゥラ編、澁澤雅英・土屋健治訳（サイマル出版会、一九七九）』

佐藤 それはおいくつときだったんですか。

木全 五十歳でインドネシア語を始めたんですから、五十四、五歳ですね。

澁澤 そうでしょうね。五十五歳かそこらでロンドンに行ったと思うので、その前ですね。

■コーネル大学でインドネシア語を学ぶ

伊藤 それでコーネル大学に行こうと思ったんですか。

澁澤 それをせっかく翻訳したけれど、本当にインドネシア語の真髓がわからないということがわかる。やればやるほど「わからないことが」わかるわけじゃないですか。それで、コーネルのインドネシア語は素晴らしいと聞いたから、じゃあ行こうかと思って、行ったんです。それもこれも、みんな英語学校の儲けのおかげですけれどね。それで小さなシェラトンホテルのモーテルに泊まって、車を借りて、毎日学校に通ったんです。

武田 インドネシアではなくて、アメリカで勉強したんですね。

澁澤 本当はインドネシアに行くべきなんですけど、私は歳も多少とついていたし、インドネシアの村に住み込んでやるという元気もちょっとなかったということですかね。それに、語学というのは不思議なもので、その国にいるからうまくなるというもので

はなくて、コーネルのような教え方のほうがいいとも思える。コーネルではネイティブ・スピーカーの先生が朝から晩までインドネシア語をしゃべっているわけです。だけど一日一時間ぐらいはアメリカ人の先生が出て来て、こちらが疑問を持つことを教えてくれるわけです。文法的なこととか文化的なことですね。それがとても役に立つんですね。そういう人がいないとわからないまま過ぎてしまうことがあるんですね。それを三ヶ月やって、それはとても役に立ったと自負しているんですが、実はそれからインドネシア語はみんな忘れちゃいましたけれどね。

コーネルにはウォルフさんという大変な言語学者がいました。二十何ヶ国語をしゃべるといって、そのうち十五、六がインドネシアの言葉なんです。ミナハサ語とか、インドネシアにはたくさん言葉がありますからね。それが何でもよくわかる人なんです。彼の書いた本はほとんど芸術に近い。インドネシア人がナマでしゃべっているのをテープに入れて、それを本にして出しているんですね。

伊藤 いまおっしゃったインドネシア語というのはインドネシアの標準語なんですか。

澁澤 ええ、それを学びました。それしか学ばない。ジャワ語なんかとても難しくして、できないですね。

伊藤 全然違うんですか。

澁澤 全然違う、まったく違う。

伊藤 そうすると、インドネシア語と言われているものの母体になったのは何なんですか。

澁澤 マレー語です。あれはリンガ・フランカ [lingua franca] として、人工的に入れられた言葉なんです。インドネシアが独立をするということを考えたのは一九二八年なんですけど、そのときに青年グループが集まって、「インドネシア」という名前をつける。インドネシアはいまの蘭領インドの全部だとする。それから

旗は、赤と白の旗にする。言葉はインドネシア語にする。「そういうことを決めたわけです」。インドネシア語というのはマレー語なんです、それが一番浸透していたと思うんです。商人が使う言葉でしたから、海岸地方は全部そうでしたし、中「内陸部」でもそうとう使われていたでしょうね。

伊藤 ジャワはまた違うんですか。

濫澤 ジャワ語は全然違うんですね。

伊藤 ジャワはインドネシアの中心ではありませんか。

濫澤 そうですね。ですから本当はジャワ人がジャワ語を使うといたら、ジャワの国になっていたんです。ほかの国は別になつてしまう。

伊藤 そういう意味ですね。

濫澤 そうだと私は思いますけれどね。その意味で、アメリカみたいなところがあるんです。つくられた国なんです。それにアイデンティティを合わせていくということで、非常に荒っぽい部分もあるし、面白い部分もある。そして非常に重層的な文化なんです。ジャワがあるし、アラビアが入っているし。

伊藤 地域性も非常に大きいんですね。

濫澤 大国ですからね。

伊藤 人口が多いですね。

濫澤 だからケネディ大統領も——。ソ連もアメリカもインドネシアには手を出せなかつたんですからね。そして中国の共産党は完全に追い出されたんですね。あの頃あんなことができた国はないですよ。

伊藤 蘭領東インドになる前は、ああいう区画はないわけですね。

濫澤 ないんです。ジャワがあつたり、それもマジヤパヒト「十四世紀頃の王朝」とか、名前がいろいろあつて、違うんですね。

伊藤 逆にオランダ領になったことによって、いまの領域ができるわけですね。

濫澤 そうですね。オランダ領になったことで世界の中にインドネシアという地図が生まれたんですね。

伊藤 当時は「インドネシア」という言葉はありませんでしたね。「オランダ領東インド」ですから。われわれが子供の頃は「蘭印」と言っていましたね。

濫澤 そうです。蘭印です。日本の兵隊が行って、いろいろやつたんですね。

伊藤 それでコーネルからロンドンに行つたんですね。

濫澤 つまりトライラテラル・コミッションの会合が三月にロンドンであつたので、それに行つて、帰りにコーネルに行つて、そこに三ヶ月いて勉強したんです。そこでウォルフ先生と非常に仲良くなつて、その翌年、インドネシアに三ヶ月住み込みました。住み込んだといっても、ちっぽけなホテルに住んでいましたけれどね。一緒に行つた学生はみんな本当の民宿、ホームステイをしていました。それは国務省が主催したんですが、コーネルが主になつてやっているシンジケートがありまして、全米のインドネシア・スタディーズをやる学生たち、PhDをとる学生たちが集まつて、毎年行くというプログラムなんです。そういうことをやるところがアメリカはえらいんですね。本当にすごいんです。日本もこのごろずいぶんやるようになったけれど、まだまだ日本文化は——。政策研究大学院大学もあるけれど。

伊藤 あれも今のところは全然駄目ですね。

濫澤 だから「アメリカには」インドネシアのことを本当にわかつているやつが何十人もいますね。日本には、土屋先生を初めとして何人かいるとわかっていますが、「アメリカには」グループとして存在している。しかもそれが全米に散らばっているわけですからね。そういう人たちが政策にインプットしていくわけでしょう。

伊藤 それでも間違ふことがあるんですからね。

澁澤 もちろん間違うこともある。それから「アメリカには」新聞記者にもそういう人がいますね。

日本の新聞記者はほかのことを勉強してきた人が急にインドネシアに行つて、事件記者みたいな顔をしてやっているわけです。僕も何人も会いましたけれどね。誰がなんと言つたとか、噂話ばかり拾つてくるわけです。インテレクチャル・ベースは非常に薄弱ですね。そういうインフォメーションで政治が行なわれる。外務省の人でも、本当に知っている人は少ない。優秀な人もいますし、インドネシア語のうまい人もいますけれどね。

伊藤 長年、という人がいませんからね。まず言葉を覚えるところまで行かないんじゃないですか。

澁澤 インドネシア語を知っている人はそうとういるようですけれどね。

伊藤 そういう人は上まで行かない人ですね。

澁澤 そういう人が多いです。僕が北スマトラ友好基金をつくるときにお世話になった領事は、とてもインドネシアをよく知った人でしたが、ノンキャリアですね。だから日本は駄目ですよ。

伊藤 システムを変えないと駄目ですね。

澁澤 駄目だと言つてもしょうがないけれどね。これだけちゃんとやっているんだから、いいんでしょうけれど（笑い）。

■MRAとインドネシアティブ・オブ・チエンジ

伊藤 それでコーネルに行かれて、戻つてきて、相変わらず小田原をやっているわけですね。

澁澤 小田原はやっていましたよ。それは飯の種でもありませんし、遊び事するのはすべてそこがお金を払ってくれましたからね。インドネシア語の勉強をしたり、インドネシアに行つたり、世界中を歩き回つて遊んでいましたから。

伊藤 最初にお会いしてお話を伺ったときに、アメリカで先生をしたというお話がございましたが。

澁澤 それはイギリスのあと、一九八五（昭和六〇）年からです。伊藤 イギリスというのは、チャタムハウスの研究員ですね。

木全 一年ですか。

澁澤 一年は国際交流基金がお金を払ってくれたんですが、それではとてもものにならないので、あとは英語の学校の金で行つたわけです。つまりうちの財団の奨学金です。それで三年ぐらいいました。

伊藤 うちの財団といっても、すでにその財団の理事だったんでしょう。

澁澤 代表理事です。いまでもそうです。

伊藤 自分で自分に奨学金を出すというのも、なかなかいいものですね。僕もそういう財団があるといいな。

澁澤 零細なものですから、会計検査院なんていうところは来ないんです。

木全 理事長、いま財団の年商はどのぐらいですか。

澁澤 商売をやっているのは、いま七〜八億円です。

木全 単なる語学学校ではないんですよ。えらい先生方に参加を呼びかけ、結構高額な授業料を出してもらい、ひと月ぐらい勉強してもらっています。

佐藤 MRAはブックマン博士が亡くなってから、あまりお金は出してくれなくなつたんですか。

澁澤 托鉢の鉢がないから。というより、お金をもらいに行けなくなつたんですね。分裂しましたしね。特に喧嘩をしたわけではないけれど、柳沢さんと相馬さんが意見が合わないようなものです。何か強い意見を持つ人とは一緒にやれない場合が多いわけです。イギリスの中でもいろいろな分派ができるし、フランス人はまた別のことを言い出す。イギリス人とフランス人が一緒に

物事をやるなんていうことはすごく簡単なことで、ブックマンのような人がいればできますが、それは大変なことです。

木全 いまのMRAの資金はどこから出ているんですか。会費ですか。相馬さんをはじめ、いろいろな人がなさっている活動を支えている資金は——。

澁澤 あれは非常に困っているんじゃないですか。私も毎年何百万円か寄付していますよ。

木全 相馬さんのほうに、ですか。

澁澤 ええ。六百万円寄付していたんだけど、バブルがはじけて、とてもそうは行かないから、三百六十万円にしてください、とか言った覚えがあります（笑い）。

伊藤 面白い数字ですね。一日二万円ですか（笑い）。

澁澤 月五十万円から、月三十万円に減らしたということですが、でもそれだけじゃないですよ。いろいろなところから寄付をもらっています。

木全 寄付でやっていらつしやるのね。

澁澤 ラウンドテーブルとかいうのをやっているでしょう。あれはMRAの分派活動の一つだと思えますけれど。

伊藤 MRAと称している部分はまだ世界にあるんですか。

澁澤 われわれが一番称しているんじゃないですかね。MRAという名前でやっていますから。ほかはみなイニシアティブ・オブ・チェンジ [Initiatives of Change] という変な名前になっている。私はすっかりそれで興味を失った。「僕はMRAですよ」と、いまでも言っているわけです。

伊藤 世界中でMRAを称している人たちはまだいるわけですか。

澁澤 みんなイニシアティブ・オブ・チェンジに変えたんじゃないですかね。組織を変えるとそういうふうになるし。

伊藤 コーにあるのはどうなったんですか。

澁澤 イニシアティブ・オブ・チェンジでやっていると思います。たぶんスイスの財団の名前がMoral Re-Armamentからその名前に変わったんでしょう。

武田 先生のお知り合いの方も、イニシアティブ・オブ・チェンジのほうに行かれたんですか。

澁澤 大部分そっちに行つたんじゃないかと思います。でも私の知り合いはみんな歳ですから、あまり活躍していないと思います。でもMRAをやっていた人はわりあいと元気な人が多いですからね。酒も飲まない、タバコも吸わないでいたから、もちのいいやつが多いから。

伊藤 ええ？ どうだろうな（笑い）。

武田 東南アジアのお仕事をされていたときには、MRAの方とは連絡をとっていらしたんですか。

澁澤 ほとんどないですね。たまにMRAの出身の人で学者になった人——もともと学者だった人もかなりいますが、アメリカの大学で教えているインドの学者とか、そういう人はよく呼んだりしました。

武田 じゃあほとんど澁澤先生のお考えで。

澁澤 ええ、もう独断ですね。独断と偏見です。

武田 それはMRAの分派みたいな形になるんでしょうか。

澁澤 なりませんでしょう。MRAから見れば、何をやっているんだ、ということなんです。こっちは自分で稼いだんだから、何をやろうと勝手だろうということです（笑い）。

■ チャタムハウスの研究成果

伊藤 それでさっきのところに戻りますが、またアメリカに行かれるわけですか。三度目。

澁澤 何度ということはありませんが、イギリスで書いた本があ

ったわけでは。

伊藤 それはチャタムハウスの成果ですね。

澁澤 はい、チャタムハウスのプロダクトです。チャタムハウスの名前で出ています。

伊藤 それに関わった人は、日本人ではどなたなんですか。

澁澤 誰もいません。私一人でやりました。一人というか、チャタムハウスと一緒にやりました。チャタムハウスがそのプロジェクトのためにスタディ・グループをつくってくれました。それがまたイギリスの感心するところで、えらい人がちゃんと入って来るんです。ロナルド・ドーアだとか、イアン・ニッシュだとか、日本学では当時は最高の人たちです。いまはもう歳ですが。

武田 いまでもそう「日本学では最高」ですね。

澁澤 アーサー・ストックウインだとか。

伊藤 スtockウインも入っていたんですか！

澁澤 彼は日産の研究所にしょっちゅう来ていましたからね。そういう人が私のスタディ・グループとして、チャタムハウスにきちんと来てくれるわけです。チャタムハウスは旅費も払わないしお車代も出さないで、安っぽいチーズと大きなフランスのワインの瓶をほこつと置いて、飲め、とかという程度です。五時頃から初めて、七時半ぐらいになったら、そのワインとチーズをちよつとやって、それからまた八時から八時半とか九時頃までやるんです。それでみんな私の原稿に文句をつけるわけです。こっちはまったく自信がありませんが、とにかく出しました。でも非常に勉強になりました。

伊藤 だけどドラフトをつくらなければならぬわけですね。

澁澤 毎回ドラフトをつくるわけです。それが一つ一つチャプターになっていくわけです。最初のうちは全体の絵が見えませんが、なんとなく思いつきみたいなのをやっているけれど、それがめっちゃくちゃにやられて、だんだんこんな絵でいくかな、とい

うことになってくるんですね。そうするとチャプターに少し形がついてきて、やや原稿らしくなりますね。しかしみんなえらい人だから、みんなそういうのはすぐわかるから、駄目だ、とか何とか言うわけです。非常に丁寧だけれど、辛辣です。

伊藤 それがまとまったんですか。

澁澤 それがまとまって本になったんです。

伊藤 なんとという本ですか。

澁澤 『Japan's Evolving Role in Asian-Pacific Region』というプロジェクトの名前がそのまま本の名前になりました。

伊藤 それはどこから出版されたんですか。

澁澤 ラトレッジ『Routledge』という本屋からです。その頃はクルームヘルム『Croom Helm』という名前の本屋でしたが、それがラトレッジに買収されて、いまはラトレッジです。それはチャタムハウスが出版するんですから、私が頼むということではないんです。

伊藤 それは著者は誰になるんですか。

澁澤 私です。

木全 その結果が大学教授の招聘のお話につながっていくわけです。それをお読みになって招聘されるわけです。

伊藤 その本が出たのは何年でございますか。

澁澤 一九八四（昭和五十九）年です。その本が出て、私は疲れたな、という程度だったんですが、なにしろ生まれて初めて英語で本を書いたんだから、どうだい、というところもあって、女房と一緒にギリシャに遊びに行つて二週間も三週間もいて、面白かったですね。

伊藤 いいですね。お金があるんだな。

澁澤 いや、それも英語学校のお金です（笑い）。

武田 「伊藤氏に」先生も学校をつくらなさいといけないんじゃないですか（笑い）。

木全 それで代表理事にならなければ(笑い)。

澁澤 それで感心したのは、英語で書いてイギリスのえらい研究所が出すと、全世界の、特にコモンウェルス「英連邦」の国はみな買うんですね。大学とか図書館とかで、ですね。だから何部刷ったのか、三千とか四千だと思えますが、それが売れるんですね。著者の名前なんか誰も知らない、変な名前のやつなんだけれど、売れちゃうんですね。売れたかどうか知らないけれど、大事なところに行くわけです。そうすると書評が出るじゃないですか。それが南アフリカから出たり、ナイジェリアから出たり、ケニアから出たり、シンガポールから出たりする。英語国からみんな書評が集まってくるんです。これにはびっくりしました。日本人が書いたものは少ないですからね。だから一つでも出れば、みんな読んでくれて、なんとか批評をしてくれるんでしょう。これは日本語で書いても何にもならないな、と思いましたね。英語の力というのか、感心しました。

伊藤 それは日本語に翻訳されたわけですか。

澁澤 また田村さんのところに行つたんです。

伊藤 サイマルですか。

澁澤 ええ。それが『日本はアジアか』〔副題・変革の航路を求めて(一九八五)〕という本です。

■ 大学教授時代

— アラスカ大学・ポートルランド州立大学

澁澤 アメリカではそんなに評判を呼ばなかったんですが、アメリカのアラスカ大学にちよつと知っていた韓国人の先生がいたんですね。その人が読んで、すごく喜んで、あいつがこんなものを書くとおぼろげな気がした、というところもあつたんだと思いますけれどね。というのは、チャタムハウスの産物ですから、いくらか学問的な顔をしているじゃないですか。内容は大したことはない

んだけれど、特にアジアのことですからね。

それでその人が、「アラスカ大学に来て教えないか」というわけです。そんな馬鹿なことできるわけないだろうと思つただけれど、しかし冷たい戦争の最中にアジアがどうしていたかという話をしてくれというので、「じゃあ行きましようか」とかいつて、めくら蛇に怖じずで行つたんです。

伊藤 それが八五年(一九八五)ですか。

澁澤 ええ。フルブライトがお金を出してくれて、女房と一緒にこの寒いアラスカに九月に行つたんです。九月からの学期ですからね。

伊藤 九月になると、アラスカはもうそうとう寒いですか。

澁澤 いま頃「九月下旬」はもう寒いですね。だんだん雪も降りそう。そういうところでアパートを借りて、初めてアメリカでセトル「定住」するわけです。自動車を手に入れて、電話を借りて、また面倒くさいじゃないですか。

そうして始めたら、案外私の講義に人が来るんだ。アラスカというところは軍人さんが多いでしょう。それから石油会社の人が多いでしょう。みんな国際的なわけです。そしてみんな、アジアに行つて何かやろうと思つている人が多いわけです。それはビジネススクールの一部の講座だつただけれど、アジアのことで、もし単位を取つてMAでも取れば、石油会社でえらくなれるし、軍人は転職できるし、というわけであるんですね。

最初は本当にきまりが悪いほどくだらない話をしていましたね。だけどだんだんコツを覚えて(笑い)、二回目はもう少しよかつた。一回目は漫談でした。最初は三ヶ月しか行かないはずだつただけれど、フルブライトがあと九ヶ月出してきて、それで一年いたんですね。それでアラスカを遊び回つたりして、いっぺん帰つたんですが、また来てくれということになって、二度目に行つたのが八九年(一九八九)です。

伊藤 あいだが空いているんですか。

濫澤 ええ、三年ぐらい空いていますね。私は小田原の経営もしなければいけないし、いろいろありますからね。行きつきり、というわけにもいかなないので、一時帰ってきて、また行った。その時は、大学で講義をするときはどうしたら大向こうに受けるか、ということを知るわけじゃないですか。特にアメリカ人が好きそういうことを言った。だから二回目はすごく評判がよくて、賞状をもらいました（笑い）。

武田 それは評価が高かったということなんですね。

濫澤 評価は初めからわりと高かったんです。まあ、珍しいんでしょうね。

木全 そしてもう一つほかの大学に行かれるんですね。

濫澤 ええ、それ「アラスカ大学での講義」をやっているときに、ポートランド州立大学の人を私が呼んだんです。というのは、僕の話ばかり聴いていてもつまらないじゃないですか。ほかの人を呼べばこちらでも楽ですからね。一回三時間とか四時間という講義ですから、全部自分でやるというのはともしんどくてしょうがない。せめて一時間半ぐらいでもほかの人にやってもらいたいということ、韓国の人とか、いろいろな人によってもらっていました。

それで、ポートランドに友人がいました。むかし私の英語学校で教えていたお嬢さんで、ワシントン大学で日本のマネージメントについてのPhDを取りつつあって、もうほとんど取るところだった。その人に来てくれといって、彼女が来たんですね。彼女もすごく評判がよかった。そうしたら「彼女は」アラスカ大学に就職しないかと、そうとう猛烈に誘われたらしいけれど「私は」、「よせ、よせ」と言ったんですね。「あんなところに行ったら、うだつが上がらないぞ。僕なら構わないけれど、あなたはよしたほうがいいよ」とかなんとか言って、裏切ったんですね。

それで彼女はポートランド・ステート・ユニバーシティに就職した。就職したら途端に、僕に来ていというわけです。そこにもう一人知っている人がいて、その二人で画策したんですね。それで九〇年（一九九〇）の春のある日、ポートランドへ女房と一緒に遊びに行ったわけです。そうしたら、大学のプロヴォスト「学務担当副総長」とかなんとかいうのが集まって、朝飯会か何かをやって、僕を試すわけです。

伊藤 お見合いですね（笑い）。

濫澤 お見合いです。それで合格したんです。それで雇ってくれた。このときは国際交流基金がお金を出してくれたと思います。向こうが頼むわけで、私が頼むわけではないんです。その時はもうだいぶ慣れていたので、まあいいやということでやったんですね。

伊藤 これも一年間ですか。

濫澤 ええ、九一年（一九九一）、九二年といて、それから九三年に行ったのかな。ポートランドはセメスター制というのが、九月から三月でいっぺん終わって、それから四月―六月という短いのがあって、ちょっと面倒くさいんです。これはやりますとか、やらないとかいって、僕もトライテラルに遊びに行ったり、ベトナムに行ったり、いろいろなところと呼ばれるわけです。外交評議会のテキサス支部に来てください、とかね。テキサスは金持ちだから、ちゃんと飛行機代も払ってくれるし、いいホテルにも泊めてくれるので、行くわけです。

そんなことをして、帰ってきたらまた行って、九三年（一九九三）に、しかし疲れたね、ということになったわけです。もうマンネリになったし、学問を続けているわけではなくて、ロンドンでやったことを切り売りしているわけだから、十年も経てばタネ切れになる。世の中も変わるしね。それについていくのは大変ですよ。

伊藤 そうですね。あとをフォローするのは大変ですね。

澁澤 やっぱ毎日、新聞を読んだり、雑誌を読んだりしてないといけないでしょう。時事問題をやってるわけですからね。英語でそういうのを読みつばなしに読んでいるのは疲れるんですよ。それで、「もう疲れたね」と女房に言った。女房ももう六十七歳ぐらいでしたから、「もうやめようや」と言っつて、荷物をまとめて帰ってきたんです。そうしたらここ「東京女学館」に来ることになった。

伊藤 ああ、そうですか。あまり先に進まないでください(笑い)。ポートランド州立大学ではどういところで教えていたんですか。

澁澤 オレゴン州です。

伊藤 オレゴン州立大学なんですね。

澁澤 オレゴン州のポートランド州立大学です。公立大学です。いわゆるアーバン・ユニバーシティでマンモス学校ですね。いろいろなクラスがある。

伊藤 先ほどおっしゃったビジネススクールの学生とはまた違うわけですか。

澁澤 そこもビジネススクールでした。ビジネススクールの大学院、グラデュエイト・コースで教えました。アンダー・グラデュエイトも受け入れて、二十人とかの限度でやるんですが、たくさんやると三十人ぐらいとなります。アンダー・グラデュエイトも来ましたし、韓国人とかベトナム人とかもいっぱいいて、そういう人も入ってきました。面白かったですね。日本人の学生もいました。

伊藤 あそこは東洋系の方がたくさんいますね。

澁澤 それからアラビア系がいますね。トルコなんかいました。すごい美人のお嬢さんがいたな。

伊藤 よく美人が出て来ますね。

澁澤 覚えている。それだけしか覚えていないから(笑い)。

武田 論文指導とか研究指導もされるんですか。

澁澤 そんなことは私はできないんです。やる建前になってはいるんですが、そういうことはできない。こういう本がありますよ、とか、こんな人がいますよ、ということは無責任に放言しておしまいですね。

木全 でもお話だけで指導になっているんでしょう。会話をするだけでなっていると思いますよ。

澁澤 そんなことはないですよ。

伊藤 お話が事柄の七割とか、それぐらいでお話になっていらつしゃると思つて伺つておりますので、あまりご心配なさらないように。

武田 その学生さんは、その後だいたい日本とかアジアで働くんですか。

澁澤 それは知りませんね、何をやっているか。

女学館に来てからも、一度ポートランドで新しいMIM(Master for International Management)という特別のコースをつくりだしたんですね。まあ客寄せですけれどね。それをやるので来てくれと言われて、最初の二ヶ月やるということで、女学館から休みをもらつて、九月、十月とやったことがありますね。九七年(一九九七)か、九八年(一九九八)だと思えます。

■ アジアセンターの経営と国際会議

伊藤 トライラテラルとか、アメリカの教師とか、いろいろなところからの招待がありますが、一番の基本は小田原なんですね。

澁澤 ええ、飯の種という意味で基本ですね。

伊藤 講義とか講演とかということも、支出だけではないわけですね。

澁澤 もちろん国際交流基金から給料は出るわけです。大学がそういうピンハネしますが、それでも残りはいくらからもらう(笑い)。

伊藤 だから支出しているわけではなくて、ご自分の収入もあるわけですね。

澁澤 あまりなかったですね。財団の給料をもらっていました。いまでももらっています。

伊藤 だけど、仕事をする場合はその財団のお金を使い尽くしているわけではないでしょう。自分は自分で支えているわけでしょう。

澁澤 もちろんそうです。基本的には自分で稼いでやっているわけです。ロンドンに行ったときは、最初の国際交流基金が一年で終わったので、そのあと、まだあと二年やればこれだけのことができるんだから――。

伊藤 チャタムハウスというのはそういうお金は出さないんですか。

澁澤 出さないとですよ。イギリスなんかケチな国ですから、なかなか出さない。それはとても渋い国です。

伊藤 やらせてやるという感じなんですか。

澁澤 そういふところもあるでしょうね。だからといって非常に不愉快な国ではないですよ。インテレクチャルな世界ですね。

伊藤 チャタムハウスなんていったら、みんなとても素晴らしいところだと思っ。

澁澤 思っているけれど、それほどでもないところもありますけれどね。でもえらい人が来るし。

伊藤 それはチャタムハウスだと言われれば、みんな来るでしょう。

澁澤 私はフェローという名前なんです。初めはフェローって何だ、と思いましたけれど、非常に名誉があるものなんだそうです。

伊藤 そうですね。フェローはそうだと思いますよ。フェローに

もいろいろありますけれど(笑い)。

澁澤 ビジティング・フェローというんですね。

伊藤 アメリカのときはどういう称号をもらいましたか。

澁澤 アメリカではビジティング・プロフェッサーです。アラスカはお金があるものだから、給料がよかったですね。

伊藤 それは州立大学ですか。

澁澤 あれはアラスカ大学というから、州の関係ですね。アラスカというのはめちゃくちゃに金持ちの州ですからね。

伊藤 石油ですか。

澁澤 石油です。あそこはすべての住民に税金を還付するんです。一人あたり千ドルとか、毎年くれるんです。住民にならなければ駄目ですよ。私たちはもらえませんがね。

武田 アラスカに行こうかな(笑い)。

澁澤 だからインディアンのファミリーなんか、十人も子供がいるじゃないですか。そうすると一万ドルの小切手が入るんですよ。それでみんな酒を飲んで、アル中になっちゃう。

木全 「税金を」納めない人にも還付されるんですか。

澁澤 ええ。

木全 それは還付とは言いませんね。

澁澤 dividend「配当」です。

伊藤 給付ですね。

木全 プレゼントですね。

伊藤 すごい国だ。

澁澤 だって全部で五十万人しかいないんですからね。羨ましい国ですね。

武田 アメリカにいらっしやったり、ロンドンにいらっしやったりするときに、小田原の経営には先生はどういう形で関わられたんですか。

澁澤 いい加減なもので、何かあると電話がかかってきて、「そ

うですか、じゃあこうしますかね」なんていうことでやっているわけですよ（笑い）。非常に優秀な人がいます。理事をやってもらっている毛原さんという人で、佐渡の出身で農業高校しか出ていないんですが、会計・経理についてはすごいです。碁がうまいから、そういう頭なんです。もちろん、うちでも公認会計士に全部やってもらっていますが、公認会計士がびっくりして、「よくできる人ですね」と言うわけです。人柄も非常にいいし、野心もあまりない。その人がいなくなったら、僕はこういうことができなかつた。

伊藤 理事代行みたいなものですか。

濫澤 そうですね。「私と」一心同体みたいところがありません。

伊藤 じゃあ少し安心して、そこを空けても大丈夫ということなんです。

濫澤 全然大丈夫。それに、そんなに変な仕事をしているわけではないですからね。だいたい同じようなことがしょっちゅう起こっているだけだから。

伊藤 さっきおっしゃったようなセミナーはずっと続いたんですか。

濫澤 あまりやっていません。

伊藤 あの二回ですか。

濫澤 東南アジアのセミナーは二回大きなものをやりまして、そのあと何かやったような気がしますが、あんなに大きなものはあれ以来やっていません。それよりも、こつちがこのこ出で行って、トライラテラルに参加する。あれもセミナーの一種です。からね。それから山本さんがやる下田会議とか、日英二〇〇〇年会議とか、日韓会議とか、日中とか、いっぱいあるんです。そういうものによつちゅう呼ばれるから、遊びに行くわけです。そうすると緒方貞子とかがいるんですね。まだ国連にいらつしゃ

る前ですけれどね。そういう方たちとお目にかかって、よかったですね。

伊藤 だいたいディスカッサントとかスピーカーという役割をされるわけですか。

濫澤 そうですね。でも女学館に来てからは、それを一切やめました。時間がなくてできなくなつたんですね。トライラテラルの総会はだいたい三月の終わりとか四月にあるんですが、ここ「女学館」が三月から四月というのはやたらと忙しい。

木全 卒業式とか入学式ですね。

濫澤 だから全然駄目なんです。それでくたびれましたから、国際関係はしばらくお休みだというわけで、休んでおつたんですね。伊藤 そうですか。やっぱり飛行機に乗って飛んで歩くというのは時差の問題もありますし、だんだん負担になってくるでしょうね。

木全 そんなことは嘘！ 日赤の先生「聖路加の日野原重明氏？」ほどではないけれど、今年の夏だつて、約一ヶ月、コロンビア大学のお嬢さんご夫妻と北欧に行かれたんです。来年は北極の旅に、という準備もあつて、今年は北極までいらしたのね。

伊藤 それは観光ですか。

濫澤 観光です。純然たる観光。

木全 それでお嬢さんご夫妻がお帰りになったら、お一人だけ、やつぱり今年行こうと決意され、北極の船に乗っておしまいなつたの。「氷山でクマに会いたい」といって、少年のような感性です。飛行機は億劫とか、そういうことはほとんどあてはまらないのではないのでしょうか。それが私のオブザーベーションです。

濫澤 いや億劫ですよ。

伊藤 全然証言が違いますね。

武田 木全先生がいらしゃつてよかつたですね。

木全 でもこのオーラルヒストリーの中に、東京女学館での十年

間の闘いを私は入れていただきたいと思うんですが。

伊藤 もうちょっとゆっくりやりましょうよ。あまり先に進まないようにしましょう。

澁澤 それはあまり話したくない。

伊藤 東京女子学館の話は、一応してください。ここから先はまずいから外せ、といえ外しますから。

澁澤 それはそんなに大した話ではありませんから。

■MRA移動学校について

伊藤 ちょっと戻りますが、相馬さんのMRAはなんといいましたっけ。

澁澤 国際MRA協会というんじゃないですか。

伊藤 あの協会ができるというのはどういうことなんですか。

澁澤 要するに、私が本来のMRAから外れていってしまったと彼らは思ったんですね。そういうことは各国で起こっていたわけです。私の場合には小田原センターというものがあって、あまり難しいMRAをやっていたら食べていられないということになりましたから、英語学校もやらなければならぬし、研修会に部屋を貸さなければならぬ。そうすると、そこで絶対正直なことを言っているわけですから、そういうことは言わないことになるわけです。そうすると、あいつは「転びMRA」だと思われるたんでしょうね。僕のほうも、ブックマン先生はすごい人でしたから、ああいう巨人がいてやっているのなら全然意味が違うけれど、そうでない亜流で、私とあまり違わないようなやつが絶対正直なんて言っても信じられないや、という感じがしますから、こっちも近づかなくなつたんですね。

伊藤 コーとかにですか。

澁澤 ええ、コーとか、それを一所懸命やっている人にはね。向

こうもあまり来なくなつた。それで僕は青年運動みたいなことを始めましたし。音楽のことでやりました。

佐藤 MRA移動学校ですか。

澁澤 そうです。それは中学生、高校生、まあ大学生もいました。それを対象とした青年運動みたいなものです。

伊藤 それはMRAなんですか。

澁澤 元がMRAなんです。スタートがMRAで、歌の数々の中にもMRAのメッセージがたくさんあります。これは一時そういう盛んで、武道館で一万二千人もお客さんが集まって、五百人が舞台上に乗ってやつたんです。すごいんです。ページェント「Pageant」おおがかりなショー」というのかな、そんなことをやりました。

そういうことをやって、子供たちが歌を歌ったり、踊ったり、ギターを弾いたりするわけです。その公演をするのに、フィリピンでやつたり、香港でやつたりするわけです。アメリカにも呼ばれたりするけれど、高校を休むわけにはいかなないので、じゃあ、こっちで学校をつくっちゃえ、ということになつたんです。それをぜひやりたいという人がいて、NHK学園と提携というか、協力を仰いだんですね。NHK学園は講義が全部ビデオになっているわけです。そのビデオをもらってきて、旅先でも毎日勉強するというシステムを採つたわけです。それをやると、高等学校を出るのに四年かかるんです。だから一年遅れるけれど、ちゃんと勉強すれば卒業資格をもらえますということ、高校をやめてうちに来て、それをやって、というのがMRA移動学校です。

伊藤 移動学校はどこにあつたんですか。

澁澤 小田原です。住むところもありますし。

伊藤 どれぐらいの学生がいたわけですか。

澁澤 全部で五十人ぐらいですかね。

伊藤 これは募集したんですか。

濫澤 やりたくてしようがないやつがいるんです。

伊藤 それをどうやってリクルートするんですか。

濫澤 リクルートというか、向こうがやりたいというから、それじゃあ君はちゃんと勉強するか、という。

伊藤 そういうシステムがあるよ、ということは何かでPRするわけですか。

濫澤 世の中一般にPRするというか、とにかく小田原にはそういう若いのが集まって集まってしようがなかったんです。

伊藤 口コミみたいなものですか。

濫澤 きっと東京中でそういうことが有名になったんでしょね。グループサウンズというものがあつたんですが、その走りです。アメリカのベトナム反戦運動がありました、若い人が自分たちのメッセージを音楽に乗せて発表しようというのがありましたね。ビートルズとか、アメリカではフーテンニー [Footenanny] 聴衆参加型フォークコンサートとかね。ウッドストックとかで何千人も集まってわいわいやる、というようなことが流行ったんです。六五年（一九六五）ぐらいですか。それを真似したんです。というか、その一団を日本に呼んできたんです。それが大変なインパクトをもちまして、高校とかいろいろるところに行くと、みんな仲間に入りたいとわいわい言い出した。それがみんな大挙して、小田原にやってくるわけです。泊まる場所もないぐらいの大騒ぎになった。ですからすごい人気が出たわけですね。

それに多少ともストラクチャーをつくってやるためには移動学校のようなものが必要になったし、それでずいぶんいろいろるところに行きました。フィリピンに行って、マルコス大統領にも会いましたし、インドネシアにも行きました。

伊藤 それを世話する人が必要ですね。

濫澤 それは私などが世話をするわけです。相馬さんという人もそうですし、われわれよりも少し若い人でもいましたね。女性

もいました。

伊藤 相馬さんというのは。

濫澤 雪香さんの義理の弟です。

伊藤 じゃあもうタイから帰って来られたんですか。

濫澤 タイはそのあとで行ったんです。いまのは六〇年代の話です。

伊藤 それはかなり続くんですか。

濫澤 二、三年続いたんですが、これはとてもやり切れないと私は思ったんです。もつと続けるという人がたくさんいたんですが、移動学校みたいな嘘っぽい学校はあまりやっていると子供たちのためにならないと思つたし、思い切つてやめるときはやめたほうがいいと思つました。それに父兄だつて心配しますからね。また僕がちよつと怖くなったのは、それをやっている人はみんなアメリカの学校に行きたくなるわけです。日本の大学には入りたくないという。それもいいんです、なにも日本の学校だけがいいわけではないけれど、アメリカの学校は、成功するかどうか、博打みたいなのところがありますからね。成功する人もいるけれど、厳しいですからね。

伊藤 落ちこぼれたら大変ですね。

濫澤 あとでどうしようもなくなっちゃうでしょう。その責任を長期にわたつて取るわけにはいかないと思つて、僕は「青年運動はやめだ」と言い出したわけです。ずいぶん反対した人もいますが、金もないし、いつまでもそんなことやっていられるか、ということ、よしたんですね。

■英語学校の先駆けとして

伊藤 それはまだ小田原ができたばかりの頃ですか。

濫澤 できたばかりではなくて、もうかなり運転していました。

「小田原センターは」一九六二年にできて、「いまの話は」六七年とか六八年ですから、「できてから」五、六年のところですね。そのときにアメリカに行きたいというのがごまんといえるものだから、英語を教えるという事になったんです。それでアメリカにいるMRAの人たちと語り合って、先生を連れてきて、泊まり込みの英語教室を始めました。小田原があつたからできたんですけれどね。それが留学希望者にもすごくもてたんですね。その頃、あまりそういうものがなかったんですよ。

伊藤 いまは駅前なんかとかがありませんね。

澁澤 いまはいくらでもありますが、ちゃんとした建物の中で外人と一緒に共同生活をするというシステムはできにくいですね。ところがうちは建物が先にあるから、できるわけです。それで一時はその建物が学生で満杯になった。でも学生はそんなにたくさんお金を払いませんから、そんなに儲かりませんでしたけれど、そのうちにビジネスマンを教えるということになったんです。ちょうどそれが高度成長の最中で、日本の会社がみんな海外発展をしていましたから、トヨタ自動車、第一銀行（そろそろ第一勧銀になったかな）、清水建設、新日本製鉄なんか、何十人の社員を一、二年でそういう訓練をさせようということになって、そのためにここが選ばれたんですね。だから毎月ウェイティングリストで、月に三十万円とつても、みんな喜んで来るわけです。それで、英語学校と研修会場に変身しちゃったわけです。

そうなるともうMRAどころの騒ぎじゃない。新日鉄の人を捕まえて、絶対正直とか言っちゃったでしょうがない。「そういうの、あつた？」みたいな顔をしていなくちゃいけないわけです（笑い）。伊藤 そうすると、純粹な方から見たら裏切りなんです。

澁澤 けしからんということでしょうね。相馬雪香さんもそう思っていたと思うんですが、最近雪香さんが来たんです。小田原で彼らの会議をやったんです。「このセンターをこの四十年、ちゃ

んとこうやってきてくれたことは、本当に澁澤さんに感謝だ」と言ったという話です。そんなことが雪香さんの文章にも書いてあつた。だから、ざまあみろ、と思いましたがね。金のないところでは駄目ですね。なにも金儲けをするわけではないけれど、金がなければ何もできないんだから。

武田 英語教室は、マキノ大学の学生を中心に、と書いてありますが。

澁澤 それはアメリカのMRAがつくった大学なんです。三年ぐらいで閉校しましたけれどね。しかしその時は非常に面白い学校でした。その学生が日本に一年いけば単位をいくつかやるという話で来たんですね。

武田 それで英語の先生もやってもらつたんですね。

澁澤 ええ、やってもらつた。でもその時は英語を教えるということは彼らは知らないし、程度は低かつたんですね。それで、これでは駄目だと思って、アメリカの英語教育の世界にアプローチして、いい人をスカウトして、だんだんプロフェッショナルにしていったんです。ビジネスマンを始める頃には、日本でもなかなかいいほうに入っていたんじゃないですか。

伊藤 同じようなことをしているとかがあつたんですか。

澁澤 あつたと思いますが、あの頃はうちのほうが早かつたでしょうね。泊まり込みのコースなんか、やっていたところもあつたでしょうが、「うちは」自前で建物を持っているからやりやすいですね。それからアメリカとの関係もわれわれはよかつた。

それからこれはある意味でするんですけど、この学校は全部アメリカ人の校長ならびに教員に任せました。好きにやってくれ、と言つたわけです。というのは、日本というのは何かとちかんとやるでしょう。そうするとアメリカ人は死んじゃうんですね。いやになっちゃうんです。アメリカ人を生かしておけなければ、こういう学校はできない。生かしておくという意味は、食べさせ

るということも入るけれど、楽しくさせる、彼らに生き甲斐を持たせる、ということですね。

本来は、みんな教員になりたいと思って、そういう勉強をしてきた人たちです。だから、まったくの自由な中で、自分たちでカリキュラムをつくって教えるというのは、すごく嬉しいんですね。そんなことがやれる学校が日本にはなかったんです。なんとか中学校に就職したり、なんとか大学の先生になったりすると、そこで制限される。こちらは、ビジネスマンがじゃんじゃん来ているので余裕がありますから、何でも好きなことをやれと言ったわけです。みんなで伊豆の大島に行くというと、「やれ！やれ！」と言わなければ。それは成功したと思います。十何年間大変な成功でした。

伊藤 いまはどうなんですか。

澁澤 いまは駄目です。八〇年代まではよかったです、八〇年代の終わり頃から円が高くなった。八五年（一九八五）のプラザ合意でとどめを刺されましたね。

伊藤 どういうふうに関わってくるわけですか。

澁澤 つまり日本人がアメリカに行くのが、極めて簡単になったんです。大きな会社でも、六〇年代とか七〇年代には、外国に人を訓練に出すなんていうことは、「一ドル＝三六〇円ではできないし、それだけの地盤も外国にない。だから本当に仕事をする人だけが行っていたわけですね。ところが八〇年代の終わり頃になると、誰でも出せるわけです。支店があれば、そこに十人でも二十人でも置いておいて、勉強している、ということができるようになった。逆に日本のほうは、先生を雇ってきても一人前の給料を払おうとすると非常に高いものにつきますね。だからマーケットが失われたと私は判断したわけです。

それではしょうがない、それじゃあやめましょうということ、ビジネスコースはよして、小田原に通いで来る人たちはいまでも

やっています。でもこれはいわゆるボロ儲けにはならないわけですね。ですから、続けているというだけのようところがありませんね。

伊藤 そうするといまの小田原での稼ぎ頭は何ですか。

澁澤 研修会とか結婚式とかの場所貸しと、サービスですね。お料理も出しますから。それはなかなかの仕事ですよ。大きい、という意味ではなくて、大変ですよ。水商売ですからね。

伊藤 いま大変なんじゃないですか。

澁澤 いま大変ですね。でもうちは、いわゆる温泉宿などとは違いますし、真面目だから、かえって来たいという会社もありますね。

伊藤 例えば何かのセミナーに使うとか。

澁澤 宗教団体が来るといいうのもありますし、結婚式はほかより安いし。

伊藤 学会なんかも使っていますか。

澁澤 学会もときどき来ますよ。

伊藤 今度値段を聞いておこう（笑い）。

澁澤 どうぞお使いくださいませ。

武田 この英語の研修は、当時でいうとけっこうお金がかかったんですか。

澁澤 いまそれを覚えていないんですが、ビジネスマンのほうはかなり請求していたと思いますね。だって三食たべさせて、一日十二時間教えるんですからね。それだけの先生を雇っておかなくてはいけない。先生だって、機械じゃないから休みますからね。ある程度しか教えてくれないし。

しかし非常に先生たちは喜んだんですよ。日本のビジネスの会社の人たちはエリートでしょう。大学を出て立派で、英語はしゃべるのは下手かもしれないけれど、読むことはできるし、話題が豊富でしょう。だからクラスで英語を教えるというよりも、日本

はどうなるかとか、経済がどうしたという議論をしょっちゅうやる。私がスタンフォードで聞きかじってきたケーススタディみたいなものを持ってきて、先生たちにやってもらおう。私もやりまいたけれどね。

そういうことをやると、ビジネススクールではないけれど、英語を使うためには非常にいいですね。英語としてやるよりも、ジエネラル・モーターズがこういう決心をしたとかしないとか、モデルTフォードはどうして駄目になったのかとか、あるじゃないですか、クラシックなケースが。そういうことを教えると喜びますね。学生も喜ぶし、先生も面白がりますね。だからとてもそれは評判がよかったです。「あれで人生が変わった」なんて言う、先生も学生もいます。

伊藤 先生のほうにも影響があったわけですね。

澁澤 ええ。日本人と一年か二年でも朝晩一緒に暮らしているわけですから、日本人を知ることになるし、さつきお話しした女の人のように、日本のマネージメントでPhDを取ろうとしたりするわけですね。そうやって、ある程度アカデミックに成功した人もいます。英語の教員として英語を教えるというのは、アメリカでは大産業ですからね。

伊藤 移民の国ですからね。

澁澤 国の中でも教えられるし、世界中で教えられる。いまイラクなんかでもやっているに決まっていますよ。国務省が金を出して、プランをつくらせて、やるわけです。そういうことのそばでやっていたわけですね。

■時代に適応した活動

— アジアセンターの改組を考える

伊藤 この前のお話ですと、清水建設への借金を完済したということですね。

澁澤 二億円完済しました。それは半分は英語学校の利益で返したんですが、最後はバブルのとき、私のおやじが寄付したちよつとばかりの土地が三田にあつたんです。それが法外の値段で売れたものですから、一億円なんか屁でもない、ということになりました。すぐにまたそうではなくなりましたけれどね（笑い）。世の中の不沈の激しさはすごいものですよ。

伊藤 しかしうまいときに手放されましたね。

澁澤 私はツイていますよ。MRAに会ったのも大変なツキだと思いますし、そのMRAがなくなつたのも大変なツキでした（笑い）。だって、そうでなければ、トライラテラルみたいな面白いことに参加したり、アジアを勉強しようということには決してなりませんでしたからね。

伊藤 やっぱアジアとの関わりというのは、女学館に來られてからはどうかわかりませんが、その前はいろいろな形であつたわけですね。

澁澤 アジアといつても東南アジア、東アジアですね。

伊藤 例えばベトナムとか、昔の仏印地域はどうですか。

澁澤 南ベトナムはMRAはやっていましたが、ポストMRAではあまりつき合っていないですね。最近英語学校でつきあっています。英語の先生を訓練してあげましょう、ということですね。

伊藤 どこでやるんですか。

澁澤 小田原でやるんです。これはなかなか人気があるんです。人気があるんですが、金がかかるので、僕はそろそろやめようと思っているんです。一年に一回、一週間のワークショップをやるんです。全国の英語の先生を集めてきて、アメリカやイギリスから英語教育の専門家を呼んでくる。本当にえらい人を呼んできて、一週間やるんです。朝は毎日、英語教育法の講義をやるわけです。午後はその先生が日本の先生を捕まえて英語をしゃべらせるわ

けです。つまり会話を勉強するわけです。そして夜はまたいろいろなプログラムをやるというものです。

これは三十五年やっていますが、とても評判がいいんです。日本の先生には、何年も何年も続けてくる人がたくさんいます。沖縄の人、九州の人、名古屋の人。つまり魅力があるんですね。外国人に全部やらせていますから、ある意味では無責任なんです。彼らにやらせるから面白いことができるんですね。日本人には考えられないような生活の場をつくってくれるんですね。しかもその時は外人がたくさんいますから、小田原中が不思議な世界になるんです。まあ文化交流というか、文化を教えているようなものですね。それが好きでいらつしやる方がたくさんいたんです。

それがそんなにいいのならといって、タイの人を呼んだら、これまた喜んで帰るんですね。インド人も来るし、フィリピン人も来るし、中国人も最近来るようになりましたし、韓国人も来ます。日本に英語を勉強に来るなんていうのはおかしな話なんだけれど、来ると喜ぶんですね。つまり日本じゃないんですね、その期間、その場所は。それで喜んで帰る人がたくさんいる。それでベトナムとの関係ができました。でもそれはちよつとやり切れないので、そろそろやめようと思っています。

伊藤 やり切れないというのは、お金が持ち出しになっちゃうんですか。

澁澤 日本の先生自身が、いまさらここに来なくてもいい。最初にワークショップを始めた頃は、ほとんどの先生が英語をしゃべれなかったんですよ。朝から晩まで英語をしゃべれというのと、反発されたりしました。ところがいまは、ほとんどすべての人がパリに行つて買い物をしてきたとか、ニューヨークに行つてオペラを見てきたという人で、英語をしゃべることに抵抗がないんですね。特に英語の先生はそうですね。だからあまりニーズがなくなつたんだと思う。つまりマーケットがない。さっきのビジネスマ

ンのマーケットは為替レートで失われましたが、「英語教師のマーケットは」日本の進歩、発展によつて失われたと私は感じています。

実は最近小田原に何回も行つたんですが、それはこの学校をどうやって閉めようかということの研究に行っているわけです。校長と話したりしてね。

伊藤 それに代替するような活動を考えなければならぬわけですね。

澁澤 LIOJ (Language Institute Of Japan) という名前です。やっているんですが、それを三十五年やっているの、いま先生たちが考えているのは、LIOJIIを始めるか、ということ。さきのうも小田原に行つたんです。LIOJという名前を捨ててしまふと人が来なくなるというので、「II」をやろうというんですね。「II」はすべてを縮小して、ワークショップも百人とかいわないで、五人ぐらいでやるとか、全然違うことをやったらどう、お金もかからなくて手軽なことをやってみましょうか、と言っているんですが、どうなるかわかりません。

伊藤 そうなると収入の問題はどうなりますか。

澁澤 だからLIOJIIはCEO (チーフ・エグゼクティブ・オフィサー) を置いて、その人が全部責任を持つ。事務はディレクター・オブ・マネージメントの女性を置く。アメリカ人の先生をディレクター・オブ・スタディーズにして、その人にカリキュラムとか先生のディプロイメントは全面的に任せて、やってみるか、必要な先生しか雇わない。先生を雇うのも、昔はアメリカから連れて来なければならなかったんですが、いまは日本にごまんといえるわけです。そこら中にいて、余りに余っているわけですから、いい人を探すのは極めて簡単です。そういうふうにして、看板方式じゃないけれど、安上がりになって、やれるならやっこらんなさい、と私は言っているわけです。

伊藤 採算が合うのなら、ということですね。

澁澤 やらなければやらないでいい、という感じだと思います。私も歳ですから、そろそろいろいろなもの整理していかなければいけないと思っております。

伊藤 小田原のそれ全体をなくしてしまうわけにはいかんでしよう。

澁澤 いや、あの建物ももう四十年でしょう。法定耐用年数は六十年です。しかも地震があるかもしれない。あれを耐震構造にしようなんていったら、大変なお金がかかってできません。今のままでやってもいくしかないし、あそこで新しい事業を始めるということはとてもできない。場合によっては売ってしまうということでも必要があるだろうと思います。やっぱり事業というのをやめることを考えていなければね。いつでも先へ、先へとやるのはいけないと思うんですね。

■財団法人の行く末

伊藤 MRAハウスのほうはどうなんですか。

澁澤 これはそう簡単にやめるということではできませんね。財団ですから。

伊藤 いまの小田原のものも、財団の持ち物なんでしょう。

澁澤 財団の持ち物です。でも事業の一部をやめるとか転身するということはできません。

伊藤 財団の本体はハウスなんですね。

澁澤 そうです。そこに山本「正」さんが入っていますが、これはだんだんきちんと整理して、私がぼつくりいなくなっても、あまりへんてこにならないような形にしなければいけない、と思っています。

伊藤 ハウスはなんで維持しているわけですか。

澁澤 山本さんに家賃をもらっていますし、外国人が住んでいる

家が二軒ありまして、それがそうとうの収入源になっています。

木全 私、うかがったことがないんですが、どのくらい大きいんですか。

澁澤 いまある坪数は七百坪です。

伊藤 場所はどこですか。

澁澤 南麻布、有栖川公園のそばです。ドイツ大使館とかフランス大使館のそばです。

木全 お庭があつて、ビルが建っているんですか。

澁澤 小さいビル、二階建てのビルです。

木全 一階が山本さんですか。

澁澤 二階「とも」全部、山本さん。私がそこにちよつと借りて入っているんです。いや、冗談です（笑い）。

木全 山本さんにビル一つを全部貸していらつしやるんですね。そして外国の方が住んでいる棟が二つあるんですね。

澁澤 いま外国人用の家は大変景気が悪いんだけど、うちの場合は独立家屋で庭があるものですから、いまでもありがたいことに、月に百何十万円という家賃で貸せるんです。ときどき直したりしなければなりません。

伊藤 渡辺武さんがシルバー・ボランティアズとかやっていたでしょう。

澁澤 渡辺さんもその事務所に行きましたよ。

伊藤 僕はたしかそこに行つたような気がするんです。渡辺さんに会いたいと言つたら、そこに来いと言われて、行つたところがそこじゃなかったかと思つて、いま考えていたんですが。

澁澤 そこに違いないです。牛場さんも一時いらつしやいました。牛場記念財団というのができて、それも入っていました。牛場記念財団は今度解散になりました。

伊藤 解散ですか。

武田 それは最近ですか。

澁澤 去年ですか。許可になったのはこの春ぐらいだと思います。

伊藤 牛場さんの資料はどうなっているだろうな。

澁澤 それはちよつとわからない。あれは面白い人ですから。

伊藤 どこにアプローチしたらいいのか。

澁澤 外務省にもあるでしょうし、外務省の史料館にもあるでしょうし。

伊藤 外交史料館は公式の文書ですからね。

澁澤 それは山本さんにお聞きになるのがいいかもしれません。国際交流センターで。

伊藤 山本さんが記念財団なんでしょう。

澁澤 山本さんの仕事は、牛場さんに非常に助けられたんですね。

山本さんはそれを非常に多として、亡くなったときにソニーの盛田さんとか、小林陽太郎とか何人かのファンを集めて、財団をつくろうといった。それで四億円か五億円集まったんです。それはよかつたんだけど、それがうちの事務所に入ったわけです。だけど、どういうわけでやめるようになったのか、私は知りません。

伊藤 そういう財団だと、キャッシュフローがないわけですから。

澁澤 やつぱりそうでしょうね。低金利のためでしょうね。やる

ことがないから。

伊藤 いま財団はみんなそれですね。澁澤財団はどうか知り

ませんが。

澁澤 うちの財団はそうじゃないんです。すごく金があるんです。

伊藤 キャッシュフローはあるんですか。

澁澤 キャッシュがあるんです。

伊藤 いや、キャッシュはあるでしょうけれど――。

武田 流れなくては(笑い)。

澁澤 それは別の話で、いまのMRAとも、この女学館とも関係

ないんですが、これから私がやるうとしている仕事があるんです。

それは面白い仕事ですが――。

伊藤 わかりました。それは聞かないでおきます。この次は東京

女学館の話と、澁澤財団の話をお願いします。

澁澤 これは面白い話です。今朝もそこに行っていたんですけれどね。

伊藤 今日が三回目で次回が四回目ですが、どうなりますかね。

いちおう四回で切りますかね。

澁澤 そうですね。そうしましょう、ぜひ。

伊藤 それで冊子にしたほうが早いですね。

澁澤 それはどうでも。とにかくお切りになった方がいいですよ。

伊藤 君たち、まだこういうことを聞いてないよ、ということがあれば――。ちよつと予想がつかないですからね。ほかの方だと

だいたい予想がつくんですが、ちよつと変わった方でいらつしや

いますので。私がいろいろお話を伺った人と全然違うキャリアと

で、ライフヒストリーが全然違いますので。

武田 東京女学館には年史みたいなものがありますか。

澁澤 あります、百年史です。

木全 それはまた次ですね。

伊藤 この次にいろいろ話を伺います。では次回を決めさせてく

ださい。

澁澤 本当にお役に立つのならけっこうですけれど。

伊藤 役に立つかどうかは私のほうで判断いたしますので、お

話しくだされれば、本当にありがたいです。いままでのお話だけで

も非常に嬉しく思っております。

澁澤 本当なんですか？ 雑談というか漫談というか。

木全 理事長はよくおっしゃっているんです、「こんなくだらな

い話、なんになるんだろう」と。

伊藤 じゃあ、くだらない話というのはどういう話なのか、一度

ぜひ聞かせてください(笑い)。では十月の末あたりにどうでし

ようか。

伊藤 そうだ、青森の話が残っているんだ。

澁澤 それは私の関係ではありません。

伊藤 関係なくても、この前も突然青森に行ったら云々という話がありましたからね。

澁澤 こんな話、久しぶりで思い出して、びつくりした。

木全 最後に私のほうから一つ。閉塞状態にある日本を救う最後の切り札は、人口の五〇%の女性の活用ではないかと思ひまして、「女性の活力を日本社会の活力に、私の提言コンテスト」というのをやっていますので、ぜひ応募をいただきますよう、あるいは学生さん等にご紹介くださいますように「パンフレットを渡す」。

伊藤 これは女性ですね。

木全 いや、老若男女、国籍を問わず応募していただいて。どういふふうに活用したらいいかということです。

伊藤 女性の活力を日本の活力に、ということですね。まず女性からいきましよう「パンフレットを佐藤氏に渡す」。

澁澤 これはなかなか有名なんですよ。いろいろな新聞に出ています。木全先生の大車輪の活躍。

木全 そのパンフレットをちよつと開けていただくと、そこに澁澤会長と書いてございます。

伊藤 どうもありがとうございました。

澁澤 雅英

オーラルヒストリー

第4回

[2003年10月29日(火) 15:00~17:00]

[出席者] 肩書きはインタビューの時点

澁澤雅英氏(東京女学館理事長・館長)

伊藤 隆氏(政策研究大学院大学教授)

木全ミツ氏(東京女学館副理事長)

武田知己氏(政策研究大学院大学特別研究員)

佐藤純子氏(政策研究大学院大学特別研究員)

丹羽清隆(録音、記録担当)

場 所：東京女学館

■ MRAハウスミュージウム

伊藤 今日では東京女学館のことと澁澤財団の話を伺おうと思いますが、ちょっとその前に、MRAハウスのことで少し伺っておきたいことがあります。MRAハウスというのが財団の正式な名前でございますか。

澁澤 財団法人MRAハウスという名前です。

伊藤 この財団の監督官庁はどこですか。

澁澤 文部省「現・文部科学省」社会教育局社会教育課です。

伊藤 それは麻布ですか。

澁澤 麻布が本部で、小田原は事業所といいますが資産の一部です。

伊藤 一番大きな事業は何でございますか。

澁澤 金銭的にはもちろん小田原の建物の運営ですね。

伊藤 でも財団法人である以上、公益法人でしょう。

澁澤 ええ、もちろん公益法人です。でも収益事業があるわけですね。小田原の運営は、収益と公益の二つの部分を兼ねているわけです。英語学校は長年公益部門だったんです。だから税金がかからなくて非常によかったところもあったんです。それから、研修会とか結婚式とか法事とかレストラン営業は収益事業になるわけです。それは消費税も払うし（消費税は学校のほうも払っていたかもしれませんが）、法人税も納めています。ただ法人税は、公益法人の場合少し安くしてくれるんですね。普通よりも三割ぐらい安い。私はそれは本当は不公平だと思っただけです。同じような旅館が隣にあつて、片方は「法人税が」安いわけですからね。今度は変わるんだろうと思います。

伊藤 一番大きな事業は教育ですか。

澁澤 教育というか、建物の運営です。建物があるから運営しなくてははいけないんですね。

伊藤 建物の運営自体は公益になるんですか。

澁澤 最初につくったところは全部公益でした。固定資産税すらまけてもらっていました。これは小田原市ですけれどね。小田原市は、MRAがあそこに「ハウスを」建てたことを喜んでいたので、「払いますよ」と言ったら、「全部でなくてもいいですよ」という話で、六〇%ぐらい払っています。所得税のほうは普通に払っていますが、最近損をしていますがね。損はしていません。ただ、減価償却をすると儲けが出ないわけですね。そうすると、要するに税金を払わなくてもいい。それは収益でも公益事業みたいな話になります。

伊藤 公益部分では、そのほかの事業は何かおやりになっていますか。

澁澤 それはいろいろお話をしたセミナーをやったり、いろいろなことをやりましたね。私の個人プレイの部分が多かったです、ロンドンに行ったり本を出したりしたのも公益の一部になりますね。

伊藤 この小田原のセンターで国際会議をおやりになっていますね。

澁澤 ええ、やりました。

伊藤 ASEANとかの話はこの前伺ったんですが、MRAの世界大会はそこでおやりになったことはございますか。

澁澤 初めは何回もやりました。

伊藤 そのお話がなかったんですね。

澁澤 ごめんなさい、そうですね、最初に、開所式というのを昭和三十七年（一九六二）十月二十二日にやりました。そのときは国際会議と一緒にやったわけです。その会議に金鍾泌さんが出席するということになったわけです。こちらからは池田「勇人」さんが来たり、大平「正芳」さんが来たりして、「金・大平メモ」

がそこでつくられたりしたわけです。それは国際会議の一部としてやったんです。これはかなり政治的なことで、M R Aではありませんでしたが、そういう機会にやったわけですね。

それと同じようなことを夢見て、翌年もう一回やりました。そのときは金鍾泌も来なかつたし、池田さんも来なかつたし、普通の小振りの会議になりました。

伊藤 でも世界中から「人が集まったんですね」。

濞澤 ええ、世界中からやって来ました。

伊藤 そういう世界中の会議はどこかで「やると」決めてやるんですか、それとも日本のM R Aが呼びかけて集めるものなんですか。

濞澤 例えばスイスでやっているときに、こつちもやりますよというわけにはいかないから、それは調整しますが、しかしイニシアチブは、こつちはこつち、あつちはあつちということです。

伊藤 その頃は、国際協会というのは――。

濞澤 まだありませんでした。財団法人M R Aハウスがやっていましたし、ブックマンがもう死んでいましたからね。だからブックマンの後継者であつたピーター・ハワードという人が全体をコーディネートしてました。私は彼の弟子でしたから、ツーカーでやっていました。

伊藤 その方が亡くなったあとの問題なんですか。

濞澤 彼がいたときも、イギリスでは彼に賛成の人もいるし、もつと違ったやり方をすべきだという人もいる。運動つてそうじゃないですか、大親分がいるうちはみんなおとなしくしているけれど、それがいなくなると意見の相違が浮上してきますね。でもハワードというのは非常に強烈なリーダーでしたから、みんな一応しようがないということ、おとなしくしていたと思うんですが、ハワードがいなくなつてからはもう大変でした。

伊藤 それはいつですか。

濞澤 一九六五（昭和四〇）年です。

伊藤 じゃあもうじきなんですね。そうするともう、M R Aの国際協会のような全世界の協会はないんですね。

濞澤 ないんです。M R Aというのは全世界的な組織は全く持っていないませんでした。私がスイスのM R Aの理事になるということとは全然ありませんし、こちらも彼らを呼んでくるということとはほとんどありませんでした。ですから、独立した人格でやっていました。

伊藤 そうすると、そういう全世界をカバーするような国際大会は、そのあとはあまり開かれていないんですね。

濞澤 ええ、開かれなくて、だんだん分裂していったわけですね。いまさら一緒に集まってもしょうがないということにもなつたし、私のほうは青年音楽運動のほうにのめり込んでいって、その方が面白かつた。それからアジアを対象にやり始めましたからね。それまではどちらかというと西欧オリエンテッドなところが多かつたから、こちらはそれに「反発していったところもありました」。

伊藤 それ「M R Aの国際会議」は二回やつただけですか。

濞澤 ええ、二回か、三回やつたかもしれないが、そつちは下火になつた。青年運動はアメリカと一緒にやつたんですね。アメリカでも同じことをやつた。アメリカも、ヨーロッパには反対するんですね。アメリカとヨーロッパの分裂というのは非常に面白い現象で、特にベトナム戦争をやっていたでしょう。それに対するヨーロッパの反応は、いまのイラク「問題」とちよつと似たところもあるけれど、イラクほど馬鹿なことではなかつたかもしれないけれど、ちよつと似ていましたね。ヨーロッパのほうは、ブックマン本来の道徳でやろうといい、アメリカのほうはもつと若い人でワイワイやつて、ベトナム戦争を肯定し――。

伊藤 肯定のほうですか。

濞澤 肯定でもないんだけど、やっぱりアメリカとしては五十

万人も兵隊を出しているんだから、それに反対するというわけにはいかないですよ。

伊藤 でもベトナム反戦運動というのがずいぶんあったじゃないですか。

澁澤 そうそう、それとは違うんですね。

伊藤 それで国際協会ができたのは――。

澁澤 それは、私どもが若い人を相手にやり始めて、昔のMRA的でなくなってきたからですね。一方で建物があるものだから、商売をしなくてはとうしようもない、商売をやるとうしても道德はちよつと棚上げになる。別に不道德なことをやるとういう意味ではないけれどね。

伊藤 それはそうでしょう。ひいおじいさんの立場は道德と商売の合一ですからね。

武田 道德経済合一主義ですね。

澁澤 せいぜいその程度、「合一」です。道德だけ、とういうわけにはいかない(笑)。だからもつとMRAの本筋を行きたい人は、あいつはどうも転びバレンだとういうことになるわけじゃないですか。僕は転びバレンなんです。それに反対して、本来のMRAだとういう人がMRA国際協会をつくったんです。

伊藤 その中心は相馬さんですか。

澁澤 相馬雪香さんとか、このあいだお話があった柳沢「鍛造」さんとかですね。つまり私とあまり近くなかった人がズラツと向こうでやったわけです。しかし、こつちのほうがお金を持っていますし、建物がありますしね。

伊藤 別段、喧嘩状態になつたわけではないんですね。

澁澤 ええ、そうです。こつちははずつと寄付してましたから。いまでも毎年三百〇四百万ぐらい寄付しているんじゃないですか。

伊藤 面白い関係ですね(笑)。

澁澤 非常に日本的です(笑)。

伊藤 敵は敵、みたいにならないんですね。そこがいいところですね。MRAのことはだいたいそんなところなんです。MRAの名前はずつとお続けになるつもりでいらつしゃいますか。

澁澤 それは曰く言い難しで、私がいなくなると、あの財団はどうなるかわからないとういう空気があるんですね。それで資産がありますので、日頃はキャッシュフローはそうないけれど、建物は相当大きいし、麻布の土地も大きい。放っておくと変なふうになる可能性もありますね。だからなんとか始末しなければいけない。始末ではないけれど、いい形にして、世間のお役に立つようなシステムをつくる。死ぬ前にそうしたほうがいいだろうと思つている人がたくさんいるんですね。私がいるうちにやらなければいけないよ、と思つている人が多い。

伊藤 それは大紛乱になるかもしれないですね。

澁澤 大したことはない。どつちにしてもコップの中の嵐ですけどね。

伊藤 いや、でかいコップですからね。

澁澤 それほど大きくはないけれど、割れば音がするし、ゴミも出る。だから割れないほうがいいやとういうような意味で、私があるうちになんとか決めるよ、とういうんだけれど、従業員もいますし、じゃあ明日やめますなんて言うわけにもいかないし、どうしたらいいかわからない。やめてあれを売るなり、ほかのことにするにしても、新しい事業をやるとういうのは大変ですからね。売つてしまうと、今度はお金だけあつて、どうしていいかわからなくなるんですね。だからいま考えているところなんです。もしそういう日が来れば、MRAとういう名前は事実上消滅するんじゃないかと思つていますね。

伊藤 いま世界中でMRAを名乗つてるところはほかにもあるわけですか。

伊藤 非常に少ないんじゃないですか。みんなイニシアティブ・オブ・チェンジという名前になっちゃった。私はその名前がきらいなものだから。きらいというか、自分がその一員だという感じがしないものだから、「僕はMRAだ。いくら転んでも、バテレンはバテレンだ」と言っているんですけれどね（笑い）。

伊藤 そうですか、それはMRAの孤塁を守られたほうがいいかもしれませんね。

伊藤 いいですよ。私もそう思っているんです。ちゃんとそれで商売をしてどうにかやっているMRAは世界にそんなにないんですから、日本人も相当なものだと思つて得意になつてみたりもするんです。

■東京女学館に関わる経緯

伊藤 それでは東京女学館のお話に移らせていただきます。東京女学館は、もともとひいおじいさん「澁澤栄一」が関わつたお仕事だと思ひますが。

澁澤 関わつたといつても――。

伊藤 途中で館長をおやりになつていらっしゃるでしょう。

澁澤 一時、館長もやりましたね。

木全 一番最初から関係がおありになるんですね。

伊藤 一番最初から関係なさつていますよね。おもてに出ていたわけではないんでしょうが、実際に推進者だつたんでしょう。

澁澤 お金のほうの推進者だつたんでしょうね。

伊藤 だいたい、日本中の明治期のあらゆる事業で澁澤さんの名前がないものはあまりないわけですからね。

澁澤 そうですね、多いですね。

伊藤 ですから、ご関係はあつたでしょうが、これ「東京女学館百年史」の歴代評議員の表」を拝見していますと、評議員にな

られたのは昭和六十年（一九八五）で、理事になられたのが昭和六十二年（一九八七）ですね。

澁澤 私の従兄弟が死んだので――。

伊藤 この「澁澤」言忠さんというのは従兄弟なんですか。何と読むんですか。

澁澤 「あきただ」です。津軽藩の御曹司なんですよ。それが私の父の従兄弟のところに養子に來たんです。父の従兄弟は澁澤昭子なんです。そのお母さん「昭子」がこの女学館の初期の卒業生の一人なんです。それで「養子の言忠を」理事にしたんじゃないですか。彼はずっと理事をしていたんだけど、女学館をどうしようなんていう気がある人ではなく、きわめて平和に静かに生きていたわけです。それが死んだので、私にやれと昭子が言つてきたから、じゃあしょうがないな、と思つてやり始めたんです。

伊藤 その昭子さんとおっしゃる方は、叔母さんですか。

澁澤 父の従兄弟に当たりますから、ジェネレーションとしては叔母さんですね。

伊藤 やつぱり澁澤家との関係はずっと続いているわけですね。

澁澤 多少は続いているけれど、こういう団体「女学館」はもう独立ですからね。

伊藤 そうですか、昭和六十二年（一九八七）に評議員、理事におなりになつて、それから関係があるわけですね。

澁澤 関係はあるけれど、ほとんど全く興味がなかった。

伊藤 じゃあ、言忠さんと同じですか。

澁澤 言忠さんのほうが、もう少し興味があつたと思いますね。私は外国にいることが多かつたでしょう。だから女学館の評議員会なんてときどき案内状が來ても捨てちゃうようなことが多かつたし、ほとんど興味がなかつたですね。「評議員会に」來ても、あまり面白くもなかつた。理事になつて初めて來たんですが、何をやっているのかよくわからないし、あまり興味がなかつたん

ですね。

伊藤 そのころは有光「次郎」さんですね。有光さんとは前から――。

澁澤 いえいえ、全然知りません。ここで初めて「知り合ったわけ」です。ただ有光さんは昔の文部次官だった方で、私の父親が大蔵大臣の頃に次官をしていらしたのかな。そのあとだったかもしれませんが、私の父は大蔵大臣として文教予算に非常に張り切ったわけですよ。いまの科研費のもとと澁澤敬三がつくったというほどでもないかもしれないけれど、先鞭をつけたものなんです。文部省は、有光さんを初めとして澁澤敬三を多としているわけです。劔木「享弘」さんとか、歴代の次官ですね。だから澁澤敬三には世話になったと言う人がよくいます。そういう意味で有光さんは私が来たときに、「お父様にはとても世話になりました」とおっしゃいました。

けれども、すでにもう九十歳近い方でありまして、少しほけていた感じがしたんですね。そこで私は、女学館にはあまり興味がなかったんだけど、ほけている人が理事長をやっていることにはちょっと危機感を覚えまして、これはお替わりになったほうがいいのではないかと、偉い方かもしれないけれど、生身の学校ですからちゃんとした人がやったほうがいいのではないかと思つて、そういう運動をちよつとやったことがあります。運動でもないけれど、ほかの理事さんと語らつて、あれじゃ駄目じゃないのよ、と言つたんですね。理事会をやつても、何が起つているのが全然わからないで、総務部長さんが「こうですよ、こうですよ」というと、「ああそうか」とか言つて、パンとはんこうを捺したりしているから、これは危ないものだ、と思つて、他人事ながら心配、という感じでした。それが最初の興味の持ち方ですね。

伊藤 何かある時期から、文部省の方がかなり多くなつてきますね。

澁澤 これは学校経営というものの問題にもなるんだけど、文部省が多いからいけないということではなくて、誰を理事にしたらいいかよくわからないんですね。理事はみんな並び大名で、学校経営という意識がないから、ただいるだけで、全く責任を持たないんですね。そういう状態で、いまもそうなので、だからうまく行かないんだと私は思っているんです。何かが起こったとき、世の中が変わりつつあるとき、それに対応して何かやらなくてはいけないという戦略を考えたり、それを実現したりするというようなことは、理事会の誰もやらないわけです。ただ員数だけ集めているわけですね。それに一番都合がいいのは文部省で、文部省の次官を一人連れてきておけば、何かあったときに「ちよつとお願ひしますよ」という話になるでしょう。そういうことで、文部省の方がずつと来ておられたんだと思います。

木全 それと同時に、「女学館は」国策としてつくった女子の教育機関なんです。伊藤博文が首相官邸で発起人総会をして、女子教育奨励会を設立しました。だから歴代トップは、文部省次官がずつと着任してこられた。だからほかの女子校とはおよそ違う。女性の理事長は、百年間いないわけですよ。

伊藤 じゃあ、半分国立みたいな感じなんですね。
澁澤 いやいや、そんなことはない。国立だったら、もう少し助けてくれてもいい。

木全 そういうところは助けないわね。それが当然だとまかり通つて来たようなところがある。

伊藤 この『百年史』の年表を見ますと、昭和六十三年（一九八八）に有光さんが――。

澁澤 名誉理事だかんだか忘れたけれど、なつて、お辞めになつて、村山さんという方が理事長代行におなりになつたんじゃないかな。

伊藤 村山さんというのはここに全然出て来ませんね。

澁澤 村山松雄というのがいるんです。やっぱり文部次官ですよ。非常に有能な方でしたけれど。

木全 でもお名前だけ貸すという形でいらしたんですね。

澁澤 というのはご病気だったんです。心臓が悪かったんですね。

伊藤 なんとまあ、ほけた方のあとに心臓の悪い方ですか。

澁澤 そういうことで学内で危機感を感じる人がいた。学内でもないかな、学外かな、同窓会とかですね。それで私がそこにほんやりいるから、「あんたやらないか」ということが言い出されたんですね。ちようど僕がポートランドから帰ってきたときにその話があったものだから——。それに乗ったのを、私は一生後悔していますけれどね。

伊藤 後悔することはないんじゃないですか。

澁澤 いや、非常に後悔しています。あれは間違いも間違い。

木全 これからお話しいただければ、もう大変なことです。

澁澤 いや、お話はそんなにしないつもりです。だって進行形の事件ですし、一つの組織に関わることですからね。

木全 まあ、それはそうですね。現職の方がそれをべらべら言ってますからね。

澁澤 べらべらしゃべるべきではないと思いますので。

伊藤 しゃべってもいいですよ、あとで消せばいいんですから。ずっと経ってから公にすればいいんですから。

澁澤 どうだっといういですよ。どうせ誰もそんなものは読むわけでもないでしょうから。

■理事長に就任 —— 東京女学館を改革する

伊藤 お引き受けなさって、いろいろ改革なさったわけですか。

澁澤 ええ、改革と称するものだと思います。なにしろ非常に古い体質の学校でしたからね。外国との関係など全くないし、海外

に行くなんていうこともない。国際化の世の中だったんだけれど、そういう方向には全く動いていなかった。九〇年代になって、よその学校はみな韓国に修学旅行に行くとかいうことが始まりましたが、そういうことは一切やっていない。それどころか、ダブルで儲けた学校はイギリスで校舎を買い込んだとか、フランスのストラスブルに何かをつくったとか、馬鹿なことをやっているわけですね。それはのちに馬鹿なこと、とわかったけれど、そのときにはよきそうに見えましたね。そういうことは夢にも考えていない学校でしたから、なんとかしなければいけないという気はしました。

私は初めはそう思っていなかったんだけれど、来てみたら、女性には素晴らしいと思ったんですね。お嬢さんたちの顔を見ていると、本当に優秀だと思った。男の子も優秀かもしれないけれど、本当に素晴らしいと思いましたが、その人たちが日本の社会ではちゃんと活用されていないということも周知の事実でした。

私の娘もそうだけれど、気の利いた人は外国に行ったら帰って来ない。博士か何かになって、アメリカのために努力していて、日本からは頭脳流出ですね。日本で一番優秀な人の五十人のうち、五人ぐらいしか帰って来ないといわれるんですね。実際、うちの娘なんかは絶対に帰らないという。彼女はコロンビア大学で教えているけれど、日本のアカデミアには絶対に近づかないという。社会福祉なんかやっているから、ときどきオファーはあるわけです。いま売れっ子の学部ですから、どこぞの学部長になってくれないかなんて言ってくるんだけれど、絶対に御免だ、ということになるんですね。かといってアメリカが好きなのではないんだけれど、日本で女性として働くということは御免です、という。

伊藤 大変は大変ですね。苦勞は多いんだ。

澁澤 あそこ「日本」は女が働くところじゃありません、という意識の人が多くいます。それは僕は非常にもったいないことだと

思う。日本の危機、というほどでもないけれど、そう思っただけで、そうならない学校にしようと思った。第一、優秀な社会参加をする女性をつくるというのがこの学校の目的だったんだから、それをもう一回リバイブするべきだと思いますね。それで改革と称することを始めたわけです。

例えば、アメリカとかアジアに研修旅行に出すとか、それからいま、アメリカとイギリスに高校生が留学をしています。それから国際会議なんかをやって、女子教育の哲学をつくらなければと思っただけで、学校のミッション・ステイトメントというものを掲げました。「21世紀の東京女学館をめざして」(資料1)」。しかも最初は英語でつくって、それを日本語に訳して、これで行くとか何とか言ってみたり、そういうちよつとキザなことでしたが、やっています。なかなか面白かったことは面白かったんですけどね。それで、たしかに少しずつ変わってきました。だけど理事長がやれることは非常に限られているんですね。やはり校長でなければできないことが多いですね。

伊藤 理事長と校長はどういう関係になるんですか。

濹澤 昔は理事長が校長を兼ねていたんです。でもしばらく前から、それぞれの学校が校長を持つようになった。短大には短大の学長がいて、中高は中高の校長がいて、小学校には小学校の校長がいる。その人たちが全権を持ってやっているわけです。その人たちが教育的には責任者です。経営的には理事長が責任者ですけれどね。

伊藤 その校長なんかの任免権は、誰が持っているんですか。

濹澤 それは理事会が持っているんです。しかしその校長たちも理事ですからね。だから任免権があるといつても、藤井「治芳・日本道路公団」総裁を解任することだってあんなに難しいわけで、総理大臣にもできないことを、たかが理事長ができるわけがないので、そんなことはできないんです。ただ、任期がくると、じゃ

あもう辞めてくださいと言いうことはできませんね。それで小学校の校長に辞めていただいたりしました。

伊藤 おっしゃった改革の成果はいかがでございますか。これには抵抗もずいぶんありましたか。

濹澤 「抵抗は」ありますね。私どもが考えていることがわかってくれた先生は非常に少ないですね。仮にわかっても、その旗をかついで走ろうという人は非常に少ない。それは先生方には失礼だけれど、「私は」学校という社会の癖だと思っただけです。みんなお山の大将みたいなところがあって、自分は聖職者だと思っただけ。転びバテレンじゃないけれど、まだ転んでいないバテレンで、聖職者だと思っただけで、自分の生活は誰かが面倒を見てくれるのは当たり前だと思っただけ。私立学校の場合は学校法人であつたり、文部省であつたりするんでしょうけれど、それで一生安泰なのであつて、自分は教室で毎日教えていけばいい。それは本当に一所懸命やっていらつしやる方も多いと思いますから、それで首尾一貫して完結するわけですね。それ以外のことに目を向けようという気があまりないし、そこで何かやり出して、みんなから嫌われたりすると困るということもあると思います。グループ意識の強さはすごいですね。

伊藤 教員の、ですね。

濹澤 教員のグループ意識ですね。だから改革をしようなんていうことは、初めからやっても駄目なものだと僕は思っています。ですから、あまり効果はなかったと思います。ただ雰囲気として多少国際化したような感じもあるし、留学した生徒たちは、本当によかったということも言っています。その人たちのキャリアに多少は影響があつたかもしれません。でもそういうことは、計量的には言えないでしょう。変わったか変わらないうか、わからないということですね。

伊藤 そういう女性たちを受け容れる体制も、まだ日本社会では

充分とは言えませんか。充分どころか――。

濹澤 イギリスに行つて一年暮らしてきて帰つてきた人がここに
来て報告してくれるんだけど、見違えるようになって帰つてく
るわけですね。目つきも違うし、話し方も違う。これからの戦争
とか環境とか、大きな話をするわけです。そういうことを教わる
んですね。ところが二、三ヶ月経つと、また元のような子になつ
ちゃうんだな(笑い)。この中で、グループの圧力があるんじ
ゃないですか。だから無駄だったとも言えないかもしれないけれ
ど、そんなものだな、と思いますね。

伊藤 やっぱり長期的に考えないとしようがないということす
かね。

濹澤 それは日本の改革が進まないと駄目だということですね。

伊藤 全体でしょう、ここだけ変わつてもどうにもならないです
からね。

濹澤 全体ですよ。ここだけ変えることはできませんからね。そ
れはMRAみたいな、全く世の中と関係のないことなら――。

伊藤 関係ないんですか。

濹澤 いや、関係ないわけではないけれど。私もこれ「前回まで
の速記録」を読ませていただいて、自分がいかに好き勝手をやつ
てきたかということが改めてわかりましたけれど、そういうこと
ができる世界と、学校という世界は全然違うんですね。でもなん
となく、そういうことができる世界のつもりでここに入ってきた
んですからね。というか、それ以外のビヘイビア「ふるまい」を
知りませんからね。だから大変苦労しました。

伊藤 先生たちとか理事たちも、たぶん戸惑つたんでしょうね。

濹澤 まあ、戸惑つた部分もあるし、利用してやろうという部分
もあったでしょうし、いろいろでしょうね。まあ、そう大喧嘩を
したというわけでもありませんからね。

■短期大学から四年制大学へ

濹澤 しかし、唯一問題だったのは、ここには短期大学があつた
んです。短期大学というのは、私はレゾンデートル「存在理由」
が無くなったものだと思つていました。特に女性の短期
大学というのは害あつて益なし、と思つていたんですね。基本
的にあまり勉強しないという人が入つてくるわけだし、お嫁さん
に行くためのフィニッシング・スクールみたいなものでしょう。二
十年ぐらい前までは、女学館の高校生もずいぶんたくさんその短
期大学に行つていたので、それなりに意味があつたんでしようが、
最近ではほかの大学に全部落ちたという人だけが来るという状態に
なつていました。そうすると、よそから連れてくるわけでしょう。
町田にあるんですが、その周りの高校のお嬢さんに来てもらつ
て。あまり程度がよくない。それから女学館らしい生徒がいなくて
すね。先生のほうも、どこから来たのかわからないけれど、あまり
女学館的な先生がいない。これはやめた方がいいと思つたのが間
違いの元で、それから先のこととはあまり申し上げる気がないとい
うか、申し上げない方がいいと思つたんですね。

伊藤 だいたいどこでも短大は四年制にするかつぶすか、とい
うことですね。

濹澤 ですからうちは四年制にしようと思つて、したわけです。
それで事実、四年制大学になつたんですが、私が願つていたよう
な四年制大学にはならなかった。私は非常に小さくて、小振り
で、国際的で、アメリカやイギリスやシンガポール大学とか、一番
いいところに行つて、本格的な女性リーダーになるような人を育て
る、就職なんかどうでもいいから、ちゃんと勉強させてやつたら
どうですか、と思つた。自分はまだあまり勉強しないから偉そう
なことは言えないけれど、勉学の意欲がある、そういう志のある子

を集めて、小さい学校にして、外国人の先生を主体にしてやろうと思っていたんですが、結局、雇用問題にぶつかると短大の先生をどうするかということになるわけです。辞めてもらわないと――。

木全 理事長はこう考えているわけです。短大は世の中で存在意義、価値がなくなってきたから、それはやめにする。やめにするということは、そこで働いている先生方（職員の方は別ですが）は全員辞めていただく。辞めていただくといっても困るでしょうから、再就職するにあたっては、普通の退職金ではなく、そこからこのものはきちんと差しあげて、去っていただく。しかし四年制の少数精鋭の素晴らしい女性を育てる大学をつくったときに、短大の先生が堂々と対等にオファーしてくださって、その中で通ってこれれば、四年制大学の教授・助教授たるべき方はもちろん採用しますし、それが結果的に短大の先生方で全部占められても構わない。ということで、世の中当然その考えが通用すると思っていたのが、全く通用しなかったということです。

伊藤 いま石原「慎太郎 東京都知事」さんがそれをやろうと思っている（笑い）。

武田 わが母校「東京都立大学」で同じことが起こるかもしれません。

澁澤 やろうと思っている人はたくさんいるんだけど、やれないですよ。

伊藤 都立大学とかではやるつもりですよ。大紛乱ですからね。

澁澤 これは先生方の方がよくご存知のことで、私がとやかく言う必要は全くないことです。ともかくそれで非常に難しくなってしまうんですね。

伊藤 でも結局、四年制にはなったわけですね。

澁澤 なりました。なりましたが、いまの四年制の形では、短大の先生が全部入っているわけですから、短大と同じぐらい大きく

しなければならぬんですね。

木全 クビが切れない。

澁澤 教員のクビも切れない。ということは、学生をたくさん採らなければならぬですね。もともと来ないところに、今まで以上に採るということはできないですね。ですから、いま定員の充率六〇％ぐらいしか来ていないと思います。まだ二年しかやっていませんけれどね。このままでは、私はつぶれちゃうと思います。つぶれるなら早くつぶした方がいいと思うし、あるいは全然違うことを考えようなんて思っているんだけど、そういうことを言うと、いろいろ混乱しますからね。

伊藤 これは最後は理事会問題なんですね。

澁澤 ええ、理事会が決めなくてはいけない。

木全 いままでのお話のあいだで、さらに重要だった要素があるんです。もちろんこれは書いていただかない方がいいのかどうか、あとで判断するとして、理事長は優秀な外国の先生をいっぱい連れてきて、いわゆる国際的市場で働ける人材を育てたいということですから、本当にアメリカに行かれて、いろいろな方とお会いになって、素晴らしい人材、集団を考えられた。そのほとんどが、文部省の大学審査会を通らない。資格の問題とかなんとかですね。

武田 ええ？ なんて通らないんですか。

澁澤 それは本当に文部省が通さなかったのか、あいだでそれをやっていた人たちがそういうふう考えたのかもしれないけれど。

木全 フイクサー「まとめ役」たちがめちゃくちゃだったのかもしれない。

澁澤 私が聞かされた理由は、例えばPhDは持っているても、教育経験が少ない、とかですね。私は若ければ若いほどいいと思っ

ているわけですよ。若いお嬢さんの相手をするんだから、それは立派な大学者も欲しいけれども、若くて生きのいいお嬢さんで、

PhDを取ったばかりという人でもちっとも構わない。どうせアメリカの場合、PhDを取ったばかりといっても、何か職業経験がある人が多いからね。黙ってPhDを取ってきたという人は少ないし、それなりに意識もあるし、日本に来ようというような人はそういう考えを持っている人が多いからね。ずいぶんインタビューをして、とても素晴らしい人がいたけれど、みんな断わられてしまった。それでも少しは採れたんですが、採れば採るほど経営が難しくなるというジレンマになるわけです。それはずいぶん安い給料で採ったことは採ったんだけど、とてもやっていけないということで、いま困っているんです。これを決めるのは理事会ですが、私は今度辞めるんです。

木全 (笑い)

伊藤 理事長を、ですか。

濫澤 ええ。このあいだ九月の理事会で、十二月三十一日に辞めます、と言ったんです。というのは、私が理事長になったのは十年前の一月一日なんです。もう十年もいるんです。長く居過ぎですね。年齢も相当になったし、ここで辞めます、と言ったんです。それから理事懇談会とかいうのをつくって、ちよろちよろ話し合っ、次の理事長を誰にするか、やっていますよ。それは私の知ったことじゃない、どなたでもお選びになったらいいでしょう。ただみんな心配なのは、それじゃこれから学校をどうするかということなんです。中学、高等学校はともうまくいき始めているんですよ。勘定もうまく合っているし、応募者の数も多いし、国際学級とかいう珍しいエクスペリメント「試み」も始めている。

伊藤 その国際学級というのは何ですか。

濫澤 来年から始めるんですが、中学一年生を三十人とか四十人採るといつているんですが、韓国人も採る、中国人も採る、日本人はもちろん採る、それから帰国子女を採る。半分英語、半分日本語みたいな学校をつくるというって、いまやっているんですけれ

どね。うまく行くといいなと思っていらっしゃるんだけど、私は国際化でさんざん失敗したから、そう簡単にうまくいくかねえ、と思っている部分もありますけれどね(笑い)。それは先生たちの抵抗が激しいですからね。なかなか大変だと思えますが、うまく行けば結構だと思います。商売がうまく行けば、先生たちも了承するかもしれませんね。

伊藤 それはそうでしょうね。

濫澤 どうなるか知りませんが、それに私は関わり合う気はないんです。もうくたびれたということで、十二月三十一日に辞める、と言った。三月までいる、というお話もあるけれど、三月までならいてもいいけれど、それ以上は絶対に御免だと言っているのが現状です。だからこのお話をしてもあまり意味がない。

伊藤 いや、意味がなくなはないですよ。

濫澤 女学館の生きて動いている組織について、特に辞める立場の人間がとやかく言うのはあまり格好良くないからね。そう思っているんですけれど。

伊藤 学校経営というのは難しいことだと思えますね。

濫澤 私のようないい加減なことばかりやって来た人間には、組織の中でやるというのはできないですよ。

武田 いや、そんなことはないですよ。

伊藤 たしかにいままでのお話を伺っていると、組織なんていうことはあまりお考えにならない社会で生きておられたということばかりですけれどね。

木全 だからいいんです。

伊藤 だけど、伝統的な日本社会のシステムの中でうまくやっついこうとしたら、大変ですね。

濫澤 それはもし、私が女の子の教育に本当に命がけで、「日本」女子大の成瀬「仁蔵」先生のような意識を持っていれば、それはあるかもしれないけれど。そう言っは悪いけれど、それほど女

の子は好きでもないのに、使命感はあるけれどそれに命を賭けるとか、それがないと生きた心地がしないとか、そういうことではないんですね。仕事としては大事なことだと思ってるし、もし必要なら一所懸命やりますよ。しかしやってもできないというのに、無理していることはないだろうというのが、いまの心境です。それに第一、歳をとりましたしね。六歳から十八歳ぐらいの女の子の学校を、八十歳のおやじがやるなんていうのはどだい間違っているという感じが非常にしますね。三、四年前から辞めたかったですね、なんだかんだ残っていましたけれど、今度こそは、ということですよ。

■女子教育機関の存在価値

伊藤 ほかでもそうですが、女子大の学長は女性がなっているところはあまりないですか。

澁澤 日本女子大が卒業生ですね。

木全 昭和女子大。

澁澤 昭和女子大もそうですね。

木全 津田塾もそうですね。

佐藤 お茶大もそうですね。

澁澤 そうであるべきなんです。

佐藤 「お茶の水女子大の場合は」百二十年にして、ようやく。

木全 やつぱりそれは官だからよね。

伊藤 そうですね。でも官だからやりやすいこともあるんですよ、逆に言えば。

澁澤 あるんです、そうなんです。

木全 踏み切って前例ができると、簡単に流れ出すんですからね。ね。

澁澤 まあ、ここだってできないことはないでしょうけれどね。

しかしまた女性が一人でここに飛び込んできて、やるのも大変だろうと思いますね。それはお気の毒ですよ。

伊藤 そうですね。また女性と女性の関係というのも、また難しいことですからね。

木全 そう簡単に、あなた、おっしゃらないで。やりようがございますので（笑い）。

伊藤 いや、そういうことを引き出そうと思って言ったんですよ（笑い）。僕もちよつと悩まされているところがありました。

木全 あら、そうなの（笑い）。

伊藤 女性が集団をなしたときに、それを率いていく女性の大変さはわかりますよ。

澁澤 それは男だって同じですよ。

伊藤 でも男は多少許されるところがあるでしょう。

木全 しかし、女性の集団って教員とかなんとか、このスタッフは男ばかりなんですよ。

澁澤 ここで議論してもしょうがないですよ。

伊藤 「木全氏に」スタッフが、ですか。

木全 教員も幹部もみんな男ばかりだから、女性を率いる組織じゃないですよ。

伊藤 先生はだいたい男なんですか。

木全 もちろん女の先生もおられます、卒業生もおられますが、幹部と称するポストには、百年間「女性は」皆無ですね。

澁澤 教頭とかなんとかには、ほとんどいないですね。とても古いところですよ。私はくたびれました。

伊藤 「木全氏に向かって」「澁澤氏の言うことを」黙って聞いていて、いいわけですか。

木全 いいですよ、もう（笑い）。

伊藤 もうしょうがないだろう、ということですか。

木全 いや、ただそれだけの理由じゃないと思いますけれど。

濫澤 (笑い)

木全 しかし、やはりあまり生々しくて、お話は絶対にできないわねえ。

伊藤 わかりました。あまり突っ込まないことにしましょう。

濫澤 それは誰が悪いとか、いろいろな話になってしまいますからね。とてもその話はしないし、私がするべきことではない。もう五年も経てばいいかもしれないけれど、いまは勘弁してください。

伊藤 だけど、女子大というのは、ちょっと変な存在だと私は思っているんですよ。女性だけの――。

濫澤 いや、私はそう思っていないですね。女性だけの学校というのは非常に価値があると思います。

木全 いままでこそ価値があると思いますね。

伊藤 それはどういう意味ですか。

木全 というのは、いままでは男の人がググッと引っ張っていつて社会がうまく行っただけでしょう。ところがこの十五年ぐらいはうまく行かなくなりました。ところがふと気がついてみたら、日本の女性の能力をほとんど活用していないじゃないですか。唯一残されている「untapped resources」[未開拓資源]です。言い方を換えれば、日本の「最後の切り札」になるかもしれません。そのため、リーダーシップを身につけた人材を育成しようとしたときに、私たちのような男女共学で育った女性には、リーダーシップがほとんど備わっていない。男にやらせればいいから。ところがこの東京女子館を見ると、小学校から大学まで女性ばかり。一から百まですべてのプロセスを女性がやる。大変なリーダーシップが育っているんです。あとはそこで意識改革をして、あなた方は社会を引っ張っていく人の配偶者になるのではなく、あなた自身自身が引っ張っていくのよ、という問題意識に切り替え、みんながそうだとしたときには、大変な力を発揮すると思います。そう

いう意味で、今日こそ女子教育機関の意義を私は大変感じています。新しい発見ですね。

伊藤 そういう女性の中だけのリーダーシップで、男をどうやって御していくのかな。男も含めて。

木全 あまり男・女と考えるのではなく、女性の能力を男女で構成される社会で活かしていくということですから。

伊藤 女性だけの社会だったら、それはいいですよ。だけど男女半分ずついるような社会でリーダーシップをつくっていくことになったら、男がいるところでないと。

木全 例えばこの高等学校を卒業して、あるいは大学を卒業して、男女の社会に身をおいて、みなさん驚きを感じるんです。どいういう驚きかというと、何か女の人にむかうと特別に優しくするとか、特別扱いにするとか、男・女を意識することなく淡々と生活してきた彼女達にとっては、異様な側面で驚いた、ということなんです。

武田 よくわからないな。

木全 日本の社会で、新しい業を起こしてビジネスで社長をしている人、起業家は大半が女子校の卒業生ですね。東京大学の卒業生で、企業の経営者なんていうのはゼロ。

伊藤 あそこから企業の経営者になる人は、そもそも少ないですからね。

木全 男の人も「起業家になる人は」ないですけどね。

伊藤 ないです。だいたい役人になるのが多いですね。

濫澤 アメリカでも、統計を取ると、女子大学卒業者のほうが例えば理科系のPhDを取る人の数が多いというようなことはあるみたいですね。共学だとしても、男のほうが理科系のもは頭がいいように見えるから、先生がそれをreinforce「補強」するということですね。おまえは、できるからという。そうすると女は、あいつにやらせておけということになる。

木全 「自分は」駄目だみたいな――。

澁澤 女は駄目だとは言わないんだけど、どうせ面倒くさいから、数学はあいつにやらせておけ、というふうになるということが書いてありますよ。私も女子校をやっているから、ちよつとそういう文章をとことこ読みましたけれどね。それからいまセネタ―「上院議員」だとか、ヒラリー夫人を初めとしてやっている人には、女子大学の人が多いですね。ウエスレイとかスミス・カレッジとか、いい学校がありますね。アメリカは一時、男女平等、人種差別撤廃ということで共学になった学校がたくさんありますが、最近逆に、女は女と戻しているところもあります。

伊藤 あれは性差別はいけないとか言っているんでしょう。

澁澤 言っていますけれども、やっぱり女性も女性のほうがいいと思っている。しかし、それは日本の女子校がそういうふうに通営されているということではない。

木全 日本の場合はそうではなくて、男性が経営しているから。

澁澤 男性が経営して、非常に古い縁縁の中に女性を収めようとしているんですから、そういうのはよくないですね。でもその話は、あまり大して意味がないことで、よくわからないことです。

伊藤 それじゃあ生々しいところに行く前で終わりにしておきます。

澁澤 はい、ありがとうございます。助かります。

■澁澤財団理事長とつて

伊藤 それでは澁澤財団、竜門社のお話ですが、これは私もホームページを見ましたら、大変お金持ちの財団のような印象でございすが、そうでしょうか。

澁澤 はい、お金はあるんですね。非常にたくさんあるんです。私がいままでやった仕事では一番お金がありますね。大変喜んで。

伊藤 そのうちにたかりに行きますので。

澁澤 たかつていただけるような仕事をしようと思っっているんです。

伊藤 こういふ「オーラルヒストリーのような」仕事でたかりに行こうと思っっているんですよ（笑い）。

澁澤 ここは初めはお金が全然なかつたんですけれど、いまから十年ほど前に澁澤栄一の持っていた土地を北区が買ったんです。そして公園にしたんです。だからわが財団は土地をすべて失ったわけです。北区が飛鳥山公園を拡張したんです。パブルで各自治体がやたらとお金を持っていて、北トピア「ほくとぴあ」とかいふべらぼうに大きな建物を建てたりしたんです。そして飛鳥山公園の整備を図って、三つの博物館をつくったわけです。紙の博物館、北区飛鳥山博物館「三つ目が澁澤史料館」。それで澁澤栄一が持っていた庭の部分があつたところが、百十億か何かで売れたんです。

伊藤 それは誰の名義だったんですか。

澁澤 財団の名義です。財団がそれを濡れ手で粟でもらつたわけです。あれは所得税はかからない。財団、公益法人は資産売却については「税金が」かからないんですね。さつき言ったように、収益事業をやればかかりますが、そうでなければかかりません。

伊藤 じゃあ、キャッシュフローというのではなくて、キャッシュユがボンとあるわけですね。

澁澤 まず第一にあつたんです。それまではあそこは、旧第一勧銀が一所懸命世話をしていたんですよ、お金がない頃も、出向社員を出していた。それでなんとか続けていたわけです。

伊藤 昔の第一銀行のつながりですか。

木全 そうです。

澁澤 彼らにしてみれば姥捨て山みたいなもので都合がいいし、それで続けてきたんです。ところが百億入つたものだから、目を

白黒させて、どうしていいかわからない。

伊藤 銀行屋がそんなわけではないでしょう(笑い)。

澁澤 銀行員の考えるのは、定期預金にしようとか。

武田 あまり面白くないですね。

澁澤 それで膨大な定期預金を持っていたんですよ。

木全 十年前の利子のいい頃ですね。

澁澤 そのころ私は理事でしたからときどき行きましたが、彼らがくだらんことをやっているからあまり興味がなかったんです。

ところが第一勧銀が大汚職事件を起こしたわけですよ、総会屋との癒着。それで頭取さんが自殺をしたりしましたね。これはいい人で、お気の毒だったんですけれどね。そういうことがあって、第一勧銀の人は総退陣をしたわけです。それで、私はまだポートルランドにいたときなんだけれど、電話がかかってきて、「きみに理事長をやってもらわないと、ほかに人がいないんだ」ということを第一勧銀のリーダーが言ってきたわけです。それは私も澁澤栄一のひ孫でもあるから、そういう引っかけりもあると思って、「やつてもいいですけど、いまはとりあえずアメリカにいますからやれませぬ。」「私が」帰ったときに理事会でも開いて、そのときまで「あなたたちが」その気ならおやりください」とか言っていたんです。それで十一月だったか、帰ってきたんです。

伊藤 それは何年ですか。

澁澤 九七年(一九九七)ぐらいだったと思います。

伊藤 じゃあ、そんなに前じゃないですね。

澁澤 それで理事長になっちゃったわけです。そのときは、下にいる人はみんな銀行の人ばかりで、そういう顔をしているから、面白くも何ともないし、そこに座っていればいいんだらうみたいで思っていたんですけれど、そんなにお金があるのに何もしないでいるのは、社会に対する反サービスだと思っちゃったわけですね。

伊藤 これも公益法人なんですか。

澁澤 公益法人です。文部省の公益法人です。それで定期預金に入れていましたが、そのころはまだ金利があったから、毎年何億と増えちゃうわけです。(一同笑い)

武田 増えちゃうんですか(笑い)。

澁澤 いまは増えませぬよ。いまはよっぽど工夫しないとね。

木全 でも十年前に預けているのは、いまでもその利率がずっと続いていますから。

澁澤 定期預金は続かない。

木全 定期預金は続いているじゃない。

澁澤 続いているのはいくつもありまして、東京都の都債なんかで、四・六%の「の利息」で来年まで残っているのもありますけれど、しかしそれは二十億円ぐらいのもので、大したことはない。

伊藤 いやいや(笑い)。

澁澤 それ以外の大部分は定期預金だったからね。しかも去年か一昨年か、定期預金は保証されないということになったでしょう。だからあわてて、それを全部社債や何かに変えたわけです。でも銀行員のやることですから、きちんとやりますから心配なこととはなかったんだけど、馬鹿な話だな、と思っていたんです。

それでも毎年二億円やそこらはできますからね。じゃあ何かやろうよ、ということですが、私にできることは国際化しかないじゃないですか。それで、澁澤栄一だつて日米関係とか日中関係に興味があつて一所懸命活躍したんだから、いま生きていたらどうしただろうと思つて、「澁澤国際セミナー」というのを立ち上げたわけです。アメリカ人とかカナダ人とか、そういう人たちを呼んでくるのは私の得意中の得意技ですからね。それで慶應のある学者に研究部長になつてもらつて、その人がやつて、今年で四回やりました。

テーマとしては、日米関係とか金融ですね。特に郵政の問題とか、金融リストラチャリングとか、女性問題とか。たまたま私が

女学館にいたこともあって、女性問題とか、そんなことを次々とやりました。それで各国の人が論文を書く。最近は少し大がかりにして、二年ぐらいお金を渡して論文を書かせて、それを合わせてかなりサブスタンティブなものにしてもらって、その大会をやって、直して本にするということで、去年のものはもうじき、日本語ではNHKで出版されます。英語ではアメリカの大学で出しますけれどね。

伊藤 それは何というタイトルですか。

澁澤 忘れちゃいました。何というタイトルか忘れましたが、そういうことをやっているんです。でもそれは片手間ですね。一年に一回しかやらないし、僕自身は別に研究するわけでも何でもありません。やりましょう、やりましょう、ということをやっていたんです。今年になって、とんでもないことを発見したんです。

木全 それが、ここを辞めたくなった理由の一つです（笑い）。

澁澤 それは前から辞めたかったんです（笑い）。

■父、敬三の夢を駆け継ぐ

澁澤 澁澤敬三という人は民俗学の研究家で、民具の蒐集では日本でも有名な人なんです。いま大阪の千里万博「記念公園内の民俗学博物館にある」基礎資料は、澁澤敬三が集めた二万点の民具です。

伊藤 民博ですね。

澁澤 民博です。あの人は大蔵大臣をやったりしたけれど、そこはあまり好きじゃなかったんですね。文化人類学、民俗学という学問のほうがいいですね。しかし民具のほうで非常に有名だったんですね。私は気がつかなかったんですけど、その人が戦争になる前、昭和十年代に澁澤栄一が死んでから、澁澤栄一の遺徳を顕彰しようということで、二つのことを考えたんです。一つは伝

記資料を出そうということです。これが『渋沢栄一伝記資料』という膨大な、五十何冊のものです。

伊藤 僕らはずいぶん使わせてもらいました。勉強のためには絶対に必要でしょうね。

澁澤 便利なんですよ。ちょっと間違っているとこもあるという話だけれど、非常にいいですよ。ああいうことをするのが敬三の哲学なんです。自分で学問をして結論を言うのではなくて、学者に資料を提供するということが、民具蒐集も全部そういう意識で貫かれています。その一つが伝記資料で、もう一つは「実業史博物館をつくらう」ということなんです。澁澤栄一が旗を振って、銀行をつくったり、いろいろな会社をやったり、それは大した活躍であったに違いないけれど、それを草の根で受け取って、変革に対応して日本を近代化していた人たちがいるに違いない。事実いるんですね。その記録をしらみつぶしに集めてしまえ、ということになったんですね。まず一つは錦絵ですが、あの頃の錦絵にはすごく面白いものがあるんです。できたばかりの鉄工所だとか、繊維工場だとか、日本人は好きなんです。博覧会というって殖産展覧会みたいなものを作るんですね。

伊藤 勸業博覧会みたいなものもありますね。

澁澤 そうそう、それを一つやると、各県がやり出すんですね。そういう資料はやたらとあるんですね（伊藤 あります）。絵も描いてある。絵だけでも千枚近くあるし、広告の史料もある。

そういう実業史博物館を作ろうと思っていたんですけど、できなくなりました。その趣意書きがこれなんです「資料2「一つの提案」。なかなかいい文章で私は感心したんですけど、そこで集めたものがたくさんあるんです。こういったものですね。「企画展・日本実業史博物館をつくりたい!!」のパンフレット「表紙」資料6」を示しながら「地図とか、日本の金融地図というのがあってですね、明治三十四年（一九〇一）ですね。それから青森県の物産展。

これは足尾銅山ですね。これが公害を垂れ流したとってあとで怒られるわけだけれど、こういうことがある。それから写真もいっぱいあるわけです。

伊藤 よく集めましたね。

濹澤 量がすごいんですよ。

武田 きれいな写真ですね。

濹澤 きれいでしよう。写真ができる、錦絵はなくなっちゃってますね。錦絵のほうが非常にインプレス「印象的」なんだけれど、嘘も描いてあるところがある。写真はつまらないけれど、本当のことが出ているということもありますね。それから、こういうものがいっぱいあるんです。「前掲パンフレットの商業器具を示しながら」これはお茶屋さんの看板で、これは秤ですね。

伊藤 こういうものは、田舎に行くと、まだあるところがあるんです。

濹澤 ありますね。それから根付けだとか、お菓子の型だとか。

伊藤 これは民具になっちゃいますね。

濹澤 これは民具に近いけれど、やっぱり実業ですね。濹澤敬三は、戦争になったのでこれらがあるところに置いておいたんだけれど、戦後、自分ではとても管理できないので、文部省に寄託したわけです。初めは寄託で、あとで寄贈しました。それで、戸越にある文部省の国文学研究資料館史料館にあるんです。それをこのあいだ見に行って、私はぶったまげたわけです。こんなすごいものがあるのか！と思ってる。その数が膨大なんです。

伊藤 これはいま公開しているんですか。

濹澤 公開していません。頼めば見せてくれる。でも、看板だとか商業器具だけでも五〇〇〇点もあるんですね。それから書籍は竹森文庫を買い取って、二四八四点あるし、地図が三六〇枚もある。それから番付というのが日本人は大好きなんです。伊藤 なんでも番付をつくりますね。

濹澤 牛乳屋の番付なんかあるんですね（笑い）。

武田 見てみたい（笑い）。

濹澤 そういう番付が二五七枚もあるんです。とにかく大変な史料なんです。しかも、文部省の資料館は今度独立行政法人になる。そのためには、何を持っているかちゃんとしておかなければいけない。できればそれを公共の用に供さなければならぬ。だから、こういうもの「前掲パンフレットに写真が載っているような史料」を全部デジタル化したんです。それはほとんど完成したんですね。しかし、これを集めたのは濹澤敬三だということを、いまあそこいらつしやる方たちはご存知だから、じゃあ濹澤史料館と一緒にやって、これ「日本実業史博物館」をやりましょうということになったわけです。

それで来年の九月にはミズーリでマーカントイル展覧会というのをやるんですね。なぜ来年かという、ちょうどミズーリで万博みたいなことをやってから百年なんだそうです。万博というほど大きいものかどうか知りませんが、博覧会ですね。それを記念して博覧会をやることになっていたんです。それに日本のこれを持っていて、十九世紀後半から二十世紀にかけての近代化のプロセスを比べてみようじゃないか。日本はだいたいアメリカとかヨーロッパの真似をしていることになっているけれど、こういうものを見ると、必ずしも真似ではない。真似も多いけれど、真似でないものもたくさんある。彼らよりもずっといいアイデアもたくさんある。それを見せる、ということになっているんです。

■実業史研究情報センター設立へ —データベースによる学問提供—

濹澤 それを皮切りに、こういう事業を始めようと考えているんです。『第一期五ヶ年計画—「啓蒙」から「参加」へ—』を示す（資料5）。まず、「社史」というものがありますね。これが

何万冊とあるんですが、みんな勝手なことを書いていて、本当か嘘かわからないものもあるけれど、しかし基本的なデータはそう間違っていないですね。人の名前もいつばい出てくる。これを全部データベース化しよう。そして何の誰兵衛が織維会社をつくって、それはどういう関係で、銀行とどうなっていたかというようなどが一目でわかるようにする。最近はそのような処理が発達しましたからね。それから「実業史錦絵データベース」ですね。これを全部デジタル化する。まだ神田あたりに行くと売っているですね。それも、いい物があれば買い込む。

伊藤 市で売っているわけですか。

澁澤 売っているらしいですね。僕はあまりそういうのはよく知らないけれど。

伊藤 古書店の展示会に行くと、あるんですよ。

澁澤 それを組織的に集めると大変なことですね。

伊藤 組織的に集めるなんていうと値段が上がるな(笑い)。

澁澤 少し買っておきますか(笑い)。それから「実業人データベース」ですね。それから「実業関係資料館データベース」。いろいろな資料館があるんです。紙の資料館とかですね。そのデータベースを一括してつくる。それから「博覧会データベース」。博覧会というのは非常に面白いもので、産業振興のためにやっているから――。

伊藤 これは公文書館にもあるし、各府県の文書の中にもたくさんありますね。

澁澤 この財団はたまたま全国に支部があるんです。澁澤栄一を慕っていた人たちがつくった支部が、いまはだいぶみんなへこたれているけれど、あるんです。そういうところに当たって、こういうデータベースをつくる。それから「モノ資料データベース」、いま見たようなものですね。そのほかいろいろなことをやろうというところで、最後に「学習キット」まであるんですけど、これ

は博物館の商売です。いずれにしても、これを五年間でやろう。今年準備をやって、だんだん公開できるようにしたら順次していこうということなんです。おととい「十月二十七日、澁澤青淵記念財団竜門社の」理事会があったんです。そこで、これを五年間で八億から十億かけてやろうということを議決したんです。「評議員・理事の皆様」(↓資料3)、「実業史研究情報センター設立趣意書」(↓資料4)」

伊藤 抵抗はなかったですか。

澁澤 全然ない。みんな非常に感心した。

木全 理事さんの年齢構成はどうなっていますか。

澁澤 理事ですか。諸井虔とか、服部礼次郎とか、福原義春とか、そういう連中です。

木全 けっこう高齢の方ですね。

澁澤 ご高齢ですよ。でも僕よりは若いですけどね。それで決まったわけです。それから、国際文化会館にいた小出いずみさんという素晴らしい方がいるんですね。ご存知ですか。

伊藤 名前だけ知っています。僕もあそこにとさどき行っていましたから。

澁澤 その人が今度辞めたんです。辞めてふらふらしていたので、もらっちゃったんです。十一月に実業史研究情報センターというのを拵えるので、彼女はセンター長になるんです。

伊藤 それは財団の中ですか。

澁澤 財団の中です。

木全 いいですね。

伊藤 それは早速行ってみないと駄目だな。小出さんちょっと話してみよう。

澁澤 小出さんは、このデータに関しては知っている人がたくさんいるんですよ。それで工業倶楽部とか経団連には社史がごっそりあって、それをまた研究している女性がいるんですよ。だけど、

データベースをつくと金もかかるし時間もかかる。なかなか人を雇ってつくることはできないから、やれないでいたわけですね。でもそれをやるうということになったわけです。由井常彦さんという経営史の大家がいらっしやるでしょう。前から私はよく知っているんですが、その方に理事になつてもらったんです。これもおととい議決したんですけれどね。由井さんにこの話をしたら、もう驚喜したんですね。

伊藤 それはそうでしょう（笑い）。由井さんはそういうことをやりたかつたのですね。

澁澤 そうなんです。由井さんはこういうことをやりたいんです。これをやってくれたら、日本の百年のためにいい、という話になったわけです。

伊藤 やつぱり「女学館より」こつちのほうがいいですね（笑い）。

武田 これはすごい。面白いですね。

木全 前向きですからね。

澁澤 これをやるということで、私が自分でやるわけではないけれど。それからもう一人、小林昭夫というコンピュータの大家を雇ったんです。NIRAは、このごろCDで出版していますが、この人はそこで下河辺「淳」さんの論文集だとかをつくつたりしている方なんです。それから国際交流センターのコンピュータも面倒を見ている。コンピュータというのは、本当に大がかりになるとエキスパートがいないとやれないですね。ウイルスも入つて来るし、やり方も日進月歩で変わりますからね。このごろ、こういうもの「錦絵、器具など」を見せるソフトはすごいのがたくさんあるんですね。ひっくり返ったり裏を見せたりする。そういうことはわれわれにはわからないけれど、小林さんという方と契約して、やることになったんです。それから、史料館の学芸員も一人、二人増やすということになって、いま始めているんです。そこで、運用資産は百二十億ぐらいですから、いまの金利では

駄目なんです。最近外貨運用も始めましたし、運用のエキスパートを顧問にしてやり始めています。このあいだドルを買ったら損しましたけれどね。急に「円・ドルレートで円が」十円も上がっちゃって大損したけれど、しかしそれは損とは言えない。簿価が下がったというだけですね。

伊藤 長期的に見る以外にない（笑い）。

澁澤 それでも、変な社債を持っているよりも、アメリカの国債は四・五%ぐらいになりますからね。このあいだ二十億ぐらい買ったんだけど、やつぱり八千万円からできるんですね。しかし円が上がると一億何千万と損しちゃうのね。痛し痒しだけれど、放っておくよりはいい。

伊藤 円にしなければいいわけですからね。

澁澤 だから僕はもつと買おうと言っているんですね。「一ドル」百円になったら、もう二十億買え、とか発破をかけているんです。

武田 二十億買え、というのはすごいですね。

澁澤 だってこれをやるには金利収入がなければ困るんです。でもおとといの理事会では、元本をつぶしても、これは大事なことからやりましょう、たぶん回収不能なほど元本が減ることはないでしょう、という理屈をつけて、OKを取ったんですけれどね。

伊藤 これは面白い。話に乗りたいたいぐらいだな（笑い）。

澁澤 これは僕は絶対に評判になると思う。NHKが来年明治のプログラムをやるんです。もうすでに『洪沢栄一伝記資料』のデータベース化をやっているんですよ。この錦絵なんかには、彼らは飛びつくと思う。そういうふうにして、だんだんこういう仕事をしようと思います。そうすると私も長い人生でありましたけれど、最後は祖先の仕事を受け継いで――。

伊藤 澁澤家に戻るといことですね（笑い）。

澁澤 戻るかどうか知らないけれど（笑い）。そういうことにな

つたらどうか、と思っっているところですよ。

伊藤 これはちよつと興奮する話ですね。僕らも似たようなことを考えていたわけですから。

武田 由井先生が驚喜するのもよくわかります。

伊藤 由井さんは三井文庫の館長をしているでしょう。僕は三井文庫の評議員をやっているものですから、ときどきお会いして、まだ原稿を頼んだりしているんですよ。彼もいろいろやっているけれど、三井文庫なんて、館長をやったって思うようにいかないじゃないですか。

濹澤 そうそう。フラストレイトしている。

伊藤 だから驚喜するのは当たり前だと思いますよ。三井文庫の評議員会に行つても――。

濹澤 硬いでしょう。

伊藤 硬いですね。これはお役所か、と思うような感じですよ。

濹澤 わがほうは、僕が行つてからみんな顔つきが変わつてきましたよ。銀行員は少しずつ減つてきた。

伊藤 これは面白そうだな。これ「第一期五ヶ年計画」はいただけですか。

濹澤 どうぞ、差し上げますよ。

伊藤 これは冊子の中に入れよう。

■今後の濹澤史料館

濹澤 このあいだの理事会で、これをパワーポイントでやったんですよ。「濹澤敬三の夢・青淵翁記念実業史博物館」と題したパワーポイントのスライド一覧を印刷したものを示す。こういうことをやるんですよと云つて、錦絵も二、三枚見せて、ちよつと食欲もそつたんです。

伊藤 いま僕らは、人物資料情報事典という事典をつくつている

んですよ。

濹澤 人物というのは大事なんです。

伊藤 その中にはもちろん実業家もいるわけですが、実業家というのは意外と資料がないんですよ。政治家とか役人とか学者というのはあるんですが、実業家は本当に少ないですね。それでこの前、木内「孝」さんに頼んで、濹澤敬三の資料がどこにあるか聞いてちよつだいといつて、それで聞いたんですよ。このあいだ、あの人に書いてもらつたんです。いまはもう校正に入つております。

濹澤 いや、これはやめられないです。

伊藤 しばらく濹澤さんのところに日参するかな（笑い）。

武田 濹澤史料館にある史料だけではなくて――。

濹澤 ええ、もうどこにあるものでもやります。

伊藤 あれは広がるインデックスみたいなものですからね。濹澤さんが関わつたいろいろな会社で、会社の役員になつた人たちをずっと追いかけていけばいいんですよ。

濹澤 そうなんです。今度工業倶楽部の新館ができて、あそこにも相当資料があるんですよ。あるんだけど、ただあるというだけで、どうにもしようがないんですよ。お金とやり方がわかれば、やれるんですよ。生資料ではなくて、みんな印刷したものです。生資料もあるのかもしれないんですが、よく知りません。あそこも由井さんが手伝つてらつしやるんですよ。

伊藤 そうです、それは由井さんから聞きました。

濹澤 そういうわけで、私もいよいよ女学館を離れて、こういうことになりました。

伊藤 それは結構です。

木全 「伊藤氏に」さつき、「いいんですか」とおつしやつたでしょう。わかりますでしょう。もう、よっぽど生産的です。それはその通りだけれど――。

伊藤 だけど、ですか（笑い）。これは面白いですね。これ「実

業史博物館関係の資料」は冊子につけさせてください。

澁澤 史料館の一部なんです、青淵文庫というのがありますが、「企画展「青淵文庫」のパンフレットを示す（資料7）」。「青淵文庫の建物は」僕と同年で、七十八年前にできた建物なんです。今度それを、たくさんお金をかけて改修したんです。それで来年は重要文化財になってやろうと思って、ちよつと画策しているんです。

伊藤 会議室みたいになってるところですか。

澁澤 昔は閲覧室と称していました。澁澤栄一が蒋介石に会ったりにしていたところですよ。

伊藤 僕はなんでそこに入ったんだろうな、なぜかそこに入ったことがあるんですね。

澁澤 きれいな建物ですよ。

伊藤 ええ、素晴らしい建物ですね。

澁澤 このあいだの土曜日には、そこで音楽会をやったんです。北区オーケストラとかいう可愛いバンドが来て、やってくれたんですけれどね。

伊藤 それ自体はそんなに大きな建物ではないでしょう。

澁澤 小さい建物です。

武田 ステンドグラスがあるんですね。

澁澤 そこでやると、西洋のお屋敷で昔々のハイドンとかがきちんとやっていったような感じがするわけです。

武田 学生を連れて行くのかな。

澁澤 どうぞ。私はラッキーだと思ってるんですけど、私がラッキーというよりも、おとといの理事会でも申し上げただけけれど、七十年前に澁澤栄一が持っていたものが、誰も考えていなかったような形で現金化されるわけです。それが幸か不幸か、財団というものできちんと管理されていたわけじゃないですか。誰も盗み出すことができない。「これを日本の学問の将来のため

に活かすのが、たぶん栄一の願いであるし、敬三の願いであると思っっています」と言ったら、みんな何も言わなかったですよ。全然反対しない。

伊藤 反対しようにも、反対できなかったんでしようけれど。

■青森、小牧温泉のこと

—杉本行雄氏の思い出

伊藤 ちよつと話が違いますが、青森のほうはどういうことなんですか。

澁澤 あそこには杉本行雄という人物がいるんですが、この人は伊豆の生まれで、小さいときは非常に苦労したらしいんですね。それが十六ぐらいのときに澁澤栄一の事務所に書生として入ったんです。大した仕事はしていませんでしたが、非常に前向き的一所懸命の子供だから、みんな可愛がられたんですね。澁澤栄一は書がうまいでしょう。だから当時の澁澤栄一の事務所にいる人は、書を書かないと商売にならないようなところがあつたんでしょうね。彼は田代秋鶴という書家について習って、本当にプロ級にうまくなつたんですね。一方、禪に凝って、北条了真という大変な禪の方（学習院に北条時敬という人がいたじゃないですか。あの方の奥様ですけれど）について、毎朝毎朝、四時から六時まで参禅して、それから事務所に通つたという人なんです。禪をやるとすべてが漢文じゃないですか。だから漢文が読めるようになる。そのバックグラウンドに漢籍、東洋文学がありますね。彼はそれほどすごい大家だとは思わなければ、相当よく知っているわけです。

そういうことで、彼が二十五、六のときに、私は十五、六だったけれど、お習字を習ったんです。彼はうまいというので、家に来たんです。それで一週間に一回ぐらい教えてもらったけれど、私のお習字は全くモノにならないどころか、やればやるほど駄目

になりましたけれどね。

伊藤 そんなことはないと思いますけれどね。

澁澤 本当ですよ、いま自分で書いたものが読めないんですから（笑い）。手帳に「伊藤先生」なんて書いても、何だっけ（笑い）、ということになっちゃったんだけど、その人はすごい人で、その頃はきちんとしていて、若い侍がやっているような感じでした。ところが澁澤栄一が死んでしまうでしょう。しばらく澁澤事務所にいたんだけど、澁澤敬三が日銀に行くようになって非常に忙しくなって、身辺多忙になったものだから、敬三のセクレタリー「秘書」みたいにして家に来てくれるようになったんです。

それですつといて、いま三田の家が青森に移りましたが、その家が例えば空襲で焼夷弾を受けたりしたときに、僕のおやじと杉本さんが二人で屋根に上がって消したとかいう武勇伝がたくさんあるんです。その家は大変珍しい家で、明治十年（一八七七）か何かにできた家を深川から三田に移した。それで大蔵省の官邸になつていて、戦後の財政の中心になった。そこでほとんどの大蔵省の幹部が入省試験を受けたんですね。三島由紀夫をはじめとして、いまの長岡実とか谷村裕とか、みんなそうなんです。だからとても面白い建物になつている。それを杉本さんが十何億をかけて、青森に移したんです。

伊藤 解体して、ですか。

澁澤 ええ、解体して。大変良かったのは、大蔵省がとても一所懸命に建具を大事にしてくれたことです。彼らにとっては要らないものなんです、新しく事務所に使っているから。しかし、それをちゃんと地下室に入れて保存してくださったので、「解体移築が」できたんです。そうでないと、ああいう建具はますますつかれないですからね。それがいま観光資源になって、青森で活躍しているんです。

伊藤 青森のどの辺にあるんですか。

澁澤 三沢に、古牧温泉というところにあるんです。その杉本さんは大変な事業家になりました。一時失敗したり、大変なこともあったり、紆余曲折がありましたけれど、温泉を掘り当てたんですね。それで古牧温泉になったんです。誰も温泉なんか出ないと思っていたのに、千メートル掘ったんです。千メートル掘っても出ない。何百万円という当時としては大変なお金をかけた。出ないので、これは破産かと思っただけれど、もう少し掘ろうと言って五十メートル掘ったら、ワーツと出て来た。青森にはたくさん温泉があるけれど、浅虫温泉というのが有名ですが、浅虫温泉の全湯量よりもさらに多い量が出て来たんです。普通の平地の、鉄道線路のすぐそばですからね。それで彼は息を吹き返したんです。それでホテルを四つも造って、大きなお庭をつくって、そこにその家「三田の旧澁澤邸」も行ったんですね。彼はさらに手を伸ばして、奥入瀬溪谷に二軒のホテルを建てたんです。

実は、私は明日そこに行くんです。よく行くんです。このあいだ、その杉本さんは死んだんです。だからお通夜だ、葬式だと二度も三度も行きました。このごろは新幹線ができて、行きやすくなりましたけれどね。

伊藤 跡継ぎの方がいらつしやるんですか。

澁澤 います、長男がやっていますし、その長男の子供たちもいます。ただ借金が多い経営ですから大変だと思えますが、あれは一所懸命やる以外にないですね。やめるなんていうことはちょっとできないと思います。

伊藤 それは建物だけなんですか。

澁澤 ええ、それに澁澤栄一と敬三の銅像か何か造っちゃって、趣味の悪い話だと思っておるんだけど（笑い）。

伊藤 そのうち「雅英さんも」銅像になるんじゃないですか（笑い）。

澁澤 いや、絶対にならないです。あの二人だけです。そういう

ふうになつているので、ちよつと気持ちが悪いところもあるんですが、まあいいんです。それで変な神社みたいなものをつくったんですが、澁澤栄一は金持ちだと思われているんですよ。青森県の人がお賽銭をくれるんですね。お賽銭というものは税金がかからないんです。特別の記念日とかには一万円も入れる人がたくさんいるというんです。だから世の中、面白いものだと感心しているんですけれどね（笑い）。

伊藤 お金持ちになるための投資なんでしょう（笑い）。

澁澤 しかし、それじゃあとても足りなくて、苦勞しているはずですよ。大変な苦勞をしていると思います。だから私もできることは助けようと思つてはいるんですが、あまりできることはありませんから、助けることもないんですけど、そういう関係が青森です。そのおやじが死んだものだから、いまだどうするか大変で、私のところにいるいろいろ相談をかけてきたりするんですけど、僕は相談に乗りにくいですね。相続の問題もありますし、うっかり乗れば、大変うるさいと思つて黙つてはいるんですが、明日行けばまた聞かれると思います。

伊藤 澁澤さん自身は事業家ではありませんからね。

澁澤 全くないですね。

伊藤 お使いになるほうですね（笑い）。

澁澤 幸い、どこに行つても使う金があつたということですね。

■文化事業に生涯をかける

伊藤 いや、こんなオーラルヒストリーは初めてですよ。何かやろうと思うと必ずお金がある。

澁澤 いや、非常に苦勞したつもりでいるんですけれどね（笑い）。

伊藤 本来、これぐらい「大きく手を広げる」欲しいのが、これぐらい「広げた手をやや狭める」だという話じゃないですか。

澁澤 ときどきがつくりしちゃうって、やつぱり僕は駄目だな、なんて思つたりしておつたんですけれどね。憂鬱になつたりしてたんだけれど、このあいだの「前速記録」を読ませていただいて、僕は幸せな人間だつたんだな、と思つて感心して（笑い）。

木全 だからいまは鬱から躁になつた。

澁澤 これ「実業史博物館の夢」を見つけて躁になつたんです。

木全 だから女学館は鬱なんですよ。書きちゃ駄目よ、そんなこと。

澁澤 そういうわけでございます。そういうことで、私の人生はこれでおしまいだと思つていますが、あとはこれをやっています。

伊藤 これに生涯を賭けるんですね。

澁澤 生涯を賭けるといふ、そういう年齢でもないですし、死ぬのを待つといふことですね。定年制があるわけではないから、僕が頭が使えるうちは理事長をやつていてと思いますし、いまやつている人たちは私を大變頼りにしてくれていますから、しばらくやつてはいるんじゃないかと思つてはいますけれどね。これから新しいことを始めるとか、そういうことはないです。

伊藤 だつて、これは新しいことを始めてはいるわけではないですか。

武田 新しい大変な仕事ですよ。

澁澤 いいでしょう、この仕事は。

伊藤 いいですよ。最高だ。

澁澤 僕のやつたことで一番いいことだと思つていますよ。

伊藤 MRAよりはいいかもしれませんね。

澁澤 MRAは無理してやつていた。

伊藤 いや驚いた。最後にこれが出てくるとは思いませんでしたね。澁澤史料館はずつと前に行つたことがあるんですが、何か暗い感じのところですね。

木全 どうなさるかを今日は聞き出そうと思つてはいたんじゃない

い？

伊藤 あれをどういふふうにするつもりかな、と黙っていたんですよ。

武田 こんなにすごいことになっていたんですね。

伊藤 もう想像だにじゃなかったね。

佐藤 面白いお話、面白いお話とおっしゃっていて、最後に本当に面白いお話になりましたね（笑い）。

武田 日本実業史博物館というのは。

澁澤 これは澁澤敬三が造ろうと思って、こういうもの「実業史博物館のパンフレットを示す」も設計して、地鎮祭までやっただですが、戦争でできなくなりました。それで資料は小石川の阪谷さんという家に置いておいた。幸い焼けなかったんです。あれが焼けたら、本当に悲しいですね。民俗学のほうも、保谷のほうに置いてあった。

伊藤 どの阪谷さんですか。

澁澤 阪谷芳郎という小石川のお屋敷なんです、それが親類なんです。それを買ったんです。

伊藤 このあいだ亡くなった阪谷「芳直」さんのお祖父さんですね。

澁澤 お祖父さんです。あの人もあそこで育ったと思います。その家を買って、やむを得なければ、その家を展示館にしようと思っただんだと思います。でも戦後は自分も金がなくなっちゃったし、世の中全体が博物館をつくらうなんていう状況ではなかったから、それで文部省に寄託したんでしょう。それもありがたいと思うんですが、いまこれだけの史料を保存、管理するのは大変ですね。ノウハウも大変、金ももちろんかかる。それをお国がやってくださるわけでしょう。それで使わせてくださるというから、こんなうまいことはないと思う。

伊藤 寄託ということは、自分が所蔵者だということですよ。

澁澤 所有は文部省です。いまは国のものです。

伊藤 寄託ではなくて――。

澁澤 寄贈になりました。まあ、返せといえば、二百億円も出せば返すというかもしれないが、そんな金はありませんからね。そんなことを言う気は全くない。国が持っているだけのが一番ありがたい。

伊藤 利用できれば、それでいいわけですからね。

澁澤 国というのは、いいところもあるんですね。

伊藤 これ「オーラルヒストリー」も国ですからね（笑い）。

澁澤 よく存じております。

伊藤 情報センターというのは、博物館の機能は持たないんですか。

澁澤 そうですね。ただ、これから集めるものがあるでしょう。そういうものはどうするか、続けて寄贈してしまうか、こちらに置いておくかということがありますね。

伊藤 向こうが展示場をつくらなかったら死蔵でしょう。

澁澤 向こうはいつでも資料をお貸ししますという。だからアメリカに持っていても結構だというけれど、錦絵の一番貴重なのは勘弁してくれといっている。それは写真とか画像で行くんだと思うんですね。それが本当に途中で変なふうになると困るし。

伊藤 それはセンターで展示会でもやったらいいんですね。

澁澤 そうですね。それで、「澁澤セミナー」のほうもいまはなかなかさかんで、今度五百旗頭「真」先生に理事になっていただいたんですね。五百旗頭先生に助けていただいたんですが、二つ三つ面白いことをやっているんです。

一つは、儒教というものが明治の日本の実業家（だけではないけれど）にどういう影響を持っていたのか。儒教は何なのか、私たちにはもうわからないじゃないですか。どういうものを持っていたのか。孔子様の『論語』なんかを噛ると、妙なコンサバティ

ブな「古臭い」話しか出て来ないように思うけれど、明治の人はあれを頼りに改革を進めたわけですね。なぜだったんでしょう、というのをやりたいんです。それで関西大学に陶徳民という先生がいるんです。復旦大学から大阪大学でPhDをとって、ハーバードに行っていた方ですが、いま関西大学にいます。この人がとても洒落た人脈を持っている。中国人とか韓国人、日本人、アメリカ人。その人に三年がかりで、明治時代の儒教の意味をやってもらおうと思ってるんです。

伊藤 僕のゼミにいたドイツ人のひとで、マーガレット・メールという人がいるんですが、この人は『明治の漢学塾』という題の本を出しましたよ。いまコペンハーゲン大学の先生ですけどね。

濹澤 来年の九月に第一回の発表会を国際文化会館でやるんですが、十五人ぐらいの人が集まってやって、たぶん公開セミナーにしようと思います。興味のある方はたくさんいるみたいです。

武田 私もぜひ聴きたいですね。

濹澤 それを三年やって本にしていこうと思ってるんですけどね。少しずつ出していつてももちろんいいんですが。

もう一つは、これは五百旗頭先生が主になってやってらっしゃるんですが、戦間期の日米関係です。日本がいろいろなことをやって全部失敗して、結局駄目になりますね。それを研究しているグループがいるんです。濹澤栄一がなんとかしようと思つて、しやりきになって失敗したことですからね、それをやるのが財団としてはいいんじゃないかと思つて、五百旗頭先生のグループにお金を差し上げて、何回かセミナーをやつてまとめていただいて、これもしばらくしたら出していくという形になるかと思つています。これも面白いと思います。そのほか、郵政公社みたいな話はナウい話で、私はあまりよくわからない話なんですけど、そういうことをよくやっているアメリカ人の学者がいるんですね。日本語がペラペラで、大蔵省のやつらとしょっちゅう話し合っている。

そういう人たちのグループを集めて、そんなこともやっています。それは五百旗頭先生に指導していただいて、木村「昌人」さんという研究部長「濹澤青淵記念財団竜門社研究部・研究部長」がマネージしてやっていく。それはこれも相当関係がある話で、非常にいいかな、と思つています。

伊藤 いいところで、終わりにしましょうか。

濹澤 もうこれでおしまいです。

伊藤 最後は非常によかった。

濹澤 もう、タネがないもの。

伊藤 この資料「実業史博物館関係の資料」は最後に全部つけましょう。

濹澤 この資料は全部差し上げます。これが一番重要なものです「第一期五ヶ年計画」。これ「一つの提案」が敬三の文章でございませう。

これは鬱のほうですけど、女学館の、私がつくったミッションステイトメントです。女子教育です「21世紀の東京女学館をめざして」。

木全 英語もあつた方がいいんじゃないですか。

濹澤 最初は英語でつくったんだけど、英語はどこかに行っちゃつて、いま日本語しかない。

木全 ぜひ欲しいということであれば、英語も差し上げます。

伊藤 日本語でいいです。

濹澤 それは百十周年の時の宣伝です。このときはそれほど鬱でもなかった。

伊藤 いや、本当に長いこと、ありがとうございました。非常に面白い話です。それで、これは冊子にしますので、もう一回ごらんになりますか。それともこのあいだ手直ししたもので、よろしいですか。

濹澤 お任せいたします。今日の部分をもし拝見できれば。

伊藤 今日の分はいろいろあるかと思えますので、注意深く、それとなくお話くださればと思います。

澁澤 わかりました。

伊藤 あの時何も言わなかったというのではなくて。

木全 しかも十年間がボーンとなくなっているのは異様な感じになるでしょう。やっぱり七十何年のうちの十年は大きいですよ。

武田 逆に疑いを持たれるかもしれない。

木全 そうそう。

澁澤 女学館で悪いことをしていたんじゃないか、とか（笑い）。

木全 あとで女学館の悪いのは全部押しつけられてしまいますから、そこはきちんとしておいたほうがいいと思います。

伊藤 では最後のだけをお送りします。それから一つお願いがあるんですが、いままでの冊子は頭のところ写真載せているんです。ご自分でお好きな写真を一枚拝借できないでしょうか。

澁澤 じゃあ隣からもらってきます。「取りに行く」。

木全 かわいい写真です。だってこんな小さいお嬢ちゃんたちが

「か〜わい〜、館長先生」と言うんだから。

武田 いまのは記録に残りますから。

伊藤 永久に残りますので。これは国ですから。

武田 あと澁澤先生が書かれた本とかはだいたいわかっているんですが、最終的にそれをチェックしてもらった方がいいですかね。

木全 おわかりの一覧表を出していただいて、最後のページでもおつけただければ。

伊藤 ある程度は調べられるんですが、ああいうものに乗らない文章がけっこうありますからね。いや、本当に面白くて、最後まで最高でした。

澁澤 「写真をとって戻ってきて」いやらしい写真ですが。

木全 かわいいでしょう。

伊藤 これは何年前ぐらいですか。

木全 昨日ですよ。

澁澤 十年前です。ここに来たときにアイデンティフィケーションのために撮られたんです。それをパンフレットに全部使っているんです。

伊藤 じゃあ十年前からお歳を召されないことになったわけですね。このとき七十歳ぐらいですか。

澁澤 六十九歳。

伊藤 じゃあ「いまの」僕より若いんだ。「武田氏に向かって」

これは大事にしておいて、あなたの担当だから。あとで記念にもらうんだから（笑い）。

武田 先生にサインしていただいて（笑い）。

伊藤 そのうちにサインをもらいに来ますよ（笑い）。最高の気分のところ終わりにさせていただきます。本当にありがとうございます。

澁澤 ありました。

澁澤 ありがとうございます。大変お世話になりました。

伊藤 また、たかりにくるかもしれないませんが、その節はよろしくお願いいたします。

本冊子は、澁澤雅英氏「現財団法人MRAハウス代表理事、東京女学館理事長・館長（談話終了後辞められた）、澁澤青淵記念財団専門社理事長」の四回に亘るオーラルヒストリーの記録である。

発端を作ったのは、従兄弟でもある三菱電機顧問の木内孝氏であった。私は数年前に朝日新聞の山下靖典氏の紹介で木内氏と知り合い、氏のご尊父の「木内信胤関係史料」（龐大で極めて貴重な史料である）をお預かりした。また私が現在編纂を進めている『日本近現代人物史料情報辞典』の「澁澤栄一」「澁澤敬三」の項の執筆者の件でもご相談したりしていたが、平成十四年「木内信胤関係文書」の仮目録が出来たので、政策研究大学院大学への寄託覚書交換を行った。その折に、それ以前から、澁澤家の嫡流であり、非常に貴重な体験をなさった澁澤氏のオーラルヒストリーを是非おやりなさいとのアドバイスをいただいていたのが、実現に向かうことになった。私も澁澤氏が深く関係なさったMRAについて多くの人のインタビューの中（例えば岸信介氏の）や、史料の中（例えば『鳩山一郎・薫日記』など）でしばしば目や耳にしており、それが戦後日本政治社会にある役割を果たしたらしいことに関心を抱いていたので、そのお話が伺えればと希望していた。

五月に木内氏を三菱電機顧問室にお訪ねし、打ち合

わせて、六月二十三日に、渋谷からバスで、日赤医療センターの向かいにある東京女学館の理事長室にお伺いした。既に木内氏も来ておられ、澁澤氏と木全ミツさん（東京女学館副理事長）に紹介して下さった。私から私共のプロジェクトの趣旨をお話しして、ご了解を得て、初回を七月八日に東京女学館理事長室で行うことに決めた。

早速聞き手を私と武田知己氏（特別研究員）、佐藤純子さん（同）の三人とし、記録者をベテランの丹羽清隆氏にお願いし、準備を武田・佐藤両氏に進めて貰った。色々参考になる文献を集めて貰って読んだが、MRAについて殆ど確たるイメージを抱くことが出来なかった。取り敢えず澁澤氏の『父・渋沢敬三』（昭和四十一年、実業之日本社）を手掛かりにしてお話をうかがうことにした。

七月八日の第一回はお生まれになった澁澤家・澁澤同族会のお話から（父敬三氏についても話していただいたが、より詳しい聞き取りが土屋喬雄氏らによって行われ、『渋沢敬三』上（昭和五十四年、澁澤敬三伝記編纂刊行会）に収録されている）、学生時代（武蔵高校）、陸軍幹部候補生時代、復員して東京帝大農学部を卒業し、東京食品に就職されてのお仕事、やがてロンドンに駐在されるまでのお話をうかがった。木全さんも参加され（以後も毎回）、随時進行を助けて下さった。八

月十九日の第二回は、東食のロンドン支店の勤務、そこでMRAの中心人物のブックマンに会って感銘を受け、その運動に入り、遂に父敬三氏の反対をおしきって、東食を辞め運動に専念することになったこと、主にアメリカで活動し、やがて日本に戻って活動を続け、特にMRAが六十年安保に深く関わったこと、十河信二などが中心になって小田原にMRAアジアセンターを建設したこと、ブックマンの死後世界のMRA運動が衰退したことなどのお話をうかがった。氏の表現によれば、MRAの運動は「つむじ風のようなもの」ということで、我々も何となく理解出来たような気がした。九月二十五日の第三回は小田原のMRAアジアセンターでの活動、日米欧委員会のこと、東南アジアに強い関心を持ち、インドネシア語を学ぶためにコーネル大学に留学し、更にその後チャタムハウスに招かれてアジア太平洋地域における日本の役割の研究をし、その成果を基に、アメリカの大学での教員生活をなされた時期のお話を伺った。最終の第四回は、十月二十

九日に行われ、MRAハウスについての追加のお話と、東京女学館理事長、澁澤財団理事長としての活動について伺った。特に澁澤青淵記念財団理事長として、父敬三の遺志をついで、日本実業史博物館、実業史研究情報センターを作ろうというユニークな活動について熱く語られた。その時に見せていただいた、その計画は極めて意欲的なもので、この冊子の末尾にそれを掲載させていただいた。

この四回を通じて、密度の高いお話を伺うことが出来た。澁澤家についても、MRAについても、女子教育についても、また産業博物館構想についても、それぞれに新しい知見を加えることが出来た。冊子には佐藤純子さんが作成し、澁澤氏に目を通していただいた略歴、著作目録を付した。

お話下さった澁澤氏、助けて下さった木全さん、聞き手や準備をして下さった武田氏、佐藤さん、記録をきちんと作って下さった丹羽氏に厚くお礼を申し上げます。

政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

澁澤雅英著作・編著作目録

『革命のデザイン—新しい世界への歩み』	(角川書店1965年)
『革命のデザイン—東京から北京へ』	(春秋社1966年)
『父・澁沢敬三』	(実業之日本社1966年)
『太平洋にかける橋—澁沢栄一の生涯—』	(読売新聞社1970年)
『東南アジアの日本批判—アジアのなかの日本問題とは何か—』	(澁澤雅英・斎藤志郎編 サイマル出版会1974年)
『日本を見つめる東南アジア—新しい道をさぐるアセアン—』	(サイマル出版会1977年)
『真実のインドネシア—建国の指導者たち—』	(タウフィック・アブドゥラ編 澁澤雅英・土屋健治訳 サイマル出版会1979年)
『東南アジア五つの国—その生存戦略—』	(チャールス・E・モリソン著 澁澤雅英訳 サイマル出版会1981年)
『Japan and the Asian Pacific Region :Profile of Change』	(Croom Helm,London, 1984)
『日本はアジアか—変革の航路を求めて—』	(サイマル出版会1985年)
『Pacific Asia in the 1990s』	(Rutledge,London,1991)
『太平洋アジア—危険と希望—』	(澁澤雅英、ザカリア・ハジ・アハマド、 ブライアン・ブリジェス他著 澁澤雅英訳サイマル出版会1991年)
『澁沢敬三著作集』 第一巻	(澁澤敬三著 網野喜彦・澁澤雅英・ 二野瓶徳夫・速水融・山口和雄・山口徹編 平凡社1992年)
『澁沢敬三著作集』 第三巻	(澁澤敬三著 網野喜彦・澁澤雅英・ 二野瓶徳夫・速水融・山口和雄・山口徹編 平凡社1992年)
『澁沢敬三著作集』 第五巻	(澁澤敬三著 網野喜彦・澁澤雅英・ 二野瓶徳夫・速水融・山口和雄・山口徹編 平凡社1993年)
『遥かな国遠い昔—遺稿—』	(澁澤登喜子著 澁澤雅英編著創英出版 1994年)

澁澤 雅英

オーラルヒストリー

参考資料

- 資料1 「21世紀の東京女学館をめざして」(東京女学館)
- 資料2 「一つの提案」(澁澤敬三)
- 資料3 「評議員・理事の皆様」(澁澤青淵記念財団電門社)
- 資料4 「実業史研究情報センター設立趣意書(案)」(澁澤青淵記念財団電門社)
- 資料5 「第一期五ヵ年計画—『啓蒙』から『参加』へ—」(澁澤青淵記念財団電門社)
- 資料6 企画展「日本実業史博物館をつくりたい!!」パンフレット表紙(澁澤史料館)
- 資料7 企画展「青淵文庫」パンフレット表紙(澁澤史料館)

21世紀の東京女学館をめざして

東京女学館は明治二十一（一八八八）年、「日本婦人のもつ潜在的な可能性を開放し、世界の女性と対等に交際できる人材を育成したい」という当時の指導者たちの願望をもとに創立された。以来百十余年、良質の教育を行い、私立の女子教育機関としてすぐれた評価を確立してきた。しかし「世界の女性との対等な交際」という創立者達の目標は実現されないまままで今日に至っている。その理由は日本では、女性が常に男性の補助者という立場を強いられ、みずからの自己実現を達成する機会を奪われ続けてきた事による。

戦後の日本は人権の重視を念頭に置いて再建され、新憲法によって男女の平等が保証されることとなった。しかしまもなく発足した経済の再建と高度成長に向かつての国民的努力が、主として男性によって計画・実行されたため、女性はふたたび補助的な役割を押しつけられ、みずからの志望の実現を阻まれてきた。

ところが最近になって顕在化した社会と経済の変化は、経済活動の国際化とあいまって、女性に對して、国内および海外でより積極的な役割を担う道を開くこととなった。こうした歴史的变化に際し、東京女学館は小学校から大学に至る総合的な教育計画を立案・実現し、二十一世紀の世界に

おける女性の活動を支援し、今度こそ創立者達の願望に込めたいと考えている。

一、グローバル化と日本のアイデンティティ

日本の女性が国際社会で積極的に活動するためには、世界のなかで日本がおかれた立場や増大する経済力とそれに伴う責任などを認識し、かつ千年を越える歳月をかけて熟成してきたその文化が二十一世紀の人類の発展にどのように貢献できるかを知らなければならぬ。また国際化の進展のなかで、他国の文化や人々に対する理解と共感を持つ事も必要である。東京女学館は日本の伝統文化の本質とその変容の実体を把握し、それを世界に向かつて発信すると共に、他国の文化の価値をも理解する力を養う教育プログラムを展開したい。

二、女性の役割

「二十一世紀は女性の時代」と言われるが、それが実際に意味するところはまた判然としていない。各国がそれぞれの社会的伝統の中で女性の役割を考え、定義づけようとしているのが現状である。しかし国際化の急速な進展の中で、女性がより大きな役割と責任を担うようになることには疑いの余地がない。東京女学館は女性の能力開発に關す

る研究を進め、義務教育に始まって高等教育までを包括する総合的で、かつ革新的な教育活動を進める事により次世代の女性の自己実現を支援したい。

三、リーダーシップ

リーダーとしての女性の潜在的な能力は、戦後の経済成長が達成された後でさえも、数々の経済的、政治的、社会的な制約の中で本来の開花を阻まれてきた。現在の日本の繁栄の実現には、人口の半分を占める女性が不可欠の役割を果たしてきただのにもかわらず、国や社会の意志決定の過程に十分な参加を求められてきたとは言い難い。東京女学館は女性のリーダーシップの育成をその最大の使命とし、リーダーとしての能力の開発と女性の地位強化のため最先端に立って努力を進めたい。一貫教育の実現に加え、教室外でも多彩な活動を展開し、海外研修やインターシップ、実社会における各種の活動への参加等を通して目標の実現を促進したい。

四、バイリンガルな人材の育成

世界という舞台に積極的に関わろうとする女性にとって英語の能力は不可欠である。周知の通り

明治以来日本の英語教育は多くの欠陥を抱えてきた。東京女学館は最先端の教育技術を駆使したカリキュラムを導入するとともに、国内での一貫教育に加えて、海外での研修計画を充実し、さらに現地の著名な女子校での学期または年間の留学・研修を推進したい。また海外での公的機関または非営利事業等でのインターンシップを通して、現職の女性リーダーと接触し、活動を共にすること

により「世界の女性と対等に交際できる日本婦人を」という創立者達の願いを実現したい。

五、女性のための新しい未来を

明治以来日本人は多大な労働と大きな犠牲を払って近代化と国力の拡大に努力してきた。しかしその反面で、女性から人間としての権利と正当な

機会を奪って来たと言ふ事実を無視し続けてきた。そのことは女性の人生を大きく制約しただけでなく、社会全体に大きな害悪をもたらしてきた。東京女学館は女性の人生が長期にわたって阻害されてきたことの原因とその結果を見極め、性別による差別を克服し、女性と男性がすべての面で対等のパートナーであるような社会をつくるという本来の使命を果たすために最善の努力を尽くしたい。

資料2

一つの提案

龍門社内の暖依村荘はその目的の一たる保存行為に於ては各位の御努力によりまして、十二分にその目的を達成せられ、宛もワシントンのマウンテンバーナンに於ける如き感さへ致すのであります。

元々個人の私宅であり、主人があつて初めて完全に使用し得る一人の家でありますから公共團體が主體となつて使用するには種々不便不備等が多々ある爲めに、これが使用の方面から見ると、保存の方面に批して多少比肩し得ぬ所があるやうに思ひます。使用の難しさは、實は暖依村荘

それ自體に已にその原因を包蔵して居るのであつて、従つてこれを公共化し自由に使用せしむるためには、未だ何物か足らざる所がある感がいたします。即ち言葉を換へて言へば何物か社會公共的

アトラクションを附け加ふる事によつてこの問題は多少共解決出来る事と思はれます。此の考へは或は青淵翁記念館に、或は之を兼ねたる俱樂部室に或は青淵會館にと云つた種々な主張の裏にも伺はれたのであります。先般偶々大橋翁から極めて凱切なる此の問題についての御意見を承るに及んで私は以前から莫然と考へてをりました事に多少考案を加へて次の如き提案を試みたいのであります。

それはこの暖依村荘の一遇に近世經濟史博物館を建設したのであります。凡そ博物館は一國一民族の教養を示す度合ともなるものであつて我國にもすでに歴史、美術並びに貴族文化を展観する皇室博物館及京都奈良等の博物館、軍事に就いて

の遊就館、運輸に就いての鐵道博物館、大名文化に就いての名古屋の鐵川博物館、國史に就いては伊勢の徴古館、自然科学を示す科學博物館等それぞれ設備が存してをりますが、我々に取つて最も必要と思はれます我が日本民族の基礎文化を現す博物館は僅に伊勢の田中芳男氏の設立され其の後發展せぬ農業館を除いては殆ど見當らないのであります。我國民を大別して、政治を擔當する者は所謂貴族や政治家でありませう。國を守る事を擔當する者は武士階級即ち軍人であります。我民族の營養を擔當する者は農民並に漁民であります。交易産業を擔當する者は我々經濟人であり夫々特殊の文化を形成して居りますが、この内特に最も重要なのは我國民中最多數を占める常民の基礎文

化で、この意味に於きます日本民族博物館の建設は緊急事として最近我々が熱心に希望且つ企圖してゐますが未だその實現の運びにまで至らないのであります。

この内經濟に關する部門を引き離した、殊に幕末から明治へかけての我々國民にとつて最も異常なる劃期的な變化を如實に示すべき博物館は未だ何處にも企劃されてゐないのであります。近世以前の經濟史に就きましては他の基礎文化と分化し難いのでありますからこれは他の機關に委ねる事とし、又挽近の科學を應用した最近代産業は他日建設する機會もあらうと思はれる工業博物館にまかす事とし、此處には青淵翁の一生に因んで丁度その誕生少し前より明治末期に至る我國國民の經濟發展を示す所の近世經濟史博物館の建設を提案したのであります。而してこの博物館の中には三つの部門を包含せしめたいと思ひます。その第一は青淵翁の一代を遺品、寫眞、繪畫、圖表等を成可

組織

(略)

○本館ノ内容

(一) 青淵翁紀念室

本室ニ於テハ青淵翁遺品寫眞著作物(筆跡著書等)其他ヲ用ヒ、模型繪畫ヲオラマ圖表等ヲ併用シ青淵翁ノ傳記ヲ可及的如實ニ且ツ簡易ニ展觀シ一日ソノ一代ノ變化性多角性一貫性ヲ明瞭ナラシムルコト

(二) 近世經濟史展觀室

茲ニイフ近世トハ青淵翁誕生ヨリ少シク前、即チ略々文

く効果的に應用して如實に一目是れを知る一つの記念室であります。從而此の室に關する限り青淵翁一生の序次にならひ、經濟以外の事項即ち教育、國際親善、勞働問題、社會事業等凡てを網羅すること、なるのであります。その第二はさきに述べた我國國民全般の見地からの近世經濟史の展觀であります。その第三は凡そ功績の大小を問はず又賤貧富を問はずこの時代に活躍したる極めて廣義な經濟人、即ち實業家、産業家、學者、發明家、篤農家等の肖像を出來得る限り蒐集してこの博物館に陳列したのであります。是れは畢竟子孫が祖先への感謝と尊敬を表徴する事にもなりますし、或る意味に於いては經濟招魂室とも言ひ得る事とも思ひます。

此の博物館が完成致しますれば既に變化し盡した現在の狀態をのみ知る者にとつて我々祖先の過ぎ來し方の苦心と努力とその成果に就いて十分にこれを教へ、更に後代の人々にとつての反省の材料ともなり一つの社會的施設として相當に意義の深いものになると同時に青淵翁の記念施設としても最もふさわしいものになると思ひます。

化文政度ヨリ維新ヲ經テ明治末期ニ至ル我國經濟史上最モ劃期的變化ノアリシ時代ヲ指スコトトス

ソノ目的トスル所ハ、コノ近世經濟史ノ各部門ニ亘リ變遷及ビ發展過程、ソノ程度、ソノ方向、接觸文化ニ依ル變移ノ度合又ハソノ反動等ニ就テ基礎的ト考ヘラル、モノ並ビニ特ニ商業史的ニ重要性アルモノ及ビ興味深キモノニシテ展觀技術上効果的ナルモノヲ選ビ陳列シ以テ実業教育及ビ社會教育上ノ資料トナスコト。從ツテコノ部門ニハ軍事外交政治學術藝術宗教、貴族文化、常民基礎文化ノ大部分ハ必要ナキ限り展觀セザルコト、又最近代ノ科學ヲ應用セル所謂近代工業ハ之ヲ他ノ機關ニ委ネ、圖書文書ノ類ハ之ヲ青淵文庫ニ讓ル

(三) 肖像室

本室ハ近世ニ於ル經濟文化ノ發展ニ貢獻アル物故人物ハ凡ソ其功績ノ大小ヲ問ハズ、ソノ貴賤ヲ問ハズ、可及的ニ網羅シ、一定ノ額縁ニコレラノ人々ノ肖像ヲ納メ、其下ニ姓名略傳ヲ記シ各部門ニ分類シテコレヲ掲ゲ、以テ子孫方祖先ニ對スル感謝ノ念ヲ厚ウスルニ資ス、即チ本室ニハ實業家企業家産業家工業家農學家漁學家鑛學家發明家學者評論家等又ハ我國實業發展上貢獻アリシ政治家外國人等、凡ソ吾人ノ尊敬シ又感謝スベキ人々ノ招魂室タラシメ以テ社會教育資料ニ供スルコト但シ人物ノ選定規則ハ別ニ之ヲ定ムルコト

○本館建設案

場所 暖依村莊内

(略)

○豫算案 (全クノ目安ニシテ實際ニ當リタルモノナシ)

(略)

○標本ノ蒐集

(略)

展観 原則

(一) 近世經濟史上特ニ重要性有ルモノニ留意スルコト

(二) 史的發展ノ過程及系統ニ留意スルコト

(三) 消滅又ハ衰亡ニ瀕セル産業モ當時トシテ重要ナリシモノハ忘レヌコト

(例) 藍關係、和紙關係、砂鐵關係、綿花關係、油蠟關係等

(四) 多クノ標本ハ直チニ一般性ヲ抽出シ難キヲ以テ其大部分ハ蒐集及集成ノ便宜上個別的配列ヲ採ルコト

(例) 銀行ノ發達ハ第一銀行、銅山ハ足尾、デパートハ三越等

(五) 單一ナル標本ト雖モ特ニ興味アルモノハ省畧セヌコト

(六) 蒐集及展観ハ從而原物標本、寫眞、繪畫、版畫、印刷物、模型、圖表等其機ニ應ジ採用シ、此等ヲ複合集成セシメ展観ノ効果ヲ期スルコト

(七) 展観方針材料範圍等熟考後確定案ノ實施ハデパート等ノ專門家ニ委嘱スルコト

展観 豫想 (一般ノ部)

(一) 原始産業

① 農業

農業ニ関シテハ農業博物館之ヲ司ル可ヲ以テ本館ニ於テハ極メテ基礎的ナルモノ及ビ青淵翁ニ關係深キモノニ就テノミ展観スルコト、他ノ原始産業ニツイテモ亦同ジ(例) 米作、藍、綿、茶、養蠶等)

(二) 補助産業

① 電氣事業

② 運輸業

③ 商業

② 林業

秋田、木曾、台灣等ノ模範的林業又ハ金原翁事蹟ノ如キヲ例ニトリテハ如何

③ 牧畜

南部馬、但馬牛、安城ノ養鶏、隱岐ノ牧畑及三里塚、小岩井等ヲ例ニトリテハ如何

④ 水産

漁業、製鹽、養魚中特ニ注目スベキモノ四、五ヲ展観スルコト

⑤ 鑛産

金(佐渡) 銅(足尾) 鐵(釜石) 砂鐵(安來) 石油、石炭等

(二) 基礎産業

① 輕工業

製糸、紡織、染色、製紙等

② 化学工業

肥料、醸造(酒、ビール、醬油、味噌) 製糖、油脂、製藥、ガラス、瓦斯、等

③ 重工業

製鐵、造船、機械、輕金屬等

④ 建築工業

種類トソノ變遷

(三) 補助産業

① 電氣事業

② 運輸業

③ 商業

○銀行及金融業

兩替商、質商、札差、爲替座等

銀行ノ沿革、銀行集會所、手形交換所、興信所、倉庫

○保險

損害保險、生命保險

○貿易

○取引所

○市場

○問屋

○小賣

○組合

⑥ 印刷業、広生堂業、出版業、其他

(四) 上記以外ノ實物又ハ寫眞、模型ヲ以テ變遷狀態其他ヲ示スモノ

① 度量衡器(例) 物指、樹、天秤、量等)

② 保管器具(例) 千兩箱、金庫、財布、早道等)

③ 計算器(例) 藁算、算盤、錢什等)

④ 文房具(例) 矢立、其他事務用具)

⑤ 帳簿類(例) 大幅帳、判取帳、通帳、複式簿記帳)

⑥ 切手類(例) 質札、手形、小切手、切符等)

⑦ 貨幣、藩札類

⑧ 廣告(目ノ廣告ト耳ノ廣告)

⑨ 各種生業模型

約二尺五寸位ノ人形ヲ作成シ維新前並ニ其後ノ生業者約百種ヲ展観スル

(例) 羅宇屋、砥屋、定齊屋、虫賣、苗賣、車夫等)

⑩ 維新前店舗様式模型

約十種ヲ選ビ模型ヲ作成ス

(例) 呉服屋、八百屋、風呂屋、床屋等)

⑪ 維新後ノ店舗様式(最近ヘノ變遷ヲ示ス)

⑫ 服飾様式各種

模型又ハ實物ニヨル

⑬ 寫眞ニヨリテ示スベキ各種建造物及情景

(例) 停車場、港、工場地區、夜店、縁日、市場、重要

土木事業、旅館各種、劇場各種、デパート、寄席、博覧會、共進會、勤工場等)

⑭ 動力使用形態ノ變遷

⑮ 通信郵便ノ變遷

(五) 圖表 (前記展覧二用ヒザルモノ)

茲ニ八成可一且了解シ易キ様工夫シテ面白ク見ラ

ル、様ニスルコト

① 一般、年表的ノモノ

② 財政

③ 土地

④ 人口表

⑤ 職業別人口及戸数

⑥ 資本

⑦ 労働

⑧ 生産高發展表

⑨ 物價、主要物價及指数

⑩ 貿易

⑪ 株價

⑫ 貨幣流通高

⑬ 爲替相場

⑭ 公社價高

⑮ 其他商業及交通等各種統計又ハ圖表

資料3

二〇〇三年十月十七日

評議員・理事の皆様

澁澤青淵記念財団竜門社理事長 澁澤雅英

評議員・理事の皆様には、お元気で過ごしの
ことと存じます。澁澤青淵記念財団竜門社の運営
につきまして、日ごろ、格別のご指導、ご支援
を賜り、感謝致しております。

来る十月二十七日(月)開催予定の評議員会・
理事会につきましては、先日議案をお送り申し上
げましたが、当日の中心的な議題となることが予
想されます「実業史研究情報センター」の設置に
つきまして、さらにいくつかの資料をお送りいた
しますので、ご高覧頂けますれば幸いです。ごさいま
す。

この「実業史研究情報センター」は、澁澤敬三
が主唱して蒐集をはじめ、現在は文部科学省国文
学研究資料館史料館に保存されております日本の
近世から近代に至る実業関係の膨大な資料を核に
し、最新の技術を駆使して内外に普及・展示し、
将来の実業史研究の基盤を作ろうという、大型で、
野心的な企画であります。

澁澤敬三は、江戸末期以来、数多くの起業家や
一般の国民が、未曾有の大変革の中で、どのよう
にして近代化の要請に対応してきたかを、具体的
な資料に基づいて検証することにより、澁澤栄一

の業績の広がりをお顕彰するとともに、全国的な規
模で進展した社会変革の研究に資するため、個人
的にも努力し、また竜門社や第一銀行などの組織
を通じて膨大な資料を蒐集しました。

これら資料の大半は、戦後散逸を恐れた敬三が、
現在の国文学研究資料館史料館に寄託(のちに寄
贈)したもので、最近になって同史料館はそれら
のデータベース化を進める一方、蒐集に当たって
の澁澤敬三の尽力と展望を考慮し、当財団との間
に将来の利用や普及について積極的な協力を進め
るといふ合意が形成されつつあります。資料の持
つ価値の高さを反映して、既に海外の大学や博物

※原文は「祭魚洞用箋」と書かれた用箋に、一行27文字、13行でタイプさ
れているが、・・・原文の行間隔、改ページなどは無視した。
展覧豫想、(三)補助産業、(六)印刷業、広生業、出版業、其他」の
「(六)」は原文の「六」。

次の文字は、旧漢字がJISコードにあるため、そのままとした。
從(從)、藏(藏)、實(實)、爲(爲)、體(體)、團(團)、莊(莊)、國(國)、
來(來)、樂(樂)、會(會)、勤(勤)、經(經)、濟(濟)、觀(觀)、德(德)、
學(學)、發(發)、當(當)、擔(擔)、營(營)、數(數)、圖(圖)、劃(劃)、
變(變)、處(處)、關(關)、應(應)、寫(寫)、眞(眞)、繪(繪)、畫(畫)、
勞(勞)、盡(盡)、萬(萬)、傳(傳)、茲(茲)、觸(觸)、竝(竝)、藝(藝)、
賤(賤)、對(對)、鑽(鑽)、豫(豫)、單(單)、畧(畧)、蠶(蠶)、鹽(鹽)、
鹽(鹽)、輕(輕)、屬(屬)、氣(氣)、轉(轉)、險(險)、賣(賣)、兩(兩)、
錢(錢)、樣(樣)、區(區)、價(價)

次の文字は旧漢字がJISコードにないため、新漢字に変更した。
青、社、即、館、兼、教、急、祖、狀、益、など。

館などから共同展示などの打診を受けております。

濹澤敬三は、こうした形で社会経済史の研究に資料的基盤を提供することにより、祖父栄一の活動を記念しようとしたもので、当財団としては、その意図を受け継ぎ、センターの活動を、今後の財団の事業の主要な柱として推進したいと考えております。

資料4

実業史研究情報センター設立趣意書(案)

二〇〇三年十月二十七日

濹澤史料館は、濹澤敬三の提案による、濹澤栄一記念日本実業史博物館*の構想を、現在の情報技術を用いて実現します。

実業史研究情報センターの設置は、現在の濹澤史料館が、資料とらんで情報提供を事業の柱に組み込んだ新たな文化機関として生まれ変わるための鍵となります。「情報資源化」は、さまざまな資料を索引化し、あるいは絵引きを作成した濹澤敬三の先見的な方法論であり、文化機関が「啓蒙」から「参加」の時代を迎えた今日において、最もふさわしいものです。

濹澤敬三の構想した実業史博物館は、近代化・産業化・企業化という大変化の時代における人々

評議員会・理事会当日は、パワーポイントによる映像上映等により、これら資料の内容、規模、将来の利用の可能性、費用の大枠の見込みなどについて、詳細なご説明を申し上げ、ご審議を頂きたいと考えております。同封の資料から、実業史研究情報センター設立の趣旨や、将来の可能性な

どを、事前にご検討頂けますれば 幸甚でございます。

以上、取り急ぎご案内まで申し上げます。

(※ 原文は横書き。アラビア数字を漢数字に改めた)

の経済的社会的な軌跡を表そうというもので、モノづくりの伝統を重視しつつ、19世紀以降の文化接触と文化変容、またその反動に注目しています。さらにその大変化を担い、次の時代を創っていった人々の活動に注目しています。いま、六十年以上も前の実業史博物館構想を再び取り上げるのは、「実業史」が将来に対して持つメッセージが現代にとつていっそう重要であるからです。現在は、経済の拡大・成長志向から、地球的規模で持続可能な生産と交易体系の構築が人類の生存にとつて急務である、という、文明の大転換期を迎えています。この時期に、経済発展とモノづくりを見直し、人間の身の丈の視点から「実業」とは何かをもう一度考える材料を豊富に提供することが、未来を切り開くメッセージになる、と期待します。

第一に、所蔵資料に関するデータベース、ならびに当館には属さない関係資料の情報案内データベースを、実業史関係の一大情報資源として開発・整備します。データベースには、資料に関する情報、資料の所在情報、研究情報などを組織して収蔵し、実業史に関する研究・教育・自学自習に資することを目指します。

第二に、濹澤栄一の時代背景となる、近世から近代への经济社会の変遷を示す実業史関係の資料を拡充します。新たに収集する史資料には、さまざまな形態の資料、すなわち文字資料、画像資料、音声資料、映像資料、モノ資料等(原資料および二次資料)を網羅します。

以上によって充実したコレクションを館内および館外で展示・上映し、開発した情報資源をもと

に館内およびインターネットなどを通じて情報サービスを行います。さらに、研究活動支援や出版教育普及用キットの作成などの活動を活発に行い

日本実業史博物館構想(原構想)

○原構想の経緯

敬三による「一つの提案」(一九三七)↓竜門社による澁澤青淵翁記念実業博物館計画案正式決定(一九三七)↓実業史関係資料収集本格開始↓暖依村荘内地鎮祭(一九三九・五・一三)↓戦争のため工事延期↓準備室と収蔵品を小石川阪谷邸に移動↓占領による阪谷邸の接收↓文部省史料館に収蔵品寄託、寄贈(一九六二)↓実業史博物館準備室旧蔵品のデジタル化(二〇〇二〜二〇〇四)

○原構想の目的

「…この暖依村荘の一遇に近世経済史博物館を建設したのであります。凡そ博物館は一國一民族の教養を示す度合ともなるもので…」

この内経済に関する部門を引き離した、殊に幕末から明治へかけての我々國民にとつて最も異常なる劃期的な變化を如實に示すべき博物館は未だ何處にも企劃されてゐないのであります。近世以

ます。

実業史研究情報センターの設置によって、澁澤史料館は、資料収集範囲を広げ、展示をリニュー

前の経済史に就きましては他の基礎文化と分化し難いのでありますからこれは他の機關に委ねる事とし、又挽近の科學を應用した最近代産業は他日建設する機會もあらうと思はれる工業博物館にまかす事とし、此處には青淵翁の一生に因んで丁度その誕生少し前より明治末期に至る我國國民の經濟發展を示す所の近世経済史博物館の建設を提案したのであります。」(一つの提案より)

○原構想の規模と内容

・青淵翁記念室(一〇〇坪)

「翁遺愛ノ品、写真、著作物(筆跡、著書等)、模型、ジオラマ、図表等ヲ出来得ル限り効果的ニ応用シテ、翁ノ伝記ヲ可及的如実ニ且簡明ニ展示シ、一目翁一代ノ變化性、多角性、一貫性ヲ見ルヲ得セシムルコト。此室ニ関スル限り翁一生ノ序次ニナラヒ、經濟以外ノ事項即チ教育、國際親善、労働問題、社会事業等總テヲ網羅スルコト」(計画面案より。以下同じ)

・近世經濟史展観室(四五〇坪)

「文化文政ヨリ明治末葉迄ノ我国經濟史ノ各部門

アルし、博物館・文書館・図書館情報サービス機能統合した、文化機関の新たなモデルとなります。*

二巨り變遷並ニ發展道程、ソノ程度及方向、接觸文化ニヨル變移ノ度合又ハソノ反動等ニ付テ基礎的ナリト考ヘラルルモノ並ニ特ニ商業史的ニ重要性アルモノ及ビ興味深キモノニシテ展観技術上効果的ナルモノヲ選ビ、實業教育及ビ社会教育ノ資料トナスコト。依テ軍事、外交、政治、學術、芸術、宗教、貴族文化、常民基礎文化ノ大部分ハ原則トシテ展観セズ必要ノ場合ニ限り展示スルコト。又圖書、文書ノ類ハ之ヲ青淵文庫ニ譲ルコト」

・肖像室(五〇坪)

「凡ソ功績ノ大小、貴賤貧富ヲ問ハズコノ時代ニ活躍シタル極メテ広義ノ經濟人即チ近世ニ於ケル經濟文化ニ貢獻セル實業家、企業家、産業家、工業家、農業者、鋳業家、漁業者、学者、評論家、發明家、篤農家、其他ノ肖像ヲ出来得ル限り蒐集シ一定ノ額縁ニ納メ、一々氏名並ニ略伝ヲ付シ、各部門ニ分類シテ之ヲ掲ゲ以テ祖先ニ対スル感謝景仰ノ念ヲ厚ウスルニ資シ又以テ經濟招魂室トシテ社会教育ニ裨補シタキコト」

(※原文は横書き。アラビア数字を漢数字に改め、下線は右線とした)

「第一期五カ年計画—『啓蒙』から『参加』へ—」

(澁澤青淵記念財団竜門社)

	2003年11月	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	
情報資源領域	社史データベース	☆	☆☆	→	公開	→	
	実業史錦絵データベース	☆☆	☆☆	→	公開	→	
	実業人データベース	☆☆	☆☆	→	第一次	→	
	実業関係資料館データベース	☆☆	☆☆	→	公開	→	
	博覧会データベース	☆☆	☆☆	→	公開	→	
	モノ資料データベース	☆☆	→	館内	→	公開	
	*実業史関係総合データベース	☆☆	企画	☆☆	→	公開	
	※澁沢関係データベース	☆☆	→	内部	→	公開	
	収蔵資料目録データベース	☆☆	→	第一次	→	→	
	資料保存・修復・デジタル化	☆☆	第一期	☆☆	→	第二期	☆☆
資料領域	「伝記資料」デジタル化	☆☆	計画	☆☆	→	→	
	実業史関係資料調査収集	☆☆	→	→	→	→	
	旧澁沢コレクション追跡調査	☆☆	→	→	→	まとめ	
	実業史研究会	☆☆	☆☆	→	→	→	
	澁沢事典	☆☆	☆ 構想	編集開始	編集	編集	発行・公開
	内外における展覧会	「日本実業史観 (くらべ)」企画	6月7日 9-10月7日	6月10日他	→	→	リニューアル オープン企画展
	常設展示リニューアル	→	基本構想	基本設計	実施設計	展示制作	史料館リニ ューオープン
	学習キット制作	→	制作	→	改訂版検討	制作	→
		☆ 計画、構想	☆☆ 着手	→ 館内/内部公開	☆☆ 公開		

企画展「青淵文庫」パンフレット表紙

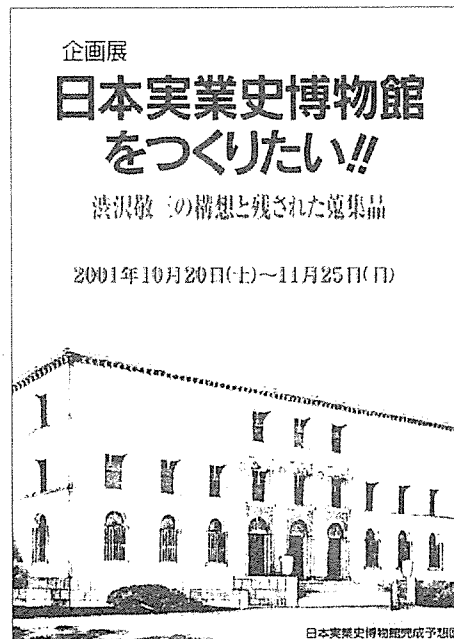
(澁澤史料館)



企画展「日本実業史博物館をつくりたい!!」

パンフレット表紙

(澁澤史料館)



平成15年度 文部科学省研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕

研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕

発行：2004年1月31日《無断転載禁》

政策研究大学院大学(政策研究院)
C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2

Tel : 03 (3341) 0458 Fax : 03 (3341) 0446